



TITLE:

シナ=チベット系諸言語の文法現象 2: 使役の諸相

AUTHOR(S):

CITATION:

シナ=チベット系諸言語の文法現象2: 使役の諸相. 2019: 1-238

ISSUE DATE:

2019-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/245178>

RIGHT:

シナ＝チベット系諸言語の文法現象 2

使役の諸相

Grammatical Phenomena of Sino-Tibetan Languages 2
Aspects of Causative Construction

池田 巧 編
IKEDA Takumi (ed.)

はじめに

本論集は、シナ＝チベット系諸言語の使役表現について、類型構造を記述分析した14の論考を収録している。広い意味での使役にまつわる文法構造の諸特徴と、言語間の異同を明らかにすることを目標として研究会を開催し、専門的な視点から各言語を分析して討論を重ねた。本論考は、その成果を専門の異なる関連分野の研究者にも参照していただけるよう、日本語でわかりやすい叙述をするという方針のもとに編集したものである。

本論集に収める各論考のもとになった研究報告について、討議を行った研究会は、京都大学人文科学研究所（以下人文）の共同研究班「漢語と周辺諸語の類型構造論」（平成23年度～24年度、班長：池田巧）による研究活動の一環としてスタートした。この研究会は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下AA研）の共同研究プロジェクト「チベット＝ビルマ系言語からみた文法現象の再構築（1）：格の体系とその周辺」（平成19年度～20年度、主査：澤田英夫）および「チベット＝ビルマ系言語からみた文法現象の再構築（2）：文の特徴付けと下位分類」（平成21年度～22年度、主査：澤田英夫）を継承したものである。人文に拠点を移してからは、「TB+（プラス）研究会」と称して研究対象をやや拡張し、チベット＝ビルマ諸語を中心としながらも、周辺のシナ＝チベット系の諸言語にも範囲を広げて検討を行った。分析にあたっては、AA研の共同研究プロジェクトの精神を引継ぎ、類型構造の表面的な整理や類似の指摘に止まることなく、個別言語の内部構造の多様なメカニズムを深く観察して精密に記述することを目指した。

研究会はその後、古代漢語および現代漢語諸方言を含むシナ＝チベット系諸言語の類型構造にも範囲を拡大して分析を進め、表層の多様性と動態、基層の痕跡と継承、構造とメカニズム、その歴史的発展の方向性などを掘り下げて行く方向で研究を継続している。本論考に収録した研究会の記録を以下に掲げておこう。会議の名称は、いずれも「TB+古漢語研究会議」とした。

2014年1月24日（日） 京都大学人文科学研究所 セミナー室1（101）にて

松江 崇	古漢語における使役表現の歴史
鈴木博之	カムチベット語梭坡[Sogpho]方言（丹巴県）における使役構文
加藤昌彦	ポー・カレン語の使役と逆使役
本田伊早夫	カイケ語の使役構文
高橋慶治	キナウル語の使役
池田 巧	ムニャ語の自他動詞と使役構文

2014 年 7 月 6 日（日） 京都大学人文科学研究所 セミナー室 1（101）にて

白井聡子 ギャロン語ヨチ方言における使役および逆使役の接辞について
荒川慎太郎 西夏語の動詞と使役表現
野原将揮／戸内俊介 「清濁別義」とされる現象について

2015 年 7 月 5 日（日） 京都大学人文科学研究所 セミナー室 1（101）にて

海老原志穂 アムド・チベット語の使役表現
山田大輔 上古漢語の指示詞と是の判断詞化

2015 年 3 月 14 日（日） 立教大学池袋キャンパス 7 号館にて

澤田英夫 ロンウォー語の非使役－使役動詞対
桐生和幸 メチェ語の自他動詞と使役の連続性
岩佐一枝 彝語の使役表現について

2018 年 3 月 11 日（日） 京都大学人文科学研究所 セミナー室 1（101）にて

林 範彦 チノ語悠楽方言の使役
長野泰彦 嘉戎（ギャロン）語莫拉（ボラ）方言の使役表現

本論集は先に刊行した『シナ＝チベット系諸言語の文法現象 1 名詞句の構造』に続くシリーズの第 2 冊目として編集した。研究会の開催と本論集の編集にあたっては、平成 29 年度の京都大学教育研究振興財団による研究活動推進助成「チベット＝ビルマ諸語の歴史的展開と言語類型地理論」（代表：池田巧）を受けることができた。ここに記して謝意を表したい。

また、本研究会を核として研究組織を編成し、シナ＝チベット系諸言語の歴史的展開と類型構造の地域的変容の諸相を解明すべく、科学研究費補助金を申請し採択された。今後は基盤研究（S）18H05219「シナ＝チベット諸語の歴史的展開と言語類型地理論」（平成 30 年度～34 年度、代表者：池田巧）により、本論集のシリーズを継続して刊行していく予定である。本論集にも基盤研究（S）による研究成果が反映されている。科研の採択を期に、研究会の名称も TB+ を改め、Sino-Tibetan Languages and Linguistics の略称により、STL 研究会と称することにした。

目 次

はじめに	i
目次	iii
アムド・チベット語の使役	海老原志穂 1
カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）における 使役表現と構造	鈴木 博之 15
カイケ語の使役構文	本田伊早夫 29
メチェ語の使役構文	桐生 和幸 45
キナウル語の使役表現	高橋 慶治 65
嘉戎語 莫拉方言の使役表現	長野 泰彦 83
ダバ語における自他動詞対と使役	白井 聡子 99
ムニャ語の自他動詞と使役構文	池田 巧 115
西夏語の使役について	荒川慎太郎 135
撒尼彝語の使役表現について	岩佐 一枝 149
チノ語悠楽方言の使役	林 範彦 163
ポー・カレン語の使役と逆使役	加藤 昌彦 181
古代中国語における動補型結果構文の拡張メカニズム —「他動詞＋在」結果構文を例として—	松江 崇 205
再び甲骨文の「不」と「弗」について —使役との関わりから—	戸内 俊介 219
執筆者一覧	239

アムド・チベット語の使役*

海老原 志穂

はじめに

本稿は、アムド・チベット語の使役について述べる。アムド・チベット語は、中国青海省の全域（青海省南部の玉樹チベット族自治州を除く）、甘肅省南部の甘南チベット族自治州、同省の北東部に位置する天祝県、そして四川省の阿壩チベット族チアン族自治州の一部の県および甘孜チベット族自治州の一部の県で話されるチベット諸語の一種である。

本稿で提示するデータは、青海省海南チベット族自治州共和県（伝統的にはチャプチャと呼ばれている地域）で話されているアムド・チベット語を筆者自身が収集したものである（地図1参照）。

以下では、§1で「アムド・チベット語の類型的な特徴」、§2で「使役に関する先行研究」を紹介し、筆者の考察に関しては、§3「語彙的使役」、§4「迂言的使役」に分けて述べる。なお、アムド・チベット語には迂言的使役の表現は一種類しか存在しない。

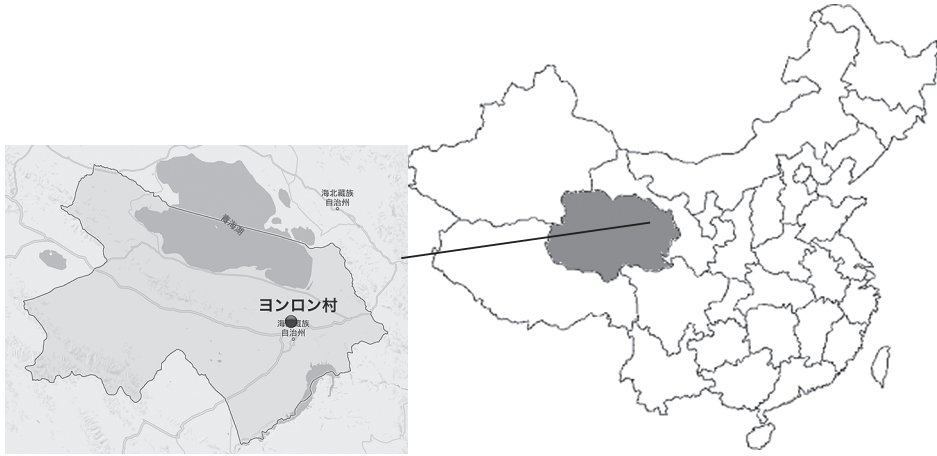
1. アムド・チベット語の類型的な特徴

アムド・チベット語の音節構造は $(C_2)(C_1)(G)V(C_3)$ である。C は子音、V は母音を表す。C₁ は音節初頭子音が一つであることを、C₂C₁ は音節初頭子音が連続して現れることを、C₁G は音節初頭子音の後ろに渡り音が現れることを表す。C₂C₁G という連続も可能である。C₃ は音節末子音である。無声調の言語である。

自動詞文の語順は SV、他動詞文の語順は AOV を基本とする。名詞修飾では、形容詞を名詞の後に置く (N←ADJ)。動詞修飾では副詞は動詞の前に置く (ADV→V)。主に後置詞句を用いる言語である。接辞（接頭辞と接尾辞）、接語（後接語

* 本稿のアムド・チベット語のデータの多くは、筆者の博士論文である海老原（2008）がもとになっている。コンサルタントは青海省海南チベット族自治州共和県ヨンロン村出身のロチ・ギャンツォ氏である。ロチ・ギャンツォ氏には、海老原（2008）の執筆にあたって全面的にご協力いただいた。一部の記述については、共和県ギャイ村出身のギャイ・ジャブ氏（青海師範大学教授）、共和県チェルジェ村出身のジャバ氏（中央民族大学教授）にご教示いただいた。記述がギャイ・ジャブ氏、ジャバ氏のご教示による際は、その旨を付記する。調査にご協力いただいたお三方にこの場を借りて御礼申し上げる。

本稿の記述に関わる調査は、日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (S)「チベット文化圏における言語基層の解明—チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンジュン語の解説」(2005–2008、代表者 長野泰彦)、日本学術振興会科学研究費補助金 特別研究員奨励費 (DC1)「チベット語アムド方言の文法記述」(2005–2007)、および、日本学術振興会科学研究費補助金 若手研究 (B)「東西方言から見たチベット語の基層の研究」(2014–2018、代表者 海老原志穂)の一環として行われた。



地図1 中国における青海省の位置（右）と共和県のヨンロン村（左）

のみ）を多用する点で膠着性が高い。接辞や接語の一部は異形態をもち、形態音韻的な交替を示す。

格標示は能格・絶対格型で、主に格助詞によって標示される（一部、ゼロ標示、母音交替もみられる）。

動詞はコピュラ動詞、存在動詞、状態動詞、動作動詞の4つに分かれる。コピュラ動詞にはウチとソトの2種類がある。動作動詞の一部は未完了、完了、命令によって屈折する。他の動詞は屈折しない。動詞は人称、性、数の一致をもたない。また定形と不定形という区別もない。これらの動詞が述語となる際には、通常、各種の助動詞（句）や動詞語尾、文末助詞が付加される。助動詞（句）は、アスペクト、エヴィデンシャリティ（証拠性）、モダリティ、ウチ・ソトなどを表す。動詞についての以上の特徴は他のチベット諸語の特徴ともおよそ一致する。

ヴォイスに関する特徴としては、使役表現はあるが、受動、逆受動、やりもらい表現はない。

2. 使役に関する先行研究

アムド・チベット語の使役に関する先行研究としてまとめたものには、札西才讓^{ツリン} (2011) がある。この研究は、日本語とアムド・チベット語の使役の形態的、統語的、意味的、語用論的特徴を対照した研究である。主に、本稿でいう「迂言的使役」について扱い、アムド・チベット語の迂言的使役表現は、「直接関与（強制、好意、意地悪、思いやり、不本意）」、「間接関与（譲歩、放任）」、「非関与」いずれの解釈も可能であるとしている。ただし、同書で提示されている例文はほぼ全て、文末が動詞語幹で終わっており、アムド・チベット語としては不自然な

ものが多い。アムド・チベット語の自然発話では、コピュラ動詞や存在動詞、ウチの事態を表す場合などを除くと、文末にアスペクト、エヴィデンシャリティ、モダリティ、ウチ・ソトなどを表す助動詞（句）や動詞語尾、文末助詞が付加されることが一般的である。その点から、同書のアムド・チベット語の記述は言語学的に不完全なものと言わざるを得ない。

その他、アムド・チベット語の文法書（周毛草 2003, Haller 2004, 海老原 2010, ダムディンジョマ 2017 等）に使役表現の簡単な記述がある。

3. 語彙的使役

一部の動詞には、非使役動詞と使役動詞のペアに形態的な対応関係がみられる。これらのペアの多くは自動詞と他動詞のペアと一致しているが、kon「着る」— hkon「着せる」のような transitive「他動詞」— ditransitive「二重他動詞」のペアも一例みついている。

非使役動詞と使役動詞の形態的な対応には、以下の (i)–(vii) に示す初頭子音(群)の音韻的対応関係がみつかった。

- (i) 非使役動詞の初頭子音が無声有気音 — 使役動詞の初頭子音群が hC₁ の子音連続
- (ii) 非使役動詞の初頭子音が無声有気音 — 使役動詞の初頭子音が無声無気音
- (iii) 非使役動詞の初頭子音が無声無気音 — 使役動詞の初頭子音群が hC₁ の子音連続
- (iv) 非使役動詞の初頭子音群が前鼻音つき有声音 — 使役動詞の初頭子音が有声音
- (v) 非使役動詞の初頭子音が l — 使役動詞の初頭子音が dz
- (vi) 非使役動詞の初頭子音が l — 使役動詞の初頭子音群が hts
- (vii) 非使役動詞の初頭子音が ʎ — 使役動詞の初頭子音群が hts

名音韻対応をもつ例を表 1 に示す。

表 1 非使役動詞と使役動詞の形態的な対応関係（未完了形を示す）

音韻対応関係	非使役動詞	使役動詞
(i)	k ^h or「まわる」	hkor「まわす」
	tɕ ^h ek「壊れる」	htɕok「壊す」
	k ^h u「沸く」	hku「沸かす」
	tɕ ^h el「切れる」	htɕol「切る」
	t ^h or「散る」	htor「散らす」
(ii)	ts ^h i「煮える」	tso「煮る」

(iii)	kon 「着る」	hkon 「着せる」
(iv)	ngu 「動く」	gu 「動かす」
	ndi 「集まる」	di 「集める」
	ndəp 「完成する」	dəp 「完成させる」
	ndzər 「変わる」	dzər 「変える」
(v)	lok 「倒れる」	dzok 「倒す」
(vi)	laŋ 「起きる」	htsoŋ 「起こす」
(vii)	ɬop 「学ぶ」	htsop 「教える」

4. 迂言的使役

中央チベット語ラサ方言には複数の迂言的使役表現が存在するが¹、アムド・チベット語で一般的に使われる迂言的使役表現は一種類のみである。

アムド・チベット語で使われる迂言的使役表現は、使役する動作を表す動詞に、「目的」を表す接続助詞である =Gə (=gə~=gi/=kə~=ki) を付し、その後に単独では「入れる」という意味を表す動詞 ndzək (未完了形) /zək (完了形) /ɕək (命令形) を伴って表す。(1) にその構造を示す。

- (1) V=Gə ndzək/zək/ɕək
V=PUR 入れる .IPF/PF/IMP

使役は、2つの節からなる複文の一種であるという解釈も可能である。しかし、(1) 主節の動詞にあたるものが ndzək (未完了形) /zək (完了形) /ɕək (命令形) 「入れる」という動詞のみに限られており、(2) その主節の動詞自体は名詞項をとれないことから、本稿では使役を複文としては扱わない。

各名詞項の格標示は、使役化される動詞が自動詞か他動詞かで異なる。使役化される動詞が自動詞であれば、使役者 (causer) は「能格」、被使役者 (causee) は「絶対格」で現れる ((i))。使役化される動詞が他動詞であれば、使役者は「能格」、被使役者は「与格」、使役行為の目的語は「絶対格」で現れる ((ii))。

- (i) 自動詞を用いた使役

非使役文

S
ABS

A

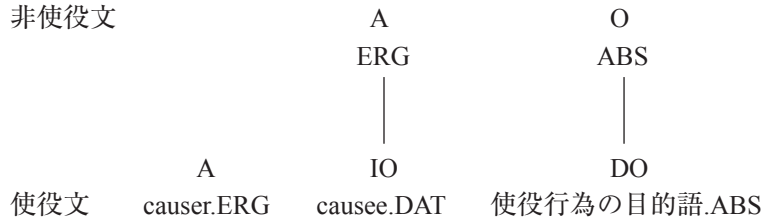
O

使役文

causer.ERG causee.ABS

¹ -ru`cuu 「～させる、～なるままにする」、-ru`tan 「～の状態にする」という使役表現がある (星 2003: 53)。

(ii) 他動詞を用いた使役



使役が「強制」であっても「許可」であっても格標示は変わらない。

使役は、使役表現を用いない非使役とヴォイスにおいて対立する。例文では、使役と対立する非使役の例文も示す。

以下では、§ 4.1「自動詞の使役」、§ 4.2「他動詞の使役」に分け、(a) 非使役文と (b) 使役文を対にして例示する。§ 4.1, § 4.2 では意志動詞の例のみを示すが、無意志動詞の使役も可能であり、それを § 4.3 で述べる。§ 4.4 では「使役の否定形」、§ 4.5 では「二重使役」を扱う。これらの使役の例文においては、使役者と被使役者が同一文中に表示された例を示す。

4.1. 自動詞の使役

最初に自動詞の使役の例を示す（例は (2)-(b), (3)-(b)）。

- (2) (a) sonam jar=a laŋ-dʒi re.
 PSN 上=DAT 起きる [-NMLZ COP.O]_{FUT.O}

ソナムは起きるだろう。

- (b) dordʒe=kə sonam jar=a laŋ=gə ndʒək-dʒi re.
 PSN=ERG PSN 上=DAT 起きる=PUR 入れる.IPF[-NMLZ COP.O]_{FUT.O}

ドルジェがソナムを起こすだろう。

- (3) (a) ʎəndəp ʎas^ha=a s^hoŋ=zək.
 PSN PLN=DAT 行く.PF=IE

ルンドゥプはラサに行った。

- (b) ŋiʎəndəp ʎas^ha=a ndʒo=gə zək=təŋ-ŋa.
 1SG.ERG PSNPLN=DAT 行く.IPF=PUR 入れる.PF=ACMP-EGO

私はルンドゥプをラサに行かせた。

4.2. 他動詞の使役

次に他動詞の使役文の例を示す（例は (4)-(b), (5)-(b)）。

- (4) (a) $h\dot{j}ants^h o = k\dot{a}$ $sama$ $si = z\dot{a}k$.

PSN=ERG 食事 食べる.PF=IE

ユムツォが食事をとった。

- (b) $sonam = k\dot{a}$ $h\dot{j}ants^h o = a$ $sama$ $sa = g\dot{a}$ $z\dot{a}k = z\dot{a}k$.

PSN=ERG PSN=DAT 食事 食べる.IPF=PUR 入れる.PF=IE

ソナムはユムツォに食事をとらせた。

- (5) (a) $\dot{l}and\dot{a}p = ki$ $xit\dot{c}^h a$ $\dot{n}o-d\dot{z}i$ re .

PSN=ERG 本 買う.IPF[-NMLZ COP.O]_{FUT.O}

ルンドゥプは本を買うだろう。

- (b) $t\dot{c}^h i$ $\dot{l}and\dot{a}p = wa$ $xit\dot{c}^h a$ $\dot{n}o = g\dot{a}$ $\dot{c}ak$.

2SG.ERG PSN=DAT 本 買う.IPF=PUR 入れる.IMP

あなたはルンドゥプに本を買わせなさい。

4.3. 無意志動詞の使役

§ 4.1, § 4.2 では意志動詞の例のみを示したが、無意志動詞の場合にも使役が可能である。以下では、自動詞と他動詞の例を示す。

自動詞の無意志動詞は、「形態的に対応関係のある他動詞をもつ有対自動詞」と、「形態的に対応関係のある他動詞をもたない無対自動詞」どちらにも使役が可能である。

札西才讓 (2011: 51, 110) は、有対無意志自動詞の使役形では、「使役者の位置にある人間がマジシャンのような超能力の所有者である場合、関与型的な意味に解釈することが可能である」とし、これを「奇跡の引き起こし」と呼んでいる²。筆者の調査の範囲ではそのような用法はみつからなかった。ギャイ・ジャブ氏、ジャバ氏によると、札西才讓 (2011: 51, 110) の (a) に相当する例文である (6)-(a) には「奇跡の引き起こし」の意味はなく、「動作者が窓ガラスを直接的な働きかけではなく、放置することによって壊した」ことを表す。ジャバ氏によると、「超能力によって窓ガラスを壊した」場合には、有対他動詞を用いた (6)-(b) を使っ

² 例えば、 $t\dot{c}^h ek$ (札西才讓の表記では $chak$) 「壊れる」という有対無意志自動詞の使役の例 (a) には「奇跡の引き起こし」の意味があるとし、「使役者である「彼」が一般的な常識では考えられない魔法をかけるなどの手段によって働きかけ、「窓ガラス」を通常の状態から「壊れる」状態に変化させることを表す」と述べている (札西才讓 2011: 110)。 (a) の音韻表記とグロス は札西才讓 (2011) に従う。

(a) $kheu$ 'geu xe 'go $chak$ keu $zheug$
 彼 geu 窓ガラス 壊れる keu $zheug$ (札西才讓 2011: 51, 110)

て表現するという。ただし、(6)-(b)は直接的な働きかけによって「窓ガラスを壊した」ことを表す文であり、この例ですぐに「奇跡の引き起こし」の意味が想起されるというわけではない。

- (6) (a) k^hərɡi ʒərɡo tɕ^hek=kə zək=taŋ=zək.
 3SG.ERG 窓ガラス 壊れる=PUR 入れる.PF=ACMP=IE
 彼は窓ガラスを壊れさせた。

- (b) k^hərɡi ʒərɡo tɕek=taŋ=zək.
 3SG.ERG 窓ガラス 壊す.PF=ACMP=IE
 彼は窓ガラスを壊した。

無対自動詞の場合、使役者と被使役者が異なる例の他 ((7)-(b)), 主語と目的語がともに2人称となる再帰的な表現も可能である ((8)-(b), (9)-(b))。再帰的な例では、主語は2人称能格形 tɕ^hi であるが、主語は発話しないことのほうが自然である。

- (7) (a) ŋa s^hən-dʒi re.
 1SG つまらない [-NMLZ COP.O]_{FUT.O}
 わたしはつまらなくなるだろう [= 退屈するだろう]。

- (b) dordze=kə ŋa s^hən=gə zək=taŋ=t^ha.
 PSN=ERG 1SG つまらない=PUR 入れる.PF=ACMP=DE
 ドルジェが私をつまらなくさせた [= 退屈させた]。

- (8) (a) hoŋwo ŋar-gə.
 体 熱い-EV
 体が熱い。

- (b) hoŋwo ŋar=gə ɕək.
 体 熱い=PUR 入れる.IMP
 (あなたは) 体を熱くさせろ。

- (9) (a) s^hem htɕək-kə.
 心 楽しい-EV
 心が楽しい。

- (b) s^hem htɕək=kə ɕək.
 心 楽しい=PUR 入れる.IMP
 (あなたは) 心を楽しくさせろ。

他動詞の無意志動詞でも使役が可能である ((10)-(b), (11)-(b))。

- (10) (a) sonam=kə potala rək-kə.
 PSN=ERG ポタラ宮 見える-EV
 ソナムにはポタラ宮が見える。
- (b) ŋi sonam=ma potala rək=kə zək=taŋ-ŋa.
 1SG.ERG PSN=DAT ポタラ宮 見える=PUR 入れる.PF=ACMP-EGO
 私はソナムにポタラ宮を見せた。
- (11) (a) sonam=kə hkel ko-gə.
 PSN=ERG 声 聞こえる-EV
 ソナムには声が聞こえる。
- (b) dordze=kə sonam=ma hkel ko=gə zək=taŋ=t^ha.
 PSN=ERG PSN=DAT 声 聞こえる=PUR 入れる.PF=ACMP=DE
 ドルジェがソナムに声を聞かせた。

4.4. 使役の否定形

使役の否定形は、主節の動詞にあたる **ndzək** (未完了形) /**zək** (完了形)「入れる」が構成する動詞句を否定形にすることで形成する ((12)-(b), (13)-(b), (14)-(b))。否定命令は、「入れる」の未完了形 **ndzək** を否定形にすることで表す ((15)-(b), (16)-(b), (17)-(b))。各例文では肯定形 (a) と否定形 (b) を対にして示す。

使役化される動詞を否定形にすることはできない。例は各例文の (c) として示す。

- (12) (a) dordze=kə sonam jar=a laŋ=gə ndzək-dzi re.
 PSN=ERG PSN 上=DAT 起きる=PUR 入れる.IPF[-NMLZ COP.O]_{FUT.O}
 ドルジェがソナムを起こすだろう。
- (b) dordze=kə sonam jar=a laŋ=gə ndzək-dzi ma-re.
 PSN=ERG PSN 上=DAT 起きる=PUR 入れる.IPF[-NMLZ NEG-COP.O]_{FUT.O}
 ドルジェはソナムを起こさないだろう。

- (c) *dordʒe=kə sonam jar=a mə-laŋ=gə ndzək-dʒi re.
 PSN=ERG PSN 上=DAT NEG-起きる=PUR 入れる.IPF[-NMLZ COP.O]_{FUT.O}

ドルジェはソナムを起こさないだろう。

- (13) (a) ŋi ʔəndəp ʔas^ha=a ndʒo=gə zək=taŋ-ŋa.
 1SG.ERG PSN PLN=DAT 行く.IPF=PUR 入れる.PF=ACMP-EGO

私はルンドゥプをラサに行かせた。

- (b) ŋi ʔəndəp ʔas^ha=a ndʒo=gə ma-zək.
 1SG.ERG PSN PLN=DAT 行く.IPF=PUR NEG-入れる.PF

私はルンドゥプをラサに行かせなかった。

- (c) *ŋi ʔəndəp ʔas^ha=a mə-ndʒo=gə zək=taŋ-ŋa.
 1SG.ERG PSN PLN=DAT NEG-行く.IPF=PUR 入れる.PF=ACMP-EGO

私はルンドゥプをラサに行かせなかった。

- (14) (a) sonam=kə ʔəndəp=wa sama sa=gə zək=zək.
 PSN=ERG PSN=DAT 食事 食べる.IPF=PUR 入れる.PF=IE

ソナムはルンドゥプに食事をとらせた。

- (b) sonam=kə ʔəndəp=wa sama sa=gə ma-zək=zək.
 PSN=ERG PSN=DAT 食事 食べる.IPF=PUR NEG-入れる.PF=IE

ソナムはルンドゥプに食事をとらせなかった。

- (c) *sonam=kə ʔəndəp=wa sama mə-sa=gə zək=zək.
 PSN=ERG PSN=DAT 食事 NEG-食べる.IPF=PUR 入れる.PF=IE

ソナムはルンドゥプに食事をとらせなかった。

- (15) (a) tɕ^hi ʔəndəp=wa xitɕ^ha ŋo=gə ɕək.
 2SG.ERG PSN=DAT 本 買う.IPF=PUR 入れる.IMP

あなたはルンドゥプに本を買わせなさい。

- (b) tɕ^hi ʔəndəp=wa xitɕ^ha ŋo=gə ma-ndzək.
 2SG.ERG PSN=DAT 本 買う.IPF=PUR NEG-入れる.IPF

あなたはルンドゥプに本を買わせるな。

- (c) *tɕ^hi ʔəndəp=wa xitɕ^ha mə-ŋo=gə ɕək.
 2SG.ERG PSN=DAT 本 NEG-買う.IPF=PUR 入れる.IMP

あなたはルンドゥプに本を買わせるな。

- (16) (a) tɕʰo tɕaŋ-dʒi re.
 2SG 寒い [-NMLZ COP.O]_{FUT.O}
 あなたは寒くなるだろう。
- (b) tɕʰo tɕaŋ=gə ma-ndzək.
 2SG 寒い=PUR NEG-入れる.IPF
 あなたを寒くさせるな [=寒くするな]。
- (c) *tɕʰo mə-tɕaŋ=gə ɕək.
 2SG NEG-寒い=PUR 入れる.IMP
 あなたを寒くさせるな [=寒くするな]。
- (17) (a) tɕʰo htok-dʒi re.
 2SG お腹がすく [-NMLZ COP.O]_{FUT.O}
 あなたはお腹がすくだろう。
- (b) tɕʰo htok=kə ma-ndzək.
 2SG お腹がすく=PUR NEG-させる.IPF
 あなたはお腹をすかせるな。
- (c) *tɕʰo mə-htok=kə ɕək.
 2SG NEG-お腹がすく=PUR 入れる.IMP
 あなたはお腹をすかせるな。

4.5. 二重使役

アムド・チベット語では、「A が B に C に～させる [=A が B に命じて C に～させる]」という意味を表す二重使役は、自動詞の場合には可能であるが（例は (18)-(b)）、他動詞の場合には非文ではないものの不自然な文となる（例は (19)-(b)）。他動詞の二重使役に対応する表現は、「A が B に言って、B が C に～させる」のように、節を分けて表したほうがより自然である（例は (19)-(c)）。他動詞の二重使役は与格目的語が同一文中に2つ以上現れることになる。おそらく、アムド・チベット語では、与格が2つ現れることを好まない、つまり Comrie (1976: 277–284) のいう「二重間接目的語」(doubling on indirect object) を許さないために、これが不自然な文だとみなされるのだと思われる。

以下の例では、二重使役のもとになる使役表現を (a) として示す。

- (18) (a) sonam=kə ʃəndəp ʃas^ha=a ndzo=gə zək=təŋ=zək.
 PSN=ERG PSN PLN=DAT 行く.IPF=PUR 入れる.PF=ACMP=IE
 ソナムはルンドゥプをラサに行かせた。
- (b) ʃi sonam=ma ʃəndəp ʃas^ha=a ndzo=gə zək=təŋ-ŋa.
 1SG.ERG PSN=DAT PSN PLN=DAT 行く.IPF=PUR 入れる.PF=ACMP-EGO
 私はソナムにルンドゥプをラサに行かせた。
- (19) (a) ʃəndəp=kə sonam=ma xitɕ^ha ŋo=gə zək=təŋ=zək.
 PSN=ERG PSN=DAT 本 買う.IPF=PUR 入れる.PF=ACMP=IE
 ルンドゥプはソナムに本を買わせた。
- (b) ?ʃi ʃəndəp=wa sonam=ma xitɕ^ha ŋo=gə zək=təŋ-ŋa.
 1SG.ERG PSN=DAT PSN=DAT 本 買う.IPF=PUR 入れる.PF=ACMP-EGO
 私はルンドゥプにソナムに本を買わせた。
- (c) ʃi ʃəndəp=wa ɕel=i sonam=ma xitɕ^ha
 1SG.ERG PSN=DAT 言う=SEQ PSN=DAT 本
 ŋo=gə zək=təŋ-ŋa.
 買う.IPF=PUR 入れる.PF=ACMP-EGO
 私はルンドゥプに言って、ソナムに本を買わせた。

まとめ

本稿では、アムド・チベット語の使役を語彙的使役と迂言的使役に分けて考察した。迂言的使役については、自動詞と他動詞、意志動詞と無意志動詞の使役とそれらの否定形の説明を行った。さらに、二重使役にも触れた。

俯瞰的な視点からみると、アムド・チベット語において、非使役動詞と使役動詞のペアに形態的な対応関係がみられるのは一部の動詞のみで、多くの動詞には迂言的使役が適応される。星（2016: 95）等を示されるチベット文語における非使役動詞と使役動詞の形態的ペアと比較すると、アムド・チベット語における非使役動詞と使役動詞の形態的ペアの数は非常に少ない。通時的には語彙的使役から、より規則的で生産性の高い、迂言的使役の使用が増加していると考えられる。この点については、今後、定量的な調査により検証しなければならない。

参考文献

- Comrie, Bernard 1976. The Syntax of Causative Constructions. In: Masayoshi Shibatani (ed.) *Cross-language Similarities and Divergence: Syntax and Semantics 6 The Grammar of Causative Constructions*, 261–312. New York: Academic Press.
- ダムディンジョマ 2017. 「チベット語アムド農民方言—音韻体系と文の基本構造」神戸市外国語大学, 博士論文.
- 海老原志穂 2008. 「青海省共和県のチベット語アムド方言」東京大学大学院, 博士論文.
- 海老原志穂 2010. 『アムド・チベット語の発音と会話』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Haller, Felix 2004. *Dialekt und Erzählungen von Themchen: Sprachwissenschaftliche Beschreibung eines Nomadendialektes aus Nord-Amdo*. Bonn, VGH Wissenschaftsverlag.
- 星泉 2003. 『現代チベット語動詞辞典（ラサ方言）』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 星泉 2016. 『古典チベット語文法：『王統明鏡史』（14世紀）に基づいて』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 札西才讓 2011. 『日本語とアムド・チベット語の使役表現の対照研究』笠間書院.
- 周毛草 2003. 『瑪曲藏語研究』北京：民族出版社.

略号

本稿ではグロス中で、助動詞句を[]で囲い、[]の右下の外側にスモールキャピタルで助動詞句全体の意味・機能を示している。助動詞句は統語的には接語（または接辞）とコピュラ動詞・存在動詞の組み合わせで形成されるが、組み合わせられた構造全体で特定の文法的な意味・機能を表している。

-	接辞境界 (-の前後いずれかが接辞)	DE	現場観察
=	接語境界 (= の後が接語)	DEM	指示代名詞
*	非文	EGO	定着知
?	不自然な発話	ERG	能格
1	1 人称	EV	観察知
2	2 人称	FUT	未完了・非継続
3	3 人称	FUT.O	未完了・非継続 (ソト)
A	他動詞の主語	FUT.S	未完了・非継続 (ウチ)
ABS	絶対格	GEN	属格
ACMP	完了明示	IE	結果観察
ADJ	形容詞	IMP	命令形
ADV	副詞	IPF	未完了形
COP	コピュラ動詞	N	名詞
COP.O	コピュラ動詞 (ソト)	NEG	否定
COP.S	コピュラ動詞 (ウチ)	NMLZ	名詞化接辞
DAT	与格	O	他動詞の目的語
		PF	完了形

PL	複数	S	自動詞の主語
PLN	地名	SEQ	継起
PSN	人名	SG	単数
PUR	目的	V	動詞

カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）における 使役表現と構造

鈴木 博之

丹巴県のカムチベット語

カムチベット語は、チベット系諸言語（Tibetic languages; Tournadre 2014 参照）の分布地域の東部を占める地域で話される言語で、下位方言区分が多岐にわたり、方言差異の大きい言語として知られる¹。その方言の多様性は、川西走廊諸語と呼ばれる非チベット語の分布地域²と重なる部分もあって、複雑な様相を呈している。

四川省甘孜 [dKar-mdzes]³ 藏族自治州東部の丹巴 [Rong-brag]⁴ 県は、チベットの伝統的地域区分では「ギャロン [rGyal-rong]」に含まれる地域で、ツァンラギャロン語⁵、ゲシツァ語、カムチベット語、アムドチベット語、そして漢語（西南官話四川方言の土地の変種）が話される。このうち本稿で扱うカムチベット語は県南東部で話され、またカムチベット語の中で独立した下位区分を形成する方言である（Suzuki 2008, 2009: 17）。当地では「二十四村⁶ 話（二十四村方言）」という名称で通っている。徐君（2001）によると、章谷 [Rong-brag] 鎮、中路 [sPro-s nang] 郷、水子 [Rwa-tso] 郷、岳扎 [Yo-brag] 郷、梭坡 [Sog-pho] 郷、格宗 [dGu-rdzong] 郷などで話されており、話者数は 30000 人弱である。二十四村方言は大渡河 [rGyal-mo rNgul-chu] を基準として東西の下位方言に分けられる⁷としてきた（Suzuki 2009）が、最近の調査で丹巴県に南接する康定市内で大渡河流域の孔玉郷、三合郷、金湯郷に分布するカムチベット語も同一の方言群に属すると考えてよいことが判明した⁸。このカムチベット語分布地域は、言語分布の観点から見て、東側にツァンラギャロン語、北側及び西側にゲシツァ語、南側にグイチャン語⁹それぞれの分

¹ カムチベット語の方言分類の全体像は、Suzuki（2009: 17）が川西民族走廊（四川省および雲南省）の範囲内での見解を提示している。ただし、その後数々の修正を加えている。丹巴県の方言についての見解もまた、新たに調査した方言を含め、再検討する必要があるが、これについては別稿にゆずる。

² 分布地域の詳細は Roche & Suzuki（2017）を参照。

³ チベットの地名など固有名詞で語源が分かっているものには、[] 内にチベット文語形式（藏文）を添える。

⁴ 正式名称は *Rong-mi Brag-go* である。

⁵ かつては四土ギャロン語にまとめられていたが、Gates（2014）が四土ギャロン語とは異なる言語区分を提案した。

⁶ この名称は、明清時代に行われた土司制度の行政区分で 24 か村で通用していたということに基づいて名づけられたという。

⁷ 二十四村方言のうち、筆者は章谷鎮、中路郷、梭坡郷、格宗郷、岳扎郷の各方言を調査した。各方言の対照研究は鈴木（2007, 2015）がある。岳扎郷の方言は 2016 年に調査したため、未公開のままである。

⁸ これらの郷の方言は、孔玉郷莫玉村の方言が格宗郷の方言と同一の下位方言群（大渡河西岸群）に属するほかは、独立した下位方言群を形成するものと考えられる。付録 1 の 2 枚の地図を参照。

⁹ これまで漢語名に従い「グイチョン」と書いてきた。ところが同言語の母語話者による自称の実際の発音が [ʔgwi tɕʰaŋ] や [ʔgo tɕʰaŋ] であることを実際に確かめ、また nGochang や Gochang と表記する事例（Roche & Suzuki 2017, 2018; Roche & Yudru Tsomu 2018）も出てきたことから、表記を改めた。この名称は藏文 *Go-thang*（漢語では「魚通」）と対応する。

布地域と接しており、チベット系諸言語に属する方言群として、孤立した言語島を形成している。

本稿で扱う言語資料¹⁰は梭坡郷で話される Sogpho 方言¹¹で、漢語の質問文を口頭で翻訳した形式と自然発話に現れる形式の2種類である。音表記は付録2の音体系で記述するものによる。

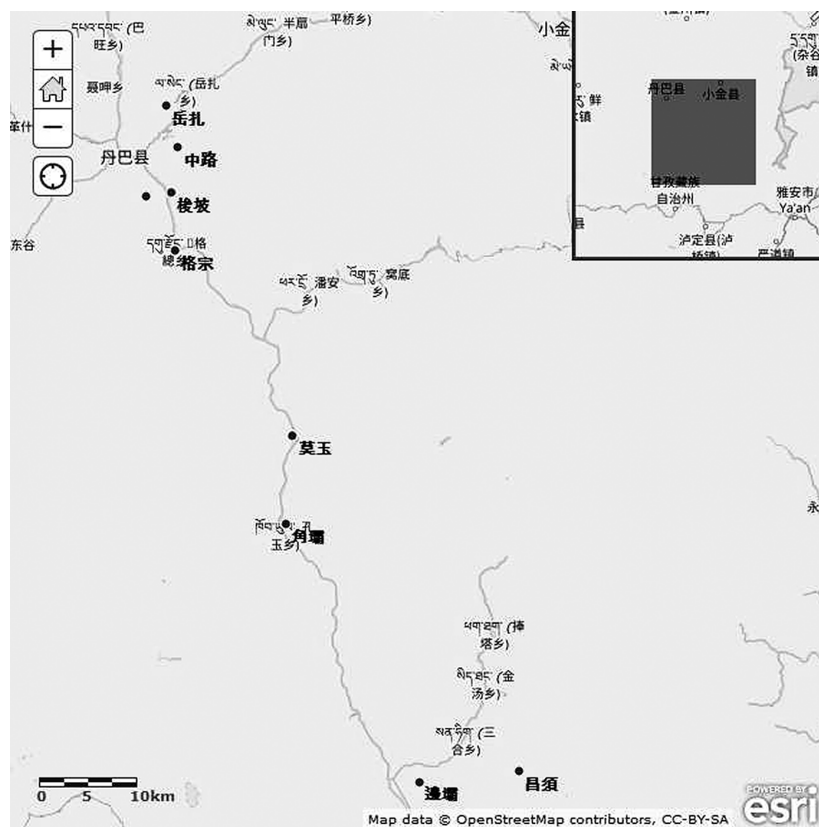
語順は動詞（句）が文末にくるのを基本とする。実際の発話によってはそうでない場合も見受けられる。また、名詞句内の修飾構造は修飾語が被修飾語に後置されるのを基本とするが、特定の接辞を用いて前置される場合も認められる（鈴木 2013, 2016）。



地図1 中国西南部における梭坡郷の位置
<http://ktgis.net/gcode/index.php> の Geocoding を用いて作成

¹⁰ 筆者の調査協力者は肖松英さん（女性）で、梭坡郷莫洛 [ʼBo-lo] 村の出身である。

¹¹ 梭坡郷はさらにいくつかの村落から構成されている。詳しくは Tenzin Jinba (2013) を参照。Sogpho 方言における村落間の差異は少ないながらも認められるため、mBolo 方言と呼ぶほうがよいかもしれない。



地図2 カムチベット語丹巴方言群の分布

ArcGIS online (<https://www.arcgis.com/home/webmap/viewer.html>) を用いて作成

1. 使役表現の種類と概要

使役の構成の定義を Aikhenvald (2015: 143–144) に基づいて理解するならば、項を増やす操作のうち、基底の自動詞節を他動詞節に変え、自動詞節の単独項 (S) を目的語としたうえで、新たに行為者 (A; 使役者) を増やす事例と、基底の他動詞節にさらに新たに行為者 (A; 使役者) を増やし、基底の他動詞節の行為者 (A) を直接目的語 (O) とするものに分かれる。チベット系諸言語では、動詞の自他による分類はうまく機能しない (Tournadre & Suzuki forthcoming) ため、この定義をそのままあてはめることはできないが、主動詞が1項動詞か多項動詞か¹²という点が上記の定義の自動詞、他動詞にそれぞれ相当するものとして理解できる。

¹² 多項動詞は、その格支配によってさらに分類できる。また、制御可能性 (controllability) によって分類することもでき、Sogpho 方言では能格標示ができるか否かがかかわってくるものの、それぞれの動詞語幹に備わっている特徴であるというよりは、派生の手続きによって変更可能な1つの特徴と見るほうが現実的である。

Sogpho 方言の使役文は、筆者が記録した限り、使役を表す動詞接尾辞 /-se/ もしくは動詞 /-^htɕu?/¹³ を主動詞に後続させることによって成立する、接辞付加タイプの形成法が最もよく観察される。

主動詞が1項動詞か多項動詞かによって、被使役者の格標示が若干異なる¹⁴。格構造の概要は以下のようである。

1. 1項動詞

- (a) 非使役文：[行為者]-[絶] [主動詞]
- (b) 使役文：[使役者]-[能] [被使役者]-[絶 / 与] [主動詞]-se/-^htɕu? (-[TAM])

2. 多項動詞

- (a) 非使役文：[行為者]-[能] [被動者]-[絶] [主動詞]
- (b) 使役文：[使役者]-[能] [被使役者]-[与] [被動者]-[絶] [主動詞]-se/-^htɕu? (-[TAM])

1項動詞の場合、被使役者が絶対格による標示の場合と与格による標示の場合があるが、この差異による意味上の異なりは認められない。

使役の意味を担う形態素に /-se/ と /-^htɕu?/ の2つがあるが、これらの意味上の異なりは、前者が強制性を含意した使役、後者が放任を意図した使役と言える。ただしこの意味区分がはっきりしない例もある。次節で詳しく記述する。後者はチベット文語の bcug 「させる」と同源であるが、前者の形態素は文語に同源形式を見出すことができない¹⁵。

否定文について、否定辞と /-se/ は共起しない。「～させない」のような使役の行為を否定する場合、否定辞は /-^htɕu?/ の直前に付加され、/ʼmə-^htɕu?/ または /ʼma-^htɕu?/ となり、声調領域が主動詞と切り離され、独立した声調パターンを担う。「～しないようにさせる」という場合は主動詞の直前に /ʼmə-/ 否定辞が付加される。

一方で、方向接辞は常に主動詞に接頭辞として付加され、TAM 標識群は常に使役動詞に後続する。

なお、使役文を構成できる動詞には制限があり、述語動詞 (/ʼjɪ, ʼjɪ ŋɔ̃/「である」, /ʼjoʔ/「存在する」), 感情動詞 (/ʼḡwɔ̃/「愛する」, /-^htɕa?/「怖い」), 知覚動詞 (/ʼpɪɛ:/「空腹である」) などは通常使役構文にならない。これは形態統語論上の問題ではなく、語用論的な問題ではないかと考えられる。作例ではこれらの一部の動詞が使役接辞をとる例が容認されるが、日常的に用いるかどうかは別の問題である。

¹³ 肯定文の場合にはこの動詞語幹は声調を担わず先行する動詞と同じ声調の範囲に入るが、否定文の場合には否定辞がこれに付加され、独立の声調を担う。

¹⁴ Sogpho 方言の格体系に関しては、鈴木 (2010) を参照。

¹⁵ Sogpho 方言では、初頭子音が無声無気阻害音の場合、同音節が語中に置かれる場合、その子音が有声化するという形態音韻論の交替が認められる。たとえば、/so/「食べる」-/ʼmə-zo/「食べない」のようである。使役の接尾辞 /-se/ を見てみると、いかなる場合においてもこの音交替が起こらない。この点は、この形態素の来源を考えるうえで重要となるだろう。

以上に述べた接尾辞以外に、/ʎeʔ/「する」と/ʎʰzu/「作る」も意味上使役文の一種としてとらえることができる構文がある。前者についてはチベット文語に認められる現象と近似する（星 2016: 159–160）。

また、語幹の形式の交替を伴う語彙形式の「自他対応」がチベット系諸言語には認められる¹⁶が、Sogpho 方言において、明確なペアを構成する例は少ない。チベット・ビルマ系諸言語において使役は動詞語幹の接頭辞 s- が示すことから、これを初頭子音に含む形式の対応形、すなわち前気音を伴う形式が派生の手続きとして使役の形態を引き継いでいるものと考えられる¹⁷。

2. 使役文の形成

ここでは、非使役文と使役文の構造を具体例を挙げつつ説明する。すなわち、非使役文と使役文を対比させながら、使役文を作る具体的な手続きを示す。

先述のように、1 項動詞と多項動詞では使役文の作り方に若干の異なりがあるため、分けて説明する。まず、1 項動詞 /ʎʰgo:/「笑う」を例に、非使役文 (1) と使役文 (2) を掲げる。「笑う」は制御可能動詞に数えられるため、行為者が絶対格におかれる場合 (1a) と能格におかれる場合 (1b) がある。

- (1) a ʎʰti:-ø ʎʰgo:
3-ABS 笑う
彼は（よく）笑うでしょう。

- b ʎʰtə ɣə ʎʰgo:-ze
3.ERG 笑う -AOR
彼は笑いました。

(1a) は習慣的な動作を描写した発話ととらえられる。(1b) は 1 回の動作が終了したことを描写した発話ととらえられる。

(1a) を使役文にする場合、被使役者は絶対格か与格かを選択できる (2a) が、(1b) の場合、被使役者は与格になるほうが好まれるようである (2b)。

- (2) a ʎʰeʔ {ʎʰti:-ø/ʎʰtə-lə} ʎʰgo:-ʰtɕuʔ
1.ERG {3-ABS/3-DAT} 笑う -CAUS
私は彼を笑わせます。

¹⁶ Tournadre & Sangda Dorje (2003), 張濟川 (2009: 210–218), 星 (2016: 94–96) など参照。

¹⁷ Sogpho 方言の形式と藏文との対応関係については、Suzuki (2011), 鈴木 (2015) を参照。

- b 'ŋeʔ 'tə-lə ^ʰgo:-^htɕuʔ-ze
1.ERG 3-DAT 笑う -CAUS-AOR

私は彼を笑わせました。

次に、2 項動詞 /'so/「食べる」を例に、非使役文 (3) と使役文 (4) を掲げる。

- (3) 'tə γə 'se-ø 'je-zo-ze
3.ERG ごはん -ABS DIR- 食べる -AOR

彼はごはんを食べました。

- (4) a 'ŋeʔ 'tə-lə 'se-ø 'je-zo-se-ze
1.ERG 3-DAT ごはん -ABS DIR- 食べる -CAUS-AOR

私は彼にごはんを食べさせました。

- b 'ŋeʔ 'tə-lə 'se-ø 'je-zo-^htɕuʔ-ze
1.ERG 3-DAT ごはん -ABS DIR- 食べる -CAUS-AOR

私は彼にごはんを食べさせました。

(4ab)における「食べさせる」は、ともに使役者が被使役者の口に食べ物を運んでいく行為と、被使役者自身が食べ物を取って口に運ぶ行為の2種類の意味がある。(4a)と(4b)の異なりは、(4a)には使役者（ここでは「私」）に強制的に食べさせる意図があるということ、(4b)には使役者が被使役者に強制性を伴わない、すなわち「食べさせたいが食べても食べなくても関係ない」という含意があるか、または被使役者が自発的に行っている行為をそのまま容認（放任）しておくという意図があること、という違いがある。(4)の場合はこの異なりが比較的明確に現れている例である。

使役文の否定は次のようである。

- (5) a 'ŋeʔ `tɕ^hɑʔ lə ^ʰduʔ 'mə-^htɕuʔ
1.ERG 2.DAT 座る NEG-CAUS

私は彼を座らせません。

- b 'ŋeʔ `tɕ^hɑʔ lə ^ʰduʔ 'ma-^htɕuʔ
1.ERG 2.DAT 座る NEG-CAUS

私は彼を座らせませんでした。

以上を示した使役文の形成に加えて、いくつかの動詞・形容詞に /'jeʔ/「する」か /^ʰzu/「作る」を付加して使役文を形成するパターンが認められる。

- (6) a $\text{ʔdza}^{\text{h}} \text{xã} \text{ʔ}^{\text{h}} \text{a} \text{ʔ} \text{-}\emptyset \quad \text{ʔte} \text{ʔ} \text{-lo}$
 靴ひも -ABS ほどける -STA
 靴ひもがほどけています。 / ほどけました。
- b $\text{ʔje} \text{ʔ} \quad \text{ʔdza}^{\text{h}} \text{xã} \text{ʔ}^{\text{h}} \text{a} \text{ʔ} \text{-}\emptyset \quad \text{ʔte} \text{ʔ} \text{-je} \text{ʔ} \text{-ze}$
 1.ERG 靴ひも -ABS ほどける -する -AOR
 私は靴ひもをほどきました。
- c $\text{ʔje} \text{ʔ} \quad \text{ʔtə-lə} \quad \text{ʔdza}^{\text{h}} \text{xã} \text{ʔ}^{\text{h}} \text{a} \text{ʔ} \text{-}\emptyset \quad \text{ʔ}^{\text{h}} \text{a} \text{-te} \text{ʔ} \text{-se-ze}$
 1.ERG 3-DAT 靴ひも -ABS DIR- ほどける -CAUS-AOR
 私は彼に靴ひもをほどかせました。

(6a) は靴ひもが話者の気づかないうちに自然とほどけた場合の描写, (6b) は行為者が靴ひもをほどく場合の描写, (6c) は使役者が被使役者に靴ひもをほどかせる場合の描写である¹⁸。(6c) は先に見た使役文の形成法に沿っているが, (6b) の形式は特定の動詞, 特に「自然と～になる」という状態変化を表す動詞語幹とともに用いられる形式である。現段階では /ʔjeʔ/ 「する」 を使役を表す動詞とは考えていないが, 語用論的に使役の意味を担っている。

(7) は形容詞が述部にくる例である。

- (7) $\text{ʔnə} \quad \text{ʔtəa: po-nə-}\emptyset \quad \text{ʔtə}^{\text{h}} \text{e} \text{ʔ} \quad \text{ʔka}^{\text{h}} \text{po} \quad \text{ʔ}^{\text{h}} \text{a-}^{\text{h}} \text{zu-}^{\text{h}} \text{təu} \text{ʔ}$
 この もの -DEF-ABS 2.ERG 白い DIR- 作る -CAUS
 この物をあなたは白にきなさい。 / 変えなさい。

形容詞述語の場合, 語幹は状態を表すのみであるが, 動詞 /ʔzu/ 「作る」を用いると状態変化を表すことができる。ただし, この動詞は「作る」という意味ではなく, 「なる」という意味で解釈する必要がある。このとき, 例文(7)のように, 使役を表す動詞をさらに加えると「～の状態にする」という意味が生まれる。しかし, (8)のように, 形容詞語幹に直接 /ʔtəuʔ/ がつく例もある。

- (8) $\text{ʔje} \text{ʔ} \quad \text{ʔtə-lə} \quad \text{ʔni mo s}^{\text{h}} \text{u} \text{ʔ-nə} \quad \text{ʔnã} \text{ʔ-}^{\text{h}} \text{təu} \text{ʔ}$
 1.ERG 3-DAT 日光浴する -CONJ 黒い -CAUS
 私は彼に日焼けにすることで黒くさせます。

¹⁸ (6c) の発話には, 動詞語幹に方向接辞 /ʔa-/ が付加されている。これは主に命令文で現れる要素で, 行為を強制させる意図が現れているものとする。使役接辞 /-se-/ との共起は自然であるが, (7) のように /ʔtəuʔ/ と共起する場合もある。

3. 具体例

ここでは、接尾辞による使役構文と動詞語幹の交替に基づく使役文の具体例を掲げる。

3.1. 接尾辞を用いる例

以下に /-^htɕuʔ/ や /-se/ を用いるものについて例文を掲げる。

/-^htɕuʔ/ を用いるものは、基本的に放任「させておく」の含意があると考えられる。

- (9) ʼŋə-{ø/lə} ʼje-^ŋgo-^htɕuʔ

1-{ABS/DAT} DIR- 行く -CAUS

私を行かせなさい。

- (10) ʼŋeʔ ʼtə-lə ʼne: ʼts^he-fiō-^htɕuʔ-^{fi}gə:

1.ERG 3-DAT ここ DIR- 来る -CAUS-IFUT

私は彼をここへ来させるつもりです。

- (11) ʼnə ʼts^he:-ø ʼŋeʔ ʼtɕ^huʔ-lə ʼso-^htɕuʔ

この おかず -ABS 1.ERG 2-DAT 食べる -CAUS

このおかずは私があなたに食べさせます。

(12) の主動詞「吐く」は制御不可能動詞である。この行為を使役者が強制することはできないため、この発話は被動作主がすでに吐いているところをそのまま放っておくといったような状況が想像できる。

- (12) ʼŋeʔ ʼtə-lə ʼ^htɕuʔ-^htɕuʔ

1.ERG 3-DAT 吐く -CAUS

私は彼に吐かせます。/ 吐かせてやります。

(13) の主動詞「死ぬ」も、(12) の例と同じく制御不可能動詞である。この発話は、死にかけている被動作主をそのまま放っておき、結果的に死なせたという状況が想像できる。

- (13) ʼŋeʔ ʼ^hto-lə ʼʂ^hə-^htɕuʔ-ze

1.ERG 馬 -DAT 死ぬ -CAUS-AOR

私は馬を死なせました。

/-se/ を用いるものは、基本的に命令・依頼による行為の強制性が含意される。しかし、強制力が必ずしも強いわけではない。

- (14) ʔtɕʰeʔ ʔŋə-lə ʔse-ø ʔba je-se
 2.ERG 1-DAT ご飯 -ABS 準備する -CAUS
 あなたは私にごはんを作らせます。

- (15) ʔʰge ʔgã-gə ʔjã tɕi-lə ʔkɔ-ø ʔzə-se-ze-ʔrɔʔ
 先生 -ERG PSN-DAT 歌 -ABS する -CAUS-AOR-[判断]
 先生はヤンジンに歌を歌わせました。

- (16) ʔnə-ø ʔtɕʰu-nə-ø-də ʔtɕʰeʔ ʔŋə-lə ʔkʰu:-ɕʰo:-ŋwo ʔji ɳɔ̃
 これ -ABS 水 -[定] -ABS-[主] 2.ERG 1-DAT 汲む -来る -NML CPV
 この水は、あなたが私に汲んで来させたのです。

(17) のような複文の例では、最初の使役文の内容を続く第2文が否定している。強制性はあっても、結果は強制されていないことを示している。

- (17) ʔŋeʔ ʔtɕʰaʔ lə ʔse-ø ʔba jeʔ-se-ze
 1.ERG 2.DAT ごはん -ABS 準備する -CAUS-AOR
 ʔtɕʰaʔ-ø ʔma-jeʔ-zə
 2-ABS NEG- する -RSL
 私はあなたにごはんを準備させようとしたのですが、あなたはしませんでした。

この場合、第1文は「準備させた」ではなく、「準備させようとした」と解さなければ意味が通らなくなる。

(18) の主動詞「死ぬ」は制御不可能動詞である。この発話は漢語からの翻訳であるが、漢語原文は「自殺する」という動詞を当てていたが、それを以下のように訳している。この使役は「自殺を強要する / 死ぬと命じる」という意味として理解できる。

- (18) ʔtə-γə ʔŋə-lə ʔpʰa-ɕʰə-se
 3-ERG 1-DAT DIR-死ぬ -CAUS
 彼は私に自殺を強要しました。

(18) において /-se/ が用いられているのは、被使役者が自殺を望んでいるわけではないことを含意している。もし /-ʰtɕuʔ/ を用いれば、被使役者は自殺を望ん

でいて、使役者は単にその行為を容認したということになる。

使役接辞が連続する例も認められるが、記録した限りでは (19) のみである。

- (19) 'ŋeʔ 'tə-lə 'xwa [wǎ-nə 'ndze:-^htɕuʔ-se-ze
 1.ERG 3-DAT 化粧する -CONJ 美しい -CAUS-CAUS-AOR

私は彼女を化粧することで美しくさせました。

形態論的には形容詞述語「美しい」を変化動詞「美しくする」にし、さらに使役の意味「美しくさせる」にするという手続きであると分析する。

3.2. 動詞語幹の交替

動詞語幹の交替には、語幹それ自体が項の増減で関連のあるものと、そうでないものに分かれる。いずれも例は少ない。

/^ŋkʰe:/ 「(湯が) 沸く」 - /^hke:/ 「(湯を) 沸かす」

- (20) a 'tɕʰu-ø ^ŋkʰe:-lo
 水 -ABS 沸く -STA

水が沸騰しました / 湯が沸きました。

- b 'ŋeʔ 'tɕʰu kʰe:-ø ^hke:-^ŋgə:
 1.ERG 湯 -ABS 沸かす -IFUT

私は水を沸かしたいです。

- c 'ŋeʔ 'tə-lə 'tɕʰu kʰe:-ø ^hke:-se-ze
 1.ERG 3-DAT 湯 -ABS 沸かす -CAUS-AOR

私は彼に水を沸かさせました。

/^ŋtsʰɛ:/ 「(米が) 炊ける」 - /^htsu:/ 「(米を) 炊く」

- (21) a 'ŋdɛ:-ø ^ŋtsʰɛ:-lo
 米 -ABS 炊ける -STA

米が炊けました。

- b 'ŋeʔ 'ŋdɛ:-ø ^htsu:-tʰo:-ze
 1.ERG 米 -ABS 炊く -ACH-AOR

私は米を炊き上げてあります。

/ʰŋgo-ˈsʰõ/ 「行く¹⁹」 -/ʰtõ/ 「行かせる²⁰」

(22) a ʰŋo-ø ˈsʰõ-ze
1-ABS 行く -AOR

私は行きました。

b ʰŋeʔ ˈti:-ø ʰtõ-ze
1.ERG 3-ABS 行く -AOR

私は彼を行かせました。

(22) は使役・非使役で形態的なペアを構成しているのではなく、意味的なペアであるといえる²¹。(22b) には、「命令によって彼を行かせる」場合と、「行きたがっている彼を行かせる」の2通りの意味がある。

Sogpho 方言の音体系

概要を以下に示す。詳細は鈴木（2005）を参照。

声調

声調は語単位でかかる。

ˉ：高平 ˊ：上昇 ˆ：上昇下降
ˋ：低平 ˋ：下降

母音

以下の各母音につき、長 / 短，鼻母音 / 非鼻母音の対立がある。

ɿ	i		ʊ	u
	e	ə	ə	o
	ɛ			ɔ
	a			ɑ

¹⁹ /ʰŋgo/ は非完了の形態で、/sʰõ/ は完了および命令の形態である。

²⁰ /ʰtõ/ の原義は「送る，派遣する」である。チベット文語では使役の動詞として「～しに行かせる」の意味で用いられる（星 2016: 158–159）。

²¹ 茶堡ギャロン語では、「行く」の語幹に使役接頭辞を付加することで「送る」の意味になる（Jacques 2015: 168）。

子音

子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧を示す。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t̪ ^h	c ^h	k ^h	
	無気	p	t	t̪	c	k	ʔ
	有声	b	d	d̪	ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h	ʂ ^h	ɕ ^h	x ^h	
	無気	ɸ	s	ʂ	ɕ	x	h
	有声		z	ʐ	ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

子音連続のパターンとして、主だったものに前鼻音、前気音、初頭両唇閉鎖音などがある。

略号

1	1 人称	DIR	方向接辞
2	2 人称	ERG	能格
3	3 人称	EXV	存在動詞
ABS	絶対格	GEN	属格
ACH	達成	IFUT	意思未来
AOR	過去	NEG	否定辞
CAUS	使役	NML	名詞化標識
CONJ	接続語	PSN	人名
CPV	判断動詞	QTF	量詞
DAT	与格	RSL	結果
DEF	定標識	TOP	主題標識

複数の略号が1つの語形に重なるときには、. で区切って示す（たとえば 1.ERG など）。

参考文献

- 鈴木博之 (2005) 「チベット語丹巴・梭坡 [Sogpho] 方言の音声分析」『ニダバ』第 34 号, 96–104.
- (2007) 「カムチベット語方言の多様性から見る丹巴県チベット語の方言特徴」『人文知の新たな総合に向けて』第 5 回報告書下巻, 231–249.
- (2010) 「カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）の格体系」澤田英夫編『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1：格とその周辺』, 95–108, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- (2013) 「カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）における文の下位分類」澤田英夫編『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』, 139–150, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- (2015) 〈丹巴藏語在藏語康方言中的歷史地位〉(向洵 [譯], 意西微薩・阿錯 [校])《東方藏區諸語言研究》, 138–162, 四川民族出版社. (原版: *Historical position of Danba Tibetan among Khams Tibetan dialects*, paper presented at the Workshop on Tibeto-Burman Languages of Sichuan (Taipei), 2008 [in *Pre-workshop Proceedings*, 419–439])
- (2016) 「カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）における名詞句の構造」池田巧編『シナ＝チベット系諸言語の文法現象 1：名詞句の構造』, 15–25, 京都大学人文科学研究所.
- 星泉 (2016) 『古典チベット語文法：『王統明鏡史』（14 世紀）に基づいて』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Aikhenvald, Alexandra Y. (2015) *The Art of Grammar: A Practical Guide*. Oxford: Oxford University Press.
- Gates, Jesse P. (2014) *Situ in situ: Towards a dialectology of Jiāróng (rGyalrong)*. München: Lincom Europa.
- Jacques, Guillaume (2015) The origin of the causative prefix in Rgyalrong languages and its implication for proto-Sino-Tibetan reconstruction. *Folia Linguistica Historica* 36: 165–198. [doi 10.1515/flih-2015-0002]
- Roche, Gerald & Hiroyuki Suzuki (2017) Mapping the linguistic minorities of the eastern Tibetosphere. *Studies in Asian Geolinguistics VI—Means to Count Nouns—*, 26–40.
- Online: https://publication.aa-ken.jp/sag6_count_2017.pdf
- (2018) Tibet's minority languages: Diversity and endangerment. *Modern Asian Studies*, 52(4): 1227–1278. [doi: 10.1017/S0026749X1600072X]
- Roche, Gerald & Yudru Tsomu (2018) Tibet's invisible languages and China's language endangerment crisis: Lessons from the Gochang language, Western Sichuan. *China Quarterly*, 233: 186–210. [doi: 10.1017/S0305741018000012]
- Suzuki, Hiroyuki (2009) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography—a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan—, in: Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet—New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report Vol. 3*, 15–34, Suita: National Museum of Ethnology.
- (2011) Dialectal particularities of Sogpho Tibetan—An introduction to the “Twenty-four villages” patois—. In Mark Turin & Bettina Zeisler (eds.) *Himalayan Languages and Linguistics: Studies in Phonology, Semantics, Morphology and Syntax*, 55–73, Leiden: Brill.
- Tenzin Jinba (2013) *In the land of the eastern Queendom: The politics of gender and ethnicity on the Sino-Tibetan border*. Seattle: University of Washington Press.
- Tournadre, Nicolas (2014) The Tibetic languages and their classification. In Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan Linguistics: Historical and Descriptive Linguistics of the Himalayan Area*, 105–129. Berlin: Walter de Gruyter.
- Tournadre, Nicolas & Sangda Dorje (2003) *Manuel de tibétain standard : langue et civilisation*, 2^{ème} édition. Paris: L'asiathèque
- Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (forthcoming) *The Tibetic Languages: An Introduction to the Family of Languages Derived from Old Tibetan* (with the collaboration of Xavier Becker and Alain Brucelles for the cartography).
- 徐君 (2001) 〈梭坡藏族田野考察報告〉郎維偉, 艾建主編《大渡河上游丹巴藏族民間文化考察報告》, 27–59, 成都: 四川省民族研究所.
- 張濟川 (2009) 《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》北京: 社會科學文獻出版社.

付記

筆者による Sogpho 方言の言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 16–20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（S）「チベット文化圏における言語基層の解明」（研究代表者：長野泰彦，課題番号 16102001）
- 平成 19–21 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21–23 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」（研究代表者：長野泰彦，課題番号 21251007）
- 平成 25–28 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究（B）「言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究」（研究代表者：鈴木博之，課題番号 25770167）
- 平成 28–29 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）「チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究」（研究代表者：長野泰彦，課題番号 16H02722）
- 平成 29 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究（A）「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」（研究代表者：鈴木博之，課題番号 17H04774）

カイケ語の使役構文*

本田 伊早夫

1. 言語の概要

カイケ語はネパール北西部ドルパ郡（カイケ語で *dolpā*; 地図 1 参照）、ティチュロン（カイケ語で *tichyuroṅ*; 地図 2 参照）と呼ばれる地域において話されている言語である。この言語の存在は Snellgrove (1989 [1961]) において文献上初めて報告され、その後、Fürer-Haimendorf (1988 [1975]) や Jest (1975) 等でも言及されているが、言語が話されている地域や、話者の文化・社会等について詳細に報告したのは、実際にティチュロンに 1968 年から 1969 年にかけて約 1 年間滞在し、調査を行ったアメリカの文化人類学者 James Fisher であった。その研究調査の集大成である Fisher (1987 [1975]) では、彼が滞在した、カイケ語地域の中心地であるサハール・タラ（ネパール語で *sahar tāṛā*; カイケ語では *tā:raṅ*; 地図 2 では *tarangpur* と表記されている）の文化・社会について主に記述されている。これに先立ち、ネパールの諸言語の word list が収められた Hale (1973) において、Fisher が収集し記述したカイケ語の word list が発表されている。この word list に掲載されているものはすべて音韻表記ではなく、デヴァナガリ文字によって書かれたものをローマ字転写したものであるが、近年までこの word list がカイケ語の概要を知ることができる唯一の資料であった。その後現在までに、著者自身 (Honda 2008a) に加え、David Watters (Watters 2006) や Ambika Regumi (例えば Regmi 2013) がカイケ語についての調査を行い、論文を発表している¹。

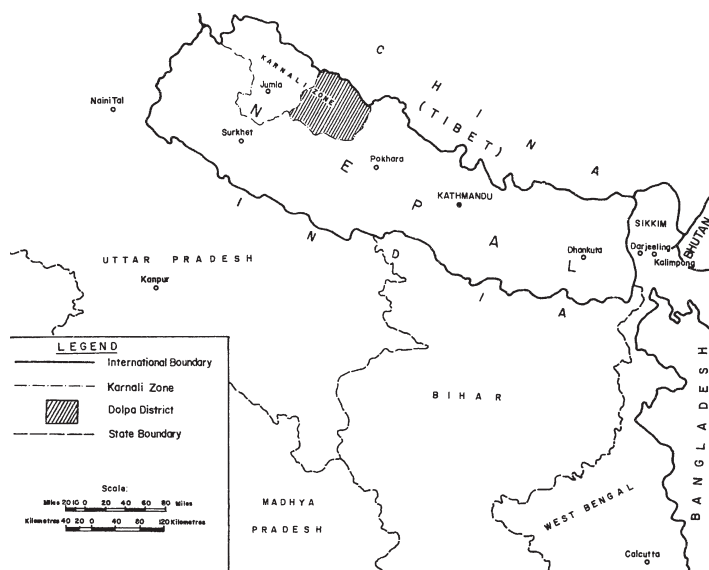
カイケ語は上述の通り、ティチュロンという地域で話されている言語であるが、ティチュロンの中でも 3 つの村、サハール・タラ、タラコット（ネパール語で *tāṛākoṭ*; カイケ語では *coṅ*; 地図 2 では *tarakot* と表記されている）、トゥパ・タラ（ネパール語で *tupa tāṛā*; カイケ語では *tumu*; 地図 2 では *tupa* と表記されている）のみで話されており、ティチュロンの残りの村々ではこの地方のチベット語方言が使われている（著者はこの方言を Tichyurong Tibetan と呼び、現在、その言語調査を実施中である）。カイケ語が使用されている 3 つの村々は endogamous group（同族婚集団）を形成してはおらず、近隣の村々の Tichyurong

* 本稿は 2015 年 1 月 24–25 日京都大学人文科学研究所において開催された第 2 回 TB + 研究会において口頭発表した内容に一部修正を加えたものである。同研究会を主催した池田巧教授、及び同研究会にて貴重なコメントをいただいた各位に感謝申し上げます。また本稿は日本学術振興会科学研究費補助金の支援を受けた研究（平成 21–23 年度、基盤研究 (C) 課題番号 21520463 「タマン諸語とカイケ語の記述、および他のヒマラヤ諸語との言語系統、接触に関する研究」、平成 24–26 年度、基盤研究 (C) 課題番号 24520486 「カイケ語の記述調査、及びチベット語との言語接触を中心とする歴史言語学的研究」）の成果の一部である。ここに記して謝意を表したい。

¹ 著者はこの他、Honda (2004), Honda (2008b), Honda (2008c), Honda (2011), Honda (2013) においてカイケ語に関する研究発表を行っている。

Tibetan を話す人との結婚も稀ではない。特に、サハール・タラに隣接するゴンバ・タラ（ネパール語で *gomba tārā*；カイケ語では *kommā*）との交流はさかんで両村間の婚姻も多く、それ故当然ながらカイケ語話者には Tichyurong Tibetan を理解し話せる人がかなりいるようだ。更に、ネパールにおける他の少数言語民族と同様、ネパールの national language であるネパール語が理解できない、話せないという人は（ほぼ？）皆無であり、特に、カトマンズなどの大きな町に引っ越し生活している人や若年層の間でネパール語の使用が増えている。

著者のインフォーマントからの情報をまとめると、カイケ語の母語話者数はおおよそ 1,000 人ほどではないかと推測される。この点について Regumi (2013: 1) は “According to the CBS report, 2001 the total population of the Kaike is 2000, of which only 39.7% (i.e. 794) of the total population of Kaike speak this language as the mother tongue. However, the National Population and Housing Census, 2011 reports that the total speakers of the Kaike language amounts to only 50.” と述べた上で脚注で “However, in reality, there are at least one thousand speakers of this language (based on the field study done in 2011).” と注釈を加え、著者とほぼ同じ見解を示している²。

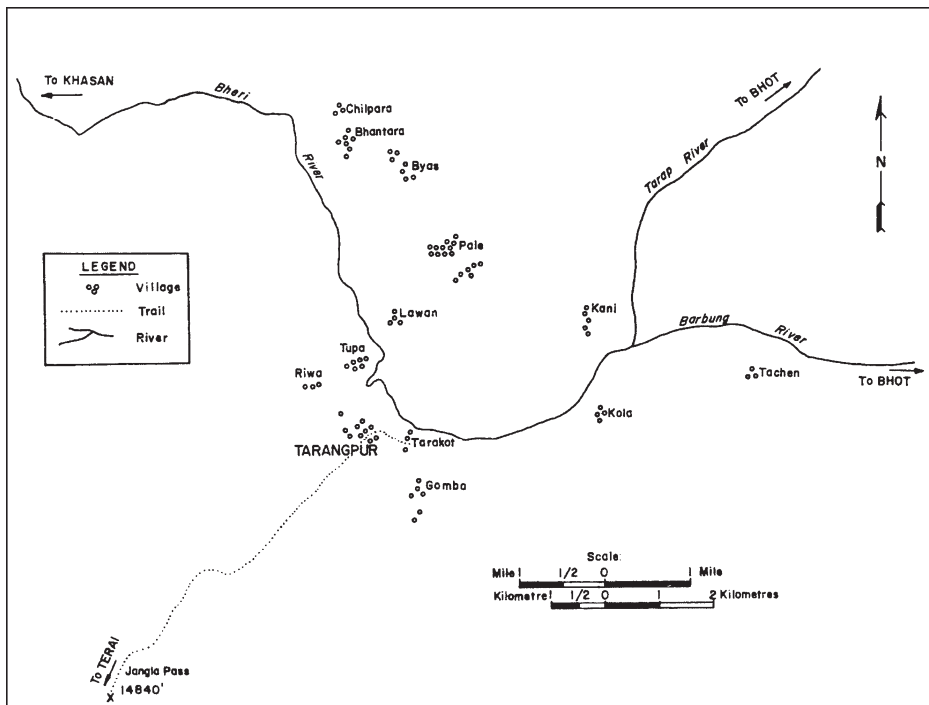


地図1 ドルパ郡 (Fisher 1987 [1975]: 16)

カイケ語はチベット＝ビルマ語派の言語であり、その内、Bodic に属することは間違いのないと思われるが、更に詳細な系統関係は未だ不確定な部分がある。

² Bradley (1997) ではカイケ語の話者数が “about 2,000” と述べられているが、Bradley (1997) の記述は、少なくともカイケ語とタマン語群については、不正確、あるいは誤りが多く、この数字は当てにならない。

現段階での著者の見解は Honda (2008a) で論じた通りであるが、カイケ語と最も近い言語はタマン諸語ではないかと考えている。ただし、カイケ語はタマン語群の言語であるとする Driem (2001: 979) や Watters (2002: 15; 2003: 17) の見解とは異なり、カイケ語は、タマン祖語 (Proto-Tamangic) から派生したと考えられている言語 (つまりタマン諸語) とは同レベルで語れないことは明らかであり、カイケ語とタマン諸語との系統関係はかなり遠いものであると推測している。この点で著者の見解は西 (1991: 92) のそれに最も近いと言えよう。



地図2 ティチュロン (Fisher 1987 [1975]: 21)

2. カイケ語における使役構文³

本稿では、カイケ語において「使役」構文と言えるものの内、動詞 *phān-* を使用した構文を取り上げ、以下論じていくこととする。

動詞 *phān-* は他の動詞に後続し「～を / に～させる」といった使役、あるいは「～

³ カイケ語は tone language であるが、カイケ語の tone system の分析が未だ完了していないこともあり、本論文では tone について記述をしていないことを注記しておく。

に～させてやる、させたままにしておく」といった意味を表す。その際、先行する動詞は動詞語幹に何も付かない形で現れ（つまり *V-ø phān-*）、*tense, aspect* などを表す接辞は *phān-* に付く。*causee* には何も付かないか（*Absolutive* 格；以降 *ABS* と表記する）、*Dative* 接辞が付く（以降 *DAT* と表記する）。*Dative marker* には以下の3つの形態があり、その分布はおおよそ以下の通りとなっている。

Dative marker とその分布

- i 語末が短母音の語に付く場合：語末短母音が長母音となる
- ii 語末が長母音、二重母音、あるいは /m/ 以外の子音の語に付く場合：X-ga
- iii 語末が /m/ の語に付く場合：X-ma（しばしば -ga）

上記の通り、語末が /m/ の語に付く場合、*Dative* 接辞は *-ma* が規範であると思われるが、*-ga* が使われている例も散見される。更に、*-ga* は語末が短母音の語の後でも現れることもあり、上記の分布はかなり緩い規範となっているようである。なお、これらの *Dative* 接辞は *Locative*、*Allative* としても使用されている。

本稿では、カイケ語のこの使役構文において、*causee* に何も付かないか、*DAT* 接辞が付くかという点に注目し、この違いが動詞や文の意味とどう関連しているか、どういった動詞が *ABS*、あるいは *DAT* を選択するのかということについて記述していくこととする。

この分布について結論をまず述べると、I) *causee* に *ABS*（何も付かない形）しか可能でない動詞、II) *ABS* と *DAT*（*DAT* 接辞が付いた形）の両方が可能な動詞、III) *DAT* しか可能でない動詞の3種類の動詞がある。ただし、母語話者が判断に迷うケースもあり、この分類は暫定的なものと言わざるを得ない。

以下、I, II, III の3つのタイプにどんな動詞が該当するか例示する。ここでは動詞を *intransitive* と *transitive* に（更に *monotransitive* と *ditransitive* に）分けているが、それは *causee* に *ABS* を使うか *DAT* を使うかの分布を説明する際、*intransitive-transitive* の区別が有用であると考えられる為である。ただし、以下の2点を注記しておく。

まず第一に、以下ではカイケ語のそれぞれの動詞が表す意味を（雑ではあるが）英語で表記しているが、言うまでもなくその動詞が *intransitive* か *transitive* であるかは、それら英語における文法や意味によるものではなく、あくまでカイケ語動詞のそれによるものであるという点である。例えば、動詞 *khyār-* と *nyin-* はいずれも ‘to fear’ と ‘be afraid’ と訳せるのでそう表記しているが、そもそも英語の ‘to fear’ と ‘be afraid’ では *valency* が異なるし、カイケ語の *khyār-* と *nyin-* の *valency* を示しているわけではない。第二に、動詞の中には *transitive*、*intransitive* の両方で使われるものもあり、そうした動詞の場合、*causee* がどういう形を取るかは、*transitive*、*intransitive* のどちらの機能で使われているかによる。

I causee に ABS しか可能でない動詞の例

intransitive

khaŋ- ‘be/get painful, sick’, *chār-* ‘grow’, *tā-* ‘recover (from sickness)’, *nāt-* ‘be/get injured, sick’, *phum-* ‘be paralyzed’ など

以下は patient にあたる名詞が animate ではなく、必ず inanimate である動詞

barāŋ- ‘be/get full (of stomach)’ (例 (8) を参照), *sāt-* ‘cease (of sb’s sleeping, i.e., sb to wake up)’ (例 (9) を参照), *soe-* ‘come back (of memory), revive’ (例 (10) を参照), *syāŋ-* ‘be/get happy, like’ など

transitive 無し

II causee に ABS と DAT の両方が可能な動詞の例

intransitive

ā- ‘sleep’, *ku-* ‘wait’, *kyāl-* ‘win’, *kyu-* ‘vomit’, *khyār-* ‘fear, be afraid’, *gusyi-* ‘be/get hungry’, *got-* ‘be/get tired’, *cum-* ‘close eyes’, *cyāŋ-* ‘stand’, *syē:tāŋ/thā:luŋ* *cyāŋ-* ‘be/get angry’ (*cyāŋ-* ‘stand’), *char-* ‘feel lazy’, *chal-* ‘sneeze’, *chyām-* ‘dance’, *chyuŋ-* ‘stay, sit’, *tir-* ‘get together’, *sam tu-* ‘feel sad’ (*sam* ‘mind’), *dā-* ‘cry’, *dāl-* ‘run’, *nyin-* ‘fear, be afraid’, *piŋ-* ‘sink’, *bor-* ‘jump’, *yurŋ-* ‘be/get insane’, *yot-* ‘be/get drunk’, *rai-* ‘laugh’, *let-* ‘climb’, *len-* ‘walk’, *wai-* ‘go’, *soə-* ‘come’, *syi-* ‘die’ など

transitive 無し

III causee に DAT しか可能でない動詞の例

intransitive 無し

transitive

monotransitive

hā ko- ‘understand’, *khye-* ‘do’, *gāl-* ‘swallow’, *cyin-* ‘remember’, *tā-* ‘hear’, *thu-* ‘wash’, *de-* ‘sing, play’, *doŋ-* ‘make’, *nor-* ‘err’, *nyān-* ‘listen, obey’, *tyu bul-* ‘be/get thirsty’ (*tyu* ‘water’), *let-* ‘forget’, *sat-* ‘kill’, *sān-* ‘bear, endure’, *syo-* ‘know’ など

ditransitive

roə- ‘say, talk’, *lan-* ‘teach, learn’, *sar-* ‘write’, *syāt-* ‘speak’ など

上記の分類を見てまず言えることは、transitive verb には ABS は使われないということである。つまり transitive verb に関しては、その動詞が表す事象・出来事に対する causer, causee の volitionality, あるいは control の度合いに関係なく、causee は常に DAT となる。カイク語の場合、この volitionality, control という概念は、conjunct/disjunct という名前で良く知られている区別を説明するのに有用である⁴。カイク語の conjunct/disjunct は Kathmandu Newar のそれと大変良く似てお

⁴ カイク語の conjunct/disjunct については Watters (2006) を参照のこと。ただし、いくつかの点で著者自身の分析と異なるため、それらを含め、Honda (2008c) で報告、論じた。Conjunct/disjunct という用語は Tournadre (2008)

り, David Hargreaves が Kathmandu Newar の conjunct/disjunct を記述している Hargreaves (2005) で使用している, control verbs と noncontrol verb の区別が記述に大変有効である。

control verbs: “those that describe prototypical self-initiated behaviors”

noncontrol verbs: “those that describe events incompatible with self-initiated behavior”

カイケ語の conjunct/disjunct は以下の例では動詞接辞 *-pā* (perfective/conjunct) と *-bo* (perfective/disjunct) によって示されているが, control verb の *sat-* ‘to kill’ の場合も noncontrol verb の *tā-* ‘to hear’ の場合もどちらも *phān-* による使役文で causee は DAT のみが可能であり, ABS は容認不可である (1c, 2c)。このように, transitive verb を含む使役文で causee が ABS を取るか DAT を取るかという点に関しては causee の volitionality, control の度合いは無関係である。

(1) *sat-* ‘to kill’ 「殺す」

- a. *ŋa-i rām sat-pā*
1sg-ERG Rām kill-PF.CJ

私は・が Rām を殺した。

- b. *hari-i rām sat-bo*
Hari-ERG Rām kill-PF.DJ

Hari は・が Rām を殺した。

- c. *ŋa-i hari:/*hari rām sat phān-pā*
1sg-ERG Hari.DAT Rām kill CAUS-PF.CJ

私は・が Hari に Rām を殺させた。

(2) *tā-* ‘to hear, sound’ 「聞こえる」

- a. *ŋa-i ke: tā-bo*
1sg-ERG sound hear-PF.DJ

私(に)は(何か)音が聞こえ(るようになっ)た。

などでの批判を受け、近年ではその代わりに “egophoricity” という用語が用いられることが多くなってきており (Widmmer 2017: 295–297), 著者もこれに全面的に同意するものであるが, 本稿では引き続き conjunct/disjunct という用語を, Hale (1980) で使用されているような概念としてではなく, “volitionality”, “locus of knowledge” によって “motivated” (Watters 2008: 300) された, “particular evidential pattern” (DeLancey 2003: 278), あるいは “a set of oppositions that index intentionality/evidential contrasts” (Hargreaves 2003: 376) として使用していることを付記しておく。

- b. *nu-i ke: tã-bo*

3sg-ERG sound hear-PF.DJ

彼・彼女（に）は（何か）音が聞こえ（るようになった）た。

- c. *ŋa-i nu:/*nu an-na den tã phān-pā*

1sg-ERG 3sg.DAT this-GEN song hear CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女にこの歌を聞かせた。

Causee に DAT しか可能でない動詞はすべて transitive verb であり, intransitive verb は一つも含まれていない。この分類において動詞 *bul-* ‘to be/get thirsty’ を transitive verb に分類していることについて疑義を持たれるかも知れないが, 実はこの動詞は常に名詞 *tyu* ‘water’ と共に使われる動詞であり, 名詞 *tyu* を目的語に取る他動詞として分析すべきものである。よって *tyu bul-* は文字通りには ‘to want water’ と訳すのがより適当である。

(3) *tyu bul-* ‘to be/get thirsty’ 「喉が渴く, 水を欲する」

- a. *ŋā tyu bul-bo*

1sg water thirsty-PF.DJ

私は喉が渴いた（水を欲するようになった）。

- b. *nu tyu bul-bo*

1sg water thirsty-PF.DJ

彼・彼女は喉が渴いた（水を欲するようになった）。

- c. *ŋa-i nu:/*nu tyu bul phān-pā*

1sg-ERG 3sg.DAT water thirsty CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女に（彼・彼女の）喉を渴かせた（水を欲するようにさせた）。

Transitive verb に *phān-* を付けて使役文にした場合, causee が ABS になることがない理由であるが, causee が ABS であると, ABS 名詞が文に二つ存在してしまうことに関連していると考えられる。この点でカイク語は, 「を」がついた名詞が複数存在する文の受容不能な日本語と同様である。一方, 文中に二つ DAT 名詞が共起することは問題ない。それ故, ditransitive verb (例 (4)) や, DAT 名詞を項に取る intransitive verb を使役文にした場合, DAT 名詞の格はそのままであり, 二つの DAT 名詞が文中に共起することになる。

(4) roə- ‘to say, talk’ 「話す」

- a. *ŋa-i an-na ruŋ hari: roə-pā*
 1sg-ERG this-GEN story Hari.DAT say-PF.CJ

私は・がこの話を Hari に話した。

- b. *ŋa-i nu/*nu nu-na ruŋ hari: roə phān-pā*
 1sg-ERG 3sg.DAT 3sg-GEN story Hari.DAT say CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女にこの話を Hari に話させた。

さて intransitive verb の方とは言うところ、その大多数は causee に ABS と DAT の両方が可能であるが、一部の intransitive verb は ABS のみ可能である。後者の部類に入る動詞は *khaŋ-* ‘be/get painful, sick’, *chār-* ‘grow’, *tā-* ‘recover (from sickness)’, *nāt-* ‘be/get injured, sick’, *phum-* ‘be paralyzed’ など、すべて noncontrol verb である。

(5) *khaŋ-* ‘to be/get painful, sick’ 「痛い・痛くなる、病気だ・病気になる」

- a. *ŋa khaŋ-bo*
 1sg painful-PF.DJ

私は痛くなった・病気になった。

- b. *ŋa-i nu/*nu: khaŋ phān-pā*
 1sg-ERG 3sg painful CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女を痛くさせた・病気にした。

これら ABS しか取れない動詞の多くは patient 項として inanimate noun (phrase) (例えば以下の例文 (6) の *ŋa-na phau* ‘my belly’) を取ることができ、またその内のいくつかは inanimate noun (phrase) しか取ることができない。Patient 項が inanimate 名詞である文に *phān-* を加えた文を使役文と呼べるかは疑問だが、いずれにせよ、*phān-* は intransitive 文を transitive 文とし、命令文とする際広く使用されることを記しておく。

(6) *khaŋ-* ‘to be/get painful, sick’ 「痛い・痛くなる、病気だ・病気になる」

- ŋa-na phau khaŋ-bo*
 1sg-GEN belly painful-PF.DJ

私の腹が痛くなった。

(7) tā:- ‘to recover (from sickness)’ 「(病氣・怪我が) 治る」

a. *nu tā:-bo*

3sg recover-PF.DJ

彼・彼女は・が(病氣・怪我から)治った。

b. *ŋa-i nu/*nu: tā: phān-pā*

1sg-ERG 3sg recover CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女(の病氣・怪我)を治した。

c. *khaŋ-nān tā:-bo*

painful-NM recover-PF.DJ

病氣が治った。

d. *ŋa-i nu-na khaŋ-nān tā: phān-pā*

1sg-ERG 3sg-GEN painful-NM recover CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女の病氣・怪我を治した。

(8) barāŋ- ‘to be/get full (of stomach)’ 「(腹が) いっぱいだ・いっぱいになる」

a. *ŋa-na phau barāŋ-bo*

1sg-GEN belly full-PF.DJ

私の腹は・がいっぱいになった。

b. *ŋa-i nu-na phau barāŋ phān-pā*

1sg-ERG 3sg-GEN belly full CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女の腹をいっぱいにした。

c. *nu-na phau barāŋ phān-ā*

3sg-GEN belly full CAUS-IMP

彼・彼女の腹をいっぱいにしな。

以下の例では、動詞 *sāt-*, *soe-* はそれぞれ「眠りから覚める」, 「(記憶などを) 取り戻す」という意味を表すが, いずれも必ず *miwa* ‘sleeping’ や *yākā* ‘memory’ (あるいは *tāmmā* ‘consciousness, memory’) といった inanimate noun (phrase) を項にとり, *phān-* によって transitive 文となった場合, causee として animate noun (phrase) が現れることもない。

(9) sāt- ‘to cease (of sb’s sleeping, i.e., to wake up)’ 「眠りが終わる」a. *ŋa-na miwa sāt-bo*

1sg-GEN sleeping cease-PF.DJ

私の眠りが終わった（私は眠りから覚めた）。

b. *ŋa-i nu-na miwa sāt phān-pā*

1sg-ERG 3sg-GEN sleeping cease CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女の眠りを覚ました（私は・が彼・彼女を起こした）。

(10) soe- ‘to come back (of memory; i.e., to recall sth), to revive (of flowers, etc.)’

「(記憶などが) 戻る」

a. *ŋa-na yākā soe-bo*

1sg-GEN memory come.back-PF.DJ

私の記憶が戻った（思い出した）。

b. *ŋa-i nu-na yākā soe phān-pā*

1sg-ERG 3sg-GEN memory come.back CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女の記憶を戻した（思い出させた）。

ちなみに、形容詞を含んだ文を他動詞文とする手段の一つとしても *phān-* が使われるが、その際動詞 *ra-* ‘to become, happen’ か *khye-* ‘to do’ を必要とする（動詞 *doŋ-* ‘to make’ を使うこともできる形容詞もある）。

(11) ADJ-*ma rā/khye phān-**ŋa-i ŋa-na yim kyi-ma ra/khye phān-pā*

1sg-ERG 1sg-GEN house big-NM become/do CAUS-PF.CJ

私は・が私の家を大きくした。

一方, causee に ABS と DAT の両方が可能である動詞 (Type II) の方であるが, この部類には noncontrol verb も control verb も含まれている。Control verb である intransitive verb はすべてこの部類であり, noncontrol verb の方は Type I と Type II に分かれている。Type I である noncontrol verb と Type II である noncontrol verb の違いは何かという点であるが, 一言えそうであることは, 前者が身体的な変化, 病気, 怪我などを表す動詞であるのに対して, 後者の多くが精神的な状況, 感情などを表す動詞であるということである。例えば *khyār-* ‘fear, be afraid’, *gusyi-* ‘be/get hungry’, *got-* ‘be/get tired’, *syē:tāŋ/thā:luŋ cyāŋ-* ‘be/get angry’ (*cyāŋ-* は 動詞 ‘stand’), *char-* ‘feel lazy’, *sam tu:-* ‘feel sad’, *nyin-* ‘fear, be afraid’, *yuŋ-* ‘be/get insane’,

yot- ‘be/get drunk’ などである。こうした後者の動詞の場合、その動詞が表す状況や状況の変化に対する自身の volitionality, control 度合いはそう高くはないものの、Type I の動詞の場合よりは高いと考えられる。動詞 *phān-* による使役文で考えると、causee の control, 関与度合いが比較的高いということになる。

さて、causee に ABS と DAT の両方が可能である動詞において、ABS の場合と DAT の場合でどのような意味の違いがあるかについては、母語話者である私のインフォーマントも判断に迷ったり混乱している部分も多く、確定的なことは言えないが、概して ABS を使った場合の方が causee の行為に対する causer の関与が強く、それに比例して causee の関与, control 度合いが低い意味となるようだ。英語に訳すと、ABS を使った場合 ‘force, make, get’ といった使役の意味が強く、DAT の場合 ‘let, allow’ といった「(自然に) そういう状況になる、(そういう状況になるのを) 許可する」といったニュアンスが強くなる。この点においてカイケ語のこの構文は日本語の「させる」を使った使役構文と似ていると言えよう。これまで日本語のこの使役構文において causee に「に」(DAT) を使う場合と「を」(ABS) を使う場合の意味の違いについては様々な用語で説明されてきた。例えば、Comrie (1985: 334) は *coercion* という語を使い、以下のように説明しているが、カイケ語の使役文についてもこういった説明が当てはまるであろう。

‘Sentence (139) [i.e., (12a)], with the direct object proposition *o*, implies greater coercion (e.g., Taroo forced Ziroom to go); (140) [i.e., (12b)], with the indirect object proposition *ni*, implies less coercion (e.g., Taroo persuaded Ziroom to go, got Ziroom to go by asking him nicely).’

(12) Japanese

- a. *Taroo ga Ziroom o ik-ase-ta*
Taroo SUBJ Ziroom DO go-CAUS-PAST

‘Taroo made Ziroom go.’

- b. *Taroo ga Ziroom ni ik-ase-ta*
Taroo SUBJ Ziroom IO go-CAUS-PAST

‘Taroo made Ziroom go.’

(Comrie 1985: 334)

Causee に ABS を使った場合と DAT を使った場合の意味の違いが比較的明らかであると著者のインフォーマントが判断した動詞はそう多くはない。動詞 *syi-* ‘to die’ はそのうちの一つである。

(13) *syi*- ‘to die’ 「死ぬ」a. *nu syi-bo*

3sg die-PF.DJ

彼・彼女は・が死んだ。

b. *ŋa-i nu syi phān-pā*

1sg-ERG 3sg die CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女を死なせた。

c. *ŋa-i nu: syi phān-pā*

1sg-ERG 3sg.DAT die CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女を死なせた。

Causee が ABS である文 (13b) の場合は、causee を死に至らしめた原因に causer が少なからず関与しているケースと理解できる。Causee を何らかの手段で causer が意図的に殺害したケースはもちろん、死にたがっている患者を医者が自殺幫助したケースにも ABS の使用が適当である。更に、殺害の意図はなかったが死に至らしめた原因が causer にあるケースでも ABS が使われる。例えば、川で溺れている causee を助ける手段はあったのに、積極的にそれを講じなかったケースや、causee を死に至らしめようという意図など毛頭なかったが、causer が救急車を呼ぶのが遅かったことで causee が死んでしまう結果となったケース、あるいは、causee が心臓に病気を抱えているということを知らずに causer が彼（女）にとっても悲しくショッキングなニュースを伝えた結果、心臓発作を起こし死に至ったケースなどがこれに該当する。Causee サイドから言えば、causee が自らの死という結果を避けることが（ほとんど）不可能だったようなケース、つまり「死ぬ」行為が自発的なものでは全く無く、「死ぬ」という状況の変化に対する causee の volitionality, control 度合いが極めて低いケースで ABS が使われると言える。最もわかりやすい例をあげれば、causee を死に至らしめた原因が人ではなく、モノやコト、例えば極度の寒さや悪い食べ物を食べた事実、である場合、「寒さ」や「悪い食べ物」といった inanimate noun (phrase) が ERG を、causee は ABS をとる。

一方、DAT を使用するケースとしては、屋上から飛び降りて自殺しようとしている人に対して、特にそれを止める積極的手段を講じず、彼（女）の意のままに自殺させた（causer が causee を死に至らしめた訳ではなく、その死の原因に関与したとは言えない）ケースなどがあげられる。

Causee に ABS を使った場合と DAT を使った場合の意味の違いが比較的明らかである動詞としてはその他に以下のものがあげられる。

(14) yot- ‘to get drunk’ 「酔っぱらう」

- a. *ŋa yot-bo*
1sg drunk-PF.DJ
私は酔っぱらった。
- b. *ŋa-i nu yot phān-pā*
1sg-ERG 3sg drunk CAUS-PF.CJ
私は・が彼・彼女を酔わせた。
- c. *ŋa-i nu: yot phān-pā*
1sg-ERG 3sg.DAT drunk CAUS-PF.CJ
私は・が彼・彼女を酔わせた。

(15) ā:- ‘to sleep’ 「寝る」

- a. *nu ā:-bo*
3sg sleep-PF.DJ
彼・彼女は・が寝た。
- b. *ŋa-i nu ā: phān-pā*
1sg-ERG 3sg sleep CAUS-PF.CJ
私は・が彼・彼女を寝させた。
- c. *ŋa-i nu: ā: phān-pā*
1sg-ERG 3sg.DAT sleep CAUS-PF.CJ
私は・が彼・彼女を寝させた。

(16) kyu:- ‘to vomit’ 「吐く」

- a. *nu kyu:-bo*
3sg vomit-PF.DJ
彼・彼女は・が吐いた。
- b. *ŋa-i nu kyu: phān-pā*
1sg-ERG 3sg vomit CAUS-PF.CJ
私は・が彼・彼女を吐かせた。
- c. *ŋa-i nu: kyu: phān-pā*
1sg-ERG 3sg.DAT vomit CAUS-PF.CJ
私は・が彼・彼女を吐かせた。

他にも, *dā-* ‘to cry’ や *do-* ‘to meet’ などの動詞は違いが比較的明らかな例である。また, 形容詞を含んだ文を他動詞文とする際に *phān-* が使われることについては上述した通りだが (例 (11)), その際 ABS と DAT の違いは causee が animate の場合によりはっきり現れる。例えば, 以下の例 (17) では, ABS を使った場合 (17a), causee である「彼 (女) が偉大な人物になった」原因に causer が積極的に関わった (例えば, 彼 (女) を積極的に援助したり, そうなれる環境, 機会を積極的に作ってあげたりした) というニュアンスが強く, 一方 DAT を使った場合 (17b) は, 特にそうした援助や支援をしていないというニュアンスが強いようだ。

(17) *ADJ-ma rā/khye phān-*

- a. *ŋa-i nu kyi-ma rā/khye phān-pā*
 1sg-ERG 3sg big-NM become/do CAUS-PF.CJ
 私は・が彼・彼女を大きな・偉大な人物にした。
- b. *ŋa-i nu: kyi-ma rā/khye phān-pā*
 1sg-ERG 3sg.DAT big-NM become/do CAUS-PF.CJ
 私は・が彼・彼女を大きな・偉大な人物にした。

結論として, causee が ABS を取るか DAT を取るかという点に関しては, 動詞が intransitive か transitive かということが最も大きな要因と言えようが, それと同時に, 何故 intransitive verb が Type I, Type II に分かれるのか, また, Type II で causee が ABS を取る場合と DAT を取る場合とでどのような意味上の違いがあるのか, という点を説明するのに, 動詞が表す状況や状況の変化に対する causer, causee の関与の度合い, volitionality, control 度合いという概念が有効である。ただし留意すべきは, 動詞接辞 *-pā* と *-bo* 等によって示される区別 (conjunct/disjunct) を説明する際用いる control verb, noncontrol verb という区別の境界と, causee が ABS を取るか DAT を取るかという境界とは一致していないという点である。

略号

1	1st person	DAT	dative	IO	indirect object
3	3rd person	DJ	disjunct	NM	nominalizer
ABS	absolutive	DO	direct object	PAST	past
ADJ	adjective	ERG	ergative	PF	perfective
CAUS	causative	GEN	genitive	sg	singular (used for pronouns)
CJ	conjunct	IMP	imperative	SUBJ	subject

参考文献

- Bradley, David. 1997. "Tibeto-Burman languages and classification." In: David Bradley (ed.), *Papers in Southeast Asian Linguistics No.14: Tibeto-Burman Languages of the Himalayas [Pacific Linguistics A-86]*, 1–72. Canberra: The Australian National University.
- Comrie, Bernard. 1985. "Causative verb formation and other verb-deriving morphology." In: Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description, volume III, Grammatical Categories and the Lexicon*, 309–348. Cambridge: Cambridge University Press.
- DeLancey, Scott. 2003. "Lhasa Tibetan." In: Graham Thurgood & Randy J. LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan Languages*, 270–288. London/New York: Routledge.
- Driem, George van. 2001. *Languages of the Himalayas: An Ethnolinguistic Handbook of the Greater Himalayan Region, vol. 2*. Leiden/Boston/Köln: Brill.
- Fisher, James F. 1987 [1975]. *Trans-Himalayan Traders, Economy, Society, and Culture in Northwest Nepal*. Delhi/Varanasi/Patna/Madras: Motilal Banarsidass.
- Fürer-Haimendorf, Christoph von. 1988 [1975]. *Himalayan Traders: Life in Highland Nepal*. New Delhi: Time Book International.
- Hale, Austin (ed.). 1973. *Clause, Sentence, and Discourse Patterns in Selected Languages of Nepal, part IV: Word Lists*. Norman, Oklahoma: Summer Institute of Linguistics.
- Hale, Austin. 1980. "Person markers: Finite egophoric and allophoric verb forms in Newari." In: Stephen A. Wurm (ed.), *Papers in South East Asian Linguistics 7 [Pacific Linguistics A-53]*, 95–106. Canberra: Australian National University.
- Hargreaves, David. 2003. "Kathmandu Newar (Nepāl Bhāṣā)." In: Graham Thurgood & Randy J. LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan Languages*, 371–384. London/New York: Routledge.
- Hargreaves, David. 2005. "Agency and intentional action in Kathmandu Newar." *Himalayan Linguistics* 5: 1–48.
- Honda, Isao. 2004. "A preliminary report on Kaike (Dolpa, Nepal)." Paper presented at the 10th Himalayan Languages Symposium, Thimphu, Bhutan. December 1, 2004.
- Honda, Isao. 2008a. "Some observations on the relationship between Tamangic and Kaike." *Nepalese Linguistics* 23: 83–115.
- Honda, Isao. 2008b. "Clause chaining with a reduplicated verb in Kaike." Paper presented at the 14th Himalayan Languages Symposium, University of Gothenburg, Gothenburg, Sweden. August 22, 2008.
- Honda, Isao. 2008c. "The Kaike conjunct/disjunct revisited." Paper presented at the 41th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, University of London, London, U.K. September 19, 2008.
- Honda, Isao. 2011. "A preliminary investigation into Kaike tones and a lexical comparison between Kaike, Tamangic, and Tibetan." Paper presented at the 17th Himalayan Languages Symposium, 神戸市外国語大学, 神戸. September 6, 2011.
- Honda, Isao. 2013. "Preliminary notes on the language of Kaike and its relation to other Himalayan languages." Paper presented at the 19th Himalayan Languages Symposium, Australian National University, Canberra, AUS. September 6, 2013.
- Jest, Corneille. 1975. *Dolpo. Communautés de Langue Tibétaine du Népal*. Paris: Éditions du Centre National de la Recherche Scientifique.
- 西義郎 1991. 「ヒマラヤ諸語の分布と分類 (中)」 "The distribution and classification of Himalayan languages" (Part II) 『国立民族学博物館研究報告』 *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 16/1: 31–158.
- Regmi, Ambika. 2013. *A Grammar of Magar Kaike*. München: Lincom Europa.
- Snellgrove, David L. 1989 [1961]. *Himalayan Pilgrimage: A Study of Tibetan Religion by a Traveller through Western Nepal*. Boston: Shambhala.
- Tournadre, Nicolas. 2008. "Arguments against the concept of 'conjunct' / 'disjunct' in Tibetan." In: Brigitte Huber, Marianne Volkart & Paul Widmer (eds.), *Chomolongma, Demawend und Kasbek: Festschrift für Roland Bielmeier zu seinem 65. Geburtstag*, 281–308. Halle: International Institute for Tibetan and Buddhist Studies.
- Watters, David. 2002. *A Grammar of Kham*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Watters, David. 2003. "Some preliminary observations on the relationship between Kham, Magar, (and

- Chepang).” Paper presented at the 36th International Conferences on Sino-Tibetan Languages and Linguistics held in La Trobe University, Melbourne, Australia.
- Watters, David. 2006. “The conjunct-disjunct distinction in Kaike.” *Nepalese Linguistics* 22: 300–319.
- Widmer, Manuel. 2017. “Review of *Evidential Systems of Tibetan Languages*, by Lauren Gawne & Nathan W. Hill (eds.)”, *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 40(2): 285–303.

メチエ語の使役構文

桐生 和幸

1. はじめに

本稿では、メチェ語の使役表現の体系と使役表現が表す意味についてその詳細を論じる。まず、本節では、メチェ語の概要について本稿の目的である使役に関する事柄を中心に紹介する。ある程度の詳細なメチェ語の概要については Kiryu (2008) や 桐生 (2010) を参照されたい。第2節では、メチェ語の使役表現のパターンを形態的な観点から論じる。第3節では、使役表現の統語的な側面として、参与者の項が取る格標示パターンについて論じる。第4節は、使役表現の意味的な側面に切り込み、各表現間の意味の差を論じる。

1.1. メチエ語の系統

メチェ語は、チベット＝ビルマ諸語のボド・ガロ (Bodo-Garo) 語支に属する言語で、ネパール南東のジャパ (Jhāpā) 郡で話されている。2011 年の人口統計によると人口 4867 人、話者は 4375 人であるが、若い世代でのネパール語へのシフトがかなり進んでおり、ネパール国内では 13 の危機言語のひとつとして数えられている。

メチェ語の話者による自称は、Bodoであり、インド・アッサム州で公用語として使われているボド語 (Boro) とは方言関係にあり、また、ネパールに隣接するヒマラヤ山麓域の西ベンガル州北部で話されるボド語の方言とほぼ同じである (Kiryu, 2012)。

A map of Nepal



ネパールの地図とメチエ語の言語地域 (Meche & Kiryu 2012)

1.2. メチェ語の音韻

メチェ語の音素は, a, i, u, e, ə; k, g, ŋ, c [ts/tʃ], j [(d)z/(d)ʒ], t, d, n, p, b, m, y, r, l, w, s, h, ʔ である。また, ピッチの高低の違いによる語の弁別が見られるが, 本稿では声調の区別は省略して表記する。多くの TB 諸語で見られる無声閉鎖音の有気・無気の対立は, メチェ語では見られない。無声閉鎖音は一般的に語頭では必ず有気音として現れ, 語中でもおおむね有気音で現れる。閉鎖音は, 尾子音 (coda) として現れた場合は, 氣息の放出を伴わない。

1.3. メチェ語の動詞

メチェ語の動詞は, jaʔ (食べる), ja (なる), bai (買う), baiʔ (折れる) などの単音節動詞や undu (寝る) sitat (殺す) などの二音節語が多い。二音節語には, bigrai (<bigrinu) などの -ai で終わるネパール語からの借用語も見られる。

動詞は以下 (1a) のような形態的構成素を取ることができる。(1b) と (1c) はその例である。

- (1) a. 接頭辞 – 動詞基体 – 動詞補助辞 *n* – TAM 接尾辞

- b. jaʔ-jred-bai-yə

食べる - 少し - あちこち -HAB

あちこちで少しずつ食べて回る。

- c. da-ləŋ-ləŋ

PROH- 飲む - 去る

飲んでいくな。

四角の部分は, 動詞語幹 (verb stem) であり, 動詞基体 (verb base) に様態, アスペクト, 移動などさまざまな意味を付加する動詞補助辞 (verbal auxiliary suffixes) が *n* 個付くことができる。(1b) では, -jred が少量であることを表し, -bai が複数の場所を回って動作が行われることを表している。また, (1c) では, 唯一の接頭辞である否定命令接頭辞 da- が付いた例である。また, -ləŋ は, 英語の away のような働きをしており, 動詞につくと「～していく」という意味になる。

動詞基体は, 単独の語根動詞 (root verb) であったり複合動詞 (compound verb) であったりするし, 別の動詞語幹が動詞基体として働くこともある。また, 動詞語幹は, 単独で命令形として使うことができる。

動詞語幹の後には, テンス・アスペクト・モダリティ (TAM) に関する以下の語尾が1つだけ付く。すなわち, -ə (習慣), -a (非過去否定), -aʔ (過去), -i: (過去否定), -bai (既然), -a khəi (未然), -dəŋ (継続・既然), -nai (未来)

のどれかが必ず付き、組み合わせて使われることはない¹。メチェ語は、他のチベット＝ビルマ系諸語に見られるような否定の接頭辞は、否定命令の *da-* しかなく、平叙文の否定は、テンス・アスペクトと融合した形式で表される。

1.4. 格標示パターン

メチェ語の動詞は、自動詞 (intransitive)、他動詞 (transitive)、および、両用 (ambitransitive) の3つのタイプが認められる。メチェ語の格標示は、主格対格型であるが、自動詞の場合、意味役割に応じてS項の格標示が異なる。また、他動詞の場合、O項の格標示はA項との関係において決まる²。

1.4.1. 自動詞

メチェ語の自動詞は、項を1つ取り、その項名詞に現れる格標識は、ゼロの場合もあるが、明示的に現れる場合は、主格形式または対格形式のどちらかが動詞にの種類によって現れる。主格形式は、*=a* と *=ə* の2つがあり、対格形式は *=kəu* の1つである。

自動詞のS項が主格形式で現れる場合、代名詞には *=ə* が、名詞には *=a* が付くか、あるいは、ゼロ表示として何もつかない。

- (2) a. *aŋ(=ə) taŋ-bai.*
私 (=NOM) 行く -PFCT
私は行った。
- b. *ram(=a) taŋ-bai.*
ラム (=NOM) 行く -PFCT
ラムは行った。

対格形式をS項に取る自動詞の場合は、*=kəu* が必ず付き、格標示がゼロになることはない。

- (3) *aŋ=kəu gəjaŋ-bai.*
私=ACC 寒くなる -PFCT
私は寒くなった。

¹ 母音で始まる接辞の場合、前に来る動詞の末音節に合わせて /y/ などの子音が介入することがある。すなわち、(1b) のような場合である。

² メチェ語の格体系については、桐生 (2010) で報告したとおりであるが、その後、Kiryu (2014) で報告したように、名詞句階層 (人称代名詞 > 有生名詞 [人間 > 動物] > 無生物名詞) が格標示に関係していることが分かっている。紙幅の関係で本稿では、その点については触れないが、簡単に言えば、二項述語の場合、O項がA項と階層が同じか上位の名詞の場合、A項の取る主格格標識を省略することはできない、という制約がある。

1.4.2. 他動詞

他動詞は、二項述語の場合、動作主（A）と対象（O）とを項として取る。A 項は主格形式が付くか、あるいは、無標のままのゼロ標示のどちらかになる。また、O 項も対格形式が付くか、あるいは、無標のままゼロ表示のどちらかになる。代名詞の場合、A 項として現れる場合は、ゼロ標示のパターンまたは明示的な標示が可能であるが、目的語として現れる場合は、必ず明示的格標示となる。

- (4) a. bi(=yə) əŋkam(=kəu) ja-bai.
 彼(=NOM) ご飯(=ACC) 食べる -PFCT
 彼はご飯を食べた。

- b. aŋ(=ə) bi=kəu jaʔ-bai.
 私(=NOM) 彼・それ=ACC 食べる -PFCT
 私はそれを食べた。

三項述語の場合、A 項は主格になるが、受け手である R 項と対象である O 項は、与格－対格というパターンか、与格 / 対格－ゼロ標示というパタンかのどちらかになる。

間接目的語には与格 =nə が付き、直接目的語は二項述語の O 項と同じパターンとなる。ここには、「与格＞対格＞ゼロ」という格標示階層が働き、受け手は対象物を取る形式よりも上位の形式でなければならない。

- (5) a. bərai=yə aŋ=nə phəisa=kəu hə-bai.
 老人=NOM 私=DAT お金=ACC やる -PFCT
 老人が私にお金をくれた。
- b. bərai=yə aŋ=nə/=kəu phəisa hə-bai.
 老人=NOM 私=DAT/=ACC お金 やる -PFCT
 老人が私にお金をくれた。

2. メチェ語の使役表現パターン

メチェ語における使役事態の表し方には、以下の 3 つの種類が認められる。

1. 語彙的使役 (lexical causative)
2. 接辞付加による形態的使役 (morphological causative)
3. 従属節構造を活用した迂言的使役構文 (periphrastic causative)

語彙的使役は、所謂有対動詞の区別に関係し、迂言的使役構文は、所謂「使役」

に関係する。形態的な使役は、両方のドメインに関係するものもある。ここでは、語彙的使役形および接辞付加による形態的使役を使役動詞と呼び、迂言的な使役は使役構文として区別することにする。以下では、まず、使役動詞のタイプについて概観し、その後、使役構文のパターンと用法について検討する。

2.1. 使役動詞の形式

メチェ語では、自動詞、使役動詞、非使役動詞の形式的な対応関係を見た場合、Haspelmath (1993), Nichols et al. (2004), Comrie (2006) で議論されているもののうち、非使役動詞から使役化 (causative), 反使役化 (anti-causative), 両極化 (equipollent), 両用 (labile), 補充 (suppletion) の5つのタイプが認められる。Dixon (2000) の分類では、使役化、反使役化、両極化は形態的使役、両用および補充は語彙的な使役と分類される。桐生 (2015) では、Dixon の分類に従ってメチェ語の有対動詞のタイプを考察した。以下では、この議論をベースに、新しく認めた形態的使役のパターンについても加えて、メチェ語の使役形態パターンの概要をまとめる。

2.2. 語彙的使役

Dixon は、語彙的な使役のパターンとして、(i) 一つの動詞が自他両用で使える場合 (ambitransitive/labile) と (ii) die/kill のような異なる2つの語彙が使役・非使役で対応する場合とを挙げている (所謂補充)。メチェ語では、これら両方のパターンが見られる。ただし、次に述べる形態的使役に比べると数は非常に少なく、桐生 (2015) から引用すれば、両用が26ペア、補充が9ペアに過ぎない。両用は、特にインド・アーリア系の言語からの借用語に多く見られる。(6) の例は、メチェ語固有のもので、(7) はインド・アーリア系言語の借用語である。

- (6) bən 「巻く」, bəngidiŋ 「巻きつく・巻き付ける」, beŋte 「塞がる・塞ぐ」, he 「捻じれる・捻る」, məcib 「(目が・を) 閉じる」, pai 「曲がる・曲げる」, pehen/peher 「広がる, 広げる」, səlai 「変わる, 変える」, ton 「丸まる, 丸める」, paŋ(te) 「閉じる」

- (7) bigrai 「壊れる・壊す」, təpi 「加わる・加える」, dub-ai 「浸る・浸す」, bədl-ai 「変わる・変える」, ultaŋ 「ひっくり返る・ひっくり返す」

インド・アーリア系言語からの借用では、元の言語の語幹に -i または -ai という接辞をつけることで派生する。

以下の例は、補充タイプの対である。

- (8) əŋkat 「出る」－bohon 「出す」, go 「(毛・歯が) 抜ける」－pu 「(毛・歯を) 抜く」, ja 「(出来事が) 起きる」－dekaŋ 「(出来事を) 起こす」, ja? 「食べる」－dəu 「食べさす」, mən 「炊ける」－coŋ 「炊く」, ja 「生まれる」－gopai 「生む」, jəŋ 「燃える」－sau 「燃やす」, sidimən 「目覚める」－pəja 「目覚めさす」, təi 「死ぬ」－sitat 「殺す」

2.3. 形態的使役

Dixon (2000, 34) では、形態的な派生として (a) internal change, (b) consonant repetition, (c) vowel lengthening, (d) tone change, (e) reduplication, (f) prefix, (g) suffix, (h) circumfix の 8 つのパターンを挙げている。メチェ語では、(a), (f), (g) のパターンが見られるが、(a) と (f) のタイプが組み合わさったケースも見られる。ここでは、便宜的に (a), (f), および、(a) と (f) の複合タイプの形態的使役パターンを「I 型形態的使役」と呼び、接尾辞によるものを「II 型形態的使役」と呼んでおくことにする。この両者の違いは、使役の表す意味の範囲の差にも関係してくる。

2.3.1. 自動詞の初頭子音の交替

自動詞の初頭子音有声無気破裂音が同じ調音点・調音法の無声有気音になることで使役動詞になるパターンである。(9) の例を見ると、両極のようにも見えるが、初頭子音の無声無気音化は TB 祖語の使役接頭辞 *s- が付加したことに由来するものと考えることができ、他の TB 諸語でもよく見られる現象である。共時的なレベルでは、上述の (a) のタイプと考えられる。

- (9) bai 「壊れる」－pai? 「壊す」, gau 「2 つに割れる」－kau 「2 つに割る」, geu 「開く・(空気が) 抜ける」－keu 「開ける・(空気を) 抜く」

2.3.2. 接頭辞付加による使役化

使役化に関わる接頭辞は、pV-, bV-, si- の 3 種類がある。V は、接続する動詞の語幹にある母音とおおむね調和する母音を示している。

- (10) a. ci 「濡れる」－pi-ci 「濡らす」, ceb 「狭まる」－pe-ceb 「狭める」, ham 「よくなる」－pa-ham 「良くする」, jəb 「終わる」－pə-jəb 「終える」, lau 「伸びる」－pə-lau 「伸ばす」, su 「冷める」－pu-su 「冷ます」, ju-tum 「集める」－pu-tum 「積み重ねる」, go-sor 「漏れる」－po-sor 「漏らす」
b. ju-tum 「集まる」－bu-thum 「集める」

- c. gab「泣く」－si-gab「泣かす」, gi「怖がる」－si-gi「驚かす」,
ji-kaŋ「起きる」－si-kaŋ「起こす」

3つの接頭辞で一番多いのがpV-パターンであり、それ以外のものは数が少なく、si-については、上の2つしか見つかっていない。また、putum, posor, butum, sikaŋのように、ももとの2音節語の1音節目が使役接頭辞で置き換わるような両極(equipollent)型も見られる。

2.3.3. 初頭子音交替と接頭辞の組み合わせによる使役化

上述の2つのパターンが融合したタイプがpV-, bV-, si-に見られる。

- (11) a. un-du「眠る」－pu-tu「寝かす」
b. geu「開く」－be-keu「開く」, gu「抜ける(歯・葉)」－bu-ku「抜く」,
go「抜ける」－bo-ko「引っこ抜く」, ji「破れる」－bi-ci「破く」,
jo「ちぎれる」－bo-co「引きちぎる」
c. ga「治る」－cə-ka「治す」, gau「ひび割れる」－cə-kau「ひびを入れる」,
gəmət「消える」－ci-kəmət「消す」
d. gə-glai「落ちる」－si-klai「落とす」

接頭辞のみの場合と同様に、2音節語の初頭音節と使役接頭辞が交替する両極(equipollent)型も見られる(putu, siklai)。

2.3.4. 接尾辞による使役化

接尾辞による使役化は、かなり生産的であり、メチェ語の形態的使役派生の大多数を占める。ここで関係する接辞は、-həであり、ももとは(12)のようにgiveの意味を持つ授受動詞である。また、これまで見た3つのパターンは、自動詞にしか付かず、自動詞から他動詞(使役動詞)を派生するものとみることができ、この接辞は、自動詞にも他動詞にも付けることができ、見た目上他動詞派生にも関与するし、(15)のように所謂「使役」構文の形成にも関係する。

- (12) aŋ syam=nə pəisa hə-bai.
1SG シャム=DAT お金 与える-PFCT
僕はシャムにお金をあげた。

- (13) a. bisa = ya undu-bai.

子供 =NOM 寝る -PFCT

子供は寝た。

- b. bima = ya bisa = kəu undu-hə-bai.

母 =NOM 子供 =ACC 寝る -CAUS-PFCT

母は、子供を寝かせた。

- (14) a. bom = a gau-bai.

爆弾 =NOM 破裂する -PFCT

爆弾が破裂した。

- b. ram = a bom gau-hə-bai.

ラム =NOM 爆弾 破裂する -CAUS-PFCT

ラムが爆弾を破裂させた。

- (15) ram = a sita = kəu taŋ-hə-bai.

ラム =NOM シタ =ACC 行く -CAUS-PFCT

ラムは、シタを／に行かせた。

この使役接辞は、上で見た接頭辞や初頭子音交替によって使役化された動詞につけることも可能である。

- (16) ram = a bisa = kəu lauti cipəi-hə-bai.

ラム =NOM 子供 =ACC 棒 折る -CAUS-PFCT

ラムは、子供に棒を折らせた。

しかし、すでに -hə を用いて作られた使役動詞にさらに使役接辞をつけることはできない。この場合は、(17b) のように迂言的使役使役構文を用いなければならない。

- (17) a. ram = a dəi = au muli gili-hə-bai.

ラム =NOM 水 =LOC 薬 溶ける -CAUS-PFCT

ラムは水に薬を溶かした。

- b. ram = a bisa = kəu dəi = au muli gili-hə-nə hə-bai.

ラム =NOM 子供 =ACC 水 =LOC 薬 溶ける -CAUS-SUB やる -PFCT

ラムは、子供に水に薬を溶かさせてやった。

2.3.5. 形態的使役の生産性

以上、形態的使役には3つのタイプの形態的使役があることを見た。それぞれの使役化パターンは、生産性において差がある。初め、便宜的に分けたI型形態的使役（初頭子音交替による使役化と接頭辞付加による使役化）は、決まった動詞、それも自動詞でしか見られない。「溶ける」という意味の *gili* を **kili* や *pə-gili* のように使役形を派生することはできないし、他動詞にI型形態的使役パターンを当てはめ、例えば、*bai*「買う」を *pai*, *cəbai/cəpai* のようにして「買わせる」という意味の使役形を派生することはできない。

それに対して、II型形態的使役とした接尾辞 *-hə* による使役化は、すべての動詞に適用できるので、*gili* と *bai* の使役形は、*-hə* をつけて *gili-hə*, *bai-hə* というように派生することができる。*-hə* は、基本的にどの動詞にもつけることができ、I型形態的使役で派生した使役動詞にもつけることができる。例えば、*ci-pai?*「折る」に *-hə* をつけて、*ci-pai?-hə*「折らせる」を派生することが可能である。

接頭辞使役接辞は、*pV-*, *bV-*, *cV-*, *si-* の4種類があることを見た。このうち、*si-* は明らかにPTBで想定されている使役・方向接頭辞 **s-* と同根であり、歴史的には最も古いと考えられる。

これら4つの接頭辞の付き方については、ある一定の法則が見られる。Meche and Kiryu (2012) の辞書データをもとに調べてみると、以下のようなことが分かった。

si- が付く語を見ると、*si-gi*「驚かす」、*si-gab*「泣かす」、*si-klai* (<*gəglai*)「落とす」、*si-kəma* (<*goma*)「隠す」のように、元の動詞の初頭子音が軟口蓋閉鎖音 /g/ であるという点で共通している。

また、*cV-* は、/g/ で始まる *cə-ka* (<*ga*)「治す」、*cə-kau* (<*gau*)「割る」があるが、他にも *ci-mau*「動かす」、*ci-pai?* (<*bai?*)「折る」があり、この二つに共通するのは、初頭子音が両唇音 (/m/ と /b/) である点である。

pV- がつく自動詞の初頭子音に軟口蓋閉鎖音 (/k/, /g/) と両唇閉鎖音 (/b/, /p/) で始まるものはなかった。両唇の鼻音 /m/ で始まるものは、唯一 (*pə-mən*「炊く」< *mən*「炊ける」) が1つだけ認められた。

bV- は、*pV-* の異音のようにも見えるが、どちらも /j/ で始まる自動詞に付く。ただし、*pV-* の場合は、*jam*「古くなる」> *pə-jam*「古くする」のようにそのままつくが、*bV-* の場合は、*jo*「ちぎれる」> *bo-co*「ちぎる」のように元の動詞の初頭子音が無声無気音化する。

表1は、4つの接頭辞がどのような初頭子音を持つ動詞につくかをまとめたものである。接辞付加の場合、上で見たようにそのままの動詞の音に変化せずにつく場合と、無声無気音化してつく場合とがある。音変化を伴わず付くものには+を付す。無声無気音化する場合は、元の動詞の初頭子音には+を付し、接辞が付いた時の初頭子音には*を付すこととする。

表1 接頭辞使役接辞と初頭子音の関係

接頭辞\子音	p	b	m	t	d	n	c	j	s	k	g	h	r	l	w
pV-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	+	+	+	+
bV-	-	-	-	+	-	-	*	+	-	*	+	-	-	-	-
cV-	*	+	+	-	-	-	*	+	-	*	+	-	-	-	-
si-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-

先に述べたこと以外で、この表から分かることは、以下のとおりである。

(i) pV- の場合、1つの例を除き初頭子音交替を伴わない。唯一の例外は、undu>putu「寝る>寝かす」のペアだけである。

(ii) pV- と bV- は、おおむね相補分布をなしているとも言えるが、/j/, /t/ では相補的ではない。ただし、/j/ で始まる語の場合 bV- が付くと /c/ に交替する (jo>bojo「ちぎる>引きちぎる」) が、pV- の時は、そのままつく (jam>pəjam「古くなる>古くする」) という違いがある。また /t/ の例は、jutum「集まる」、putum「積み重ねる」、butum「集める」のみで、初頭音節の交替として現れるものである。

2.4. 迂言的使役構文

迂言的使役は、動詞 hə が補文を取ることで形成される。パターンは (17b) や (18) および (19) のように V-nə hə となる。ここでの hə は、元来の語彙的意味である「与える」という意味は失っていると言える。

- (18) aŋ-kəu sinema nai-nə hə.
 1SG-ACC 映画 見る -SUB やる .IMP
 僕に映画を見させて。

- (19) “oho, jirai, babu, jirai, jirai, dandəice jirai.”
 おお 座る .IMP 坊や 座る .IMP 座る .IMP 少し 座る .IMP
 jirai-nə hə-bai, bi burəi = ya.
 座る -SUB やる -PFCT その 老人 =NOM

「さあ、坊や座った、座った、座った。ちょっと座りなさい。」その老人は座らせた。

3. 統語的特徴

本節では、メチェ語の使役構文の統語的な特徴を論じる。論じる内容は、使役構文において使役者、被使役者等が取る格標示パタン、および、使役構文の構造について論じる。格標示パタンについては、非使役事態が自動詞を含む場合と他動詞を含む場合とを見る。使役構文の構造については、統語的に単文構造なのかそれともそうでないかをそれぞれの使役表現パタンについて検討する。

3.1. メチェ語の使役表現に現れる項の格標示

3.1.1. 非使役事態が自動詞を含む場合

第1節で見たように、自動詞文の主語であるS項には、主格を取るタイプと対格を取るタイプとがある。主格標識 =a/=ə は省略可能だが、対格標識 =kəu は、省略できないということを見た。

主格標識を取る動詞を使役構文にした場合、もとのS項である被使役者は、対格標示を受ける。ただし、対格標識は省略が可能である。

(20) 語彙的使役

- a. duwar(=a) geu-bai.
 ドア (=NOM) 開く -PFCT
 ドアが開いた。
- b. aŋ duwar(=kəu) keu-bai.
 1SG ドア (=ACC) 開ける -PFCT
 僕はドアを開けた。

(21) a. si ci-bai.

服 濡れる -PFCT

服が濡れた。

- b. bisa=ya si(=kəu) pici-bai.
 子供=NOM 服 (=ACC) 濡れる -PFCT
 子供が服を濡らした。

(22) 形態的使役

- a. cəima=ya kat-dəŋ.
 子供 (=NOM) 走る -CONT
 犬が走っている。
- b. bisa=ya cəima(=kəu) kat-hə-dəŋ.
 子供 =NOM 犬 (=ACC) 走る -CAUS-CONT
 子供が犬を走らせている。

対格を S 項に取る自動詞は、感覚を表す動詞が多いが、使役にした場合、非使役事態の S 項は、そのまま対格として現れ、省略はできない。

- (23) a. aŋ=kəu meŋ-bai.
 私 =ACC 疲れる -PFCT
 私は疲れた。
- b. bisa=ya aŋ=kəu meŋ-hə-bai.
 子供 =NOM 私 =ACC 疲れる -CAUS-PFCT
 子供が私を疲れさせた。

許容を表す使役構文の場合も同様である。

- (24) aŋ bisa=kəu jirai-nə hə-bai.
 私 子供 =ACC 座る -SUB やる -PFCT
 私は、子どもを座らせてやった。

3.1.2. 非使役事態が他動詞を含む場合

他動詞からは、形態的な使役構文か迂言的使役構文のどちらかを作ることができる。この場合、他動詞の元の動作主である被使役者は、与格または対格のどちらかになるが、基本的に元の他動詞の目的語が無標である場合は対格として現れる方が自然である。

- (25) a. gələi=ya əŋkam jaʔ-bai.
 子供 =NOM ご飯 食べる -PFCT
 子供はご飯を食べた。

- b. aŋ gələi=kəu əŋkam jaʔ-hə-bai.
 私 子供=ACC ご飯 食べる -CAUS-PFCT
 私は、子供にご飯を食べさせた。

しかし、他動詞の元の目的語が (26a) のように対格マーカーを伴っていたり、(26b) のように文末に置かれ文脈的に被使役者に焦点が当たるような場合は、与格になる。

- (26) a. aŋ gələi=nə əŋkam=kəu jaʔ-hə-bai.
 私 子供=DAT ご飯=ACC 食べる -PFCT
 私は、子供にご飯を食べさせた。
- b. coŋ-nan kau-nan jaʔ-hə-bai, gələi-pər=nə bə.
 調理する -CP 分ける -CP 食べる -CAUS-PFCT 子供 -PL=DAT も
 ご飯を作り、分けて食べさせた、子どもたちにも。

少なくとも、元の手動詞の対象が対格マーカーを伴っている場合、与格にすることはできないので、使役構文でも DAT > ACC > ゼロという格の階層関係が反映されている。

迂言的使役構文の場合も、形態的使役と同じで、元の手動詞の動作主は、使役文では対格か与格で表され、その目的語が対格マーカーを取る場合は、与格にならない。

- (27) a. ram=a sita=kəu mani pidiŋ-hə-bai.
 ラム=NOM シタ=ACC マニ車 回す -CAUS-PFCT
 ラムはシタにマニ車を回させてやった。
- b. ram=a sita=nə mani=kəu pidiŋ-hə-bai.
 ラム=NOM シタ=DAT マニ車=ACC 回す -CAUS-PFCT
 ラムはシタにマニ車を回させてやった。

3.2. 使役構文の構造

最後に、語彙的使役は、単一の節構造を持つものに対して、形態的使役は埋め込み文のような構造を持つ可能性があるを示す。メチェ語には、gaunə という表現がある。意味としては、「一人で・自分で」という意図的動作による動作であることを表す場合と「自然に」という自発的な動作であることを表す場合のいずれかに解釈が可能である。

- (28) a. ram=a bi=kəu gaunə banai-bai.

ラム=NOM それ=ACC 自分で 作る -PFCT

ラムがそれを自分で作った。

- b. duwar=a gaunə geu-bai.

ドア=NOM 自然に 開く -PFCT

ドアが自然に開いた。

この gaunə を用いて解釈テストを行うと、語彙的使役と形態的使役の構造の違いが分かる。

- (29) a. ram=a duwar=kəu gaunə keu-bai.

ラム=NOM ドア=ACC BY.SELF 開ける -PFCT

ラムは、ドアを自分で開けた。(≠ ドアが自然に開くようにした。)

- b. ram=a duwar=kəu gaunə geu-hə-bai.

ラム=NOM ドア=ACC BY.SELF 開く -CAUS-PFCT

ラムは、ドアを自分で・自然に開くようにした。

(29a) の語彙的使役の場合は、どのような文脈を与えても、ドアが自然に開くように仕向けるという自発的な解釈は成り立たず、ラムが自分で・一人で開けた、という動作主的解釈のみが成立する。それに対して、(29b) は、文脈なしではドアが自然に開くように仕向けた、という自発的な意味で解釈される傾向が強いが、他の人の助けを借りずに、という文脈を与えてやると、(29a) とは異なり、動作主的な解釈も可能である。

語彙的使役の場合も同じことが言える。

- (30) a. aŋ oma=kəu gaunə sitat-bai.

私 豚=ACC BY.SELF 殺す -PFCT

私は自分で豚を殺した。

- b. aŋ oma=kəu gaunə tət-hə-bai.

私 豚=ACC BY.SELF 死ぬ -CAUS-PFCT

私は自らが豚を死なせた。・私は豚が勝手に死ぬようにした。

(30a) では、gaunə が指すのは、動作主である「私」だけであるが、(30b) では、使役者の「私」でも被使役者の「豚」のいずれかでの解釈が可能である。豚を指す場合は、豚が自ら死ぬように仕向けたという意味になる。

以上のことを見ると、語彙的使役、I 型形態的使役では構造的に単一の節から

なるが、II 型形態的使役では、使役事態の中に非使役事態が埋め込まれた構造であることが伺える。

また、迂言的使役構文は、*-nə* という目的を表す不定従属マーカールを取ることから、表面的にも単一節ではないことが分かるが、事実、*gaunə* をつけた場合、使役者と被使役者のどちらでも指すことができる。次の例では、1 の位置に置かれた場合、「私」を指すのに対して、2 の位置に置かれた場合は、「レンタ」を指す。

- (31) *aŋ gaunə₁ rentə=kəu gaunə₂ gidiŋ-nə hə-bai.*
 私 BY.SELF レンタ=ACC BY.SELF 回る-SUB やる-PFCT
 私は、自分₁でレンタを自分₂で回らせた。

4. 使役表現の意味的特徴

使役事態は、意味的な観点から使役者 (causer) と結果事態の主体である被使役者 (causee) との関係によって直接使役 (direct causation) と間接使役 (indirect causation) のように分けられるのが通例である。特に、使役者と被使役者の非使役事態に対するコントロールの程度と被使役者の主体性 (volition) の度合いにより、両者は連続的に関連している。

最も典型的な直接使役では、非使役事態が完全に使役者のコントロール下に置かれ、被使役者にはコントロールも主体性もない。このような事態は、(32) のように被使役者が無生物であり、非使役事態の動作が自発的なもので、使役動詞が自動詞に対する他動詞として働くような場合である。メチェ語では、このような場合の他動詞は、語彙的使役と I 型形態使役の動詞がこれに該当する。

- (32) a. *lauti=ya bai?-bai.*
 棒=NOM 折れる-PFCT
 棒が折れた。
- b. *ram=a bi lautikəu cipai?-bai.*
 ラム=NOM その 棒=ACC 折る-PFCT
 ラムはその棒を折った。

これに対し、(33) では、使役者は被使役者が行う事態を監視し、そこに介入し止めさせることのできる余地はあるけれども、積極的に関わるものではなく、非使役事態の遂行は被使役者が主体的に行うもので、非使役事態の成立を許容するという間接使役の例である。

(33) ram = a bisa = kəu gele = nə hə-bai.

ラム = NOM 子供 = ACC 遊ぶ = PURP やる -PFCT

ラムは子供を遊ばせてやった。

Dixon (2000: 62) は、使役動詞になる動詞の性質、使役における使役者と被使役者の性質の違いによって使役構文の意味的範囲を規定するために (34) 9つの意味変数を設定している。

(34) a. Relating to the verb

1. State/action

状態動詞だけが使役化の対象となるか、それとも動作動詞も対象となるか。

2. Transitivity

使役化の対象となる動詞の他動性との関係。

b. Relating to the causee (Original S or A)

3. Control

被使役者に動作の支配権があるか。

4. Volition

被使役者が動作を行う意思がある。

5. Affectedness

全体的に影響を受けるのか、部分的な影響なのか。

c. Relating to causer (in A function in the causative construction)

6. Directness

使役者が直接的にその事態の達成に関与しているか。

7. Intention

使役者が意図的に使役動作を行うのか、非意図的なのか。

8. Naturalness

使役動作を無理なく遂行できるのか、それなりの労力を伴うのか。

9. Involvement

使役者が被使役動作を被使役者とともにやっているか。

9つのパラメータのうち、メチェ語の使役構文の差に関わるのは、5, 7, 8以外の6つのパラメータである。パラメータ5については、部分的な影響を受けるのか全体的な影響を受けるのかの区別は、メチェ語では使役構文の選択に関係しない。また、被使役者の意図性や自然性についても使い分けの区別には関係しない。7の意図性についても、メチェ語では直接は関係しない。文脈次第で意図的・非

意図的どちらの解釈も可能であり，殊に非意図的な状況を表すならば，*-pənan* という補助動詞接辞をつけることが可能である。また，8 も使役構文の成立・選択にメチェ語では無関係で，「無理に」という意味は *-tar* という動詞補助接辞で付け加えることができる。

関係するパラメータのみまとめると以下の表 2 のようになる。

表 2 メチェ語の使役構文に関する使役パラメータ

			語彙的使役	I 型形態的使役	II 型形態的使役	<i>-nə hə</i>
Verb	1	State/action	変化自動詞	変化自動詞	すべて	すべて
	2	Transitivity	変化自動詞	変化自動詞	すべて	すべて
Causee	3	Control	－	－	±	＋
	4	Volition	－	－	±	＋
Causer	6	Directness	＋	＋	±	－
	7	Involvement	＋	＋	±	－

メチェ語では，語彙的使役と I 型形態的使役（初頭子音交替型・接頭辞付加型）は，使役のパラメータに関して違いがない。これらの使役動詞は，実質的に自動詞に対し二つの項を取る他動詞として機能していると言える。II 型形態的使役（接尾辞 *-hə* を付加する使役）は，あらゆる動詞が対象となり，使役者・被使役者のパラメータも動詞の元の意味と文脈によって決まり制約がない。迂言型は基本的に許可を与える使役構文であるため，非意志動詞がこの構文には現れにくい，まったく不可能ではない。この点は，後の方で例を見て説明する。

動詞についてのパラメータ 1 と 2 に関しては，コンピュータと存在動詞だけは使役化の対象とはならないということが共通する。語彙的使役と形態的使役は，変化を表す自動詞だけが対象となる。メチェ語では，状態を表す述語の多くが変化自動詞に状態化接頭辞 *gV-* をつけることで派生される（例：*hai* 低くなる > *ga-hai* 低い）。このような動詞は，すべて *pV-* をつけて使役を派生する（例：*hai* > *pa-hai* 低くする）（桐生（2016）参照）。

接尾辞型の使役は，すべての動詞が対象となる。このことは，語彙的使役や形態的使役の対象となる自動詞でも，*-hə* をつけた使役化が可能であることを意味する。例えば，前節で見たように，*gau* 「割れる」に対する使役形は *cəkau* という接頭辞＋初頭子音交替というパターンによる他動詞があるが，*gau-hə* という接尾辞による使役形も可能である。

- (35) a. dəihu gau-bai.
壺 割れる -PFCT
壺が割れた。
- b. aŋ dəihu cəkau-bai.
私 壺 割る -PFCT
私は壺を割った。
- c. aŋ dəihu gau-hə-bai.
私 壺 割れる -CAUS-PFCT
私は壺を割れるようにした。

(35b) と (35c) の違いは、前者が他動詞として機能しており、使役者が直接叩くなどして壺が割れるという事態を引き起こしたことを意味するのに対して、後者は、そのような意味で用いることもできるし、直接的でなく割れるように仕向けたり、第3者を介して割った場合でも用いることができるという点にある。

ちなみに、非意志動詞が迂言的使役構文に使われた場合、使役者が非使役事態の発生を許容するという意味になる。例えば, gau「割れる」で考えてみよう。(36)の文は、壺にひび割れが入り始め、割れてしまうのは時間の問題だが、割れても仕方がないと考え、何もせずにそのままにしておいた結果、壺が割れた、という場合である。

- (36) aŋ dəihu gau-nə hə-bai
私 壺 割れる -SUB やる -PFCT
私は壺を割れるにまかせた。

意志動詞の場合も、接頭辞型使役の対象となる自動詞に -hə をつけて使役が可能である。例えば、「寝る」という意味の undu に対する使役形は, putu および undu-hə の両方が可能である。putu は、形態的には undu の du を初頭子音交替で tu にし、それに使役接頭辞 pV- をつけたものと見ることができる。

- (37) a. gəlai=ya undu-bai.
子供 =NOM 寝る -PFCT
子供は寝た。
- b. bima=ya gəlai=kəu putu-bai.
母 =NOM 子供 =ACC 寝かす -PFCT
母親は子供を寝かしつけた。

c. bima = ya gəlai = kəu undu-hə-bai.

母 =NOM 子供 =ACC 寝る -CAUS-PFCT

母親は子供を寝かせた。

(37b) は、例えば、子供を抱いていて、揺らしながら眠りにつかせるような状況を表す。それに対して (37c) では、寝かしつけるような解釈も可能だが、歌を歌ってあげて眠るようにしたり（パラメータ 6 と 7 は +）、寝なさいと指示して寝かせたり（パラメータ 6 は +, 7 は -）する場合に使うことができる。基本的には「寝るようにする」という意味だと見ることができ、子供が自らの意志で眠ってもよいし（パラメータ 3/4 は +）、無理やり（薬で）眠らされた場合（パラメータ 3 と 4 が -）でも構わない。

5. 結論

以上、本稿ではメチェ語の使役表現パターンについて論じてきた。メチェ語では、使役は語彙的使役、形態的使役、迂言的使役の 3 つのタイプがあり、形態的使役は初頭子音交替、および、接頭辞付加による I 型形態的使役と接尾辞付加による II 型形態的使役の 2 つにわけることができる。語彙的使役と I 型形態的使役は、gaunə の解釈から単一の節からなる構造で、自動詞に対する語彙的な他動詞として機能しているとみなせるのに対し、II 型形態的使役と迂言的使役は非使役事態節を埋め込み構造として持つ可能性を見た。

統語的な特徴として、使役文における各参与者の格の現れ方について検討した。その結果、被使役者が取る格は、非使役事態の中に含まれる他の参与者の取る格標示によって異なってくることを明らかにした。

また、接頭辞型の使役では、4 つの接頭辞の分布パターンを接続する動詞の初頭子音との組み合わせから、ある一定の法則性があることを明らかにした。これらの接頭辞について同系統の他の言語との比較や TB 諸語との関連から今後考察を深めることが課題として残っている。

最後に使役表現の意味的な側面について Dixon (2000) の使役に関するパラメータを用いて分析を行った。ここからも、語彙的使役・I 型形態的使役は語彙的な他動詞として機能していることが裏付けられたと言える。

略号

ACC : accusative 「対格」, CAUS : causative 「使役」, DAT : dative 「与格」, HAB : habitual 「習慣」, IMP : imperative 「命令」, LOC : locative 「所格」, NOM : nominative 「主格」, PFCT : perfect 「已然」, PL : plural 「複数」, PROH : prohibitive 「禁止」, PURP : purposive 「目的」, SG : singular 「単数」, SUB : subordinator 「従属接辞」, 1 : 1 人称

参考文献

- Comrie, B. (2006) Transitivity pairs, markedness, and diachronic stability. *Linguistics* 44(2), 303–318.
- Dixon, R. (2000) A typology of causatives. In: Dixon, R. M. W., Aikhenvald, A. Y. (Eds.), *Changing Valency: Case Studies in Transitivity*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 30–83.
- Haspelmath, M. (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In: Comrie, B., Polinsky, M. (Eds.), *Causatives and Transitivity*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 87–120.
- Kiryu, K. (2008) *An outline of the Meche Language—a Grammar, Text and Vocabulary*. Report for 2007 Grant-in-Aid for Scientific Research (No. 17720093) granted by the Ministry of Education, Science, Sports and Culture, Tsuyama: Mimasaka University.
- Kiryu, K. (2012) Western Bodo dialects in Nepal and northern West Bengal. 美作大学・美作大学短期大学部紀要 57, 9–18.
- Kiryu, K. (2014) Case-marking and animacy hierarchy in Meche. A paper presented at 20th Himalayan Languages Symposium, Nanyang Technological University, Singapore, 18 July 2014.
- Meche, S. L., Kiryu, K. (2012) *Meche–Nepali–English Dictionary*. Jhapa: The Council of the Meche Language and Literature.
- Nichols, J., Peterson, D. A., Jonathan Barnes (2004) Transitivity and detransitivizing languages. *Linguistic Typology* 8, 149–211.
- 桐生和幸 (2010) 「メチェ語の格体系」澤田英夫 (編) 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1：格とその周辺』。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 213–237.
- 桐生和幸 (2015) 「メチェ語の使役動詞の形態的特徴」パルデシ・ブラシャント, 桐生和幸, ナロック・ハイコ (編) 『有対動詞の通言語的研究—日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』くろしお出版, pp. 239–255.

キナウル語の使役表現*

高橋 慶治

1. はじめに

本稿では、主としてキナウル語の使役表現を記述する。他のチベット・ビルマ諸語と同様、キナウル語にも、動詞の形態変化によって使役を表すことのできる自他対応と呼ばれる現象がある。第2節では数は多くないが、他のチベット・ビルマ諸語に見られる自他対応のパターンを例示する。また、第3節では、動詞の不定詞と使役動詞を使った迂言的な表現を見る。

1.1. キナウル語の概要

キナウル語は、チベット・ビルマ語派西ヒマラヤ諸語に属する言語の一つである。西ヒマラヤ諸語は、インド西北部のヒマーチャル・プラデシュ州およびウッタラカンド州に分布する言語群であり、キナウル語はその西部グループであるキナウル語群に属し、ヒマーチャル・プラデシュ州キナウル地区で話されている。人口は5万人程度であるが、他のインドの少数民族と同様、若い世代で主としてヒンディー語を使うようになってきており、今後、母語話者が激減する可能性がある。

方言的には、大きく上キナウル方言と下キナウル方言に分けることができる。上キナウル方言はチベット語からの借用が、下キナウル方言はヒンディー語からの借用が多いと言える。方言間の差は比較的小さいようであるが、詳細は今後の調査に待たなければならない。

* 本稿は、2015年1月25日に京都大学人文科学研究所で行われた「TB 諸語における「使役文」」に関わる研究会での発表をまとめたものである。研究会においてさまざまな意見をくださった皆さんに感謝の意を表する。この研究は、これまで受けたさまざまな科学研究費補助金の成果の一部である。とくに、動詞形態論を中心とする研究テーマで受けた科学研究費補助金基盤研究(B)、#26284063、2014-2016年度「南アジア諸言語の文法記述研究—言語類型論的視点から」(研究代表者：総合地球環境学研究所名誉教授 長田 俊樹)、基盤研究(A)海外学術調査、#16H02722、2016-2019年度「チベット・ビルマ語族の繁聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究」(研究代表者：国立民族学博物館名誉教授 長野 泰彦)、基盤研究(C)、#17K02735-0004、2017-2019年度「キナウル語の現地調査：会話文例の収集と動詞形式の分析」(研究代表者)など、および、所属大学から受けた研究費によって行われた調査での資料を中心とする。調査は、1997年以降、ほぼ毎年1回ないし2回、それぞれ数週間程度行ってきた。この間、筆者の執拗な質問に根気よく答えてくれたインフォーマントのRavinder Singh Negi氏に感謝の意を表する。また、氏とともにつねに変わらぬ好意で筆者を受け入れてくれる、氏の家族に感謝の意を表したい。

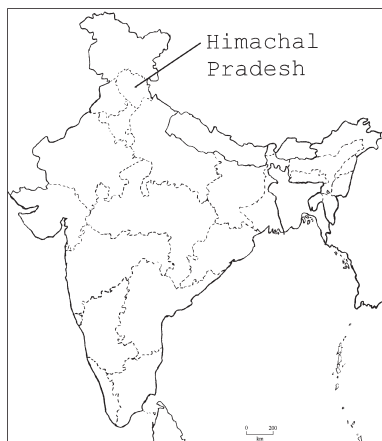
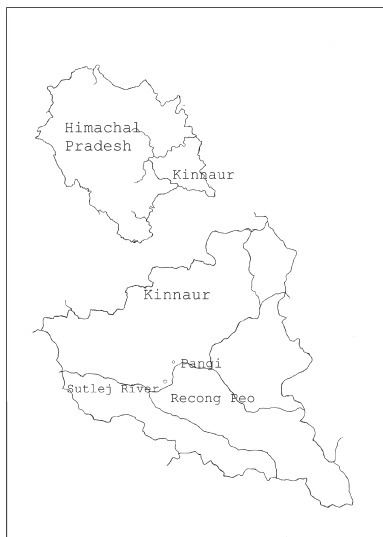


図1 インド

図2 ヒマール・プラデシュ州と
キナウル地区

キナウル語の基本語順は、SOV/AN である。また、格標識が名詞に後置されるか、または名詞の末尾に接辞として付加される。動詞は、代名詞由来とされる主語人称接辞のほか目的語人称接辞を取る。ただし、目的語人称接辞は1, 2人称が同形であり、3人称目的語を表す接辞はない。

2. 自他対応

西 (1993) は, Sharma (1988) などの過去の研究に従って動詞を整理し, キナウル語で自他対応が少なくなっているとする。

9) 動 詞 動詞は、自動詞と他動詞に分けるが、チベット・ビルマ語系に広く見られる、語根の初頭子音の有声・無声の対立による、自動詞（有声音）・他動詞（無声音）の区別が残されている動詞語根はわずかである。

自動詞	他動詞
bər- 「燃える」	pər- 「燃やす」
bra- 「広がる」	pra- 「広げる」
bəʃ- 「割れる, 砕ける」	pəʃ- 「割れる, 砕ける」
don- 「出る」	ton- 「出す」
doŋ- 「開く」	toŋ- 「開ける」

同様に、わずかであるが、自動詞あるいは他動詞が、古い接頭辞 /s-/ によって使役動詞となっている例がみられる。この形態論的過程も、すでに、非生産的な過程である。現在の生産的な使役動詞は、{ 動名詞 +/šen-/ 「送る」} の複合動詞の形式を取る¹。(西 1993: 83)

しかし、実際にはこれ以外にも自他対応する動詞対がある。以下の (A) ~ (C) にその一部を示す。

他動詞	自動詞	他動詞の意味
(A)		
<i>spyug-</i>	<i>byug-</i>	「(火を) 消す」
<i>skwad-</i>	<i>k^hwači-</i>	「沸かす」
<i>skrab-</i>	<i>krab-</i>	「泣かせる」
<i>stui-</i>	<i>tuñ-</i>	「飲ませる」(<i>tuñ-</i> 「飲む」)
<i>stod-</i>	<i>tod-</i>	「坐らせる」
<i>skum-</i>	—	「寝かせる」
(B)		
<i>k^hel-</i>	<i>gel-</i>	「折る, 裂く」
<i>k^hon-</i>	<i>gon-</i>	「曲げる」
<i>p^har-</i>	<i>bar-</i>	「破る」
<i>p^hi-</i>	<i>bī-</i>	「持ち出す」(自動詞: 「行く」)
<i>p^hrus-</i>	<i>brus-</i>	「(壁, 家を) 壊す」
(C)		
<i>čod-</i>	<i>ǰod-</i>	「点ける」
<i>twañ-</i>	<i>dwañ-</i>	「開ける」
<i>paš-</i>	<i>baš-</i>	「割る, 潰す」
<i>prā-</i>	<i>brā-</i>	「広げる」(自動詞: 「溢れ出る」)
<i>pid-</i>	<i>bid-</i>	「持って来る」(自動詞: 「来る」)
(C')		
<i>ṭig-</i>	<i>riḡ-</i>	「壊す」
<i>ṭag-</i>	<i>rag-</i>	「濡らす」
(D)		
<i>pog-</i>	<i>pogši-²</i>	「燃やす」
<i>šog-</i>	<i>šogši-</i>	「乗せる」
<i>sū-</i>	<i>sūši-</i>	「洗う」(自動詞: 「自分の身体を洗う」)
<i>hud-</i>	<i>huši-</i>	「教える」(自動詞: 「勉強する」)

¹ この引用で「動名詞」と呼ばれている形式を本稿では「不定詞」と呼ぶ。また, /šen-/ という形式は, 本稿では *šed-* とする。西 (1993) の表の *don-*, *ton-* も, 本稿の形式ではそれぞれ *dod-*, *tod-* となる。この形式の違いは, 高橋 (準備中) を参照のこと。

² *pog-* に対する自動詞形には *bog-* もある。

(E)		
<i>tub-</i>	<i>tubči-</i>	「貼る」
<i>yab-</i>	<i>yabči-</i>	「飛ぶ」(いずれも自動詞)

(A) は、接頭辞 *s-* を持った他動詞と自動詞の対である。動詞に接頭辞 *s-* を付ける操作は生産的ではなく、西 (1993: 83) の指摘のとおりこのような対は多くないようである。しかし、*skrab-* と *krab-* などの対応に見られるように、キナウル語で独自の発達をしたと思われる動詞もあるので、この接頭辞 *s-* の生産性が全くないとも言いきれない。

また、*skum-* のように *s-* を持つ他動詞に対して、*s-* を持たない対応形式がないこともある。他動詞 *skum-* 「寝かせる」に対応する自動詞「寝る」は *yag-* である。

本稿では、接頭辞 *s-* を付加して作られた他動詞を *s-* 使役と呼ぶことにする。

(B) は無声有気音と有声音の対立の例である。

興味深いのは、*pʰ-* と *bī-* のような対立である。*bī-* は直示中心から出ることを表す「行く」という意味の動詞である。この動詞の初頭子音を無声有気化することによって他動詞化し、目的語が表すものを直示中心から持って出ることを表す。ここから、キナウル語で独自に対立を作っているものがあるのではないかと思われる。

(C) は無声無気音と有声音の対立である。キナウル語では、この対立が、他の対立に比べ、やや多いようである。

(C') は、初頭子音が無声無気音の他動詞に対応する自動詞の初頭子音がたんに有声音なのではなく、ふるえ音になっている。同様の音対応に、語中で有声化する際に捲舌閉鎖音がふるえ音化する現象がある。*tug* '6' と *sōrug* '16' を参照。

(D) と (E) は、(A) ～ (C) のパターンに見られるような対応ではなく、中動態接辞を利用する対立である。

(D) は中動態接尾辞 *-ši* を使って他動詞を自動詞化する例である³。

(E) は中動態尾接辞 *-či* を使う例である。

この接尾辞 *-či* は、1-2 人称目的語を表す目的語接辞と同じ形式であり、意味的には曖昧な場合もある。*tub-* と *tubči-* は他動詞と自動詞の対であるが、*yab-* と *yabči-* はいずれも自動詞である。今のところ、その意味の違いは明確ではない。

中動態接辞 *-či* を持つ動詞は、*-ši* に比べより自動詞的な印象を与えるが、かならずしも生産的とは言えない。

なお、*-ši* や *-či* を持つ自動詞に対し、それらの接辞が付加されない他動詞がない場合がある。つまり自動詞しかないことがあり⁴、これを擬似中動態と呼ぶことにする。

以下に具体例を見る。

³ キナウル語の中動態接辞は再帰、相互、自動詞化、集合的複数などの意味を持つ。キナウル語の中動態については Takahashi (2012) を参照のこと。

⁴ *-ši-* が付いていても、目的語を取る場合があるが、主語は具格を取らない、つまり能格構文にならないようである。

(1) は、自他対応する動詞の例である。(1a) は自動詞で、「燃える」の意味である⁵。

- (1) a. *ǰu kitāb mēliñ.u diñ tʰa.tā.ñ, ǰu bog.tō*
 this book stove.GEN place PROH.put.2SG:S this burn.FUT

この本をストーブの近くに置くな、本が燃える。

- b. *gi.s mē.s gasā pog.a.k*
 1PRN:SG.INS fire.INS clothes burn.PT.1s

私は火で服を燃やした。

- c. *gi.s mē.s gasā bog.i.m šē.k*
 1PRN:SG.INS fire.INS clothes burn.LV.INF send.1s

私は火で服が燃えるようにした。

(1b) は「燃やす」という意味の使動詞であり、(1c) は迂言的使役文になっているが、実際の意味は「燃やす」で、*pogak* を使った (1b) と同じ意味である。

なお、次の例のように他動詞では、事象キャンセルが可能である。

- (2) *gi.s mēliñ.u den tī skwā.k, do ma.kʰwač*
 1PRN:SG.INS stove.GEN on water boil.1s that NEG.boil

私はストーブで湯を沸かしたが、沸かなかった。

s-使役は強制的なニュアンスがある。被使役者が意志的に動作を行っていない。*stuñ-* は、牛を *nāgasti* (湧き水の名) に連れて行って、飲ませることを表す。

- (3) *gi.s lañ.ū nāgasti.u diñ tī stuñ.to.k*
 1PRN:SG.INS COW.DAT PLN.GEN place water make_drink.FUT.1s

私は牛にナーガスティーで水を飲ませた。

(4) は、Pradeep の意志に反して無理に飲ませることを表す。

⁵ 以下の例文の略号は次の通り：1 = 1 人称，1-2 = 1 人称または 2 人称，2 = 2 人称，3 = 3 人称，ATTR = 連体形，COM = 共格，COP = 繫辞動詞，DAT = 与格，DIM = 指小辞，DST = 遠称，EMPH = 強調，FUT = 未来，GEN = 属格，HON = 敬語，IMP = 命令，IMPF = 未完了，INF = 不定詞，INS = 具格，LOC = 位置格，LV = つなぎ母音，NEG = 否定，NOM = 主格，O = 目的語，OBLG = 義務，PF = 完了，PINF = 派生不定詞接辞，PL = 複数，PLN = 地名，PR = 現在，PRN = 代名詞，PROH = 禁止，PRX = 近称，PSN = 人名，PT = 過去，S = 主語，SG = 単数

- (4) *gi.s pradīp.ū čā stuñ.udu.k*
 1PRN:SG.INS PSN.DAT tea make_drink.PR.1s

私はプラディーブに（強制的に）茶を飲ませている。

stuñ- は、被使役者が自分の意志を表出できない動物や赤ん坊について用いられる。

以下は、「泣かせる」と「坐らせる」の例である。

- (5) *gi.s nu.pññ / *nu skrab.to.k*
 1PRN:SG.INS that:PRX.DAT/that:PRX.NOM make_cry.FUT.1s

私は彼を泣かせる。

- (6) *gi.s čʰaŋ.ū kurusi.u den stō.k*
 1PRN:SG.INS child.DAT chair.GEN upon make_sit.1s

私は子供を椅子に坐らせた。

以上、いずれも被使役者は意志的ではない。

下の例で、*skum-* に対応する *gum-* や *kum-* という形式の動詞はない。

- (7) *tetē.s an.e.nū spāts.ū skum.m.ū tañes*
 grandfather.INS self.PL.DAT grandchild.DAT make_sleep.INF.PINF for
- dō pišṭiñ.ū tuptupya.ō du.e.š*
 that:DST:GEN back.DAT pat.IMP COP.PT.3S:HON

おじいさんは孫を寝かせるためにその背中をたたいていた。

次の文は、自他対応する自動詞が通常無意志的な意味を持っていたても、命令文で使えなくはないことを表している。

- (8) *?kim! brus*
 house break
- 家！ 壊れろ。

ただ、命令文では完全に適格にはならないので、自他対応する自動詞が意志的ではない場合があるということを示している⁶。

⁶ 例えば、*bi-*「行く」は意志的でもあるので、有対自動詞がすべて無意志的であるとは言えない。

3. 使役文

本節では、迂言的な使役構文を見る。キナウル語の使役文は、基本的に動詞の不定詞形と動詞 *šed-* ‘send’ の組み合わせによって表す (9)。

(9) *Vstem.m(.ū) + šed-*

不定詞は動詞語幹に接尾辞 *-m* を付加して作る。また、使役文を作る際には、この不定詞にさらに接尾辞 *-ū* を付けた形式が用いられることがある⁷。これをここでは *u*-不定詞と呼んでおく。

次の2例は、*u*-不定詞を用いている例である。

- (10) *gi.s* *añ* *č^hañ.ū* *ts^hā* *kan.n.ū/kan* *duk^hān.ō*
 1PRN:SG.INS 1PRN:GEN child.DAT salt bring.INF.PINF/bring.INF shop.LOC
šešē *tō*
 send:PF COP

私は、塩を運ばせるために子供を店に送った。

- (11) *añ* *amā.s* *añū* *līt.ā* *zog.m.ū/zog.i.m* *duk^hān.ō*
 1PRN:GEN mother.INS 1PRN:DAT egg.PL buy.INF.PINF/buy.LV.INF shop.LOC
še.č.e.š
 send.1-2o.PT.3s:HON

私の母は、卵を買うために私を店に送った。

不定詞を使う場合と *u*-不定詞を使う場合の違いは明確ではない⁸。ただ、*u*-不定詞を使った場合には、厳密には「～するために人を送る」という文字通りの意味がありうるので、本稿では *u*-不定詞を用いた使役文は対象としないことにする。

3.1. 強制的かどうか

キナウル語の使役文では、使役者が被使役者に動作を強制するか許可するかは区別されない。つまり同じ形式で表される。

前節で見たように、使動詞を作る接辞 *s-* をもつ *sturi-* は、被使役者が自分では飲めないことを表しているのに対し、迂言的な使役文では被使役者は自分で飲めるものであることを前提としている。(12b) では、牛小屋の戸を開けて牛を放つ

⁷ 不定詞形の詳細については高橋（準備中）を参照のこと。

⁸ 無意志的な有対自動詞の *u*-不定詞は迂言的な使役で不可になるなどの違いはあるが、その違いの分析は今後の課題である。

だけでもよい。その点で, *šed-* は「送り出す」という意味を残している。(12c) で Pradeep は必ずしも飲まなくてもよい。

- (12) a. *gi.s* *añ* *č^hañ.ū* *gaṭō.ts.dā* *k^herañ* *tuñ.i.m*
 1PRN:SG.INS 1PRN:GEN child.DAT some.DIM.some milk drink.LV.INF
 šē.to.k
 send.FUT.1s

私は赤ん坊にミルクを飲ませる。

- b. *gi.s* *lañ.ū* *tī* *tuñ.i.m* *šē.to.k*
 1PRN:SG.INS cow.DAT water drink.LV.INF send.FUT.1s

私は牛に水を飲ませる。

- c. *gi* *pradīp.ū* *čā* *tuñ.i.m* *šē.to.k*
 1PRN:NOM PSN.DAT tea drink.LV.INF send.FUT.1s

私はプラディーブに茶を飲ませる。

意志的な動詞の使役文では、埋め込み文の動詞が表す動作が強制される場合と許可される場合がある。(13) は意志的な動詞であり、どちらの解釈もありうる。

- (13) *mē* *gi.s* *nu.piñ* *piō* *bī.m⁹* *šē.k*
 yesterday 1PRN:SG.INS that:PRX.DAT PLN go.INF send.1s

私は昨日彼をレコン・ピオに行かせた。

被使役者は与格で表される。次の文では, *šečeš* が目的語接辞 *-š* を持っていることから被使役者が 1 人称の目的語であることがわかる。そして, 1 人称の被使役者が与格になっている。

- (14) *añ* *pērañ.ā.s* *añū* *dillī* *bī.m* *še.č.e.š*
 1PRN:GEN family.PL.INS 1PRN:DAT PLN go.INF send.1-2o.pt.3s:hon

私の両親は私をデリーに行かせた。

この文では、インフォーマントによると強制的な意味より許可を与えている印象を与えるようである。動詞 *šečeš* が敬意を表す 3 人称主語の接辞を取っており、主語に敬意を示すということによって、話し手が強制を受けていないと感じていると解釈されうる。したがって、動詞が敬意を表さない *šečē* の場合は強制を感じ

⁹ この例では, *bīmū* が使えない。u-不定詞が使えない例があるが、詳細は不明である。無意志的な自動詞が使役文に使われる場合は、u-不定詞が使われない場合がある。

じるといふ。ただし、これは解釈の問題である。キナウル語では、*šed-*を使った使役文が許可を表すか強制を表すかは文脈によって決まると考えられる。

次の(15a)は、不定詞に*šed-*が続いているので使役文だが強制的ではない。命令して行かせたのではなく、許可を求められたので許可した。(15b)は、*biu/biñ*が命令形であり、「行け」という命令文を先に発している。行かせるために「行け」と言ったということであり、使役文ではない¹⁰。

- (15) a. *gi.s añ č^hañ.ũ piō bī.m šē.k*
 1PRN:SG.INS 1PRN:GEN child.DAT PLN go.INF send.1s
 私は息子をレコン・ピオに行かせた。
- b. *gi.s añ č^hañ.ũ piō bi.u/bi.ñ lō.k*
 1PRN:SG.INS 1PRN:GEN child.DAT PLN go.IMP/go.2s tell:3o.1s
 私は息子にレコン・ピオに行けと言った。

(15b)は強制的に行かせようとしているが、「行け」と言っただけで、行ったとは含意されない。

次の2例は、被使役者が無生物である。(16)は、コップを置いたままにしておく。

- (16) *ju glās jñ.ĩ nĩ.m še.ñ, ju jñ.ĩ*
 this glass:NOM here.EMPH exist.INF send.2s this here.EMPH
 gyā.m.i.g.seyā
 want.INF.LV.OBLG.ATTR
 このコップをここに置いておけ、ここで必要だ。

次の例では、古いので壊れるにまかせ、何もできなかった、またはしなかった。この状況は意図的に壊したのではなく放っておいたので、非強制的な意味の使役である。

- (17) *gi.s kim.ũ brus.i.m šē.k*
 1PRN:SG.INS house.DAT break.LV.INF send.1s
 私は家が壊れるままにした。

(16) (17)のように、被使役者が無生物のとき動詞は意志性が低く、使役文は放置を表していると言える。

キナウル語の使役文では、次のように被使役者が動作を行わなかったことを明示できる。

¹⁰ 使役文は項の数が増え、混乱しやすいので、よりわかりやすい構文を取ることが日常的には行われる。

- (18) *amā.s čimed.ū tī skwan šē.š, dogō.s tī*
 mother.INS daughter.DAT water boil:INF send.3S:HON 3PRN.INS water
ma.skwaskwa
 NEG.boil:PF

母は、娘に湯を沸かさせたが、彼女は沸かさなかった。

- (19) *boā.s añū tasmā t^hor.i.m še.č.e.š, gi.s*
 father.INS 1PRN:SG:DAT lace untie.LV:INF send.1-2:O.PT.3S:HON 1PRN:SG.INS
ma.t^hor.i.k
 NEG.untie.LV.1s

父は、私に靴紐をとかせたが私はとかなかった。

これは、埋め込み文の動詞が表す動作が実行されなかったことを表しているが、意味的には強制にせよ許可にせよ動作の実行には被使役者の意志が働くことを示していると言えよう。

3.2. 与格名詞の数

3.2.1. 1 項動詞

キナウル語では、基本的には一次目的語と二次目的語が区別される。一次目的語は与格形式が用いられるが、キナウル語では、意味的基準によって主格形と与格形が使い分けられる点に注意しなければならない (cf. 高橋 2010)。

次の文では、被使役者名詞が与格になっており、特定のであることを表す。

- (20) *gi.s añ konyas.ū kin kim.ō tōšī.m šen.n.ū*
 1PRN:SG.INS 1PRN:GEN friend.DAT 2PRN:GEN house.LOC sit:INF send:INF.PINF
to.k
 COP.1s

私は私の友達に君の家にいさせた。

次の例では、被使役者が主格ではなく与格でなければならないことを表す。

- (21) a. *gi.s nu.piñ/*nu añ kim.ō bin šē.k*
 1PRN:SG.INS that:PRX.DAT/that:PRX:NOM 1PRN:GEN house.LOC come:INF send.1s
 私は彼に私の家に来させた。

- b. *gi.s* *tašl.pĩn/*taši* *añ* *kim.ō* *bin* *šē.k*
 1PRN:SG.INS PSN.DAT/PSN:NOM 1PRN:GEN house.LOC come:INF send.ls

私はタシに私の家に来させた。

次の例では、文法的には使役者は「私」であるが、「私が咳をした」という事態が使役者となって、タシが眠れなかったと言っており、「私」は無意志的である¹¹。

- (22) *gi.s* *mešā* *tsu.ō* *tsu.ō* *tašl.pĩn* *yag.i.m* *ma.še.k*
 1PRN:SG.INS last_night cough.IMPf cough.IMPf PSN.DAT sleep.LV.INF NEG.send.ls

私は、昨夜咳をしてタシを寝かせなかった。

以上のように、被使役者は通常特定できるので、与格形を取る。埋め込み文の動詞が1項動詞の場合は、被使役者以外に与格名詞が現れないので、混乱はしない。

3.2.2.2 項動詞

1項動詞の場合と同様、2項動詞でも被使役者は与格になる。したがって、2項動詞の目的語が与格形の場合、2つの与格名詞が並ぶことになり曖昧である。

次の例では、被使役者が主格であることが許されず、埋め込み文の目的語は不特定なので主格になる。すなわち、使役者は具格、被使役者は与格、埋め込み文の目的語は主格であり、すべての項の形式が異なる。

- (23) a. *gi.s* *do.pĩn/*do* *tsiṭ^hi* *čē.m* *šē.k*
 1PRN:SG.INS that:DST.DAT/that:DST:NOM letter:NOM write:INF send.ls

私は彼に手紙を書かせた。

- b. *binōd.is* *hinā.pĩn* *gaṭōdā* *seō* *zā.m* *šed.tu.š*
 PSN.INS PSN.DAT a_bit_of apple eat:INF send.PR.3S:HON

ビノードはヒーナにりんごを強制的に食べさせている。

- c. *gi.s* *č^hañ.ū* *kin* *komra.ō* *tī* *kan* *šē.k*
 1PRN:SG.INS child.DAT 2PRN:GEN room.LOC water bring:INF send.ls

私は、息子にあなたの部屋に水を持って行かせた。

- d. *gi.s* *añ* *č^hañ.ū* *añ* *krā* *tsog.i.m* *šešē* *tō*
 1PRN:SG.INS 1PRN:GEN child.DAT 1PRN:GEN hair cut.LV.INF send:PF COP

私は、息子に髪を切ってもらっている。

¹¹ ただし、意識的にそのようなことはできる。

次は、埋め込み文の目的語が特定のであれば与格形で現れる。

- (24) a. *nugo.nū nu sapas.ū san še.ñ*
 3PRN:PL.DAT that:PRX snake.DAT kill:INF send.2s
 彼らに蛇を殺させなさい。

- b. *gi.s do.piñ bak^hor.ū san še.k*
 1PRN:SG.INS that:DST.DAT goat.DAT kill:INF send.1s
 私は彼に羊を殺させた。

例 (24) は、被使役者と埋め込み文の目的語が、形式的には区別できないが、意味的に常識的な対応（人が家畜を殺すなど）から上のように解釈されると言える。

次の例は、直訳では「～するように言って、～させた」ということである。この文では、埋め込み文の目的語が 2 人称なので、埋め込み文の動詞が目的語接辞を取っている。

- (25) *gi.s nu.piñ lolō kinū toñ.či.m še.to.k*
 1PRN:SG.INS that:PRX.DAT tell:3o:PF 2PRN:DAT hit.1-2o:INF send.FUT.1s
 私は彼にあなたを殴るように言った。

(25) では、*lolō* がなくても上の意味に取ることができる。埋め込み文の動詞が目的語人称接辞を取っているのので、「殴られる」人は 3 人称の相手ではない。

次の文は、被使役者が表現されていない。また、目的語名詞が与格形なので特定のであることを表している。

- (26) *gi.s kagli.ga.nū leg.i.m še.k*
 1PRN:SG.INS paper.PL.DAT burn.LV:INF send.1s
 私は（誰かに）紙を焼かせた。

被使役者は与格である。さらに、2 項動詞では、埋め込み文の目的語が特定のなら与格となるので、その場合は、意味が曖昧になりうる。

3.2.3. 3 項動詞

3 項動詞では、被使役者と、埋め込み文の受益者がいずれも与格となることがありやや曖昧である。さらに、直接目的語も与格になりうる。次の例 (27) では、被使役者と埋め込み文の間接目的語がいずれも与格形（代名詞は対格形を持たないので必ず与格形になる）をとっており、いずれが被使役者であるか曖昧である。

- (27) *tašĩ.s* *añũ* *kinũ* *kitāb* *kē.m/*ran.i.m* *še.č.e.š*
 PSN.INS 1PRN:SG:DAT 2PRN:SG:DAT book give:1-2o.INF/give:3o.LV.INF let.2o.PT.3o:HON

タシは私にあなたに本を与えさせた。

しかし、例 (28) では、使役動詞 *šed-* が、1-2 人称目的語接辞を取っており、2 つの与格名詞は *kinũ* が被使役者となることは明らかである。

- (28) *tašĩ.s* *kinũ* *an.u* *konyas.ũ* *p^hōtũ* *ran.i.m* *še.č.e.š*
 PSN.INS 2PRN:SG:DAT self.GEN friend.DAT photo give:3o.LV.INF let.1-2o.PT.3s:HON

タシはあなたに写真を彼の友達に与えさせた。

次の文のように、2 つの与格名詞がいずれも 3 人称の場合は、動詞に目的語人称接辞がつかないので曖昧になる。次の文では、Ram を被使役者と取るのがわかりやすい解釈である。

- (29) *tašĩ.s* *rām.ũ* *mayā.piñ* *rupyā* *ran.i.m* *šē.š*
 PSN.INS PSN.DAT PSN.DAT money give:3o.LV.INF let.3s:HON

タシはラームにお金をマヤに与えさせた。

形式的には Maya を被使役者とする「タシはマヤにお金をラームに与えさせた」という解釈も可能である。ただし、その意味では *rāmũ* と *mayāpiñ* の位置を入れ替えた方がよい。すなわち、語順で意味が決まる。

3 項動詞では、使役者以外の名詞がすべて与格になる可能性がある。ここでは、その例を示していないが、被使役者と埋め込み文の受益者がともに与格になる場合、両方の動詞に目的語接辞が現れるか、または両者とも現れない文では曖昧である。

3.3. 共格名詞が現れるかどうか

次の使役文からわかるように、1 項動詞または 2 項動詞では被使役者に共格を使うことはできない。

- (30) *boā.s* *añũ/*añ ran* *deyarō* *rim.ō* *kamañ* *lan.i.m*
 father.INS 1PRN:DAT/1PRN:GEN COM everyday field.LOC work do.LV.INF
še.č.e.š
 send.1-2o.PT.3s:HON

父は私に毎日畑で仕事をさせた。

しかし、以下に見るように、3 項動詞では共格名詞が被使役者のように振る舞うことがある。

(31) は使役の意味を持つ文であるが、被使役者に共格名詞¹² が用いられており、さらに使役動詞 *šed-* が現れていない。

- (31) a. *boā.s aṅ raṅ an.e.nū konyas.ū tsit̪ʰi ker.a.š*
 father.INS 1PRN:GEN COM self.PL.DAT friend.DAT letter give:1-2o.PT.3s

父は私に手紙を彼の友達に送らせた。

- b. *boā.s aṅ raṅ hinā.piṅ tsit̪ʰi ker.a.š*
 father.INS 1PRN:GEN COM PSN.DAT letter give:1-2o.PT.3s

父は私に手紙をヒーナに与えさせた。

上の例では、父が友人宛 (31a)、Heena 宛 (31b) の手紙を書いて、それを友人または Heena に送ってくれと私に頼み、私はそれを送ったという意味であり、結果的に使役の意味になる¹³。

- (32) *gi.s nū raṅ kin kitāb ranran/*kēkē šē.k*¹⁴
 1PRN:SG.INS that:DST:GEN COM 2PRN:GEN book give:3o:PF/give:1-2o:PF send.1s

私は、彼にあなたの本を持って行かせ、あなたに与えさせた。

(=私は彼にあなたの本をあなたに与えさせた。)

以上の文で特徴的なのは、「与える」の意味の動詞が対象とする受益者名詞にずれがあることである。すなわち、動詞 *kēm* は 1・2 人称を受益者、*ranim* は 3 人称を受益者とする動詞であるが、上の例ではそうっていない。この点、インフォーマント自身はこの構文で上のような対応になることを当然のことととらえているが、構文の分析は今後の課題である。

(33) では、共格が使役文でも 3 項動詞とも使えるが (33a)、与格は使役文では使えるのに、3 項動詞のみだと使えないことがわかる (33b)。

- (33) a. *guruḷ̪.s čʰaṅ.ā raṅ an.e.nu taṅes tsit̪ʰi (šen) šē.š*
 teacher.INS child.PL COM self.PL.GEN for letter send:INF send.3s:HON

先生は自分宛に生徒たちに手紙を送らせた。

¹² このような共格の用法は、高橋 (2010) の発表以降にわかったことなので、ここでは紹介していない。

¹³ ただし、*aṅ raṅ hinā* が一つの句となって「父は私とヒーナに手紙を送った。」という意味にもなる。これは、*aṅ raṅ* が *hināpiṅ* の前にあるために「A と B」と解釈されやすいからである。

¹⁴ この *šēk* は、むしろ使役構文を構成する *šed-* と同じ動詞であるが (1 人称過去形になっている)、ここでは完了形の動詞に後続しており、使役を表すものではない。

- b. *guruŋĩ.s čʰaŋ.a.nū an.e.nu taŋes tsitʰĩ šen/*Ø šē.š*
 teacher.INS child.PL.DAT self.PL.GEN for letter send:INF send.3S:HON

先生は自分宛に手紙を生徒たちに送らせた。

次の例文は (33b) と同じである。与格名詞では、使役構文でなければならない。

- (34) *boā.s an.e.nu taŋes aŋū kitāb.ē šen/*Ø šē.č.e.š*
 father.INS self.PL.GEN for 1PRN:DAT book.PL send:INF/Ø send.1-2o.PT.3S

父は自分宛にその本を私に送らせた。

次の (35a) は使役文であり、共格名詞は「彼と一緒に」という意味（与えられる人は明示されていない）であり、(35b) は使役文で、共格名詞で被使役者を表せない。

- (35) a. *aŋ boā.s aŋū nū raŋ kitāb ran.i.m*
 1PRN:GEN father.INS 1PRN:DAT that:PRX:GEN COM book give:3o.LV.INF
šē.č.e.š
 send.1-2o.PT.3S:HON

私の父は（他の人に）本を与えるために彼と私に行かせた。

- b. *aŋ boā.s nu.piŋ /*nū raŋ aŋū kitāb*
 1PRN:GEN father.INS that:PRX.DAT/that:PRX:GEN COM 1PRN:DAT book
ran.i.m/kē.m šē.š
 give:3o.LV.INF/give:1-2o.INF send.3S:HON

私の父は彼に本を私に与えさせた。= (33a)

以上の例からわかるように、3 項動詞の使役文では被使役者は与格でも共格でも良い場合があるが、共格が許されるのは、物の移動があるやり貰いの動詞の時である。また、共格名詞は運び手を表すだけで、その場合、物の受け手は明示されない。物の受け手を明示する場合は、動詞は *šed-* に限られる。

3 項動詞では、共格名詞が被使役者の役割を担うことがあるが、構造上の分析などは今後の課題である¹⁵。

¹⁵ 人文研での研究会の際、共格名詞が現れることについて加藤昌彦氏より、3 項動詞の使役文では、与格名詞が重なることになるため、混乱を裂けるために共格名詞が現れることがあるとご教示を賜った。その時点では、キナウル語でもそのようなになっていると考えたが、本節で見たように、キナウル語ではそのようなになっていない。

3.4. 否定

使役文の否定は、使役動詞 *šed-* に否定辞を付けることによって表される。

- (36) a. *rabindar.is aṇū poš.u den tōšl.m ma.še.č.ē*
 PSN.INS 1PRN:DAT carpet.GEN upon sit.INF send.1-2o.PT

ラビンダルは私にベッドの上に坐らせなかった。

- b. *rabindar.is aṇū poš.u den ma.sto.č.ē*
 PSN.INS 1PRN:DAT carpet.GEN upon NEG.make_sit.1-2o.PT

ラビンダルは私にベッドの上に坐らせなかった。

なお、(36b) は s-使役であるが、上の 2 文は同じ意味である。

- (37) *aṇ boā.s aṇ atē.piṇ rim.ō gaḍā kor.i.m*
 1prn:GEN father.INS 1PRN:GEN elder_brother.DAT field.LOC hole dig.IV.INF
ma.šē.š
 NEG.send.3S:HON

私の父は、兄に畑で穴を掘らせなかった。

本稿では、u-不定詞を使う例を挙げなかったが、次の例のように、否定文では u-不定詞が使えないことがあるので、単純不定詞と u-不定詞の間で違いがあることは明らかだろう。

- (38) *mē gī.s nu.piṇ piō bī.m/*bī.m.ū ma.še.k*
 yesterday 1PRN:SG.INS that:PRX.DAT PLN go.INF/go.INF.PINF NEG.send.1s

私は、昨日レコン・ピオに彼を行かせなかった。

次の例は禁止を表す。禁止も同様に *šed-* に禁止の接頭辞が付加される。

- (39) *ādarš.ū ju paṇṭ^haṇ.ō bīn t^ha.še.ñ*
 PSN.DAT this room.LOC come.INF PROH.send.2s

アーダルシュにこの部屋に入らせるな。

次のように「～しないようにした」という意味では、埋め込み文の動詞に否定辞が付く。

- (40) *čʰaŋ.a.nū ma.kʰyā.m šen.n.ū taŋes tībī.piŋ kapʰrā.s*
 child.PL.DAT NEG.look.INF send.INF.PINF for TV.DAT clothe.INS
lubyā.š
 put_over.3S.HON

(私の母は) 子供がテレビを見ないようにテレビに布をかけた。

ただし、否定辞がいずれかの動詞について意味が明確に異なると意識されているわけではない。

4. おわりに

本稿では、キナウル語の使役について例をあげて紹介した。

まず、キナウル語の動詞には自他対応があり、他動詞（使動詞）は、自動詞に対して使役的な意味を持つことを見た。

迂言的な使役として、動詞の不定詞形と動詞 *šed-* を使った構文を見た。*šed-* は「送る」という意味であり、この意味を保持している場合もある。

上でも述べたように、キナウル語の使役文についてまだ不明の点も残っている。とくに、不定詞と *u-* 不定詞の違いについては、十分な結論を得られていない。また、(擬似) 中動態動詞が使役文で使われる場合を、分析が不十分であったために本稿では触れなかった。今後の課題としたい。

さらに、動詞完了形と *šed-* などいくつかの動詞が結びついて、特定のニュアンスを生じることがある。*šed-* などの動詞が補助動詞的に用いられる。関連する事象として分析をしたが、使役文とは直接関係ないので本稿では扱わなかった。いずれかの機会に論文としてまとめたい。

参考文献

- 西義郎 (1993) 「カナウル語」『言語学大事典』5 巻, pp. 76–86. 東京：三省堂.
 Sharma, D. D. (1988) *A Descriptive Grammar of Kinnauri*. Studies in Tibeto-Himalayan Languages 1. Delhi: Mittal Publications.
 高橋慶治 (2010) 「キナウル語 (パンギ方言) の格形式と複合後置詞」澤田英夫 (編) 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1: 格とその周辺』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 127–152.
 Takahashi, Y. (2012) 'On a suffix of middle voice in Kinnauri (Pangi dialect)'. In Nakamura, W. and Kikusawa, R. (eds.), *Objectivization and Subjectivization: A Typological of Voice Systems*, Senri Ethnological Studies 77, Osaka: National Museum of Ethnology, pp. 157–175.
 高橋慶治 (準備中) 「キナウル語動詞の非定形について」.

ギャロン ボラ 嘉戎語 莫拉方言の使役表現 *

長野 泰彦

1. はじめに

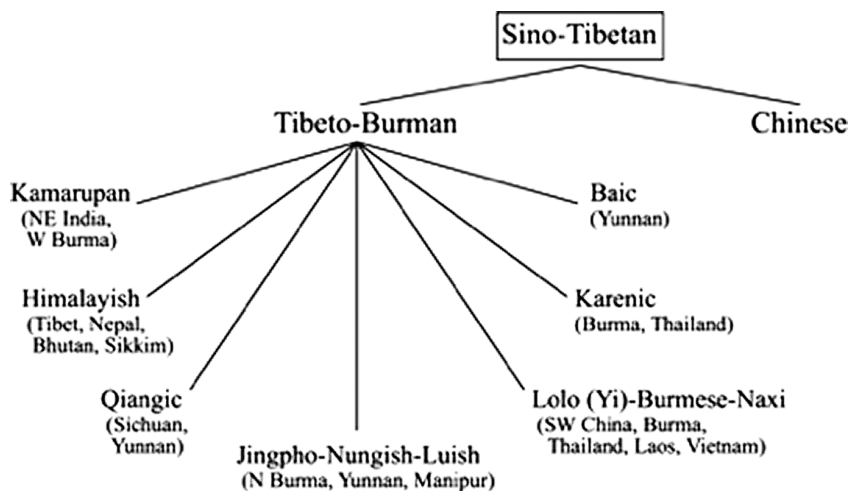
小稿は嘉戎（ギャロン：WT rgyal rong）語莫拉（ボラ：WT bho la）方言における使役表現のアウトラインである。嘉戎語は中国四川省西北部に話されるチベット・ビルマ系の言語で、複数の下位言語群の特徴を兼ね備え、系統関係の橋渡し役を演じる繫聯言語のひとつと見做されている。現代の繫聯言語は類型的に多様であるが、同時に様々のレベルで古態をも保っていることが多く、それらの言語記述はチベット・ビルマ諸語の歴史研究に不可欠と考えられている。

嘉戎は歴史的・文化的にチベットとの関係が深く、特に宗教の面でボン教の一大シェルターであったことやチベット仏教教理の偉大な学者を多数輩出したことも手伝って、多くの文語チベット語形式を借用し、接辞を含めそれらを口語として受け入れた。このため、嘉戎語はチベット語の古い層を代表していると考えられたことがあった。

しかしながら、Wolfenden (1929, 1936) 以来記述が積み重ねられてきた結果、上に述べたチベット語との直接的な系統関係は否定された一方、チベット・ビルマ祖語と比較できるほど古い語彙形式や形態統辞論的手続きを保持していることとともに、高度に発達した人称接辞及びその agreement 体系など後代の innovation と考えるべきものも少なくないことが明らかになった。また、系統関係についても、嘉戎語はチベット語ではなく、羌系諸語と共通の祖語をシェアするとの考え方が一般的になってきている。参考までに、Matisoff によるシナ・チベット諸語の相関図（系統樹ではない）を示す。ここに rGyalrong は明示されていないが、STEDT の language coding では Tangut-Qiang 語支の下、rGyalrong 語群に分類されている。

これらの議論にとって中核的な研究は動詞構造の形態統辞論的解析である。幾つもの接辞が生産的に働き、動詞句の文法的意味が精緻に特定される。そこには、極めて複雑ではあるが、入念に練られた統辞論的ルールが機能しており、それが同時にチベット・ビルマ祖語段階の統辞論を考える上でも有用な鍵となる。使役表現も主として動詞句内に現れる。

* 本稿は、2018 年 3 月 11 日（日）に京都大学人文科学研究所にて開催された TB +（プラス）研究会での報告「ギャロン語ボラ方言の使役表現」を文章化したものである。報告時には参加者各位より有益な御意見をいただいた。なお本稿は平成 28-29 年度日本学術振興会科学研究補助金基盤研究（A）「チベット・ビルマ語族の繫聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 16H02722）による研究成果の一部である。

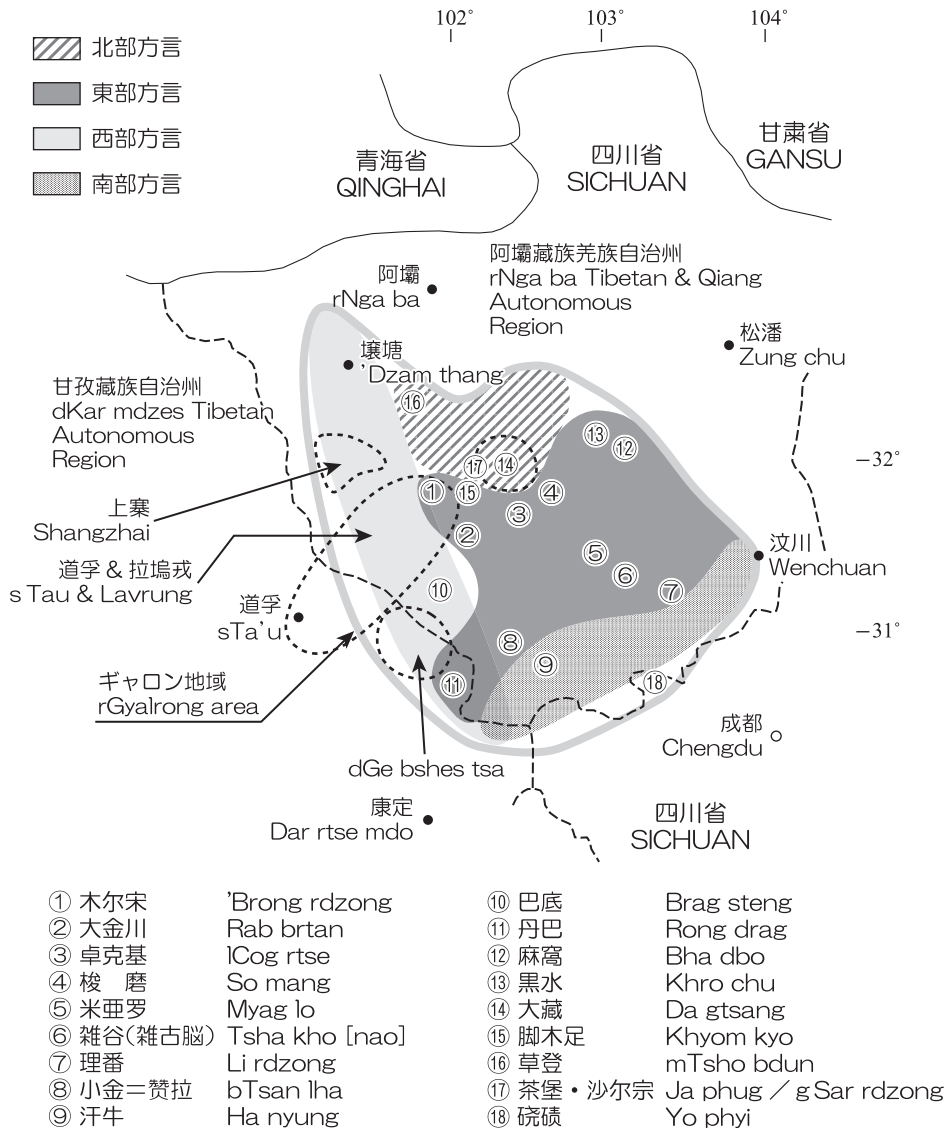


音論概略

p ph b	t th d	ʈ ʈh ɖ	k kh g	ʔ
	ts tsh dz	ʈʂ ʈʂh ʈʂ	c ch j	
	s z	ʃ ʒ		h fi
m	n		ñ	ṇ
	r			
w	l		y	
i	u			
e ə	o			
a	ɐ			

通常 /i/ は音声的に [i], /e/ は [ɛ], /u/ は [u] である。また、長短の区別は弁別的でない。

ギャロン語莫拉方言の音節構造は一般に (C₁)Ci(G)V(C_f)(C₂) であり、括弧で括った部分はオプションである。C₁ に立ちうるのは p-, t-, k-, r-, l-, s-, ʃ-, m-, n- である。このうち、p-, t-, k-, s-, ʃ- は有声の Ci の前で有声化する。fi を除くすべての子音が Ci に立ちうる。V は母音。G は介音であり、-r-, -l-, -w-, -y- の4種類がある。C_f は -p-, -t-, -k-, -ʔ-, -č-, -s-, -fi-, -m-, -n-, -ṇ-, -ñ-, -l-, -r-, -w-, -y- のいずれかである。C₂ は s または人称接辞であり、n, ṇ, ñ, Nč, č, w, y のいずれかである。



地図 嘉戎語方言及び嘉戎系諸語の分布 (©Y. Nagano 2018)

2. 動詞句の一般的構造

動詞句の一般構造は次のように記述できる。

[(名詞句) + VPnon-final]ⁿ (助辞) [(名詞句) + VPfinal] (判定詞または助動詞)。

但し、n は 0 または 1 または 2。また、VPnon-final は kə/ka- 語幹。

VPnon-final は不定形であり、動作を表す動詞（動態動詞）語幹には ka- が、それ以外（多くは状態動詞）の語幹には kə- が前接する。

VPfinal は次のように記述される。

VPfinal → P1 - P2 - P3 - P4 - P5 - 語幹 - (s) - S1

これは接辞の語幹との距離によって相対的に位置づけた概念的な接辞の並び方である。この内、

P1 は「ムード」標識。疑問、命令、禁止、否定、などを表す。

P2 は「テンス・アスペクト標識」で、Past/Non-Past の区別と、動詞の表す動きの諸様相を指定する。Past/Non-Past の区別には方向接辞が重要な役割を担う。

P3 は「エビデンシャル」標識で、ギャロン語が鋭敏な情報の直接性・間接性などを示す。

P4 は人称接辞で、S1 とペアをなす。動作者、被動作者、ゴール、経験者、受益者などの一致 (agreement) を指定する。

P5 は Voice 標識、動作の様態などを示す副詞的標識で、様態を指定する他に、動詞化や他動詞化の手続きを含む。これには下記の 10 種が含まれ、小稿が記述する使役表現も P5 に現れる接辞によって実現される。

副詞的接辞 wə

使役を示す接辞 sə-, šə-, rə-, wa-

相互動作を示す nə-

反復動作を示す ra- と na-

意志で制御しがたい動作を示す mə-

再帰を表す nə-

適用態 (applicative) を表す na-

判断の転換 (estimative/tropative) を表す ne

非人称を表す nə-

動作者が特定されない行為の様態を表す nu-

(s) は動詞語幹につく単一の派生的接尾辞で、かつ、完了標識でもある。

3. 語幹レベルでの自他の区別

莫拉方言で VPfinal 内で P5 接辞として生産的に使役を表現するものに 4 種を認めるが、これらの生産的接辞を説明する前に、レベルでの自動詞と他動詞の区

別の幾つかを列挙しておく。

s-jur	「変える」	:	n-jur	「変わる」
s-kor	「廻す」	:	n-kor	「廻る」
s-krə	「巻く」	:	n-krə	「巻かれた状態になる」
s-roñ	「見せる」	:	Ø-roñ	「見える」
r-was	「起こす」	:	Ø-was	「起きる」
r-to > r-do	「会う」	:	m-to	「見える」
k-tsum	「つぶる」	:	n-/m-ɟup	「閉じる」
k-ram	「乾かす」	:	Ø-ram	「乾く」
p-ram	「乾かす」	:	Ø-ram	「乾く」
(ka-)tuw	「開ける」	:	(kə-)ñə-tow	「開く」
(ka-)čat	「閉める」	:	(kə-)ñə-čat	「(戸が) 閉まる」

P5 接辞が母音要素を失い、語幹の一部のように振る舞うようになっているものもあるし、その逆に、意味を明確化するために語彙化した接辞に母音を挿入して脱語彙化したり、接辞が語彙化した語幹の前にさらに別の接辞を置く過程も見られる。この接辞の母音要素消滅と挿入の過程はチベット・ビルマ系諸語に共通して広く起こった事象であると推察できる。

4. 使役を示す P5 接辞

使役を示す生産的接辞には sə-, šə-, rə-, wa- の4種がある。このうち, sə- と šə- は TB 祖語に来源を求めることができ, rə- と wa- についても他の TB 諸語に同源と思われる形態を見いだせる。これら生産的な接辞の他, より古い時代に既に動詞語幹に語彙化したものもある。

一方, 脚本足 (キョムキョ) 方言と茶堡 (ジャブック) 方言では sə- と šə- は Indirect, rə- と wa- は Direct という考え方もある。しかし, 莫拉方言ではこの区別は必ずしもあてはまらない。

4.1. sə-

この接頭辞は使役マークとして最も頻繁に用いられるもので, 自他を区別する。

- (1) bišer tərmi tokəydzum {to-kə-yidzum-Ø}.

昨日 人 PST-3p-集まる-3

昨日人々が集まった。

- (1a) *ña bišer tərmi tosaydzun {to-sə-yidzum-ñ}.*

1s 昨日 人 PST-CAUS-集まる-1s

私は昨日人を集めた。

上の例文中、*to-*は「過去の非完結相」を表す。また、*yidzum*の*yi-*は本来一般的移動を示す方向接辞であるが、語幹に同化している。

- (2) *ñiŋo ñ-əmñak ro mə-ños?*

2p 2p:GEN-眼 起きる Q-LKV

起きますか？

- (2a) *ña tapu w-əmñak nəšəroñ {nə-sə-ro-ñ}.*

1s 子供 3s:GEN-眼 PST-CAUS-起きる-1s

私はその子を起こした。

(2a)の*nə-*は本来「下流へ」を表す方向接辞だが、この接辞は一般に過去を示す。

- (3) *štə w-əṭha w-əngu=y tadok toñacolo {to-ñə-colo} noto.*

これ 3s:GEN-茶 3s:GEN-中=LOC 毒 DIR-REC-混ざる AUXex

この茶には毒が混じっている。

- (3a) *štə w-əsman təji w-əngu=y tošəcolow {to-sə-colo-w}.*

これ 3s:GEN-薬 水 3s:GEN-中=LOC IMP-CAUS-混ざる-2s

この薬を水に混ぜよ。

(3)(3a)では*ñə-colo*が*sə-colo*に差し替わるにより使役が表現される。*ñə-colo*の*ñə-*も本来動作の様態を示すP5接辞だが、unitary rootではないので、*sə-*が出現するとそれとは共起しない。

- (4) *štə w-ətasi kə-gurgur noto.*

これ 3s:GEN-棒 INF-曲がっている AUX

この棒は曲がっている。

- (4a) *ña tətasi sə-gurgur.*

1s 棒 CAUS-曲がっている

私は棒を曲げよう。

- (5)
- ña nə-che-ñ.*

1s REFL-酔う-1s

私は酔いそうだ。

- (5a)
- wuyo=kə tərmi=tə to-sə-che-w.*

3s=ERG 男=DEF PST-CAUS-酔う-3s

彼はその男を酔わせた。

sə-kšot のようにやや込み入った歴史を抱える語彙もある。これはもともと *kšot* 「習う」に CAUS が接頭した形だが、「習わせる」の意ではなく、「教える」を意味する。そして現在では *kšot* が「習う」の意味で単独で使われることがなくなり、*səkšot* だけが *sə-* が語彙化した形で残っている。現在「習う」の意味で単独で使われるのは *ka-slap* である。

- (6)
- wužo kuru? skat mažu sokpo skat=tsə na-səkšot.*

3s チベット 語 また モンゴル 語=も PROG-教える

彼はチベット語だけでなく、モンゴル語も教えていました。

- (6a)
- *wužo kuru? skat mažu sokpo skat=tsə na-kšot.*

3s チベット 語 また モンゴル 語=も PROG-習う

彼はチベット語だけでなく、モンゴル語も習っていました。

- (6b)
- wužo kuru? skat mažu sokpo skat=tsə na-slap.*

3s チベット 語 また モンゴル 語=も PROG-習う

彼はチベット語だけでなく、モンゴル語も習っていました。

次に *sə-* が「・・・をして～せしめる」の意での使役に転換する例を検討する。

- (7)
- ña ñ-ənge wan {wat-ñ}.*

1s 1s:GEN-着物 着る-1s

私は（自分の）着物を着よう。

- (7a)
- ña tapu w-ənge səwan {sə-wat-ñ}.*

1s 子供 3s:GEN-着物 CAUS-着る-1s

私は子供に（彼の）着物を着せよう。

- (7b)
- ña(=kə) tapu w-ənge ñ-apyə səwan {sə-wat-ñ}.*

1s(=NIF) 子供 3s:GEN-着物 1s-妻 CAUS-着る-1s

私は家内をしてその子に（彼の）着物を着用せしめよう。

- (8) *ña ñ-əŋge nə-tɛ-ñ.*
 1s 1s:GEN-着物 PST-脱ぐ-1s
 私は着物を脱いだ。
- (8a) *ña w-əŋge nə-sə-tɛ-ñ.*
 1s 3s:GEN-着物 PST-CAUS-脱ぐ-1s
 私は彼の着物を脱がせた。
- (8b) *ña(=kə) w-əŋge ñ-əwos nə-sə-tɛ-ñ.*
 1s(=NIF) 3s:GEN-着物 1s:GEN-使用人 PST-CAUS-脱ぐ-1s
 私は使用人をして彼の着物を脱衣させた。
- (9) *ña wuʃo tama kə-sə-pa ños.*
 1s 3s 仕事 NOM-CAUS-する LKV
 私は彼に仕事をさせよう。
- (10) *wuʃo(=kə) tətha ña yi-sə-tsam.*
 3s(=NIF) 本 1s DIR-CAUS-運ぶ
 彼は私に本を運ばせた。
- (11) *ña dawa sonam=gə ta-sə-top-ñ.*
 1s ダワ ソナム=FOC PST-CAUS-殴る-1s
 私はダワにソナムを殴らせよう。
- (11a) *butañ=kə krašis sonam tascor na-sə-wu-w.*
 部長=ERG タシ ソナム 書類 PROG-CAUS-与える-3s
 部長はタシにソナムに書類を出させようとしている。
- (12) *ñ-əpɛ ñ-əwɛ ka-sar yusthañ{yi-wu-sə-thal-ñ}.*
 1s:GEN-父 1s:GEN-祖母 INF-探す PST-3>1-CAUS-行く-1s
 父は（私に）祖母を探しに行かせた。
- (13) *ñ-əpɛ ña kə-mbri mənusčheñ {mə-nə-wu-sə-čhe-ñ}.*
 1s:GEN-父 1s INF-遊ぶ NEG-PST-3>1-CAUS-行く-1s
 父は私を遊びに行かせてくれない。

- (14) *ña səmnor kə-ŋjip=ke nuslan {nə-wu-sə-lat-ŋ}.*
 1s 熟慮 INF-細かい=IDEF IMP-INV-CAUS-する-1s

ゆっくり考えさせて。

「・・・をして～せしめる」の構文で、(7a)(8a)(9)(12)(13)のように主たる行為者が無標である場合と、(7b)(8b)(10)(11a)のようにERG/NIFでマークされる場合とがあり、2次的行為者はいずれも無標である。このことは、このような使役表現では格標示に関しては無標が基本であり、主たる行為者を特に明示すべき場合にのみ-NIFが現れ、項の語順は統語ルールに従うと解釈される。また、(11)のように「～せしめる」行為の結果を受けるpttが=gəによって焦点化される例がある。

このような用例の他、*kə-kte*「大きい」に対して、*kə-sə-kte*「大きくする、育てる」のような例もあるが、このように*sə-*が形容詞とともに生産的に働く類例は少ない。また、歴史的な検討を経て、既に語彙化している*sə-*を見いだすこともできる。たとえば、*ka-sna-skik*「修繕する」の*skik*は単独でも「直す」の意を含んでいる。では*sna*は何かと言うと、「良い」の意である。ところが、実は*na*には本来「良い」の意がある。つまり、*sna*はもともと**s-na < *sə-na*「良くする」であって、「良い」という形容詞にCAUSを表す接辞が接頭した形なのである。このような接辞の語彙化は随所に見られる。

4.2. *šə-*

この接辞はCAUSマークである点では*sə-*と同じであり、おそらくそこからの派生形式であるが、「助けて・・・させる、幫助する」の意を表す。

- (15) *ña rwas {rwas-ŋ}.*
 1s 起きる

私は起きる。

- (15a) *ña wuʃo sərwās {sə-rwas-ŋ}.*
 1s 3s CAUS-起きる-1s

私は彼を起こす。

- (15b) *ña wuʃo šə-rwas {šə-rwas-ŋ}.*
 1s 3s CAUS-起きる-1s

私は彼が起きるのを助ける。

「借りる」「貸す」の対立を*šə-*で表すことができる。

- (16) *ña poñyi nə-rña-ñ.*
 1s お金 PST-借りる-1s

私はお金を借りた。

- (16a) *ña poñyi nə-šə-rña-ñ.*
 1s お金 PST-CAUS-借りる -1s

私はお金を貸した。

- (17) *ña poñyi nə-sca-ñ=ren təjim to-pa-ñ.*
 1s お金 PST-借りる-1s=て 家 PST-作る-1s

私はお金を借りて、家を建てた。

- (17a) *ña ñ-əpoñyi kə-ndo=tə ndo kor wužo ma-šə-sca-ñ.*
 1s 1s:GEN-お金 NOM-有る=DEF 有る が 3s NEG-CAUS-借りる-1s

私はお金があるにはあるが、彼には貸さない。

- (18) *štə wužo kə-šə-rña ka-ra w-əthep nə-ño.*
 これ 3s INF-CAUS-借りる INF-必要がある 3s:GEN-本 EVI-LKV

これは彼に貸してやらねばならない本なのです。

「借りる」「貸す」の対立は *sə-* で表すのが一般的であるが、*šə-* を使うのは「貸してあげる」と言う一種の待遇表現の現れかと思われる。

šə- が特に幫助の意なしに、全く *sə-* と同じ CAUS としてのみ働く例もある。たとえば、*pki* は「隠れる」という自動詞であるが、その他動詞形は *šə-pki* であって、**sə-pki* という形はない。また、*šə-čhit* 「濡れる」と *šə-lot* 「道に迷う」はいずれも CAUS- 形容詞の複合語幹である。但し、*čhit* と *lot* は現代語では自立的形容詞としては存在しない。

4.3. *rə-*

rə- が CAUS マークとして機能する例は下記の通りである。

<i>kə-kšut</i>	「出る」	:	<i>kə-rə-kšut</i>	「追い出す」
<i>kə-čhak</i>	「少ない」	:	<i>kə-rə-čhak</i>	「減らす」

<i>tapu?</i>	「子供」	:	<i>ka-rə-pu?</i>	「出産する」
<i>tascor</i>	「手紙」	:	<i>ka-rə-scor</i>	「書く」
<i>tətha</i>	「本」	:	<i>ka-rə-tha</i>	「勉強する、学校へ行く」

もうひとつの例は *kə-ram* 「乾く」に関わる手続きである。これに対する他動詞形には *ka-kram* と *ka-pram* があり、いずれも「乾かす」を意味するが、*ka-pram* は「曝涼する」の意にのみ使われる。*kram* にせよ *pram* にせよ、既に他動詞化された形なのだが、これらの語幹が単独で現れることは少なく、多くの場合、*ka-rə-kram* と *ka-rə-pram* として出現する。Prins (2011: 479) にも *kəraʔm* ‘dry’ vs. *karəkraʔm* ‘dry in the sun’ が例示されている。なお、*ka-wa-kram* は「(乾かすために何かを) 広げる」の意である。

4.4. wa-

この接辞の主たる役割は形容詞と名詞を動詞化することである。たとえば、

- (19) *ñiʃo təʃi wa-stshe-ñ mə-ños.*

2p 水 CAUS-熱い-2p Q-LKV

あなた方は湯を沸かすのですか？

- (20) *ña towambiyañ {to-wa-mbiyas-ñ}.*

1s PST-CAUS-跛-1s

わたしは跛をひいた。

- (21) *w-ərjap jaron nə-čhe nowarmow {no-wa-rmo-w}.*

3s:GEN-奥さん 嘉戎 PST-行く PST-CAUS-夢-3s

彼は奥さんが嘉戎へ行った夢を見た。

- (22) *ña bišer w-əpu nowardon {no-wa-rdo-ñ}.*

1s 昨日 3s:GEN-子 PST-CAUS-見る-1s

私は昨日彼の子に会った。

(15) では *stshe* 「熱い」を *wa-* が動詞化し、(16) では *mbiyas* 「跛」という名詞を「跛をひく」に、(17) では *rmo* 「夢」を「夢を見る」に転換する。(18) の *rdo* は「見る」の意で、*mto* の他動詞形と考えられる。この *rdo* に *wa-* が接頭されて、「見せしむる、会う」に意味が特殊化される。語の成り立ちからの説明は以上の通りだが、記述的には *wardo* 「会う」という語彙化した語幹形式を認めた方が適切かもしれない。

təndzor 「臼」に対して *ka-wandzor* 「挽く」もこの類例である。

- (23) *ña tərɡoʔ kawandzorn̩* {*ka-wandzor-n̩*}
 1s 穀物 PROG-挽く-1s

私は穀物を挽いています。

- (24) *ña kraʃis tərɡoʔ kaswandzorn̩* {*ka-sə-wandzor-n̩*}
 1s タシ 穀物 PROG-CAUS-挽く-1s

私はタシに大麦を挽かせています。

語彙的な対立としては、

<i>kə-mne</i>	「少ない」	:	<i>kə-wa-mne</i>	「減る」
<i>kə-rmuk</i>	「消える」	:	<i>ka-wa-rmuk</i>	「消す」
<i>kə-rlak</i>	「消える」	:	<i>ka-wa-rlak</i>	「消す」

やや趣の異なる対立として、

<i>ka-wa-rdə</i>	「ほどける」	:	<i>ka-rda</i>	「緩める」
------------------	--------	---	---------------	-------

がある。また、*kə-skren*「長い」に対し、*waskren* は名詞としての「長さ」、*kə-wa-skren* は「長くする」である。

前節の *rə-* と本節の *wa-* に関し、Prins は「*rə-* と *wa-* は direct causative, *sə-* と *ʃə-* は indirect causative」と述べている。但し、*rə-* と *wa-* は語彙化されるものが多く、この仮説が妥当か否か疑問である。また、Sun と Jacques の説を引用する形で、「*sə-* が出現する文の ptt は human, *rə-* が出現する文の ptt は non-human」とも述べているが、これにも反例がある。

5. P5 接辞の組み合わせ

原則として P1-5 の各スロットに立つ接辞はそれぞれ 1 つであるが、P5 の使役接辞（特に *sə-*）に限り、相互動作を示す *nə-*、再帰を示す *nə-* と組み合わせられることがある。例えば、

<i>ka-sat</i>	殺す
<i>ka-nə-sat</i>	己を殺す
<i>ka-sə-sat</i>	(誰かをして) 誰かを殺させる
<i>ka-sə-nə-sat</i>	(誰かをして) その人を殺させる
<i>ka-nə-sat</i>	殺し合う

ka-sə-nə-sat 人々をして殺し合いをさせる

ka-sə-nə-sat と ka-sə-ñə-sat には nə-sat と ñə-sat の部分にいずれ語彙化が起きることが予測される。

6. 終わりに

ギャロン語における使役表現を概説してきた。おそらく WT ないし TB 諸語において起きたことと平行に、生産的使役接辞の語彙化⇒脱語彙化⇒語彙化した語幹の前にさらに別の接辞を置く、といった過程が何回か繰り返されてきたと思われるが、ギャロン語の現状はまさに接辞の母音要素消滅と挿入の過程の最中にある。これを歴史的に跡づけるには、WT との詳細な比較や羌系諸語における接辞の語彙化・脱語彙化の記述観察による一層の精査が求められよう。

略号

1	1 人称：first person	=	Clitic が後接することのマー
2	2 人称：second person		ク：constituent boundary one
3	3 人称：third person		degree higher than ‘-’
agt	動作者：agent	ABL	奪格：ablative
d	双数：dual	ABT	絶対時制：absolute tense
ex	存在：existence	ADVR	副詞を形成する接辞：
n	名詞：noun		adverbializer
neg	否定：negative	ALA	動作者非特定：
p	複数：plural		agentless action
ptt	被動作者：patient	APP	適用態：applicative
s	単数：singular	ATT	語気を和らげる副詞：
v	動詞：verb		attenuant
vi	自動詞：intransitive verb	AUX	助動詞：auxiliary verb
vt	他動詞：transitive verb	CAUS	使役：causative
<	<A で A 由来：	Chin.	中国語：Chinese
	originated from the right	COMP	比較級：comparative
>	行為が左項から右項へ向か	DAT	与格：dative
	う：	DEF	定（じょう）：definite
	action going from left to right	DIF	直接情報：direct information
-	形態の区切り：	DIR	方向接辞：
	morpheme boundary		directive/direction marker

ERG	能格：ergative	OPT	希求法：optative
EST	判断転換態：estimative	P	前接辞：prefix
EVI	エビデンシヤル：evidential	PFV	完了：perfective
FOC	焦点化マーク：focus marker	POSS	所有：possessive
GEN	属格：genitive	PROG	進行態：progressive
HON	敬語：honorifics	PROH	禁止：prohibitive
IDEF	不定（ふじょう）：indenite	PST	過去：past
IMP	命令：imperative	Q	疑問：question
IMPS	非人称：impersonal	RCP	相互動作：reciprocal action
INF	不定形：in nitive	REP	反復動作：repetitive act
INS	具格：instrumental	S	接尾辞：suffix
INT	感嘆詞：interjection	SFP	終助詞：sentence final particle
INV	逆行態：inverse	TB	チベット・ビルマ： Tibeto-Burman
IRR	非真実：irrealis	VP	動詞句：verb phrase
LKV	判定詞：linking verb	VPS	視点切替： view-pivot switcher
LOC	場所格：locative	WT	チベット文語 (ワイリー方式によるローマ 字転写)：Written Tibetan
NIF	新情報：new information		
NOM	名詞化標識：nominalizer		
Non1	非1人称：non-1st person		
NonV	非意志的：non-volitional		
NP	名詞句：noun phrase		

参考文献

- Jacques, Guillaume (向柏霖)
 2008 『嘉绒语研究』中国新发现言研究丛书. 北京：民族出版社.
 2013 Applicative and trovative derivations in Japhug rGyalrong. *LTBA* 36(2): 1–13.
 2016 Grammaticalization in Japhug and Gyalrongic languages. https://www.academia.edu/23037903/Grammaticalization_in_Japhug_and_Gyalrongic_languages
- Lin, Xiangrong (林向荣)
 1993 『嘉戎语研究』成都：四川民族出版社.
- LaPolla, Randy J.
 1992 On the dating and nature of verb agreement in Tibeto-Burman. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, University of London LV.2, 298–315.
 2017 Qiang, Thurgood, Graham and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*, pp. 773–789. London and New York: Routledge.
- DeLancey, Scott
 1980 *Deictic Categories in the Tibeto-Burman Verb*. Ph.D dissertation, Indiana University.
 1989 Verb agreement in Proto-Tibeto-Burman. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, University of London LII(2): 315–333.
- Matisoff, J.A.
 2003 *Handbook of Proto-Tibeto-Burman*. Berkeley: University of California Press.

長野泰彦

- 1984 嘉戎語の人称接辞『国立民族学博物館研究報告』9(4): 711–745.
- 2001 嘉戎語の基本構造『国立民族学博物館研究報告』26(1): 131–164.
- 2017 Cogtse Gyarong. *The Sino-Tibetan Languages*. London: Routledge, pp. 572–596.
- 2018 『嘉戎語文法研究』東京：汲古書院.

Prins, Marielle

- 2011 *A Web of Relations. A Grammar of rGyalrong Jiāomùzú (Kyom-kyo) Dialects*. Ph.D. dissertation, Leiden University.
- 2016 *A Grammar of rGyalrong, Jiāomùzú (Kyom-kyo) Dialects*. Leiden: Brill.

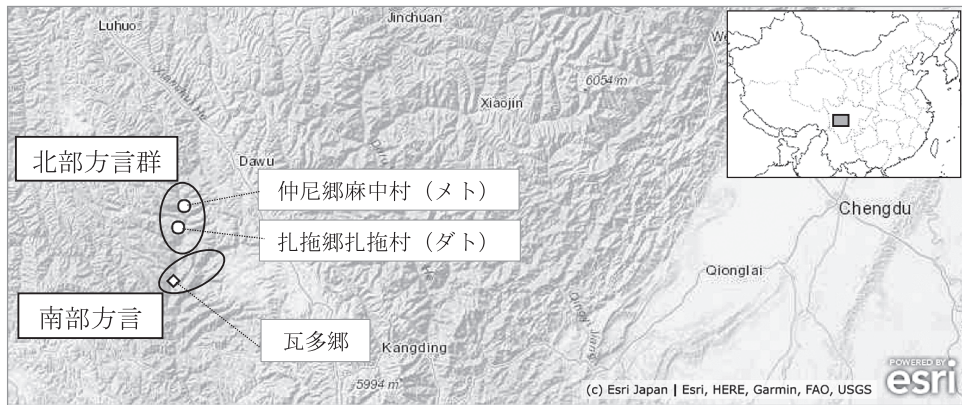
ダバ語における自他動詞対と使役

白井 聡子

1. はじめに

本稿では、ダバ語（中国四川省：チアン語支）における動詞の自他対応と使役について論じる。まず、第1節でダバ語の概要および基本特徴を概説する。第2節では、自動詞と他動詞の対応について述べる。メト方言における形態論的自他対応、自他同形動詞、補助動詞を用いた他動化について記述した上で、他方言との比較を行う。第3節では、使役文の特徴を述べる。特に被使役者の格標識に注目して分析を行う。第4節でまとめる。

1.1. ダバ語について



地図1 ダバ語の話される地域

ダバ語（nDrapa/Zhaba/ 扎壩 / 扎巴）は、中国四川省甘孜チベット族自治州道孚県および雅江県で話される、チベット＝ビルマ語派チアン語支の言語である（地図1参照）。方言は、北部方言群と南部方言に大きく分かれるが、方言間の相互理解は可能である。総話者数は約8,000人と推定される（黄1990、龔2007、馮2010）。本稿の議論は、主として、北部方言群に属するメト方言（道孚県仲尼郷麻中村）を対象とするが、一部、ダト方言（北部方言群、扎拖郷扎拖村）および南部方言（瓦多郷吾知村）にも言及する。メト方言のデータは筆者の現地調査に基づく。ダト方言のデータは黄（1991, 2009）、南部方言のデータは龔（2007）を用いる。

1.2. ダパ語メト方言の特徴

ダパ語メト方言には、次の音素が認められる。[1] 子音 /ph [pʰ], th [tʰ], tʰ [tʰ], ch [cʰ], kh [kʰ]; p, t, t̪, c, k; b, d, d̪, j, g; tsh [tsʰ], t̪ch, [t̪cʰ]; ts, t̪c; dz, d̪z; m, n, n̪, ŋ; m̪ [m̪m], n̪ [n̪n], ñ [ɲ̪n̪], ɲ̪ [ɲ̪ɲ̪]; fh [fʰ], sh [sʰ], ɕh [ɕʰ]; f, s, ɕ, x, h; v, z, ʒ, ɣ, fi; w, j; l, r [ɾ]; ɭ [ɭ], ɣ [ɣ]; [2] 母音 /i, i, u, e [ɪ], ɐ, o, ɛ, ʌ, ə, a; ei/; [3] 語声調（音韻語の後ろに以下の番号で表記する）：1（高平調），2（高降調），3（低昇調），4（低昇降調）。固有語の音節構造は、最大で CCCV となる。なお、借用語には、鼻母音も認められる。

膠着的な特徴を持ち、接頭辞と接尾辞の両方が用いられる。動詞に付加される接辞としては、方向および否定の接頭辞、アスペクトおよび視点（egophoricity）の接尾辞がある。このうち、方向接辞は次の5つである：Λ- ‘UPW’（上向き），a- ‘DWN’（下向き），ka- ‘INW’（上流／内向き），ɲΛ- ‘OUT’（下流／外向き），ta- ‘NTL’（不特定／中立）。方向接辞は完了および命令において義務的に付加され、移動を伴わない動詞とも恣意的に結びつく（Shirai 2009, 2018）。本稿では、メト方言の動詞の形式を挙げる際、方向接辞を伴う形式を示す。他の方言については引用元のままとする。

動詞語幹は単音節のものが多く、一部、2音節以上のものもある。

基本的な構成素順は動詞後置型（AOV, SV）である。さまざまな後置詞が用いられるが、前置詞はない。

格標示パターンは、基本的に主格対格型（A/S vs. O）である。格標識には後置詞が用いられる。主格標識はない（ゼロ標識）。格標識には以下のものがある：=wu ‘ACC’（対与格），=perΛ ‘CNT’（内容格）¹，=la ‘DAT’（与位格），=ji ‘BEN’（受益格），=na ‘COM’（共格），=ntsha ‘ASS’（随伴格），=kaɬΛ ‘INS’（具格），=ma ‘CMPR’（比格），=ra ‘GEN’（属格）。詳細は白井（2010）を参照していただきたい。

1.3. 先行研究

ダパ語の自他動詞対応や使役について中心的に論じた研究はないが、黄（1991, 2009）、龔（2007）などの記述文法に一定の言及が見られる。

黄（2009: 85–86）は、ダト方言におけるヴォイスについて、自動態と使役態が次の方法で表示されると記述している：[1] 語根の声母の交替—自動態 :: 使役態が有声音 :: 無声音または非帯気音 :: 帯気音—；[2] 語根の韻母の交替—i :: e または y :: u—；[3] 接頭辞の変換；[4] 分析形式—動詞 t̪s̪ʰu³³「～させる」の付加—。さらに、これらを組み合わせて表示される場合もあるとする。

龔（2007: 91–93）は、南部方言のヴォイスを記述している。自動詞・他動詞の形態的対応を示すペアについて、その他動詞を使役動詞と呼び、自動詞・他動詞

¹「内容格」は白井（2010）で用いた便宜的な名称。機能については3.2節で述べる。この格標識はおそらく複合的な形式で、第二音節は属格の =ra と考えられる。

(使役動詞)の対応と使役態を共に扱っている。その形成法の分析では、[1] 動詞語根の声母の交代；[2] 使役動詞 tʃhu³¹ の付加，という二つに大きく分けた上で、[1] をさらに次の二つに分類している：[1-i] 有声声母が自動詞，無声声母が使役動詞；[1-ii] 非帯気音が自動詞，帯気音が使役動詞。

本稿では、2.4 節において、これらの先行研究が示すデータとの比較分析を行う。

2. 動詞の自他対応

ここでは、ダバ語における自動詞と他動詞の対応について述べる。対応のタイプ²としては、他動化と不安定動詞（自他同形）が中心であると考えられる。非他動化（自動詞化）や中立（両極）と確言できる例は、共時的記述レベルでは見つかっていないが、方言を比較すると古い段階にはあった可能性がある。

動詞の自他対応パターンは、その形式から、大きく以下の3つに分けられる：[1] 形態論的対応，[2] 自他同形（不安定動詞タイプ），[3] 補助動詞付加，[4] 補充である。これらのうち、[3] は、生産的に使役形を形成しうる。また、複数の対応パターンを持つ動詞も見られる。なお本稿では [4] 補充法的自他対応については詳しく扱わない。例としては、o-ʈu3 「乾く」:: o-kho1 「干す」，tʌ-ɕʌ1 「死ぬ」:: kʌ-se3 「殺す」などがある。

以下、2.1 節から 2.3 節ではダバ語メト方言の自他動詞対応について述べる。2.4 節において、他方言との比較を試みる。

2.1. 形態論的自他対応

他のチベット＝ビルマ系諸言語と同様に、自動詞と他動詞が形態的に近似する語幹を持ち、主として語根初頭音の帯気性や有声性の有無によって区別されるという現象が見られる。このタイプのうち、特に、他動詞が帯気音で対応するペアについては、チベット＝ビルマ祖語の使役化接頭辞 *s- に由来する可能性がある。なお、ダバ語においては、この対応を示す自動詞・他動詞のペアは限られており、非生産的である。

ダバ語に見られる形態論的自他動詞対は、少数の例外を除いて、[1] 自動詞語根初頭が非帯気音 :: 他動詞語根初頭が帯気音，[2] 自動詞語根初頭が有声 :: 他動詞語根初頭が無声という対応を示す。このうち [1] がより多く見られる。このほか、散発的に、母音、初頭子音連続、声調の交替を伴う。

上記 [1] の例を (1) に挙げる。各例の左側が自動詞、右側が他動詞である。(1a-h) は典型的なペアである。(1i) は、帯気性に加えて初頭の重子音の有無も異なる。(1j) においては、母音の交替も見られる。この例は、狭義の自他対応ではないが、初頭が非帯気音の形式が無意志動詞、帯気音の形式が意志動詞であるという点で、

² バルデシ他編（2015: 2）の用語を用いた。

前者よりも後者の他動性が高いと考えられるため、ここに挙げておく。なお、(1d, i)については、複数の自他対応パターンが併存する(2.3節参照)。

(1) 【非帯気—帯気】

a.	o-ccu1	「開く」	o-cchu1	「開ける」
b.	tΛ-tçε1	「(布が) 破れる」	tΛ-tçhe1	「破る」
c.	ηΛ-t[ta1	「(結び目が) ほどける」	ηΛ-t[tha1	「ほどく」
d.	o-tu1	「(目が) 覚める」	o-t[hu1	「覚ます, 覚まさせる」
			(cf.) o-tu = t[hu1	「目覚めさせる」
e.	a-t[ti3	「(家が) 倒壊する, 崩れる」	a-t[hi3	「破壊する, 崩す」
f.	ηΛ-ke3	「(板が) 裂ける, 割れる」	ηΛ-khe3	「裂く, 割る」
g.	Λ-te1	「出てくる」 ³	Λ-the1	「取り出す」
h.	ηΛ-ttsia1	「ひび割れる」	ηΛ-ttshia1	「ひび割れさせる」
i.	Λ-ttsi1	「燃える」	Λ-tshi1	「燃やす」
			(cf.) Λ-ttsi = t[hu1	「燃やす」
j.	tΛ-ntsile3	「(水で) 滑って転ぶ」	tΛ-ntshele3	「(水を) 滑走する」

帯気性が関わるが、例外的な対応を示す例を(2)に挙げる。(2a)においては、自動詞が帯気音、他動詞が非帯気音であり、母音も異なる。(2b)は、狭義の自他対応ではないが、左側の動詞「食べる」よりも右側の動詞「食べさせる」の項が一つ多いという点で自他対応に準ずる特徴を持ち、また、形式面では後者に前気音が現れるという点で、帯気性に準ずる特徴を示すことから、ここに挙げておく。

(2)	a.	tΛ-t[he1	「(紐が) 切れる」	tΛ-t[ta3	「切る」
				(cf.) tΛ-t[hi2	「切り取る」(cf. (1e))
	b.	kΛ-ttsi1	「食べる」	tΛ-htsi1	「食べさせる」

上記 [2] 有声 :: 無声による自他対応例は、非帯気 :: 帯気のペアに比べると少ない。(3)に例を挙げる。(3a–c)は語幹初頭が阻害音の例で、いずれも自動詞は有声前気音を伴う有声閉鎖音である。ところが、他動詞の形式は、(3a)が前気音、(3b, c)が帯気音と、異なっている。(3d)は重複タイプの語幹で、他動詞では二音節とも初頭が無声音となる。声調の交替も見られる。(3e, f)においては、j :: ç の対応が見られるが、ダパ語の /j/ は音声的に摩擦を伴うことから、自然な対応である。(3f)は二音節語幹で、語幹第一音節のみが j :: ç の交替を示し、第二音節は同形である。また、第一音節の母音も自動詞と他動詞で異なっている。

³ (1g)の自動詞は、一般的に「来る」を表す動詞 te1 に上向きの方角接辞 Λ- が付加されたもので、「高いところに向かって来る」という移動のほか、袋や壺など上に口の開いたいれものから「出てくる」ことを表す。

(3) 【有声—無声】

- | | | | |
|-------------|------------|--------------------|-----------------|
| a. o-fjə1 | 「回る」 | o-hco1 | 「回す」 |
| b. kΛ-fidΛ1 | 「折れる」 | kΛ-thΛ1 | 「折る」 |
| c. a-fido3 | 「剥がれる」 | a-tho3 | 「剥がす」 |
| d. tΛ-lala3 | 「揺れる」 | tΛ-ɭaɭa1 | 「揺らす」 |
| e. a-ji3 | 「溶ける」 | a-çi3 | 「(バターを熱して) 溶かす」 |
| | | (cf.) a-ji = t̥hu3 | 「(氷を) 溶かす」 |
| f. a-jelΛ3 | 「(石が) 転がる」 | a-çΛΛ3 | 「(石を) 転がす」 |

以下に、もう一つ、例外的な自動詞・他動詞対応を示す。(4) は、自動詞が低昇調、他動詞が高平調と、声調が交替している例である。同様の声調交替は (3d) にも見られるが、他の並行例は見つかっていない。また、興味深いことに、(4) の他動詞 Λ-the1 は (1g) と同じである。つまり、自動詞と他動詞が複数の対応を示す例の一つである (2.3 節参照)。論理的には、(4) のペアがより古く、類推によって、より多く見られる自他動詞対応パターンに合うよう (1g) の自動詞が形成されたという可能性が考えられるが、今のところ類例がないため確認できない。さらに、(cf.) に挙げたように、方向接辞 (1.2 節参照) の異なる同語根の動詞 ηΛ-the1 が、2.3 節で扱う補助動詞による自他対応を示す。

(4) 【声調】

- | | | | |
|---------------|---------------|----------------|-----------------|
| Λ-the3 | 「(袋から荷物が) 出る」 | Λ-the1 | 「(袋から荷物を) 取り出す」 |
| (cf.) ηΛ-the1 | 「(牛が囲いから) 出る」 | ηΛ-the = t̥hu1 | 「(牛を囲いから) 出す」 |

2.2. 自他同形 (不安定動詞)

同じ形式が、自動詞としても他動詞としても用いられる例が多数見られる。自他同形タイプであることが確認されている例を (5) に挙げる。

(5) 自他同形

- | | |
|----------------|--------------------------|
| a. Λ-htçi1 | 「掛かる／掛ける」 |
| b. a-fji3 | 「落ちる／落とす」 |
| c. a-fjo3 | 「落ちる、失せる／落とす、失う」 |
| d. a-hpe3 | 「(家が) 焼ける／焼く」 |
| e. a-htε3 | 「沈む (水中に落ちる)／沈める (〃落とす)」 |
| f. a-mə3 | 「閉まる／閉める」 |
| g. a-n̥ε | 「閉まる／閉める」 |
| h. a-peitche3 | 「(玩具が) 壊れる／壊す」 |
| i. a-pho3 | 「ひっくり返る／ひっくり返す」 |
| j. a-tçhetche3 | 「(服が) 破れる／破る」 |

- k. a- $\text{t}[\text{h}\epsilon 3$ 「(茶碗が⁵) 割れる／割る」
 l. $\eta\text{o-ntho}1$ 「止まる／止める」

2.3. 使役の補助動詞を用いた他動化

補助動詞 $=\text{thu}$ は、生産的に動詞に付加されて使役態を標示する。(6) では、前節 (5l) の自他同形動詞 $\eta\text{o-ntho}1$ 「止まる／止める」に $=\text{thu}$ が付加され、使役の意味を表している。

- (6) $\eta\text{o-ntho}=\text{thu}1$
 OUT- 止める =CAUS
 (運転手に言って車を) 停めさせる。

補助動詞 $=\text{thu}$ は、動詞語幹の直後にのみ付加され、音韻的にも通常は (6) のように動詞を中心とする音韻語の一部となる。このことから、接辞であるかどうかの問題となる。(7) は、民話の一場面、命令文が連なる箇所である。第2文と第3文は、 $=\text{thu}$ が付加された述部を持つ。この例では、述部が強調された結果、 $=\text{thu}$ が強勢を持つ独自の音韻語として声調 (3: 低昇調) を担っている。このような強調が可能であることから、本稿では、 $=\text{thu}$ は接尾辞ではなく語であると結論づける。

- (7) $\text{no}=\text{ne}1$ $\text{sh}\epsilon 1$ $\text{hki}1$ $\text{to-ju}3$.
 2SG=TOP 薪 採る NTL- 行く / 来る .IMPR
 $\text{c}\text{a}[\text{t}\text{h}\epsilon=\text{wu}=\text{ne}3$ $\text{zo}1$ $\text{ko-tsho}3$ $=\text{thu}3$.
 幽霊=ACC=TOP かまど INW- 並べる CAUS
 $\text{z}\text{a}[\text{nt}\text{c}\text{hi}=\text{wu}3$ $\text{t}\text{a}=\text{le}3$ $\text{a-ji}3$ $=\text{thu}3$.
 女の子=ACC 水=汲む DWN- 行く / 来る CAUS
 おまえは、薪を取りに行きなさい。幽霊にはかまど (に使う石) を並べさせなさい。女の子を水汲みに行かせなさい。

この節では、以下、この補助動詞 $=\text{thu}$ によって自動詞から他動詞が派生される現象について述べる。使役態の形成を含む $=\text{thu}$ の用法の広がりについては、第3節で述べる。

補助動詞 $=\text{thu}$ の付加による他動化の例を以下に挙げる。なお、(8f, g) は形容詞と共通する語根を持つ状態変化動詞である。

- (8) 他動詞が補助動詞 $=\text{thu}$ を持つ自他対応
 a. $\text{A-pe}i3$ 「満ちる」 $\text{A-pe}i=\text{thu}3$ 「満たす」
 b. $\text{A-mphei}1$ 「凍る」 $\text{A-mphei}=\text{thu}1$ 「凍らせる」

- c. kΛ-palΛ3 「(人が) 集まる」 kΛ-palΛ=ʈhu3 「集める, 集合させる」
 d. tΛ-jelΛ3 「(人が) 転がる」 tΛ-jelΛ=ʈhu3 「(人)を 転がす」 cf. (3e)
 e. tΛ-nʝΛ1 「変わる」 tΛ-nʝΛ=ʈhu1 「変える」
 f. Λ-lei3 「良くなる」 Λ-lei=ʈhu3 「良くする」 (cf.) lele1 「良い」
 g. ɲΛ-fi1 「広くなる」 ɲΛ-fi=ʈhu1 「広げる」 (cf.) fifi1 「広い」

補助動詞 =ʈhu による他動化が生産的であることを示す事実として、複数の対応を示す自動詞・他動詞ペアがある。ダバ語において、自他の対応が一对一でない例のほとんどが、一つの自動詞に対して、形態的に対応する他動詞と =ʈhu が付加された形式が併存するというものである。意味上は、形態的他動詞も =ʈhu が付加された他動詞も大差なく用いられることが多い。(9) のような例である。

(9) =ʈhu があってもなくてもほぼ同じ意味のもの

- a. ɲa1 tΛɲi3 Λ-hca1 fɲe3.
 1SG 湯 UPW- 沸かす PST.1
 私はお湯を沸かした。
- b. tsheri1 tΛɲi3 Λ-hca=ʈhu1 hce-a3.
 PSN 湯 UPW- 沸く =CAUS PST-B.PFV
 ツェリはお湯を沸かした。

以下に、複数対応を持つ自他動詞ペアを例示する。形態的な他動化と補助動詞 =ʈhu による他動化が併存する例としては、既に挙げた (1d) 「覚める／覚ます」、(1i) 「燃える／燃やす」、(3e) 「溶ける／溶かす」などがある。そのほかの組み合わせには、以下のようなものがある。(10a) は、(9) に示したように、ほぼ意味の差がない。それに対し、(10b) では、自他同形の他動詞が無意志動詞、=ʈhu を付加した他動詞が意志動詞という差が見られる。

(10) 自他同形と =ʈhu が併存

- a. Λ-hca1 「沸く／沸かす」 Λ-hca=ʈhu1 「沸かす」
 b. kə-ñei1 「濡れる／(うっかり) 濡らす」 kə-ñei=ʈhu1 「(わざと) 濡らす」

(11) 補充法と =ʈhu が併存

- a. o-ʈʈu3 「乾く」 o-kho1 「干す」； o-ʈʈu=ʈhu1 「乾かす」
 b. o-tsho1 「起き上がる」 Λ-rʈe1 「起こす」； o-tsho=ʈhu1 「起こす」

例外的な複数対応は、2.1 節で言及した「出る／取り出す」(1g), (4) である。以下に改めて示す。形態論的な自他対応が併存する点と、複数の自動詞が対応する点において例外的である。

(12) Λ -tɛ1 「出てくる」； Λ -the3 「出る」 Λ -the1 「取り出す」

2.4. 他方言との対応

前節まで、ダバ語メト方言の自他動詞対について述べてきた。ここでは、特に、形態論的な自他対応について、黄 (2009), 黄 (主編) (1992) に所収のダト方言、および、龔 (2007) の記述する南部方言のデータを参照し、比較を試みる。

2.4.1. 非帯気 :: 帯気

2.1 節 (1) に例示した、自動詞 :: 他動詞が非帯気 :: 帯気で対応する例は、南部方言およびダト方言にも多く見られる。(13) にダト方言、(14) に南部方言の例を挙げる。また、語彙的に対応するメト方言の例が見つかった場合は、本稿における例の番号を右側に付す。

(13) ダト方言 (黄 2009: 85–86⁴, 黄主編 1992) 対応形式

- | | | |
|--|---|------|
| a. a ³³ -ptʂa ⁵⁵ 「ほどける」 | a ³³ -ptʂha ⁵⁵ 「ほどく」 | (1c) |
| b. a ⁵⁵ -tʂɿ ³³ 「崩れる」 | a ⁵⁵ -tʂhɿ ³³ 「崩す」 | (1e) |
| c. tə ⁵⁵ -ptʂe ⁵⁵ 「(紐が ^g) 切れる」 | tə ⁵⁵ -tʂhe ⁵⁵ 「切る」 | (2a) |
| d. Λ ³³ -pei ⁵⁵ 「満ちる」 | Λ ⁵⁵ -phei ⁵⁵ 「満たす」 | (8a) |

(14) 南部方言 (龔 2007) 対応形式

- | | | |
|---|--|------|
| a. ŋə ³⁵ -tɕu ⁵⁵ 「開く」 | ŋe ³⁵ -tɕhu ⁵⁵ 「開ける」 | (1a) |
| b. tə ³⁵ -tɕo ³¹ tɕo ³¹ 「(布が ^g) 破れる」 | tə ³⁵ -tɕho ³¹ tɕho ³¹ 「破る」 | (1b) |
| c. ŋə ³⁵ -ptʂa ⁵⁵
「(結び目が ^g) ほどけた」 | ŋə ³⁵ -ptʂha ⁵⁵
「ほどく」 | (1c) |
| d. i ⁵⁵ -tʂyi ³¹
「(目が ^g) 覚める」 | i ⁵⁵ -tʂhyi ³¹
「覚ます, 覚まさせる」 | (1d) |
| e. a ³³ -tʂɿ ⁵⁵
「(壁が ^g) 倒壊する, 崩れる」 | a ³³ -tʂhɿ ⁵⁵
「破壊する, 崩す」 | (1e) |
| f. a ⁵⁵ -ptsa ⁵⁵
「(石が ^g) 裂ける, 割れる」 | a ⁵⁵ -ptsha ⁵⁵
「裂く, 割る」 | (1h) |
| g. i ⁵⁵ -ptsi ⁵⁵ 「燃える」 | i ⁵⁵ -ptshi ⁵⁵ 「燃やす」 | (1i) |

⁴ 黄 (2009) では、ダバ語ダト方言の帯気音記号 [ʰ] が /ʰ/ と表記されているが、本稿では黄 (主編) (1992) の表記に合わせて /h/ とした。

- h. tə⁵⁵-ptʂe⁵⁵ 「(紐が) 切れる」 tə⁵⁵-ptʂhe⁵⁵ 「切る」 (2a)
 i. tə³⁵-pi³¹tʂi³¹-a³¹ 「(卓が) 壊れた」 tə³⁵-phi³¹tʂhi³¹-a³¹ 「壊した」 (5h)
 j. tə⁵⁵-ktʂo⁵⁵ 「(茶碗が) 割れる」 tə⁵⁵-ktʂho⁵⁵ 「割る」 (5k)

以上の例から、特に南部方言にこのタイプの自他対応が多いことが分かる。ダト方言については、メト方言や南部方言ほど多くの例は報告されていない。

また、方言間で異なる語形成法を持つ例が一部に見られる。「切れる／切る」を意味するペアは、(13c), (14h) に見るように、ダト方言と南部方言では帯気性による交替だが、メト方言では (2a) に示すように有声性による交替を示す。(13d) に対応するメト方言の語彙は、帯気性によるペアが見つかっておらず、生産的な補助動詞を用いた他動化のみが見られる。また、(14i, j) に対応するメト方言の語彙は、自他同形タイプである。

2.4.2. 有声 :: 無声

有声 :: 無声タイプの自他対応は、数は少ないものの、方言間でよく対応する。

(15) ダト方言 (黄 2009: 85–86, 黄主編 1992) 対応形式

- a. o⁵⁵-bjo⁵⁵ 「回る」 o⁵⁵-ʂcʂo⁵⁵ 「回す」 (3a)
 b. kɿ³³-vda⁵⁵ 「折れる」 kə⁵⁵-thə⁵⁵ 「折る」 (3b)
 c. la⁵⁵la⁵⁵ 「揺れる」 ɭa⁵⁵ɭa⁵⁵ 「揺らす」 (3d)
 d. a³³-ji⁵⁵ 「溶ける」 a³³-ʂi⁵⁵ 「溶かす」 (3e)
 e. tɿ³³-li⁵⁵ 「倒れる」 tɿ³³-ɭe⁵⁵ 「倒す」 (3f)

(16) 南部方言 (龔 2007) 対応形式

- a. r⁵⁵-dzu⁵⁵ 「回る」 r⁵⁵-ʂtʂu⁵⁵ 「回す」 (3a)
 b. tə⁵⁵-də³¹ 「折れる」 tə⁵⁵-thə³¹ 「折る」 (3b)
 c. a⁵⁵-do³¹ 「剥がれる」 a⁵⁵-tho³¹ 「剥がす」 (3c)
 d. la⁵⁵la⁵⁵ 「揺れる」 ɭa⁵⁵ɭa⁵⁵ 「揺らす」 (3d)
 e. tə³¹-zə⁵⁵lə³¹ 「倒れる」 tə³¹-ʂə⁵⁵lə³¹ 「倒す」 (3f)

ここで注目したいのは、ダト方言において、(15a, b) のように、初頭子音連続の交替が見られることである。(15a)ではb-が、(15b)ではv-が、それぞれ自動詞語幹初頭に見られることから、これらが非他動化接辞の名残ではないかと考えられる。既に挙げた(13c)も同様の子音連続の例で、自動詞語幹初頭にp-が見られる。

2.1節では、メト方言について、散発的に初頭子音連続の交替が見られることを述べた。改めてその例を確認すると、(1i), (3b), (3c)において、自動詞初頭の形式が、ダト方言のp-/b-/v-に対応している可能性が高い。

南部方言においても、初頭子音連続の有無が関わるという点で並行的な自他対応の例が見られる。いずれも自動詞に初頭子音連続が見られる。

(17) 南部方言	対応形式
a. $\eta\text{ə}^{35}\text{-}\text{ʃ}\text{the}^{55}$ 「出てくる」	$\eta\text{ə}^{35}\text{-the}^{31}$ 「取り出す」 (12)
b. $\text{a}^{55}\text{-vzi}^{31}$ 「(戸が) 閉まっている」	$\text{a}^{55}\text{-ze}^{55}$ 「閉める」 —

以上のことから、自動詞の初頭子音連続は、非他動化的派生の名残であると考えられる。また、その一部は、有声 :: 無声による自他動詞対の一部として現代語に残っている。非他動化の形態法は、かなり古い段階で生産性を失ったと考えられる。

2.4.3. その他の形態論的自他対応

ダト方言については、母音および方向接辞⁵による自他交替も見られる（黄 2009: 86）。

ダト方言において母音交替によって形成される自他動詞対を (18) に示す。メト方言においては、2.1 節で述べたように、母音交替は散発的に他の形態交替と共に見られるのみで ((1j), (2a), (3a, f)), 母音交替のみによる自他対応は見つかっていない。また、これらの散発的な母音交替の例はいずれもダト方言の母音交替例と語彙的に対応しない。

(18) ダト方言（黄 2009: 86）	対応形式
$\text{a}^{33}\text{-t}\text{ʃ}\text{hi}^{55}$ 「(茶碗が) 割れる」	$\text{a}^{33}\text{-t}\text{ʃ}\text{he}^{55}$ 「割る」 (5k)
$\eta\text{ə}^{55}\text{-thi}^{55}$ 「出てくる」	$\eta\text{ə}^{33}\text{-the}^{55}$ 「取り出す」 (12)
$\text{o}^{33}\text{-sy}^{55}$ 「生きる」	$\text{a}^{33}\text{-su}^{55}$ 「養う, 生かす」 —

ダト方言において、方向接辞の交替によって形成される自他対応の例を (19) に示す。

(19) ダト方言（黄 2009: 86）	対応形式
a. $\Lambda^{33}\text{-}\text{ʃ}\text{c}\text{c}\text{a}^{55}$ 「(湯が) 沸く」	$\text{a}^{33}\text{-}\text{ʃ}\text{c}\text{c}\text{a}^{55}$ 「沸かす」 (10a)
b. $\text{t}\text{ə}^{55}\text{-ptshia}^{55}$ 「(竹が) 割れる, 裂ける」	$\eta\text{ə}^{33}\text{-ptshia}^{55}$ 「割る, 裂く」 (1h)
c. $\text{t}\Lambda^{33}\text{-t}\text{ʃ}^{\text{h}}\text{y}^{55}\text{t}\text{ʃ}^{\text{h}}\text{y}^{55}$ 「驚く」	$\text{o}^{55}\text{-t}\text{ʃ}^{\text{h}}\text{u}^{55}$ 「驚かす」 —

メト方言においては、方向接辞の交替による自他対応の例は見つかっていない。

⁵ 方向接辞は、ダバ語のいずれの方言でも、1.2 節で述べたメト方言と同様に、完了および命令において義務的に付加され、移動を伴わない動詞の場合は、いずれかの方向接辞が、方向性と関係なく結びつく。

(19a) に形式的に対応する例は拙著 Shirai (2009: 12) に挙げたが、自他対応ではなく、目的語の違いによる方向接辞の交替である。(20) に示すように、「沸かす／煮る」を意味する動詞語幹が、目的語によって異なる方向接辞をとる：水やお茶を沸かす場合は上向き、肉や野菜を煮る場合は下向き、ミルクを沸かす場合は内向きの方向接辞が付加される。なお、この動詞は、(10a) に示したとおり、メト方言においては自他同形（補助動詞付加も可能）である。

(20) メト方言 (Shirai 2009: 12 より) ⁶

“boil”	Λ-hca1 (water/tea);	a-hca3 (meat/vegetable);	kΛ-hca1 (milk)
	UPW-boil	DWN-boil	INW-boil

母音や方向接辞の交替がどのような歴史的変遷をたどったかについては、今後さらなる比較、分析が必要である。

3. 使役文

本節では、メト方言における補助動詞 =tʰu によって形成された使役文の特徴について述べる。

3.1. 補助動詞 =tʰu の機能

補助動詞 =tʰu は生産的に動詞に付加され、使役者項を導入する。=tʰu の付加された動詞は必ず意志的な動作を表すと考えられる。(10b) に示したように、自他同形の動詞 kə-ñei1 「濡れる／濡らす」は、うっかり濡らしてしまった場合にも用いられるが、=tʰu を伴う他動詞 kə-ñei=tʰu1 は、故意に濡らすことを意味する。また、次の例の最初の文では、無意志動詞 a-mpho 「負ける」に =tʰu が付加され、形式上の被使役者 jo3 「自分」とともに用いることで、故意に負けたことを意味している。

(21)	aco3	jaça3 te=anΛ2	jo3	a-mpho=tʰu3	hce-a3.
	PSN	強い=[逆接]	自分	DWN- 負ける =CAUS	PST-B.PFV
	nəvo1	Λ-kʰe=tʰu1		hce-a3.	
	姉妹	UPW- 勝つ -CAUS		PST-B.PFV	

アキヨは強いのにわざと負けた (Lit. 自分を負けさせた)。妹に勝たせてやった。

⁶ 音韻表記を本稿の方式に合わせて改めた。

3.2. 使役文における格標識

ここで、使役文で使役者と被使役者の関係がどのように表示されるかを分析する。

例 (21) の二つの文、および、次の (22) において、使役者と被使役者がともに主格（格標識を伴わない形式）で現れる。

- (22) $\eta a1$ $\eta o r o1$ $ja = wu2$ $k\Lambda - nt\epsilon hi = \{hu1$ $hje3.$
 1SG 3SG 手 = ACC INW- 見る = CAUS PST.1

私は彼に手を見せた。

ダパ語において、格標識の省略は頻繁に見られる現象である。特に、文脈から文法関係が明らかな場合は、主語以外の項も格標識なしで現れることが多い。(23) に例を示す。

- (23) $tsheri1$ $nthei3$ $\Lambda - mphei = \{hu1$ $hcj - a3.$
 PSN 肉 UPW- 凍る = CAUS PST-B.PFV

ツェリは肉を凍らせた。

使役者と被使役者を格標識によって区別する場合、使役者は常に主格となる。被使役者は、対与格 = wu ないし内容格 = $per\Lambda$ で表示される。

ここで、対与格と内容格について説明しておく。対与格 = wu は、(24) に示すように、目的語を明示する際に最も一般的に用いられる格標識である。一方、内容格 = $per\Lambda$ は、日本語の「～のこと（を）」に似た機能を持つ。(25), (26) のように、主として人を表す名詞や人称代名詞に付加され、言及の内容や動作の対象であることを明示する。

- (24) $me3$ $phe = wu3$ $k\Lambda - t\Lambda1$ $hci3.$
 母 父 = ACC INW- 打つ PST

母が父をぶった。

- (25) $\eta a1$ $rendzo3$ $no = per\Lambda2$ $m\epsilon m\epsilon = \{ \Lambda3.$
 1SG しょっちゅう 2SG = CNT 考える = IPFV

私はしょっちゅうあなたのことを考えます。(白井 2010: 298) ⁷

⁷ 表記は本稿の方式に合わせた。

- (26) none=per
- Λ
- 1 tsi3 çaça1 re3.

2DL=CNT 食べる 強い COP

(もし振り返ったら、鬼が) お前たち 2 人をきっと食べてしまう。(ibid.)

既出の (7) および (27) ~ (29) は、被使役者が対与格 =wu で表示される／表示されうる例である。(29) は助詞がない方が自然と判断された例だが、あえて助詞を用いる場合は =wu が用いられる。

- (7) (第 2 文, 第 3 文を再掲)

ça[the=wu=ne3 zo1 ko-tsho3 =thu3.

幽霊 =ACC=TOP かまど INW- 並べる CAUS

zantçihi=wu3 ta=le3 a-ji3 =thu3.

女の子 =ACC 水 =汲む DWN- 行く / 来る CAUS

幽霊にはかまど (に使う石) を並べさせなさい。女の子を水汲みに行かせなさい。

- (27) taçi3 ŋa=wu3 figefige=wu3 mel
- Λ
- 3 ta-hte=thu1 hce3.

PSN 1SG=ACC 先生 =ACC バター NTL- 渡す =CAUS PST

タシは私に先生へバターを渡させた。

- (28) ŋa1 taçi(=wu)3 figefige=wu3 mel
- Λ
- 3 ta-khe=thu1 fiye3.

1SG PSN=ACC 先生 =ACC バター NTL- 与える =CAUS PST.1

私はタシに先生へバターを差し上げさせた。

- (29) ŋgu[thi-re2 ŋore(?=wu)1 fidowu2 ka-p
- Λ
- Λ
- =thu3 hcj-a3.

指導者 -PL 3PL(=ACC) 一緒に INW- 集まる =CAUS PST-B.PFV

指導者たちが彼らを一箇所に集めた。

一方、次の (30) ~ (35) では、被使役者が内容格 =per Λ で表示される／表示されうる。

- (30) tsheri1 lozo=per
- Λ
- 3 nphei=ta1 a-ntshel
- ϵ
- 3+le=thu3 hcj-a3.

PSN PSN=CNT 氷 =上 DWN- 滑る + 置く =CAUS PST-B.PFV

ツェリはロゾを氷の上で滑らせた。

- (31) miwo = pɛɾΛ4 kΛ-fja = t̥hu3 hcj-a3.
 老婆 = CNT INW- 泊まる = CAUS PST-B.PFV
 老婆を泊めてやった。
- (32) tsheri1 lozo = nΛ3 t̥aɕi = nɛ = pɛɾΛ3 ko-ɾoɾo = t̥hu3 hcj-a3.
 PSN PSN=COM PSN= 二 = CNT INW- 知り合う = CAUS PST-B.PFV
 ツェリはロゾとタシの二人を紹介した（知り合わせた）。
- (33) lozo3 tsheri = pɛɾΛ1 o-t̥u = t̥hu1 hce3.
 PSN PSN= CNT UPW- 目覚める = CAUS PST
 ロゾはツェリを起こした（ツェリについて目覚めさせた）。
- (34) tɛ = i2 tΛ-jelΛ3, tsheri1 ŋoro = pɛɾΛ1 o-tsho = t̥hu1 hce3.
 one=CLF NTL- 転がる PSN 3SG= CNT UPW- 起きる = CAUS PST
 ある人が転んで、ツェリはその人を助け起こした（起きさせた）。
- cf. tɛ = i2 tΛ-jelΛ3, tsheri1 ŋoro = pɛɾΛ1 Λ-ɾ̥t̥ɛ1 hce3.
 one=CLF NTL- 転がる PSN 3SG= CNT UPW- 起こす PST
 ある人が転んで、ツェリはその人を助け起こした。
- (35) phe3 tsheri(= pɛɾΛ1) tΛ-jelΛ = t̥hu3 t-ɛ3.
 父 PSN= CNT NTL- 転がる = CAUS IPFV-B.IPFV
 お父さんがツェリを（遊びで）転がらせている。

被使役者が対与格を伴う例と内容格を伴う例の区別については、以下のことが指摘できる。

現在見つかっている範囲では、内容格を伴う例の方が多い。また、対与格の例はいずれも使役者が被使役者に行為を強制する使役であるのに対し、内容格の例には被使役者の意志を容認するものも含まれる。たとえば、(30)の動詞 a-ntshɛle + le3 「(わざと) 滑る」は、(36)のように、滑る場所で足を滑らせて移動する行為を表す意志動詞である。(35)の動詞 tΛ-jelΛ3 「転がる」は、無意志動詞としても用いられうるが、この文の聞き取り調査時には、(37)のように自主的に転がって遊んでいる場面を前提に使役文を作ってもらった。(31), (34)も、容認使役であると考えられる。(33)については、強制か容認かはっきりしない。

- (36) lozo3 nphei=ta1 ntshelɛ3+lɛ=t-ɛ3.
 PSN 氷=上 滑る+置く=IPFV-B.IPFV

ロゾは氷の上で（わざと）滑っている。 cf. (30)

- (37) tsheri tɕuu2 ta-jelɛ3 t-ɛ3.
 PSN 今 NTL-転がる IPFV-B.IPFV

ツェリは、今、（わざと）転がっている。 cf. (35)

以上のことから、強制使役の被使役者には対与格が、容認使役の被使役者には内容格が用いられる傾向があるが、強制使役であっても内容格が用いられる可能性がある」と結論づけられる。

4. まとめ

この論文では、ダバ語における動詞の自他対応および使役について記述と分析を行った。この研究から以下のことが明らかになった。

ダバ語メト方言における自動詞と他動詞の対応には、[1] 形態論的対応、[2] 自他同形（不安定動詞タイプ）、[3] 補助動詞付加、[4] 補充の4種類が見られる。本稿では主に[1]～[3]について論じた。[1]についてはさらに方言比較の観点からも分析を行った。

[1]形態論的対応には、自動詞::他動詞が非帯気::帯気の交替を示すものが多い。有声::無声の交替も見られる。このほか、初頭子音連続や母音の交替も散発的に見られる。他方言との比較から、ダバ語には古い段階で非他動化（自動詞化）の派生接辞も存在していたものの、早い段階で生産性を失った可能性があると考えられる。非帯気::帯気の交替はチベット=ビルマ祖語の使役接辞 *s- と関係している可能性があるが、やはり生産性を失っている。共時的には[3]補助動詞付加による他動詞化が最も生産的で、[2]自他同形の動詞も多く見られる。

他動詞化に用いられる補助動詞 =tɕhu は生産的に動詞に付加され、使役者項を導入する。これが付加された動詞は、常に、意志的な動作を表すと考えられる。

ダバ語の使役文において、被使役者の格表示には、主格（ゼロ）、対与格 =wu, 内容格 =perɛ の3種類が見られる。このうち、主格形式となるのは、文脈から文法関係が明らかな場合に格標識が省略されているものと考えられる。対与格と内容格の違いについては、強制使役の被使役者には対与格が、容認使役の被使役者には内容格が用いられる傾向があるが、強制使役であっても内容格が用いられる可能性がある」と結論づけられる。

略号

1	first person	CNT	content (case)	NTL	neutral directional
2	second person	COM	comitative	O	object
3	third person	COP	copula	OUT	outward directional
A	transitive subject	DAT	dative-locative	PFV	perfective
ACC	accusative-dative	DL	dual	PL	plural
ASS	associative	DWN	downward directional	PSN	personal name
B	non-egophoric	GEN	genitive	PST	past
BEN	benefactive	IMPR	imperative	S	intransitive subject
CAUS	causative	INS	instrumental	SG	singular
CLF	classifier	INW	inward directional	TOP	topic
CMPR	comparative (case)	IPFV	imperfective	UPW	upward directional

謝辞

ダバ語メト方言の現地調査に当たっては、ネッギェラモさん（女性、1945年生まれ）とご家族・ご親戚の皆さんにご協力いただいた。ここに記して深く感謝する。また、この研究は、JSPS 科研費（課題番号 16H03414, 17J40087）の助成を受けたものである。

参考文献

- Feng, Min [馮敏]. 2010. 《扎巴藏族—21 世紀人類學母系製社會田野調查》. 北京：民族出版社.
- Gong, Qunhu [龔群虎]. 2007. 《扎壩語研究》(中国新發現語言研究叢書). 北京：民族出版社.
- Huang, Bufan [黃布凡]. 1990. 〈扎壩語概況〉《中央民族學院學報》1990. 4: 71–82.
- Huang, Bufan [黃布凡]. 1991. 〈扎壩語〉戴慶厦、黃布凡、傅愛蘭、仁增旺姆、劉菊黃《藏緬語十五種》，pp. 64–97. 北京：北京燕山出版社.
- Huang, Bufan [黃布凡]. 2009. 《川西藏區的語言》北京：中國藏學出版社.
- Huang, Bufan, et al. (eds.) [黃布凡 主編]. 1992. 《藏緬語族語言詞匯》北京：中央民族學院出版社.
- バルデシ プラシヤント、桐生和幸、ナロック ハイコ（編）. 2015. 『有対動詞の通言語的研究 日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』東京：くろしお出版.
- Shirai, Satoko. 2009. Directional prefixes in nDrapa and neighboring languages: an areal feature of western Sichuan. In: Yasuhiko Nagano (ed.) *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics*. Senri Ethnological Studies 75, pp. 7–20. Suita: National Museum of Ethnology.
- 白井聡子. 2010. 「ダバ語の格を表す形式」澤田英夫（編）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1：格とその周辺』, pp. 287–310. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Shirai, Satoko. 2018. An analysis of the aspect-marking function of directional prefixes in nDrapa. In: Tooru Hayasi, Tomoyuki Kubo, Setsu Fujishiro, Noriko Ohasaki, Yasuhiro Kishida, and Mutsumi Sugahara (eds.) *Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative Volume*. Contribution to the Studies for Eurasian Languages Series, Vol. 20, pp. 405–420. Kobe: Consortium of Studies of Eurasian Languages.

ムニャ語の自他動詞と使役構文*

池田 巧

ムニャ語の概要

ムニャ語 (Mu-nya language; 木雅語; *Mi nyag skad*) は、中国四川省甘孜藏族自治州の康定県から九龍県にかけて居住するチベット人の一部が話していることばで、書記体系をもたない。話し手の人口は、中国の資料では約1万人という推計があるが、実際のところは不明である。話し手の族称はチベット族 (藏族;



地図1 九龍縣の位置
バルーンは湯古村を示す。

* 本稿は、2014年1月24日(日)に京都大学人文科学研究所で開催されたTB+ (プラス) 研究会での「ムニャ語の自他動詞と使役構文」の報告に基づく。研究会メンバーによる議論とコメントを反映させた改訂版を、Causative Constructions in the Mu-nya Language というタイトルで The 48th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics: 2015/8/20-23 at University of California, Santa Barbara にて発表した。英語版の作成にあたっては、James A. Matisoff 教授から懇切なる御指摘と御指導をいただき、また報告後には Bernard Comrie 教授からもコメントを賜った。併せて謝意を表したい。本稿は日本学術振興会科学研究補助金基盤研究 (A) 23242019 羌系諸語の歴史と西夏語の位置づけに関する実証的研究 (代表: 池田 巧) による研究成果の一部である。

[pu³³pa⁵⁵] < Tib. *bod pa*) だが、他地域のチベット人と区別して自らを [muw³³na⁵⁵vu³³] cf. Tib. *Mi nyag ba* と呼ぶ。この族称が歴史上の西夏を建国した主要民族名 *Mi nyag* と一致することから、その系統関係が注目されてきた。

ムニャ語を話すチベット人の若い世代では漢語の四川方言、中年以上の世代ではチベット語カム方言も話す人が多い。今日では漢語からの影響が圧倒的ではあるけれども、ムニャ語に定着している借用語のほとんどはチベット語からのものである。ムニャ語を話す人々の社会背景と研究史については、IKEDA (2007) に詳述した。文法の概要は黄布凡 (1985: 1991: 2007: 2009 [修訂版]) および池田巧 (2010/2013/2016) を参照されたい。

1. はじめに

チベット＝ビルマ語のなかでも川西民族走廊に分布する羌語支 (Qiangic Branch) には、類型特徴のひとつとして動詞の形態論における〈使動範疇〉が提唱されている。しかしこの〈使動範疇〉は、しばしば構文の分析をせずに動詞の形態のみに注目して分類しており、その結果、ともすれば自他動詞の対応の分析では自動詞文の主語と他動詞文の目的語との関係についての整理が不十分であったり、〈使動〉という概念のなかで使役 (Causative) と他動 (Transitive) とが区別されずに論じられていたりもする。

ムニャ語については、孫 (1983) が、ムニャ語には〈自動態〉と〈使動態〉があるとして、8つの動詞について鼻冠濁音声母と同部位の清音声母の交替形を示したことを受けて、黄 (1991) ではさらに、1) 動詞の方向接辞の母音交替、2) 動詞語幹の頭子音の鼻冠濁音と清音の交替、3) 自動態動詞に *te^ha* (使) を加えて使動態とする、という3種類の表現形式があることを指摘した。このうち2)は、孫 (1983) の報告例に相当するものであるが、数は少なく、古ムニャ語からの残存形式ではないかと推測している。1) と3) の形式については、孫 (1983) では言及がない。

黄 (1991) は、3) は分析型で、比較的新しく起こった表現形式であろうと推測する。たしかにいくつかの自動詞については、助動詞 */=te^hu³³/* (黄: *te^ha*) をつけることであたかも他動詞のように使われる場合もあるが、実際にはその数は多くない。助動詞 */=te^hu³³/* は自由度が高く、自動詞のみならずさまざまな他動詞にも接続して使役構文を形成する。したがって自動詞に */=te^hu³³/* のついた動詞句部分のみを取り出して〈使動態〉の表現形式のひとつとして扱うのは、分析が不十分であると言わざるを得ない。

本稿では、ムニャ語の自動詞文／他動詞文／使役文を並べて対照しながら、動詞の自他対応と構文との関係をより詳しく分析する。あわせてムニャ語と接触関係にあった他のチベット＝ビルマ語と比較対照することで、ムニャ語の使役構文の歴史的発展についても検討したい。

2. 自動詞と他動詞

2.1. 文の基本構造：能格型

ムニャ語は能格型の言語である。他動詞文の主語 (Agent) は能格助詞の / ji^{33} / で標示されるが、自動詞文の主語 (Subject) と他動詞文の目的語 (Patient) はいずれも無標 (absolutive) である。ここではまず典型的な「切れる」(自動詞 [vi]) と「切る」(他動詞 [vt]) のペアを例に、ムニャ語の基本構文について紹介する。

自動詞	他動詞
/ ně^{33} - ndzwe^{55} / [+voiced]	/ ně^{33} - $\text{ntɕ}^{\text{h}}\text{we}^{55}$ / [-voiced]
切れる	切る

ムニャ語のこのふたつの動詞は派生関係にある。どちらが基本形なのかは判定し難いが、語幹の頭子音の有声 [vi] / 無声 [vt] により区別される。動詞前接辞の { ne^{33} -} は動作の方向を表わし、ここでは下向きの方向を示している。一部の存在動詞などを除くと、ムニャ語の動詞の基本形は [方向接辞-語幹] (DIR- $\sqrt{\text{STEM}}$) の構成である¹。

- (1) we^{55} ně^{33} - ndzwe^{55} ɪa^{33} .
 ロープ DIR- 切れる DEC: 完了
 ロープが切れた。

この自動詞文の主語 (Subject) / we^{55} / 「ロープ」は無標である。/ ɪa^{33} / は述詞 (Declarative) で、無意志動詞のあとについて完了を表わすとともに、話し手の3段階の確認性: [伝聞/熟知/確認] のうちの [+確認] を示している²。

- (2) ɲi^{55} we^{55} ně^{33} - $\text{ntɕ}^{\text{h}}\text{we}^{55}$ ɲe^{33} .
 1sg.[ERG] ロープ DIR- 切る DEC
 私がロープを切った。

この文の主語 (Agent) の / ɲi^{55} / は、第一人称単数の人称代名詞 / ɲw^{55} / 1sg. 「わたし」に能格助詞 / ji^{33} / がついた形である。この他動詞文においては、目的語 (Patient) の / we^{55} / <ロープ> は無標であり、自動詞文の主語 (Subject) と同じ

¹ ムニャ語の動詞には8種類の方向前接辞がある。

1. { tuw^{33} -}	「上へ」	5. { ngw^{33} -}	「話し手に向かって」
2. { ne^{33} -}	「下へ」	6. { $\text{t}^{\text{h}}\text{e}^{33}$ -}	「話し手から離れて」
3. { ywu^{33} -}	「上流へ」	7. { ruw^{33} -}	「回って」
4. { fia^{33} -}	「下流へ」	8. { $\text{q}^{\text{h}}\text{w}^{33}$ -}	「方向性なし」

² ムニャ語の述詞 (DEC) とその確認性については、池田 巧 (2013) の分析を参照。

扱いとなっている。/ŋe³³/は述詞で第一人称単数の主語による完了および確認性の [+熟知] を示している³。

2.2. 自動詞（有声子音）と他動詞（無声子音）の対

ムニャ語の動詞の中には、派生交替により有声頭子音の自動詞と無声頭子音の他動詞が対をなすものがある。

自動詞	他動詞
/fĩe ³³ - mbũ ³³ ndʒe ⁵⁵ / [+voiced] (結び目が) ほどける	/fĩe ³³ - pu ³³ tʃe ⁵⁵ / [-voiced] (結び目を) ほどく
/fĩã ³³ - ngo ⁵⁵ / [+voiced] ゆるむ	/fĩã ³³ - nqʰo ⁵⁵ / [-voiced] ゆるめる
/nẽ ³³ - nge ⁵⁵ / [+voiced] (棒や枝が) 折れる	/nẽ ³³ - qɑ ⁵⁵ / [-voiced] (棒や枝を) 折る
/nẽ ³³ - mba ⁵⁵ / [+voiced] こわれる	/nẽ ³³ - pʰɑ ⁵⁵ / [-voiced] こわす

3. 使役文

3.1. 使役文の構造

ムニャ語において、たとえば「私はロサン（チベット文語の綴り [WrT] では *bLo bzang*）にロープを切らせた。」のような典型的な使役文は、どのように表現されるのだろうか。ここでは、使役文において、使役主 (Causer) 被使役者 (Causee) 受動者 (Patient) のそれぞれの項が、文中でどのように標記〔マーク〕されるのかを見ておきたい。

- (3) ŋi⁵⁵ ly³³ze⁵⁵ = le³³ we⁵⁵ nẽ³³- ntʃ^hwe⁵⁵ = tʃ^hu³³ ŋe³³.
 1sg.[ERG] *bLo bzang* =DAT ロープ DIR- 切る =CAUS DEC
 私がロサンにロープを切らせた。

³ 同上。

この文は、使役主 (Causer=Agent) 被使役者 (Causee) 受動者 (Patient) から構成される典型的な使役文である。使役主 (Causer=Agent) には能格 (ERG) 助詞がつき (/ŋi⁵⁵/ < /ŋw⁵⁵=ji³³/), 被使役者 (Causee) は与格 (DAT) の助詞で標記〔マーク〕されている。文法事象として注目されるのは、能格助詞が付いてマークされる項は、ムニャ語においては、[実際の動作者である] 被使役者 (Causee) ではなく、[行為を起こした] 使役主 (Causer=Agent) のほうである。受動者 (Patient) であるロープ〔他動詞の目的語〕は無標であり、動詞のあとには使役助動詞の /=tɕ^hw³³/ がついている。

以上の分析から、ムニャ語の使役構文は、以下のように定式化できる。

使役主 = 能格	被使役者 = 与格	受動者 [目的語]	方向 - 動詞 = 使役助動詞	述詞
Causer (Agent) =ERG	Causee =DAT	Patient/Object (=∅)	DIR- √V =CAUS	DEC

3.2. 使役文の否定

「私はロサンにロープを切らせなかった。」のような使役文の否定は、以下のよう表現される。否定のしかたにはいくつかのタイプがある。

- (4) ŋi⁵⁵ ly³³ze⁵⁵ =le³³ we⁵⁵ nẽ³³- ntɕ^hwe⁵⁵ =tɕ^hw³³
 1sg.[ERG] bLo bzang =DAT ロープ DIR- 切る =CAUS
 me³³- vuw⁵⁵.
 NEG- する

私はロサンにロープを切らせなかった。[過去=完了]

- (5) a. ŋi⁵⁵ ly³³ze⁵⁵ =le³³ we⁵⁵ nẽ³³- ntɕ^hwe⁵⁵ =tɕ^hw³³
 1sg.[ERG] bLo bzang =DAT ロープ DIR- 切る =CAUS
 nɯ³³- vuw⁵⁵.
 NEG- する

- b. ŋi⁵⁵ ly³³ze⁵⁵ =le³³ we⁵⁵ nẽ³³- ntɕ^hwe⁵⁵ =tɕ^hw³³
 1sg.[ERG] bLo bzang =DAT ロープ DIR- 切る =CAUS
 nɯ³³- =po⁵⁵.
 NEG- =SFX: 非完了

私はロサンにロープを切らせない。[現在=非完了]

使役構文の否定形は、使役助動詞 / $t\phi^{h\omega^{33}}$ / のあとに [否定辞 - 汎動詞] / $me^{33}-vu^{55}$ / <NEG [完了] - する>あるいは / $n\omega^{33}-vu^{55}$ / <NEG [非完了] - する>を置き、述詞はつけない。ムニャ語には2種類の動詞否定辞があり、/ me^{33} / は完了の文に、/ $n\omega^{33}$ / は非完了の文でそれぞれ使われる。あるいは非完了の場合には / $n\omega^{33}-po^{55}(\eta e^{33})$ / <NEG- SFX (DEC)> という述語表現を用いてもよい。動詞接尾辞 / po^{55} / + 述詞 / ηe^{33} / の組合せは、非完了相における第一人称主語の意志を示しており、否定文中では述詞の / ηe^{33} / は省略されることが多い。

第三人称主語の場合には、もうひとつ異なる否定表現がある。使役助動詞を反復して否定する / $V=t\phi^{h\omega^{33}} n\omega^{33}-t\phi^{h\omega^{55}}$ / という形式である。

- (6) $ve^{33}ve^{55}=ji^{33}$ $\eta e^{55}=le^{33}$ $ti\tilde{e}^{55}\eta^{33}$ $k^{h\omega^{33}}-t\phi^{h\omega^{55}}.i^{33}=t\phi^{h\omega^{33}}$
 父さん =ERG 1sg. =DAT テレビ DIR- 見る =CAUS
 $n\omega^{33}-t\phi^{h\omega^{55}}$ ti^{33} .
 NEG: 非完了 =CAUS DEC

父さんはボクにテレビを見させてくれない。

さらに使役助動詞を反復することなく述詞のみを否定する / $n\omega^{33}-ti^{55}$ / という否定表現もあるが、これは述詞を伴う平叙文の否定と同じ形式である。しかし動詞の後につく使役助動詞を直接否定することはできない。*/ $k^{h\omega^{33}}-t\phi^{h\omega^{55}}.i^{33} n\omega^{33}-t\phi^{h\omega^{55}} ti^{33}$ / は、文法的に誤りである。以上をまとめると、否定は常に述部において表現され、使役文中においては、動詞あるいは使役助動詞を直接否定することができないということになる。

4. 独立自動詞文

4.1. 非人称主語 / 受動者 [物]

ムニャ語の動詞のなかには、対応する他動詞をもたない独立自動詞がいくつかある。ここでは、独立自動詞の例として、「満ちる」を取り上げ、自動詞文、他動詞文、使役文を比較してみたい。

- (7) $t\phi^{55}$ $t\phi^{33}-su^{55}$ ia^{33} .
 水 DIR- 満ちる DEC
 水が満ちた。[自動詞文]

ムニャ語の / $t\phi^{33}-su^{55}$ / 「満ちる」は自動詞で、対応する他動詞の「満たす」に相当する単語はない。それゆえこの自動詞 / $t\phi^{33}-su^{55}$ / を用いて「誰かが（何

かを) (何かで) 満たす」といった他動詞的な意味内容を伝えるには、ムニャ語では以下のような構文を使う。

- (8) ηi^{55} $t\epsilon u^{55}$ $t\bar{o}^{33}-s\bar{u}^{55}$ = $t\epsilon^h u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] 水 DIR- 満つ =CAUS DEC
 [使役主 [能格] 目的語 (無標) DIR- 動詞 = 助動詞 述詞]
 私が水を満ちさせた。(=私が水を満たした。)[他動文]

この場合、他動性は被使役者 (Causee) のない使役構造を用いて表現される。ムニャ語の使役構文においては、被使役者 (Causee) は与格助詞の $/=le^{33}/$ を後置して標示する。よってこの文の主語は使役主であり、能格助詞の $/=ji^{33}/$ で標示 [マーク] されるとともに、自動詞に使役助詞の $/=t\epsilon^h u^{33}/$ を付けることで他動性が示されている (が、ここでは「使役」ではない)。

この文と「私がロサンに水を満たさせた。」という典型的な使役文を比較してみたい。「誰かに～させる」という使役の主体が、動作者とは別にいる場合、動作の実行者のほうは、能格ではなく与格で表現する。この使役文においては、ロサンは (実際に水を満たす動作者ではあるが) 被使役者 (Causee) なので、能格助詞ではなく、与格助詞の $/=le^{33}/$ によって標示されることになる。能格を取るのは、使役主 (動作をさせる主語) のほうである。

- (9) ηi^{55} $ly^{33}ze^{55} = le^{33}$ $t\epsilon u^{55}$ $t\bar{o}^{33}-s\bar{u}^{55}$ = $t\epsilon^h u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] *bLo bzang* =DAT 水 DIR- 満つ =CAUS DEC
 [使役主 [能格] 被使役者 = 与格 目的語 (無標) DIR- 動詞 = 助動詞 述詞]
 私がロサンに水を満たさせた。[使役文]

自動詞文の場合、動詞の動作主体は、動詞の直前にある無標の名詞 (つまり自動詞文の主語) と考えるべきであるが、他動詞文の目的語もやはり無標であることに注意を払う必要がある。

もし $/t\epsilon u^{55}/$ 「水」が他動詞句 $/t\bar{o}^{33}-s\bar{u}^{55} = t\epsilon^h u^{33}/$ 「満ちさせる」 > 「満たす」の目的語と考えるなら、この VtP にさらに使役の助動詞 $/=t\epsilon^h u^{33}/$ が二重につくのではないかとも思えるが、そうはならない (非文)。

4.2. 人称主語 / 受動者 [人]

派生他動詞 (形) をもたない同様の独立自動詞には、「沸く」「笑う」「泣く」などがある。主語が人の場合、これらの動詞を他動詞化するにはすこし複雑な手段が必要となる。

- (10) (?e⁵⁵tsu³³) za⁵⁵ ni³³-ji⁵⁵ ɿa³³.
 (この) 子供 DIR- 笑 DEC

(この) 子が笑った。

- (11) ?e⁵⁵tsi³³ za⁵⁵ ni³³-ji⁵⁵ = tɕ^hu³³ ɿa³³.
 3sg.[ERG] 子供 DIR- 笑 =CAUS DEC

彼が子供を笑わせた。

例文 (10) では、/za⁵⁵/「子供」は明らかに自動詞 /ni³³-ji⁵⁵/「笑う」の主語である。例文 (11) においても、/za⁵⁵/「子供」は依然として自動詞 /ni³³-ji⁵⁵/「笑う」の主語であって、/ni³³-ji⁵⁵=tɕ^hu³³/が*「(何かを) 笑う」という他動性フレーズとして振舞っていて、その目的語となっているわけではない。それゆえ /vi]=tɕ^hu³³/を、他動性を構築する文法フレームとして機械的に抽出するのは正しくないことがわかる。

ムニャ語で「誰かを笑う」を表現する場合、自動詞をそのまま用いたうえで、笑われる対象つまり受動者 (Patient) は、与格の助詞 /le³³/で示し、/ly⁵⁵za³³=le³³ ni³³-ji⁵⁵/「ロサンを笑う」のように表現する。その結果、使役文においては、被使役者 (Causee) も受動者 (Patient) も、ともに与格 (DAT) の助詞で示されることになる。

- (12) ni⁵⁵ ?e⁵⁵tsu³³=le³³ za⁵⁵=le³³ ni³³-ji⁵⁵ = tɕ^hu³³ ɿe³³.
 1sg.[ERG] 3sg.=DAT 子供=DAT DIR- 笑う =CAUS DEC

私は彼に子供に笑いかけさせた。[笑ったのは彼]

- (13) ni⁵⁵ ?e⁵⁵tsu³³=le³³ za⁵⁵ ni³³-ji⁵⁵ = tɕ^hu³³ ɿe³³.
 1sg.[ERG] 3sg.=DAT 子供 DIR- 笑う =CAUS DEC

私が彼に子供を笑わせた。[笑ったのは子供]

(12) (13) はいずれも作例であるが、発話協力者によれば、いずれも文法的には正しいけれども、解りにくいので、ほとんど使わない表現であるという。このほかムニャ語の動詞 /te³³-nge⁵⁵/「泣く」も、同じような文法的振舞いをする。

- (14) ?e⁵⁵tsu³³ te³³-nge⁵⁵ ɿa³³.
 3sg. DIR- 泣く DEC

彼が泣いた。

- (15) ηi^{55} $?e^{55}tsu^{33}$ $te^{33}-nge^{55}$ $=t\phi^{h}u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] 3sg. DIR- 泣く =CAUS DEC

私が彼 / 女を泣かせた。[泣いたのは彼 / 女]

- (16) ηi^{55} $ly^{33}ze^{55}=le^{33}$ $?e^{55}tsu^{33}$ $te^{33}-nge^{55}$ $=t\phi^{h}u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] *bLo bzang* =DAT 3sg. DIR- 泣く =CAUS DEC

私がロサンに彼 / 女を泣かさせた。[泣いたのは彼 / 女]

ただし、次の作例 (17) は、文法的には非文ではないけれども、想定される状況がわからないので使われない表現だとのことである。

- (17) ηi^{55} $ly^{33}ze^{55}=le^{33}$ $?e^{55}tsu^{33}=le^{33}$ $te^{33}-nge^{55}=t\phi^{h}u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] *bLo bzang* =DAT 3sg.=DAT DIR- 泣く =CAUS DEC

? 私はロサンに彼女のために泣いてもらった。[泣いたのはロサン]

5. 独立他動詞文

自動詞文の主語と他動詞文の目的語（受動者）がともに無標の絶対格であるとはいっても、典型的な他動詞である / $f\tilde{a}^{33}-ndzu^{55}$ /「食べる」、/ $f\tilde{a}^{33}-t\phi^{h}u^{55}$ /「飲む」、/ $t\phi^{33}-z\phi^{55}$ /「持参する」などは、目的語である受動者をそのまま主語にして自動詞文を自動的に生成することはできない。たとえば / $k^{h}u^{33}t\phi e^{55} f\tilde{a}^{33}-ndzu^{55}$ / は *「蒸餃子が食べる」ではなく「蒸餃子を食べる」であるし、/ $wi^{55} f\tilde{a}^{33}-t\phi^{h}u^{55}$ / は *「酒が飲む」ではなく「酒を飲む」、/ $\phi oo^{33}to^{55} t\phi^{33}-z\phi^{55}$ / は *「傘が持参する」ではなく「傘を持参する」である。

- (18) $(?e^{55}tsu^{33})$ $za^{55}=ji^{33}$ $k^{h}u^{33}t\phi e^{55}$ $f\tilde{a}^{33}-ndzu^{55}$ ja^{33} .
 (この) 子供 =ERG 蒸餃子 DIR- 食べる DEC

(この) 子が蒸餃子を食べた。

- (19) $?e^{55}me^{55}=ji^{33}$ $za^{55}=le^{33}$ $k^{h}u^{33}t\phi e^{55}$ $f\tilde{a}^{33}-ndzu^{55}=t\phi^{h}u^{33}$ ja^{33} .
 お母さん =ERG 子供 =ERG 蒸餃子 DIR- 食べる =CAUS DEC

母が子供に蒸餃子を食べさせた。

- (20) ηi^{55} $\zeta oo^{33} to^{55}$ $t\emptyset^{33}-z\emptyset^{55}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] 傘 DIR- 携帯 DEC

私は傘を持ってきた。

- (21) $ve^{55} ve^{55} = ji^{33}$ $k^h wi^{55} = le^{33}$ $\zeta oo^{33} to^{55}$ $t\emptyset^{33}-z\emptyset^{55} = t\zeta^h w^{33}$ ja^{33} .
 お父さん=ERG 弟=DAT 傘 DIR- 携帯=CAUS DEC

父が弟に傘を持たせた。

6. 語幹の母音交替による自他動詞の区別

自動詞と他動詞が母音交替によって形態的に区別される動詞がある。交替する母音は、方向接辞のみ、語幹のみ、あるいは方向接辞と語幹の両方に見られる場合がある。ここでは母音交替が動詞語幹に現れるタイプを取り上げる。

6.1. 母音交替が動詞語幹に現れる例

$/\underline{h}e^{33}-\underline{ju}^{55}/$ 「回る」と $/\underline{h}e^{33}-\underline{je}^{55}/$ 「回す」は、語幹の母音交替により自他動詞を区別する典型的な動詞のペアである。

自動詞	他動詞
$/\underline{h}e^{33}-\underline{ju}^{55}/$	$/\underline{h}e^{33}-\underline{je}^{55}/$ [+ tense]
回る	回す

- (22) $me^{33} ni^{55} k^h o^{33} lu^{55}$ $\underline{h}e^{33}-\underline{ju}^{55}$ $= pi^{33}$.
 マニ 車 DIR- 回る =SFX

マニ車が回る。

- (23) ηi^{55} $me^{33} ni^{55} k^h o^{33} lu^{55}$ $\underline{h}e^{33}-\underline{je}^{55}$ $= po^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] マニ 車 DIR- 回す =SFX DEC

私がマニ車を回す。

- (24) ηi^{55} $?e^{55} tsu^{33} = le^{33}$ $me^{33} ni^{55} k^h o^{33} lu^{55}$ $\underline{h}e^{33}-\underline{je}^{55} = t\zeta^h w^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] 3sg.=DAT マニ 車 DIR- 回す=CAUS DEC

私が彼にマニ車を回させる。

例文 (22) と (23) を比べてみるとわかるように、動詞語幹の母音交替が、自動詞と他動詞を区別する形態論的な手段となっている。例文 (24) の使役構文においてもこの母音交替が現れる。それは使役構文中の被使役者に「マニ車を回す」ことをさせるわけだから、嵌め込まれた他動詞句は当然、他動詞文と同じ構造になっている。

6.2. 母音交替が動詞語幹と前接辞に現れる例

動詞「沈む／沈める」は、自動詞と他動詞がやはり母音交替による派生関係にあり、母音交替は動詞語幹と方向前接辞の両方に現れる。

自動詞	他動詞
/nẽ ³³ - ndzũ ⁵⁵ /	/nõ ³³ - ndzo ⁵⁵ /
沈む	沈める

- (25) ts^hu³³ru⁵⁵ tɕũ⁵⁵=qo³³ nẽ³³- ndzũ⁵⁵ ɪɑ³³.
 材木 水 = 中 DIR- 沈む DEC
 材木は水に沈んだ。

- (26) ŋi⁵⁵ ts^hu³³ru⁵⁵ tɕũ⁵⁵=qo³³ nõ³³- ndzo⁵⁵ ŋe³³.
 1sg.[ERG] 材木 水 = 中 DIR- 沈め DEC
 私が材木を水に沈めた。

- (27) ŋi⁵⁵ ʔe⁵⁵tsũ³³ =le³³ ts^hu³³ru⁵⁵ tɕũ⁵⁵=qo³³
 1sg.[ERG] 3sg. =DAT 材木 水 = 中
 nõ³³- ndzo⁵⁵=tɕ^hũ³³ ŋe³³.
 DIR- 沈め =CAUS DEC
 私が彼に材木を水に沈めさせた。

方向接辞に形態論的機能を反映した母音交替が起こるのは、基本的に非円唇高母音に限られる（次節を参照）。他動詞 /nõ³³- ndzo⁵⁵/「沈める」は、この原則から外れているが、その理由は、この動詞の方向前接辞に見える母音交替は、動詞語幹の母音交替による同化の結果にすぎないからだと考えられる。

7. 方向前接辞の母音交替

他動詞のなかには、方向前接辞の母音交替によって自動詞を他動詞化したタイプのものがある。

自動詞

/tɛ³³-ɪa⁵⁵/

乾く

他動詞

/tɛ³³-ɪa⁵⁵/ [+tense]

乾かす

- (28) pɛɛ³³ɪe⁵⁵ tɛ³³-ɪa⁵⁵ = suw³³.

タオル DIR- 乾く =SFX

タオルが乾いた。

- (29) ɲi⁵⁵ pɛɛ³³ɪe⁵⁵ tɛ³³-ɪa⁵⁵ ɲɛ³³.

1sg.[ERG] タオル DIR- 乾く DEC

私がタオルを乾かした。

- (30) ɲi⁵⁵ ʔɛ⁵⁵tsuw³³ = le³³ pɛɛ³³ɪe⁵⁵ tɛ³³-ɪa⁵⁵ = tɕ^huw³³ ɲɛ³³.

1sg.[ERG] 3sg. =DAT タオル DIR- 乾く =CAUS DEC

私が彼にタオルを乾かさせた。

次の例も方向前接辞の母音交替による他動詞化であるが、もとの自動詞の文法的性質に起因して、他動詞としての自由度には制限がある。

自動詞

/t^hɛ³³-q^hɛ⁵⁵/

怖がる

他動詞

/t^hɛ³³-q^hɛ⁵⁵/

怖がらせる

- (31) ʔɛ⁵⁵tsuw³³ t^hɛ³³-q^hɛ⁵⁵ ɪa³³.

3sg. DIR- 怖がる DEC

彼 / 女は恐れた。

- (32) ɲi⁵⁵ ʔɛ⁵⁵tsuw³³ t^hɛ³³-q^hɛ⁵⁵ ɲɛ³³.

1sg.[ERG] 3sg. DIR- 怖がる DEC

私が彼 / 女を怖がらせた。

ただし例文 (32) に見える派生型他動詞 /t^he³³- q^he⁵⁵/「(誰かを) 怖がらせる／脅かす」は、使役文中では使うことができない。

- (33) * ηi^{55} $ly^{33}ze^{55} = le^{33}$ $?e^{55}tsur^{33}$ $t^he^{33}-q^he^{55}$ $= t\phi^h u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] bLo bzang =DAT 3sg. DIR- 脅かす =CAUS DEC
 意図した意味：？私がロサンに彼／女を怖がらせた。

では、なぜこの派生型他動詞を使役文中で使うことができないのであろうか？その理由は、基本となる自動詞 /t^he³³- q^he⁵⁵/「怖がる」のまえに与格の助詞 / =le³³/ のついた名詞が置かれると、恐れる対象を表わすからである。次の例文 (34) と比較されたい。

- (34) $?e^{55}tsur^{33}$ $ji^{55} = le^{33}$ $t^he^{33}-q^he^{55}$ $= pi^{33}$.
 3sg. お化け =DAT DIR- 怖い =SFX [非完了]
 彼／女はお化けがこわい。

次もやはり方向前接辞の母音交替による他動詞化の例であるが、おそらく一過性のもので、母音交替による形態論的な生産性の限界が観察できる。

自動詞	他動詞
/t ^h e ³³ - ku ⁵⁵ /	/t ^h i ³³ - ku ⁵⁵ /
凍る	凍らせる

- (35) $t\phi u^{55}$ $t^he^{33}-ku^{55}$ $= su^{33}$.
 水 DIR- 凍る =SFX [完了]
 水が凍った。

- (36) ηi^{55} ($?e^{55}tsur^{33}$) $t\phi u^{55}$ $t^he^{33}-ku^{55}$ $= t\phi^h u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] (この) 水 DIR- 凍る =CAUS DEC
 私が (この) 水を凍らせた。

ここでは自動詞 /t^he³³- ku⁵⁵/ に使役助詞 / =t^he³³- ku⁵⁵/ のついたフレーズが、あたかも他動詞句のように使われており、この（迂言的）使役構造を借りた他動詞文においては、動詞の方向前接辞に他動詞化を示す母音交替が生じていないことに留意しておきたい。方向前接辞に母音交替が現れるのは、次のような使役文中においてである。

- (37) ηi^{55} $\eta e^{55}tsu^{33} = le^{33}$ $(\eta e^{55}tsu^{33})$ $t\phi u^{55}$ $t^h i^{33} - ku^{55}$ $= t\phi^h u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] 3sg. =DAT (この) 水 DIR- 凍る =CAUS DEC
 私が彼 / 女に (この) 水を凍らさせた。

使役文においては、使役者と被使役者が明示されており、動詞の方向接辞にも母音交替が生じ形態的な他動詞化が行なわれていることに注意を払う必要がある。ムニャ語の話者によれば、使役文中で方向接辞に母音交替を生じていない自動詞形の $/t^h e^{33} - ku^{55}/$ を使うと非文になるとのこと。ここでは方向前接辞の母音交替がかろうじて形態論的生産性を有しているけれども、使役助動詞 $/=t\phi^h u^{33}/$ を省き、この他動詞形のみを使った他動詞文は成立しないという。

- (36) * ηi^{55} $(\eta e^{55}tsu^{33})$ $t\phi u^{55}$ $t^h i^{33} - ku^{55}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] (この) 水 DIR- 凍る DEC
 意図した意味：？私がこの水を凍らせた。

このことから、使役助動詞 $/=t\phi^h u^{33}/$ の用法と生産性の拡大傾向が見て取れる。上述の例文 (32)「怖がらせる」と後述の例文 (39)「沸かす」を比較されたい。

自動詞
 $/t\phi u^{33} - ts^h u^{55}/$
 沸く

他動詞
 $/t^h i^{33} - ts^h u^{55}/$
 沸かす

- (38) $t\phi u^{55}$ $t\phi u^{33} - ts^h u^{55}$ ia^{33} .
 水 DIR- 沸く DEC
 お湯が沸いた。

- (39) a. ηi^{55} $t\phi u^{55}$ $t\phi u^{33} - ts^h u^{55}$ $= t\phi^h u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] 水 DIR- 沸く =CAUS DEC
 b. ηi^{55} $t\phi u^{33}$ tse^{55} $t^h i^{33} - ts^h u^{55}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] 水 熱 DIR- 沸く DEC
 私が湯を沸かした。

- (40) ηi^{55} $tse^{33}ci^{55} = le^{33}$ $t\phi u^{55}$ $t^h i^{33} - ts^h u^{55}$ $= t\phi^h u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] *bKra shis* =DAT 水 DIR- 沸く =CAUS DEC
 私がヂャシにお湯を沸かさせた。

動詞の「沸く」には2種類の他動詞化表現がある。(39) a. は自動詞にそのまま使役助動詞を付けた {[vi] = CAUS} を他動詞句のように使っており, (39) b. は方向接辞に母音交替を生じた /tᵢ³³- tsʰu⁵⁵/ を他動詞として使っている。そして使役構文の (40) 「誰かにお湯を沸かさせる」では, /tᵢ³³- tsʰu⁵⁵ = tɕʰu³³/ のように, 母音交替による他動詞化に加え, 使役助動詞も使われている。

8. おわりに

以上見てきたように, 他動性を示すために方向接辞に現れる母音交替は, 形態論レベルでの文法現象であり, いまなお活きてはいるものの, 生産性は限定的である。ムニャ語において, 他動性の表示は, 音節初頭子音の有声／無声の交替によって自動詞から他動詞を派生させたのが最も早い段階であり, 語彙として固定化した。ついで動詞語幹の母音交替により他動性を表示したが, 一時的な他動性を付与する形態論的な手段としては方向前接辞の母音交替が使われた。それゆえこの母音交替は, 使役文中においても現れ得る。その後, 自動詞に使役助詞 / = tɕʰu³³/ を付けた {[vi] = CAUS} が他動詞句として生成される用法が拡大したと考えられる。そのため, 例文 (37) 「凍らせる」のように, 使役文中でことさら他動性が意識された時には, 痕跡的な母音交替が出現するのであろう。こうした一過性の母音交替は, 独立自動詞を使った使役文中にも現れることがある (第4節を参照)。

- (9)′ ɲi⁵⁵ ly³³ze⁵⁵ = le³³ tɕu⁵⁵ tᵢ³³- su⁵⁵ = tɕʰu³³ ɲe³³.
 1sg.[ERG] bLo bzang =DAT 水 DIR- 満たす =CAUS DEC
 私がロサンに水を満たさせた。

この使役文においては, 方向前接辞の母音交替は余剰である。こうした一時的な母音交替は必須ではなく不安定であり, もはや母音交替のみでは, 自動詞を他動詞化する独立した文法現象として機能しない。それゆえ, この文から被使役者と使役助動詞 / = tɕʰu³³/ を除いてしまうと, 他動詞文としては成立しない。

- (8)′ * ɲi⁵⁵ tɕu⁵⁵ tᵢ³³- su⁵⁵ ɲe³³.
 1sg.[ERG] 水 DIR- 満たす DEC

意図した意味：？私が水を満たした。〔他動詞文：非文〕

したがって前述の使役文 (9)′ において母音交替が起こる理由は, 「満ちる」が独立自動詞であって語彙項目には対応する他動詞が存在しないことから, 水が自動詞の主語ではなく, 動詞の目的語 (受動者) であることを示そうとして, 他動性の意識が使役動詞に先んじて表出したためであろうと考えられる。

附論1 チベット語カム方言の使役文とムニャ語

ここではムニャ語の文法における使役構文が、ムニャ語の分布域における優勢言語であるチベット語カム方言から影響を受けて発達した可能性について検討しておきたい。

以下の例文 (41) から (44) は、チベット語カム方言の典型的な使役表現である⁴。

(41) *nga kho la ja skil bcug zin yin/*

ŋa²³ kho⁵⁵=la²² dza²³ ki⁵⁵=tɕu?⁵⁵ =zu⁵⁵ ji²³.
1sg. 3sg.=DAT 茶 沸か=CAUS =SFX:pft DEC [肯定]

私は彼 / 女に茶を沸かさせた。

(42) *kho bkra shis la phru gu tsho la gos bzhan bkon bcug shun do/*

kho⁵⁵ tʂa⁵⁵xi⁵⁵=la²² tʂhu⁵⁵gu⁵⁵ tsho²²=la²² go²²ze⁵⁵
3sg. bkra shis =DAT 子供 たち =DAT 服

ko⁵⁵=tɕu?⁵⁵ =ɕi⁵⁵ do²³.

着る =CAUS =SFX:impft DEC [肯定]

彼女はタシに子供たちに服を着させる。

(43) *kho bkra shis la gos gzhan bkon shun do/*

kho⁵⁵ tʂa⁵⁵xi⁵⁵=la²² go²²ze⁵⁵ ko⁵⁵=ɕi⁵⁵ do²³.
3sg. bkra shis =DAT 服 着る =SFX:impft DEC [肯定]

彼女はタシに服を着せる。

(44) *khos bkra shis la gos gzhan bkon bcug shun do/*

kho⁵⁵ tʂa⁵⁵xi⁵⁵=la²² go²²ze⁵⁵ ko⁵⁵=tɕu?⁵⁵ =ɕi⁵⁵ do²³.
3sg. bkra shis =DAT 服 着る =CAUS =SFX:impft DEC [肯定]

彼女はタシに服を着させる。[タシは自分で服を着る]

ダワさんによると、この文は両義文で、単独で発話した場合、状況がなければ曖昧であるという。日本語の直訳も同様で、①彼女はタシに（命じて明示されていない誰かに）服を着させる。あるいは②彼女がタシに服を着させる [タシは自分で服を着る]。のどちらの意味にも取れる。もし①の意味であることを明確にするのであれば、他動詞 *gyon* /dzũ²³/「着せる」を使うべきとのこと。

⁴ここに挙げたチベット語カム方言（新都橋方言）の文例は、いずれも同地出身のダワチャシさんの提供になるものである。広義のムニャ地区で話されているチベット語方言のひとつで、新都橋はムニャ語が話されている地域の北側に隣接している。作例にあたり、ダワさんにはできるだけ自然な発話表現を選ぶとともに、口語の発音にできるだけ近いチベット文字表記も提案していただいたが、文語の綴りとは異なるため、ここではワイリー方式のローマ字転写を添えるにとどめた。発音はできるだけ忠実に音声表記し、声調は近似の高さを数字で示している。

(44)′ *khos bkra shis la gos gzan gyon bcug shun do/*

kho⁵⁵ tʂa⁵⁵xi⁵⁵=la²² go²²ze⁵⁵ dʒu²³=tʂu⁵⁵=ʧi⁵⁵ do²³.
 3sg. bkra shis =DAT 服 着せる =CAUS =SFX:impfct DEC [肯定]
 彼女はタシに（誰かに）服を着させる。

一見してわかるように、チベット語カム方言の使役文の構造は、ムニャ語の使役文に非常によく似ている。以下にその構造を提示する。

[チベット語カム方言]

(41) *nga kho la ja skil bcug zin yin/*

ŋa²³ kho⁵⁵=la²² dʒa²³ ki⁵⁵=tʂu⁵⁵=zu⁵⁵ ji²³.
 1sg. 3sg.=DAT 茶 沸か =CAUS =SFX:pft DEC [肯定]
 私は彼 / 女に茶を沸かさせた。

使役主 = 能格	被使役者 = 与格	受動者 [目的語]	動詞 = 使役助動詞	述詞
Causer (Agent) =ERG	Causee =DAT	Patient/Object (=∅)	V =CAUS	DEC

この構造を、上述したムニャ語の使役文 (40) と比較してみる。

[ムニャ語]

(40) ŋi⁵⁵ tʂe³³ʧi⁵⁵=le³³ tʂu⁵⁵ ti³³-ts^hu⁵⁵=tʂ^hu³³ ŋe³³.
 1sg.[ERG] bKra shis =DAT water DIR- boil =CAUS DEC
 私がタシにお湯を沸かさせた。

使役主 = 能格	被使役者 = 与格	受動者 [目的語]	方向 - 動詞 = 使役助動詞	述詞
Causer (Agent) =ERG	Causee =DAT	Patient/Object (=∅)	DIR-√V =CAUS	DEC

両者の最も大きな違いは、チベット語カム方言の動詞には、ムニャ語のような方向前接辞が接続しないので、その母音交替によって他動詞性を表わすことが構造的にできないことである。そのほか、述語部分におけるアスペクトや確認性の表示のしかたにもさまざまな違いがあるが、いずれも当面の議論には関係しない。注目されるのは、使役の各項の語順と格表示、動詞のあとに使役助動詞がつく構造には一致がみられ、しかも両言語の使役助動詞は、語順や機能はもちろん、発音もよく似ていることである。とはいえチベット語カム方言の使役助動詞 / =tʂu⁵⁵/ は、音節初頭子音が無気音であり、円唇高母音で音節末には咽頭閉鎖音がつくが、ムニャ語の使役助動詞 / =tʂ^hu³³/ は、音節初頭子音は有気音であり、非円唇高母音で音節末に閉鎖音はつかない、という違いがある。

チベット語カム方言の使役助動詞 /= $t\epsilon u$?⁵⁵/ は、チベット文語の *bcug* から派生したもので、ラサ方言においてもやはりチベット文語に対応する同源語の使役助動詞 / $t\epsilon uu$ / *bcug* を、動詞未完了語幹のあとに付けて使役を表現する。アムド方言でもやはり同源語の動詞 / $nd\acute{z}ək$ / *'jug*（現在）/ $t\epsilon \acute{a}k$ / *bcug*（過去）/ $t\epsilon \acute{h}ək$ / *chugs*（未完了）を使う。ムニャ語の使役助動詞 /= $t\epsilon^h u$?³³/ がはたして語源的にチベット文語の *bcug* に繋がるのか、あるいは西夏語の使役助動詞 /= $phji$ ¹¹¹/ <L0749>（後述の附論 2 を参照）と関係するのか、俄かには定め難い。仮に後者だとしても、ムニャ語がチベット語カム方言の影響化で使役構文を発達させて来た可能性は否定できない。

附論 2 西夏語の使役文とムニャ語

西夏語はチベット＝ビルマ語派の古代語で羌語支に属し⁵、その言語構造の共通性から西夏語とムニャ語の祖先とは方言の関係にあったのではないかと予想される。幸い、我々は西夏文献中に見える使役構文について、翻訳のもとになったオリジナルの漢文テキストと比較対照することで、その構造を分析できる。ここでは西夏語とムニャ語の使役文の構造とその対応関係について見ておきたい。西夏語の典型的な使役構文は、以下のようなものである⁶。

(45)	5306	5604 / 5113	5525	1241	0448	1139
	𐽀	𐽀𐽁𐽂	𐽀	𐽀	𐽀	𐽀
	dzjwi	= $d\acute{z}ji$ -wji	zjɿ	lji	gji	= jji
	1.30	1.17 / 1.10	1.69	2.9	2.28	1.36
	皇帝	=ERG	男兒	童	一	=GEN

0960	5815	4729	4906	0749
𐽀	𐽀	𐽀	𐽀	𐽀
mji	tsji	lhwi	gjwi	phji
1.61	1.30	1.1	2.10	1.11
女兒	子	衣服	着る	=CAUS

【帝令童男衣女之衣】《類林》卷六 醫巫篇 29-10

⁵ 池田巧（2012）を参照。

⁶ 西夏文字の上の数字は、李範文『夏漢字典』の文字番号。再構音は龔煌城による。その下の数字は、声調（1：平声，2：上声）と小数点以下は『文海』の韻を示す。

皇帝が命じて男の子に女の子の服を着させた、という内容の文である。この例文 (45) に基づいて、西夏語の使役文の構造は、以下のように分析できる。

使役者	受動者	動作対象	述語
Causer [=ERG]	Patient [=GEN]	Object (sth.) [=Ø]	Predicate [V=CAUS]
帝	男兒	女衣	着 = せる

この文では、残念ながら被使役者 (Causee：恐らくは皇帝の命を受けた家臣) が表示されていない。注目すべきは、男兒は被使役者ではなく、動詞「着る」の受動者であり、西夏語の属格助詞でマークされていることである。

つぎに、西夏語の例文に対応するムニャ語の使役文 (作例) と比較しながらその構造を分析してみたい。

- (46) ηi^{55} $ly^{33}ze^{55}=le^{33}$ $ze^{55}=le^{33}$ $ts\check{e}^{33}\eta gw^{55}$ $t\check{i}^{33}-ngw^{55}$
 1sg.[ERG] *bLo bzang* =DAT 子供 =DAT 衣服 DIR- 着る
 = $t\check{c}^h w^{33}$ ηe^{33} .
 =CAUS DEC

私はロサンに子供に服を着せてもらった。

ムニャ語の使役文 (46) は、以下のように分析できる。

使役者	被使役者	受動者	動作対象	述語
Causer [=ERG]	Causee [=DAT]	Patient [=DAT]	Object (sth.) [=Ø]	Predicate [V=CAUS]

ムニャ語の使役文では、被使役者と受動者はいずれも対格の助詞でマークされている。同じ格表示を取っているけれども、文法的な意味は異なる：前者は使役助動詞の要求によるもので、後者は動詞の要求によるものである。この例文の意味関係の構造は、西夏語の例文 (45) とほとんど同じであり、使役者 (Causer) が能格助詞でマークされている点も共通である。逆に大きく異なる点は受動者の格表示のしかたで、西夏語の被使役者は属格の助詞 /=*jij*/ をとるのに対し、ムニャ語では対格の助詞 /=*le*³³/ でマークされている。

残念ながら西夏語の使役文において、被使役者 (Causee) がどのように格表示されるのかわかる適当なデータがないため、これ以上の議論を進めることができない。また「着せる」は3項動詞なので、その格表示との関連がやや複雑になることにも留意する必要があるだろう。今後の西夏文献の解読のなかで、さらに使役文の文例が見つかることを期待したい。

略号

CAUS	Causative auxiliary	DAT	Dative	DEC	Declarative
DIR	Directional prefix	ERG	Ergative	GEN	Genitive
impft	imperfect	IRG	Interrogative	NEG	Negative
NUM	Numeral	PCL	Particle	pft	perfect
pl.	plural	SFX	Suffix	sb.	somebody
sg.	singular	sth.	something	VP	Verb Phrase
vi	intransitive Verb	vt	transitive Verb		

参考文献

[日本語]

- 池田 巧. 2010. ムニャ語の格助詞. 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1：格とその周辺』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所. 15–28 頁.
 池田 巧. 2013. ムニャ語の述詞と文. 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2：文の特徴づけと下位分類』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所. 365–390 頁.
 池田 巧. 2016. ムニャ語の名詞句. 『シナ＝チベット系諸言語の文法現象 1：名詞句の構造』京都大学人文科学研究所. 37–55 頁.

[中文]

- 池田 巧. 1998. 木雅語語音結構の幾個問題. 『内陸アジア言語の研究』XIII. 中央ユーラシア学研究会. 83–91 頁.
 池田 巧. 2012. 羌語支語言の特徴詞：試探西夏語和羌語支的關係. 《日本東方學》第 2 輯. 北京：中華書局. 130–146 頁.
 戴慶廈. 他. 1991. 《藏緬語十五種》北京：燕山出版社.
 格桑居冕, 格桑央京. 2002. 《藏語方言概論》北京：民族出版社.
 黃布凡. 1985. 木雅語概況. 《民族語文》1985 年第 3 期.
 黃布凡. 2009. 《川西藏區的語言》北京：中国藏学出版社.
 孫宏開. 1983. 六江流域的民族語言及其系屬分類—兼述嘉陵江上游, 雅魯藏布江流域的民族語言. 《民族學報》1983 年第 3 期. 昆明：雲南民族出版社. 99–273 頁.
 孫宏開. 他. 2007. 《中國的語言》北京：商務印書館.

[English]

- IkEDA Takumi. 2003. On pitch accent in the Mu-nya language. *Linguistics of Tibeto-Burman Area*. 25.2. University of California, Berkeley. pp. 27–45.
 IkEDA Takumi. 2007. Exploring the Mu-nya people and their language. *ZINBUN*. 39. Institute for Research in Humanities, Kyoto University. pp. 19–147.
 IkEDA Takumi. 2008. 200 Example Sentences in the Mu-nya Language. *ZINBUN*. 40. Institute for Research in Humanities, Kyoto University. pp. 71–140.
 IkEDA Takumi. 2013. Verb predicate Structure in the Mu-nya language. Paper presented for the 3rd Workshop on Tibeto-Burman Languages of Sichuan, held on September 2nd–4th of 2013 at Paris: Centre National de la Recherche Scientifique.

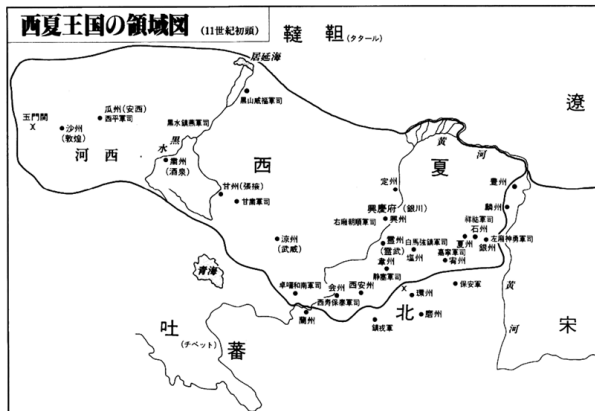
西夏語の使役について

荒川 慎太郎

1. 西夏語の概要¹

1.1. 西夏語の概要

西夏語²は1038～1227年、中国西北部に存在した西夏国の言語であり、1036年に創製されたといわれる西夏文字資料によってのみ知られる。西夏が滅んだ後も西夏語・西夏文字は使用されていたが、現時点では1502年以降の西夏文字資料は見つかっておらず、その後死語・死文字と化したと考えられている。西夏語はチベット＝ビルマ語派に属し、ギャロン語や四川省西部のいわゆる川西走廊言語との関係も指摘されている。確認される限り、同語派の言語としては地域的に最北限といえる。



左：西夏の領域 右：西夏語と川西走廊言語との位置関係
(図は共に西田 1989a: 15 より)

¹ 本節は荒川 (2010, 2013) 冒頭の「西夏語の概要」の縮約修正版である。

² 簡便な概説は、西田 (1989b, 2012), Gong (2003) などを参照。

西夏語は死語であるため、全て文字資料が分析の対象となる。西夏文字資料は、仏典、漢語古典の翻訳、韻書、詩歌、法律集、各種契約文書、題記など多岐に及ぶ。現存する資料のうち9割以上を占めるのが仏典である。本報告では、筆者の有するデータの都合上、仏典から多くの例を引くことになる。

西夏文字は1文字がおよそ1語ないし1形態素であり、声調を持つ1音節を表す。全ての例文で西夏文字を示す。

1.2. 西夏語の音韻

西夏語の1音節は、CV(C)/T (T= Tone) の構造を持ち、西夏文字1文字で表される。西夏語の諸韻書は漢語音韻学に倣い、CV(C)/T を C-「声母」と -V(C)/T 「韻母」に分けて記述する。声母を「反切上字」、韻母を「反切下字」に分析する。声調、声母、韻母の順に述べる。

まず、西夏語の声調は「平声」と「上声」と漢訳できる、2種類の声調が基本にあったことが確認されている。西夏時代の韻書『文海』では全ての西夏語音節が平声、上声ごとに大分類される。

西夏語韻書は、主に調音部位に基づき、声母を9種類に分類する。それらは、漢語訳すると「重唇音類・軽唇音類・舌頭音類・舌上音類・牙音類・歯頭音類・正歯音類・喉音類・流風音類」のように名称付けられる。西夏語音韻学ではこの分類と順序が厳密に守られる。

一方、西夏語韻母は平声「97 韻」・上声「86 韻」と細分化され、通し番号が付与されていた。声調の対立を除き韻母の形式が同じ韻類、すなわち「通韻」は「105 韻」に分類される。韻母番号と代表字が『文海』冒頭に記載されることから、こうした番号による整理が西夏語音韻学では通用していたことがうかがえる。漢語音韻学同様、「合口韻」（渡り音 -w- を持つ音節）は各韻類に含まれる。したがって、西夏語音節から初頭子音を除いた残りの部分は、105 種類よりもさらに多種であったということになる。

1.3. 本稿における表記

本稿における西夏語推定音は荒川（2014）による。声調は上付き小文字で示す（1 は平声，2 は上声）。声母・韻母表記の一覧は稿末に付す。語レベル以上の例文は通し番号・西夏文・推定音・グロス・訳注³を基本とする。使役の助動詞など、強調すべき要素には適宜下線を付した。（ ） 内に出典文献と登場箇所も示す。この表記はおおむね出典の通りとする。

³ 人称代名詞が主語と呼応する場合は《 》、目的語と呼応する場合は〈 〉で訳に反映させる。

⁶ この要素 宛²ni: は西田 (1989b) においては「仮定」、Кепинг・Gong らは「複数性」を表すものとされてきたが、本節の最小対からみても、「複数性」を示す人称接辞とするのが妥当だろう。

(02)	𑖦𑖯	𑖦𑖰	𑖦𑖱	𑖦𑖲	𑖦𑖳	𑖦𑖴	𑖦𑖵	𑖦𑖶	𑖦𑖷
	<u>²ni:</u>	<u>²ni:</u>	¹ myor	¹ ldenq	² thI:	² syu	² li?	¹ wi:	² nga
	2sg	pl	如来		Dem	ように	念	為す	1sg
	𑖦𑖸	𑖦𑖹	𑖦𑖺	𑖦𑖻	𑖦𑖼	𑖦𑖽	𑖦𑖾	𑖦𑖿	𑖦𑖿
	² jyan	¹ chyu	¹ e:	¹ gyu	¹ dzenq	² I:	¹ ti:	² I:	<u>²ni:</u>
	衆生		CM	済度		という	Proh	言う	Sufp

お前達は、如来はこのように念を為して、私は衆生を済度すると言ってはならぬ《お前達は》。(金剛 66-2, 3)

2.2. 西夏語の使役と本稿の構成

西夏語の使役、動詞の使役形についてはまず西田 (1989b: 415)⁷ を引用する。

動詞の使役形は、a) 語幹形式の対立で示す語彙的使役と、b) 語幹に𑖦𑖿⁻¹phi: (平 11) あるいは𑖦𑖿⁻¹wi: (平 10) を添接する統語的使役がある。後者は、生産的な手順として頻用される。

本稿の 3. では、ここでいう「統語的使役」を例文とともに記述する。次に 4. で「語彙的使役」について、いくつかのパターンに分けて紹介する。

なお、本稿では、純粋な統語的使役の要素を𑖦𑖿⁻¹phi: に限る。𑖦𑖿⁻¹wi: は文脈上確かに「使役」と解釈できる用例もあるものの、本動詞として使用する例、名詞・動詞に後続して「動詞化・動作強調」などとして機能する例 (03) もあり、𑖦𑖿⁻¹phi: と同等の要素と見做しがたいためである。

(03)	𑖦𑖸	𑖦𑖴	𑖦𑖳	𑖦𑖲	𑖦𑖱	𑖦𑖰	𑖦𑖯	𑖦𑖸	𑖦𑖸
	² wa	² syu	¹ genq	² qyi	² cha:	¹ o''	² rI:r	<u>¹wo:</u>	² na:
	Q	ような	益		功德		P1	為す	Suf2

どのような益、功德を為した (のか) 《お前は》。(金剛經纂 07-3)

この例文においては、2 人称単数が主語であり、人称接辞によって表されている (ここでは、𑖦𑖿¹wi: は𑖦𑖿¹wo: に変化する)。文脈上、2 人称単数以外の人物が動詞の項となる可能性は無いため、使役形とは言いがたい。

⁷ 推定音は筆者のものに統一し、西夏文字も加えた。

3. 統語的な使役

3.1. 使役形とその助動詞

語幹に付加される 𐰽 ¹phi: は、1) 単独で本動詞として使用されることが無い、2) 一部の動詞のように、「人称接辞」と共起する際に母音が交替する形式を持つ、という特徴から、筆者は「助動詞」という文法カテゴリーに属するものとみなす。機能的には「～させる」という使役形の形成を、第一義と考えている。

「人称接辞」と共起する際、先行研究では、

A「主語」と一致する場合　：動詞－𐰽 ²pho:－人称接辞

B「目的語」と一致する場合　：動詞－𐰽 ¹phi:－人称接辞

のようになるとされる。Gong (2003: 610) の例を、筆者の推定音・グロスで再掲することにする。

A「主語」と一致する場合

(04)	𐰽	𐰽	𐰽	𐰽	𐰽	𐰽	𐰽	𐰽	𐰽	𐰽
	² lo	² seu	¹ e:	² dzyu	¹ phi:	[?] wo?	¹ kha	² gi:	¹ e:	¹ kl:
	兄	小	CM	主たる	Caus	理	CM	子	CM	Pl
	𐰽	𐰽	𐰽							
	² dzyu	² pho:	² na:							
	主たる	Caus	Suf2							

(お前は) 弟を首領にさせるべきところを、(自分の) 子を首領にさせた《お前は》。(Gong 2003: 610)

B「目的語」と一致する場合

(05)	𐰽	𐰽	𐰽	𐰽	𐰽	𐰽
	¹ ko	¹ chya:	² wI:	² dzu	¹ phi:	² nga
	車	CM	Pl	座する	Caus	Suf1

車上に座らせよ〈私を〉。(Gong 2003: 610)

西夏文『金剛經』の例文でこうした使役の助動詞の交替形が存在することは、西田 (1976: あとがき pp. 18–19) に既に指摘されるところである。西田の言及を引用し、該当する『金剛經』の例文 (06), (07) を挙げる (例文の推定音, グロス, 訳は筆者による)。

𐰽 𐰽 は、𐰽 𐰽 〈減度する〉の使役形式に代名詞 𐰽 〈我〉を後置した形であるが、その場合、使役形 ¹phifi (平 11) が ¹phĩfi (上 44) に変わり、西夏文字は 𐰽 から 𐰽 に書き換えられる。

朕は人に鬼神を見させることができる。(Кепинг 1985: 286)

(09) は「動詞語幹－否定辞－可能を表す助動詞－使役を表す助動詞」, (10) は「動詞語幹－使役を表す助動詞－可能を表す助動詞－人称を表す接尾辞」という構造となっている。動作が「可能」であるのが何者であるかによって, 「可能を表す助動詞」の位置が変化していることが興味深い。

「誰が^が(何が) ～させるのか」のように, 疑問文形式の反語表現で, 使役の助動詞を伴う動詞句構造となる例 (11) も確認できる。

- (11) 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲
¹tha: ²zyIr ²mIr ¹e: ¹gi: ¹se: ¹swI: ¹ny'en ¹phi:
 その 水 本 自 清浄 今 誰 濁る Caus

その水は本来自ずと清らかだった (のに) 今, 誰が濁らせるのか?

(Кепинг 1985: 303)

3.3. 使役形と格標識

統語的な使役を検討する際に, いかなる格標識が被使役者に付加されるかは重要であるため, 本節で例とともに紹介・検討する。具体的には, 動詞の使役形を含む文で被使役者が明示される場合, 西夏語に特徴的な格標識 𐽳𐽱𐽲 ¹e: が出現する。

まず荒川 (2010) などから, 𐽳𐽱𐽲 ¹e: について簡単に述べる。属格用法を省略すると, 𐽳𐽱𐽲 ¹e: は「～に, ～を」のように目的語を標示する。与格的か対格的かを問わず, 被動作者 (P) が標示される。(12), (13) を参照。

- (12) 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲
¹tha ¹e: ²naq ²I:
 仏 (P) に 申す 言う
 仏に申して言う。(金剛 8-3, 4)

- (13) 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲
¹myor ¹lden ¹ryur ²jyan ²tse: ¹e: ²li? ²wyeqr
 如来 (A) 諸 菩薩 (P) を 念じる 護る
 如来は諸菩薩を念じ護る。(金剛 8-4)

被動作者 (P) が非生物・事物である場合, それが標示される例も見られる。

- (14) 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲 𐽳𐽱𐽲
¹shi: ²ngo ¹e: ¹konq
 先 病 (P) を 治す
 先の病を治す。(心経注 03a-1-l, r)

使役文において、被使役者が（人称接辞でなく）目的語の位置で明示される場合は、この格標識が使用される。「使役者－被使役者（＋格標識）－動詞－使役の助動詞」という構造が一般的と考えられる。(15), (16), (17) を参照。

- (15) 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤
¹ryur ¹pyuq ²nga ¹nI: 𐰇𐰆𐰏𐰤 ²mi: 𐰇𐰆𐰏𐰤
 世尊 1sg pl CM 解悟する Caus

世尊は、私達を悟らせて、(法華 4, 030-4～5)

- (16) 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤
²nga ¹shi: ²ni: ¹nI: 𐰇𐰆𐰏𐰤 ¹tha ²neu' ²chi: ¹li:q 𐰇𐰆𐰏𐰤
 1sg 先 2sg pl CM 仏 善 根 植える Caus

私が先にお前達に仏の善根を植えさせる。(法華 4, 030-6～031-1)

- (17) 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤
²gyan ²tse: ¹wi: ²zyonq ²nga ¹nI: 𐰇𐰆𐰏𐰤 ¹dzyu ²dze:'
 菩薩 為す 時 1sg pl CM 教化
- 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤 𐰇𐰆𐰏𐰤
²ngo:r ²ngo:r ²senq ¹ne:' ¹a? ¹sho 𐰇𐰆𐰏𐰤 ²ni:
 一切 智 心 P1 起こす Caus Sufp

(仏は) 菩薩となる時、私達を教化し、一切智慧の心を起こさせた〈私達に〉。(法華 4, 030-1～2)

3.4. 使役を表す西夏文字

本稿で論じた、使役に関する二つの西夏文字、𐰇𐰆𐰏𐰤 ¹phi: と𐰇𐰆𐰏𐰤 ²pho: の字形構成についても述べておきたい。西夏時代の韻書『文海』には、それぞれの西夏文字について、形・音・義が説明される。ただし現存するのは「平声韻」部のみである。したがって、「平声 11 韻」という韻母グループに属する前者についてしか、字形解説は残らない。『夏漢字典』の文字番号 0749 (李 2008: 128) の例文より引用する。とはいえその解説も、

𐰇𐰆𐰏𐰤：𐰇𐰆𐰏𐰤𐰇𐰆𐰏𐰤

𐰇𐰆𐰏𐰤は「𐰇𐰆𐰏𐰤」を偏、「𐰇𐰆𐰏𐰤」を助（とする文字）

という簡単なものである。𐰇𐰆𐰏𐰤は発音が ¹ngwu で意味が「言葉、言う事」⁸、𐰇𐰆𐰏𐰤は発音が ¹phi: で意味が「意、謀」⁹である。おそらく、西夏文字における「ごんべん」

⁸ 文字番号 0226 (李 2008: 39) より。

⁹ 文字番号 0797 (李 2008: 136) より。

にあたるものを偏に、「意図して～させる」のような意味と発音の文字要素を旁にして成立した文字であろう。

𐵓²pho: について私見を述べる。おそらく、西夏文字における「くちへん」にあたるものを偏に、初頭子音 ph のような発音の文字要素を旁にして成立した文字であろう。同じ旁を持つ文字として、𐵓²phyu 「上」という、声調も初頭子音も等しい文字が知られる。

4. 語彙的な使役

4.1. 動詞語幹形式の音交替—先行研究の注意点

西夏語の動詞の一部には、動詞語幹の音・素性が変化して「自動詞－他動詞」が対になるという現象が見られる。これらの中には「非使役－使役」とみなせるものもあるため、使役形を扱う本稿でも紹介する。

ただし、先行研究の扱いには注意を要する。西夏語の推定音は声母・韻母の一部に統一の見解が無い箇所も多く、音変化・交替にも関係するためである。例えば、あえて原表記のまま引用すると、西田 (1989b: 415) 「l-: hl- の対立と、非緊喉母音と緊喉母音の対立」の例：

𐵓 lu₂ (平 1) 「まざる」

𐵓 hlü₂ (平 58) 「まぜる」

Gong (2003: 611) においては、「声母は同一で韻母の非緊喉：緊喉の対立のみが自他対応に関与する」とされる。

𐵓 lwu¹ “to get mixed (Vi)”

𐵓 lwü¹ “to mix (Vt)”

4.2. 動詞語幹形式の音交替の諸例

Gong (2003: 605–606, 610–611) から、語幹形式の音交替による「自動詞－他動詞」「非使役－使役」の例を紹介する。内容上、英文も含め原表記とする。

A) 声母の交替

声母の有声音・無声有気音の交替が、統語的カテゴリーの変化を引き起こすことが知られている。一般に、有声音は自動詞、無声有気音は他動詞になる。

𐵓 bie² “to release, to open (Vi)”

𐵓 phie² “to release, to open (Vt)”

B) 韻母（母音）の交替

韻母における主母音、具体的には非緊喉：緊喉の交替が、動詞の自他対応ない

し、使役形形成に関与する。

𑖀𑖦 gjwi² “to wear clothes (Vt)”

𑖀𑖦 lwu¹ “to get mixed (Vi)”

𑖀𑖦 gjwi² “to make to wear clothes (Caus)”

𑖀𑖦 lwu¹ “to mix (Vt)”

5. おわりに

西夏語の使役表現とその構造は従来あまり記述されていたとはいえない。現在話者のいない言語という制約があるため、例えば「3 項動詞文を使役文にすると、格標識の使用はどうか」などの問題については、自由に作文して検証することは難しいものの、今後も用例の収集に努めたい。

略号

A: 動作者, Adj: 形容詞, Caus: 使役の助動詞, CM: 格標識, Dem: 指示代名詞, N: 名詞, Neg: 否定接頭辞, NV: 存在否定の動詞, O: 目的語, P: 被動作者, pl: 複数標識, Proh: 禁止命令接頭辞, P1: 動詞接頭辞形式 1 (方向接辞), Q: 疑問代名詞, S: 主語, sg: 単数, Suf(1, 2, p): 人称接辞 (1 人称, 2 人称, 複数), V: 動詞, Vi: 自動詞, Vt: 他動詞

出典と略称

金剛：金剛般若波羅蜜多經（荒川 2014）

金剛經纂：金剛般若波羅蜜多經纂（荒川 2014）

法華 4：妙法蓮華經第四卷（荒川 forthcoming）

心經注：般若波羅蜜多心經（及びその注部分）（荒川 2006）

* 本稿は、科研費（基盤 B 課題番号 25580087）「「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相」（代表：荒川慎太郎）、及びアジア・アフリカ言語文化研究所 共同利用・共同研究課題『アジア文字研究基盤の構築 1』の研究成果の一部である。

参考文献

- 荒川慎太郎. 2006. 「ロシア所蔵西夏語訳『般若心経註』の研究」. 『中央アジア古文献の言語学的・文献学的研究』(Contribution to the Studies of Eurasian Languages Series 10) (白井聡子・庄垣内正弘編), 京都大学文学部言語学研究室. pp. 95–156 (+図版 8).
- . 2010. 「西夏語の格標識について」. 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1: 格とその周辺』(澤田英夫編), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. pp. 153–174.
- . 2011. 「プリンストン大学所蔵西夏文華嚴經卷七十七訳注」. 『アジア・アフリカ言語文化研究』 81. pp. 147–305.
- . 2013. 「西夏語の文について」. 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2: 述語と発話行為からみた文の下位分類』(澤田英夫編), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. pp. 151–173.
- . 2014. 『西夏文金剛經の研究』. 松香堂.
- . 2018. 「西夏語の双数接尾辞について」. 『ユーラシア諸言語の多様性と動態』(林徹ほか編), ユーラシア言語研究コンソーシアム. pp. 69–83.
- . forthcoming. 『プリンストン大学所蔵西夏文妙法蓮華經一写真版及びテキストの研究』. 東洋哲学研究所.
- Gong Hwang-Cherng (龔煌城). 2003. “Tangut.” In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan languages*. London and New York: Routledge. pp. 602–620 (2nd Edition 2017. pp. 805–822).
- Кеппинг, К. Б. 1985. *Тангутский язык. Морфология*. Москва: Наука.
- 李範文編著. 1997. 『夏漢字典』北京: 中国社会科学出版社 (増補修正本 2008).
- 西田龍雄. 1989a. 『西夏文字の話』. 大修館書店.
- . 1989b. 「西夏語」. 亀井孝ほか(編)『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』. 三省堂. pp. 408–429. {西田 2012 に修訂再録}
- . 2012. 『西夏語研究新論』. 松香堂.

付録：本稿における西夏語音表記

1. 声調 (上付き小文字で示す)

平声 1 上声 2

(声調不明 ? 平声と思われるもの 1? 上声と思われるもの 2?)

2. 声母

重唇音類 p ph b m

軽唇音類 f v w

舌頭音類 t th d n

舌上音類 ty' ty'h dy' ny'

牙音類 k kh g ng

齒頭音類 ts tsh dz s

正齒音類 c ch j ny sh

喉音類 ' h

流風音類 l lh ld z r

(声母不明 ? 推定に何らかの根拠を持つもの 子音表記 + ?)

3. 韻母（西夏語 105 韻の分類と表記を次のようにする。）

第 1 環				第 2 環			第 3 環		
1	R. 1	1.1=2.1	u	R. 61	1.58=2.51	uq	R. 80	1.75=2.69	ur
2a	R. 2	1.2=2.2	yu	R. 62	1.59=2.52	yuq	R. 81	1.76=2.70	yur
2b	R. 3	1.3=2.3	yu						
3	R. 4	1.4=2.4	u:						
1	R. 5	1.5=2.5	u'						
2	R. 6	1.6	yu'						
3	R. 7	1.7=2.6	u:'						
1	R. 8	1.8=2.7	i				R. 82	1.77=2.71	ir
2	R. 9	1.9=2.8	yi	R. 63	1.60=2.53	yeq	R. 83	1.78	yir
3a	R. 10	1.10=2.9	i:						
3b	R. 11	1.11=2.10	i:				R. 84	1.79=2.72	i:r
1	R. 12	1.12=2.11	i'						
2	R. 13	1.13	yi'						
3	R. 14	1.14=2.12	i:'						
1	R. 15	1.15=2.13	in	R. 64	1.61=2.54	enq			
2	R. 16	1.16	yin	R. 65	1.62=2.55	yenq			
1	R. 17	1.17=2.14	a	R. 66	1.63=2.56	aq	R. 85	1.80=2.73	ar
2	R. 18	1.18=2.15	ya				R. 86	1.81	yar
3a	R. 19	1.19=2.16	a:	R. 67	1.64=2.57	a:q	R. 87	1.82=2.74	a:r
3b	R. 20	1.20=2.17	a:						
4	R. 21	1.21=2.18	ya:						
1	R. 22	1.22=2.19	a'				R. 88	1.83	ar'
2	R. 23	2.20	ya'				R. 89	2.75	yar'
3	R. 24	1.23=2.21	a:'						
1	R. 25	1.24=2.22	an						
2	R. 26	1.25=2.23	yan						
3	R. 27	1.26=2.24	a:n						
1	R. 28	1.27=2.25	I	R. 68	1.65=2.58	iq	R. 90	1.84=2.76	Ir
2	R. 29	1.28=2.26	yI	R. 69	1.66=2.59	yiq	R. 91	1.85	yIr
3a	R. 30	1.29=2.27	I:	R. 70	1.67=2.60	i:q	R. 92	1.86=2.77	I:r
3b	R. 31	1.30=2.28	I:						
1	R. 32	1.31	I'	R. 71	1.68	iq'			
2	R. 33	1.32=2.29	yI'						
3				R. 72	1.69=2.61	i:q'			

1	R. 34	1.33=2.30	e			R. 93	1.87=2.78	er
2	R. 35	1.34=2.31	ye			R. 94	1.88=2.79	yer
3a	R. 36	1.35=2.32	e:					
3b	R. 37	1.36=2.33	e:					
1	R. 38	1.37=2.34	e'					
2	R. 39	1.38	ye'					
3a	R. 40	1.39=2.35	e:'					
3b	R. 41	1.40	e:'					
1	R. 42	1.41=2.36	en					
2	R. 43	1.42=2.37	yen					
1	R. 44	1.43=2.38	eu					
2	R. 45	1.44=2.39	yeu					
3a	R. 46	1.45=2.40	eu:					
3b	R. 47	1.46	eu:					
1	R. 48	2.41	eu'					
2	R. 49	1.47	yeu'					
1a	R. 50	1.48	o	R. 73	1.70=2.62	oq	R. 95	1.89=2.80 or
1b	R. 51	1.49=2.42	o					
2	R. 52	1.50=2.43	yo				R. 96	1.90=2.81 yor
3	R. 53	1.51=2.44	o				R. 97	1.91=2.82 o:r
1	R. 54	1.52=2.45	o'					
2	R. 55	1.53=2.46	yo'					
1	R. 56	1.54=2.47	on	R. 74	1.71=2.63	onq		
2	R. 57	1.55=2.48	yon	R. 75	1.72=2.64	yonq		
3	R. 58	1.56=2.49	o:n					
1	R. 59	1.57	o"					
2	R. 60	2.50	yo"					
1							R. 98	2.83 wor
2							R. 99	2.84 ywor
1				R. 76	2.65	eqr		
2				R. 77	1.73=2.66	yeqr		
1				R. 78	2.67	eqr'		
2				R. 79	1.74=2.68	yeqr'		
							R.100	1.92=2.85 ylr
							R.101	1.93=2.86 yer'
				R.102	1.94	woq2		
	R.103	1.95	ya:n					
	R.104	1.96	un					
	R.105	1.97	ua					

撒尼彝語の使役表現について¹

岩佐 一枝

1. はじめに

彝語（イ語，別名ロロ語；Yi, Lolo）は，チベット・ビルマ語派ロロ・ビルマ語支に属す言語で，中国西南部の雲南省，四川省，貴州省，広西壮族自治区，ベトナム及びラオスの北部で現在も使用されている。中国国内には8,714,393人²，ベトナムには約4,500人³，ラオスには1,400人余り⁴の彝族が居住している。

中国国内の彝語は6方言（北部，東部，南部，西部，中部，東南部）25下位方言に分けられているが，本稿で取り上げる撒尼彝語は，そのうちの東南部方言に属する。東南部方言には宜良，弥勒，華弥，文西の4下位方言があり，撒尼彝語は『彝語簡志』（1985）が彝語東南部方言宜良下位方言とするものである。

彝語は分析的言語であり，その基本語順はSOV/NAである。

撒尼彝語においては，3項動詞の場合は，S IO DO Vの語順をとる。助動詞は動詞に後置され，アスペクトを示す助詞などがその後に加えられる。文法関係は名詞に後置される格助詞によって示される。

本稿で扱う言語資料は，特に注記がない場合，中国雲南省石林彝族自治县五棵樹村で筆者が収集した調査データに基づいている⁵。

なお，撒尼彝語の文法に関する主な先行研究には，Vial（1909），馬（1951）がある。

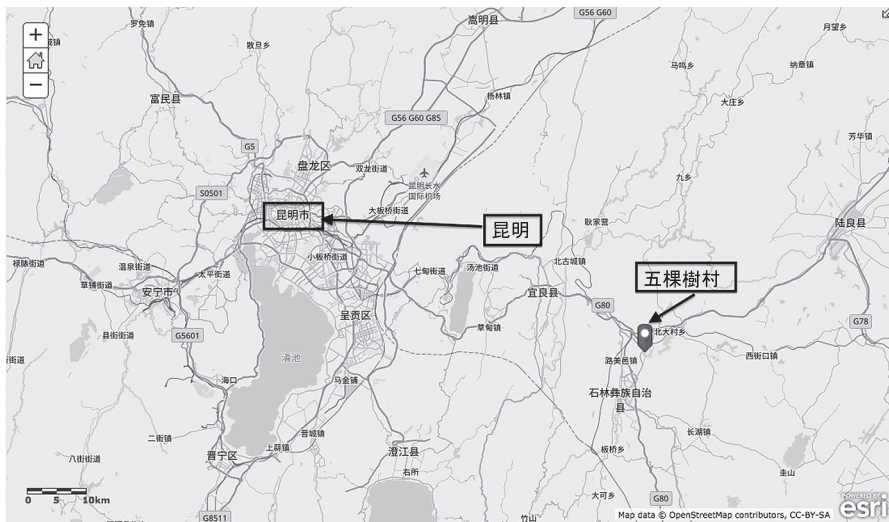
¹ 本稿は，2014年3月14日に立教大学池袋キャンパスにて行われた第3回TB + OC研究集会（池田巧教授主催）での口頭発表，並びに，2016年11月13日に中国広州市暨南大学で開催された第49回国際シナ・チベット言語学会での発表原稿に加筆したものである。また本稿執筆にあたり，両発表の際に多くの方々からいただいたご質問やご意見をもとにデータを新たに収集し，内容の修正を行った。貴重なコメントを下された参加者の皆様に心より御礼申し上げます。なお，本研究は日本学術振興会特別研究員奨励費の援助を受けている。

² 2010年の第6次人口統計による。

³ 2009年の調査結果による。“The 2009 Vietnam Population and Housing Census: Completed Results”, General Statistics Office of Vietnam: Central Population and Housing Census Steering Committee, June 2010, p. 135. Retrieved 2013-11-26.

⁴ Schliesinger（2014: p. 93）によれば，1995年の人口調査に基づく。

⁵ 言語データ提供者の一人は，生まれも育ちも五棵樹村である60代Pさん（女性）である。20年来の良き友人でもある彼女はどんなに多忙な時にも貴重な時間を割き，快く調査に協力してくれた。常に粘り強く筆者の質問に答えてくれた彼女に心から感謝申し上げます。もう一人の言語データ提供者は，石林県出身のピモ（彝族の祭司）40代のCさん（男性）である。彼も文献整理作業等，職務で多忙な中，時間を割いて筆者の調査に根気強くお付き合い下さった。ここに心より御礼申し上げます。また，これまで長年に渡り筆者を温かく迎え，撒尼彝語を教えてくれた五棵樹村のみなさんに，この場を借りて心から御礼申し上げます。本稿も五棵樹村で言語調査を行いつつ，みなさんのご協力を頂戴することで完成させることができました。

地図1 五棵樹村広域図⁶

地図2 五棵樹村狭域図

2. 撒尼彝語の使役表現パターン

撒尼彝語の使役表現には、語彙的使役、形態的使役、迂言的使役の3タイプがある。

⁶ 地図1及び2は、ArcGIS (<http://www.arcgis.com/home/index.html>) を用いて作成した。

2.1. 語彙の使役

以下、語彙の使役の例を挙げる。

2.1.1. 自他同形型

- | | |
|---------------------------------|-------------------------------|
| 1) 自動詞：ɬe ³³
沸騰する | 他動詞：ɬe ³³
沸騰させる |
| 2) 自動詞：phu ³³
開く | 他動詞：phu ³³
開ける |

2.1.2. 補充型⁷

- | | |
|--|---|
| 3) 自動詞：dli ²¹
折れる | 他動詞：ɬi ⁵⁵ / tshi ⁴⁴
折る |
| 4) 自動詞：ɣi ³³
死ぬ ⁸ | 他動詞：xe ²¹
殺す |
| 5) 自動詞：so ⁴⁴
学ぶ | 他動詞：mo ⁵⁵
教える |

2.1.3. 両極型⁹

- | | |
|---|--|
| 6) 自動詞：ho ⁴⁴ pe ³³
混ざる | 他動詞：vi ³³ ho ⁴⁴
混ぜる |
|---|--|

⁷ 3), 4) は『彝漢簡明詞典』(1984) より, 5) は『藏緬語族語言詞彙』(1992) より引用。また, 以下の様な例もある。a) 及び b) は『藏緬語族語言詞彙』(1992) より, c) は『彝漢簡明詞典』(1984) より引用。

a) 自動詞：la ² 倒れる	他動詞：ɬe ⁴⁴ 倒す
b) 自動詞：dx ³¹ 燃える, 火がつく	他動詞：tx ⁵⁵ 燃やす, 火をつける
c) 自動詞：vi ³¹ 着る	他動詞：fi ⁵⁵ 着せる

現代撒尼彝語の語彙形式のみから分類するならば, これらのペアは補充型と看做すこともできよう。しかしながら, 最終的な分類には更に検討が必要と判断し, 結論は保留とした。ちなみに, 上記3例に共通して認められる初頭子音の声の対立(側面音については有声音と摩擦音の対立であるが), 並びに低調から高調への声調変化は, PTB *s- のような使役接頭辞の存在を示唆しているように思われる。例えば, 彝語の特徴的な歴史的音韻変化の一つに, 音節初頭の子音結合の単子音化というものがある。この変化の過程において, 自動詞に前置され他動詞を形成していた *s- が後続する子音を無声化し, 且つ調値の変化も引き起こしたと推測することができる。ただ, この点についてはさらなるデータの収集と分析が必要である。

⁸ 音声表記では [s⁵⁵] となるが, 原文ママ。同じ理由で, 『藏緬語族語言詞彙』からの引用も原文ママ。以下本稿では, そり舌音に後続する [ɲ] は /ɲ/ で表記する。また, 齒茎音に後続する [ɲ] も以下 /ɲ/ と表記する。

⁹ Haspelmath (1993: 91) の以下の記述に基づく。... In *equipollent* alternations, both (= inchoative/causative verb pairs) are derived from the same stem which expresses the basic situation, by means of different affixes..., different auxiliary verb..., or different stem modifications...

なお, 両極型の例 6) は『彝漢簡明詞典』(1984) より引用。

2.2. 形態的使役

撒尼彝語においては、形態的使役はほとんどが自動詞の使役化型で、使役的色彩を動詞に与える要素は、撒尼彝語の通常の語順とは異なり、主動詞に先行する。また、後述する 14) のように反使役化型を示す例も少数ながら存在する。

本稿では、 $d\ae^{11}$, $t\check{c}hr^{33}$, ky^{33}/ku^{33} を前置する語彙は、その形式から便宜上形態的使役と分類したが、現代撒尼彝語においてはいずれも生産的とはいえず、これらを伴った例はすでに語彙化していると判断される。よって、今後の研究の進展によって、語彙的使役に分類する可能性もある。

2.2.1. $d\ae^{11}$ 付加タイプ¹⁰

[$d\ae^{11}$] は、「打つ、叩く」という意味の動詞であるが、以下の例のように、自動詞に前置して、他動詞化する働きをもつ。

- | | |
|------------------------------|-------------------------------------|
| 7) 自動詞： br^{11}
散り散りになる | 他動詞： $d\ae^{11} br^{11}$
バラバラにする |
| 8) 自動詞： $ɬr^{44}$
穴が開く | 他動詞： $d\ae^{11} ɬr^{33}$
穴を開ける |

2.2.2. $t\check{c}hr^{33}$ 付加タイプ¹¹

[$t\check{c}hr^{33}$] は、「人を派遣する、頼む（中国語の「派」）」という意味の動詞である。これも [$d\ae^{11}$] と同様に、自動詞に前置され、それを他動詞化させる。黄（1992）によれば、[$t\check{c}hr^{33}$] は、上述の中国語の「派」に加え、「使」‘to make, cause’の項目にも記述されている¹²。

- | | |
|----------------------|-------------------------------------|
| 9) 自動詞： qu^2
戻る | 他動詞： $t\check{c}hr^{33} qu^2$
戻す |
|----------------------|-------------------------------------|

2.2.3. ky^{33}/ku^{33} 付加タイプ

[ky^{33}/ku^{33}] は、本来「作る、創造する」という意味の動詞であるが、自動詞に前置すると、それを他動詞化する場合がある。例 10)–13) を参照。例 14) は、反使役化型と考えられるが、便宜上本章で扱った。

¹⁰ 7), 8) ともに『藏緬語族語言詞彙』（1992）より引用。

¹¹ 9) は『藏緬語族語言詞彙』（1992）より引用。

¹² 2016 年 11 月 13 日の国際シナ・チベット語学会での発表後、Matisoff 先生より、撒尼彝語の [$t\check{c}hr^{33}$] とラフ語の ci [tsi^{33}]（中国語の「使」に相当）が同源語であるご教示いただいた。ここに感謝申し上げる。

¹³ 母音の表記の差異は引用した資料の表記に違いによる。各資料の語彙形式及び意味を比較検討した結果、本稿では同じ形態素として扱う。なお、10)–13) までは『藏緬語族語言詞彙』（1992）からの引用。14) は『彝漢簡明詞典』（1984）より引用。

また、[kɿ³³/ku³³] は一部の形容詞（主に性質形容詞）にも前置され、これを動詞化する働きを持つ¹⁴。

Vial (1909: p. 66) は、現代撒尼彝語の [kɿ³³/ku³³] に相当すると推測される *koù* という動詞について、漠然と「作る」という意味を持つ類義語の *moù* に比べて、特に「何かを作る、制作する」といった意味を持つ、と述べている¹⁵。

- | | |
|---|--|
| 10) 自動詞：la ²
倒れる | 他動詞：kɿ ³³ la ²
倒す |
| 11) 自動詞：qæ ⁴⁴ qu ²
曲がる | 他動詞：kɿ ³³ qæ ⁴⁴ qu ²
曲げる |
| 12) 自動詞：tʂo ⁴⁴
ぐるぐる回る | 他動詞：kɿ ³³ tʂo ⁴⁴
回す |
| 13) 自動詞：ʂi ³³
死ぬ | 他動詞：kɿ ³³ ʂi ³³
死なせる |

以下は、この kɿ³³/ku³³ が反使役の働きをしていると考えられる例である。

- | | |
|---|--------------------------------|
| 14) 自動詞：ku ³³ tʂe ⁵⁵
煮える、炊ける | 他動詞：tʂe ⁵⁵
煮る、炊く |
|---|--------------------------------|

2.3. 迂言的使役

迂言的使役は主に間接使役を表す。基本構造は以下の通り。

使役者 被使役者 + ŋo⁵⁵ (欲する, 必要がある) + VP
(ŋo⁵⁵) qe⁵⁵ (呼ぶ, 頼む)
(ŋo⁵⁵) tʂhi³³ (依頼する, 派遣する)
zɿ⁵⁵ (～させる, ～するよう頼む)¹⁶

¹⁴ kɿ³³/ku³³ がある種の形容詞の前に現れ、動詞を形成している例を挙げる。いずれも『彝漢簡明詞典』（1984）より引用。

a) 形容詞：bo³³ 動詞：ku³³ bo³³
裕福な 裕福になる、富む

b) 形容詞：dle³³ 動詞：ku³³ dle³³
悪い 荒廃する、荒廃させる、台無しにする

¹⁵ Le sens primitive de *moù* est: faire, et il a pour synonyme : *koù*, ils se prennent très facilement l'un pour l'autre; cependant *Moù* a plutôt le sens vague que nous donnons au verbe—faire—... 中略 ... tandis que *koù* a le sens plus special de—faire, fabriquer quelque chose—...

¹⁶ 中国語の「让（～させる）」の借用とも考えられるが、現段階では詳細不明。

上記 ηo^{55} / $q\epsilon^{55}$ / $t\check{c}hr^{33}$ / $z\Lambda^{55}$ のうち、最も広く用いられるのは $q\epsilon^{55}$ である。容認使役にも強制使役にも用いられる。

(ηo^{55}) $t\check{c}hr^{33}$ 及び $z\Lambda^{55}$ を用いると丁寧な表現になり、特に人に何かを依頼する際に用いられる。

ηo^{55} については、使役の強制の度合いやその機能など、今後さらなる調査が必要である。よって、稿を改めて論じたい¹⁷。

また、これら以外にも、表現する内容によって vi^{33} 「(手に) 取る」, mo^{55} 「言いつける、言い聞かせる」などが使用される¹⁸。

2.3.1. 間接使役

以下に関節使役の例を挙げる。

- 15) a. ηe^{33} kh^{33} $q\epsilon^{55}$ / ηo^{55} / ηo^{55} $q\epsilon^{55}$ / $z\Lambda^{55}$ $q\epsilon^{33}$ be^{21} $t\check{c}i^{33}$ $z\dot{i}^{33}$
 1sg 3sg call/ want/ want to call/ make PART Beijing go

私は彼を北京へ行かせる。

- b. ηe^{33} kh^{33} $q\epsilon^{55}$ / ηo^{55} / ηo^{55} $q\epsilon^{55}$ / $z\Lambda^{55}$ $q\epsilon^{33}$ be^{21} $t\check{c}i^{33}$ me^{21} $z\dot{i}^{33}$
 1sg 3sg call/ want/ want to call/ make PART Beijing NEG go

私は彼を北京へ行かせない。

- 16) ηe^{33} li^{33} $t\check{c}hu^{21}$ ze^{21} $q\epsilon^{55}$ $t\check{c}e^{33}$ do^{33} dzi^{21} xe^{33}
 1sg PART puppy call run away PERF

私は子犬を逃した。

16) のように、 $q\epsilon^{55}$ は、被使役者が人間でなくとも用いることができる¹⁹。

¹⁷ ηo^{55} は「欲する、必要がある」という意味を持ち、直接目的語を取る動詞としても、動詞の後に置かれる助動詞としても機能する。また、行為の対象を示す「～に対して/～を」という助詞としての機能も持つが、その場合にもやはり欲求・必要性という意味を多分に含んでいるようである。このように、助詞として用いられる際にも話者の強い要求を示すことから、動詞 ηo^{55} の文法化が進んだ結果、助詞としての機能が生じたと推測される。しかしながら、現段階ではその語源的関連性など詳細不明のため、本稿ではこれ以上論じない。ただし、 ηo^{55} が撒尼彝語の使役表現中に出現する際、特に $q\epsilon^{55}$ 及び $t\check{c}hr^{33}$ とともに現れる場合には、 ηo^{55} の現れる語順が通常助動詞として現れる時と異なっていることから、被使役者、つまり実際に行為を行う者を示すマーカーとして機能していると判断してよいだろう。

¹⁸ 以下の例文を参照されたい。

ア) ηe^{33} i^{33} me^{33} li^{33} ηe^{33} vi^{33} / mo^{55} $q\epsilon^{33}$ kh^{33} m^{33} ke^{33}
 my mother PART 1sg take/exhort 3sg help

母は私に彼を手伝わせる。

イ) ηe^{33} i^{33} me^{33} li^{33} ηe^{33} vi^{33} / mo^{55} $q\epsilon^{33}$ kh^{33} $th\Lambda^{21}$ m^{33} ke^{33}
 my mother PART 1sg take/exhort 3sg PROH help

母は私に彼を手伝わせない。

ηo^{33} 同様 vi^{33} も文法化の過程にあり、動詞としてよりも多くの場合対格・与格標識として機能していると推察する。特に使役表現においては、被使役者 = VP で提示される行為の実行者を示すマーカーとして機能していると考えられる。

¹⁹ 16) では、 li^{33} を用いなくとも非文ではないが、話者によってはこれを多用する者もいる。

- 17) a. $r^{55} \eta^{33}$ $\eta e^{33} me^{33}$ ηe^{33} qe^{55} $ly^{31} thu^{31}$ zi^{33} $qe^{33} zi^{33}$
 yesterday my mother lsg call go out play
 昨日母は私を遊びに行かせた。
- b. $r^{55} \eta^{33}$ $\eta e^{33} me^{33}$ ηe^{33} qe^{55} $ly^{31} thu^{31}$ zi^{33} $qe^{33} zi^{33}$
 yesterday my mother lsg call go out play
 me^{21} di^{31}
 NEG may, can
 昨日母は私を遊びに行かせなかった²⁰。

2.3.2. 二重使役

2.3.2.1. 直接使役+間接使役パターン

以下に間接使役と直接使役からなる二重使役の例を示す。

- 18)²¹ a. ηe^{33} kh^{33} qe^{55} $zi^{21} le^{33}$ le^{33} zi^{33}
 lsg 3sg call hot water boil go
 私は彼に水を沸かしに行かせる。(沸かしに行くように言う。)
- b. ηe^{33} kh^{33} ηo^{55} $zi^{21} le^{33}$ le^{33} zi^{33}
 lsg 3sg want hot water boil go
 私は彼に水を沸かしに行かせる。
- c. ηe^{33} kh^{33} $t\check{c}h^{33}$ $zi^{21} le^{33}$ le^{33} zi^{33}
 lsg 3sg ask hot water boil go
 私は彼に水を沸かしに行くよう頼む。
- d. ηe^{33} kh^{33} $\eta o^{55} t\check{c}h^{33}$ $zi^{21} le^{33}$ le^{33} zo^{33}
 lsg 3sg want to ask hot water boil need
 私は彼に水を沸かすよう頼まなければならない。
- e. ηe^{33} kh^{33} qe^{55} $zi^{21} le^{33}$ le^{33} zo^{33}
 lsg 3sg call hot water boil need
 私は彼に水を沸かささなければならない。

²⁰ 17) b. の [di^{31}] という語は、その意味するところも使われ方も中国語の「可以」によく通じ、許可や容認を示す。

²¹ c, d は a, b よりも丁寧な言い方である。また、 $\eta o^{55} t\check{c}h^{33}$ や $t\check{c}h^{33}$ を用いると、撒尼彝語話者にとっては若干漢語的表現に聞こえるようである。

- f. nɪ³³ khɪ³³ qɛ⁵⁵ zɪ²¹ ɬe³³ ɬe³³ zo³³ zo³³
 2sg 3sg call hot water boil need need

あなたは彼に水を沸かさせる必要があるのか？

- g. ŋe³³ khɪ³³ qɛ⁵⁵ zɪ²¹ ɬe³³ ɬe³³ me²¹ zo³³
 1sg 3sg call hot water boil NEG need

私は彼に水を沸かさせる必要はない。

- 19) a. sɪ⁵⁵ pe³³ phi⁵⁵ xe³³
 bowl break PERF

茶碗が割れた。

- b. khɪ³³ sɪ⁵⁵ pe³³ phi⁵⁵ xe³³
 3sg bowl break PERF

彼は茶碗を割った。

- c. ŋe³³ lɪ³³ khɪ³³ tɕhɪ³³ qɛ³³ sɪ⁵⁵ pe³³ phi⁵⁵ xe³³
 1sg PAR 3sg ask PART bowl break PERF

私は彼に茶碗を割らせた²²。(依頼の度合いが強い表現)²³

- d. ŋe³³ khɪ³³ qɛ⁵⁵ sɪ⁵⁵ pe³³ thɰ²¹ phi⁵⁵ xe³³
 1sg 3sg call bowl PROH break PERF

私は彼に茶碗を割らせなかった²⁴。

- 20) a. ŋe³³ khɪ³³ m̥³³ ke³³
 1sg 3sg help

私は彼を手伝う。

- b. ŋe³³ ɪ³³ me³³ lɪ³³ ŋe³³ qɛ⁵⁵ khɪ³³ e⁵⁵ m̥³³ ke³³
 my mother PART 1sg call 3sg PART help

母は私に彼を手伝わせる。

²² 19) c. の qɛ³³ は、2つの動作をつなぐ助詞。

²³ tɕhɪ³³ が用いられている c の例文の場合は、割るのを躊躇している相手に対して、「(大丈夫だから) 割ってくれ。」と依頼しているニュアンスがある。ŋo⁵⁵/qɛ⁵⁵/zɰ⁵⁵ も出現可能であるが、依頼の度合いは低いと思われる。

²⁴ ŋo⁵⁵/tɕhɪ³³/zɰ⁵⁵ も出現可能。

- c. ηe^{33} i^{33} me^{33} $lɿ^{33}$ ηe^{33} qe^{55} khr^{33} e^{55} $m̐^{33}$ ke^{33}
 my mother PART 1sg call 3sg PART help
 me^{21} zo^{33}
 NEG need

母は私に彼を手伝わせない。

2.3.2.2. 間接使役+間接使役パターン

次に、間接使役と間接使役による二重使役の例を挙げる。

- 21) a. ηe^{33} ($lɿ^{33}$) khr^{33} qe^{55} ni^{21} do^{21} be^{33}
 1sg (PART) 3sg call Sani language speak
 私は彼に撒尼語を話させる²⁵。
- b. ηe^{33} khr^{33} qe^{55} ni^{21} do^{21} $th\Lambda^{21}/me^{21}$ be^{33}
 1sg 3sg call Sani language PROH/ NEG speak
 私は彼に撒尼語を話させない。
- c. ηe^{33} i^{33} me^{33} $lɿ^{33}$ ηe^{33} $\eta o^{55}/t\check{c}hr^{33}$ qe^{33}/qe^{55} khr^{33}
 my mother PART 1sg want/ ask PART/ call 3sg
 ni^{21} do^{21} be^{33}
 Sani language speak
 母は私をして（私に命じて）彼に撒尼語を話させる。
- d. ηe^{33} i^{33} me^{33} $lɿ^{33}$ ηe^{33} $\eta o^{55}/qe^{55}$ khr^{33} ni^{21} do^{21}
 my mother PART 1sg want/ call 3sg Sani language
 me^{21} be^{33}
 NEG speak
 母は私をして（私に命じて）彼に撒尼語を話させない。
- e. ηe^{33} i^{33} me^{33} $lɿ^{33}$ ηe^{33} qe^{55} khr^{33} qe^{55} ʈe^{33} do^{21}
 my mother PART 1sg call 3sg call Chinese
 me^{21} be^{33}
 NEG speak
 母は私をして（私に命じて）彼に漢語を話させない。

²⁵ 例えば、自分が撒尼彝語を子どもに教えて、話せるようにするといった場合は、次のように言う。

ηe^{33} $lɿ^{33}$ ni^{21} do^{21} mo^{55} Λ^{21} qe^{33} ze^{21} be^{33}
 1sg PART Sani Language to teach child to speak
 私が子どもに撒尼彝語を（教えて）話させる。

- 22) a. ηe^{33} $khɪ^{33}$ qe^{55} $\zeta\tilde{\Lambda}^{33}$ $phi\tilde{e}^{33}$ ne^{33}
 1sg 3sg call picture look, see
 私は彼に写真を見せる²⁶。
- b. ηe^{33} i^{33} me^{33} li^{33} ηe^{33} $\eta o^{55}/qe^{55}$ $khɪ^{33}$ qe^{55} $\zeta\tilde{\Lambda}^{33}$ $phi\tilde{e}^{33}$
 my mother PART 1sg want/ call 3sg call picture
 ne^{33}
 look, see
 母は私をして（私に命じて）彼に写真を見させる。
- c. ηe^{33} i^{33} me^{33} li^{33} ηe^{33} $\eta o^{55}/qe^{55}$ $khɪ^{33}$ qe^{55} $\zeta\tilde{\Lambda}^{33}$ $phi\tilde{e}^{33}$
 my mother PART 1sg want/ call 3sg call picture
 $\eta\Lambda^{21}$ ne^{33} me^{21} di^{33}
 look, see NEG may
 母は私をして（私に命じて）彼に写真を見させない。
- 23) a. ηe^{33} ni^{33} ηo^{55} $\dot{\iota}o^{33}$ $b\epsilon^{33}$ vi^{33} qe^{33} Λ^{33} ti^{55} ze^{21} fi^{55}
 1sg 2sg want clothes take PART very little son dress
 私はあなたに私の息子に服を着せて欲しい。
- b. ηe^{33} ni^{33} ηo^{55} $\dot{\iota}o^{33}$ $b\epsilon^{33}$ vi^{33} qe^{33} Λ^{33} ti^{55} ze^{21}
 1sg 2sg want clothes take PART very little son
 $th\Lambda^{21}/me^{21}$ fi^{55}
 PROH/ NEG dress
 私はあなたに私の息子に服を着せて欲しくない。

以下第3章では、撒尼彝語と他の彝語方言の使役表現を比較し、その特徴や差異について述べる。

2.3.3. 被使役者が主題化される場合

迂言的使役において、被使役者が主題化される場合がある。二重使役においては、通常使役者から「第三者にある行為をするよう命じられる者」が主題化される。言い換えれば、二重使役表現中最右の被使役者はほとんど主題化されない²⁷。この時、主題化された被使役者は文頭に置かれ、使役を示す $\eta o^{55}/t\epsilon hr^{33}/z\Lambda^{55}$ は出現せず、無標となる。また、この時の構造が同方言の受身

²⁶ ne^{33} は文末においては $[n\epsilon^{31}]$ のように、やや緊喉を帯び、且つ下降調で発音される。

²⁷ 現段階では、筆者のデータには該当例がない。ただし、今後の調査により、最右の使役者が主題化されるような例が見つかる可能性もある。今後の調査課題としたい。

的表現の構造とほぼ等しくなるということも、併せて記しておく。この点に関しては今後更に調査し、改めて論じたい。

- 20) b. ηe^{33} i^{33} me^{33} li^{33} ηe^{33} qe^{55} $khɿ^{33}$ e^{55} m^{33} ke^{33}
 my mother PART 1sg call 3sg PART help

母は私に彼を手伝わせる。

- b'. ηe^{33} ηe^{33} i^{33} me^{33} li^{33} $khɿ^{33}$ e^{55} m^{33} ke^{33}
 1sg my mother PART 3sg PART help

母は私に彼を手伝わせる。(私は母によって彼を手伝わされた。)

3. 他の彝語方言の使役表現との比較²⁸

3.1. 東南部方言弥勒下位方言（阿細彝語）²⁹

基本構造

使役者 被使役者 + dze^{33} (行為者マーカ) + VP + mo^{33} (～させる)

阿細彝語では、被使役者は通常与格標識として使用される dze^{33} で示す。また、VP の後には、本来「作る」という意味の使役動詞 mo^{33} が義務的に置かれる。以下の例文を参照されたい。

- 24) $kɿ^{33}$ ηo^{33} dze^{33} va^{33} ta^{33} li^{33} mo^{33}
 3sg 1sg AGT there go make

彼は私をそこへ行かせた。

- 25) ηo^{33} mo^{33} $sɿ^{33}$ vu^{33} ηo^{33} dze^{33} zi^{33} tse^{33} Λ^{11} li^{33} mo^{33}
 my mother night 1sg AGT outside NEG go make

母は私を夜外出させない。

3.2. 東南部方言文西下位方言（阿扎彝語）³⁰

基本構造

使役者 被使役者 + le^{33} (行為者マーカ) + VP + le^{55} (～させる)

阿扎彝語では被使役者は、通常与格標識として使用される le^{33} で示す。また、

²⁸ 特に注記がない場合、例文は全て筆者自身のデータからの引用である。

²⁹ 本稿では以下阿細彝語と呼ぶ。

³⁰ 本稿では以下阿扎彝語と呼ぶ。

VP の後には、本来「作る」という意味の使役動詞 le^{55} が義務的に置かれる。以下の例文を参照されたい。

- 26) ηa^{33} mo^{33} mi^{42} $tchi^{42}$ ηa^{33} le^{33} ma^{31} $t\gamma^{31}$ le^{55}
 my mother night lsg AGT NEG go make

母は夜私を外出させない。

- 27) ku^{33} le^{33} pe^{33} le^{55}
 3sg.DAT AGT speak make

彼に話させなさい。

3.3. 南方方言石屏下位方言（尼蘇彝語）³¹

基本構造

使役者 [被使役者 + la^{33} (行為者マーカー) / $th\Lambda^{33}$ (～させる)]
 + [VP] + [bi^{21} (与える)]

尼蘇彝語では、被使役者は通常与格標識として使用される la^{33} 、あるいは「(に) させる」という意味の動詞 $th\Lambda^{33}$ で示される。また、VP の後には、本来「与える」という意味の使役動詞 bi^{21} が義務的に置かれる。以下の例文を参照されたい。

- 28) su^{33} $k\gamma^{55}$ $p\gamma^{21}$ ηo^{21} $th\Lambda^{21}$ ηi^{55} bi^{21}
 book that CL lsg let read give

私にあの本を読ませてください。

- 29) ηo^{33} mo^{21} ηo^{21} mu^{33} $tchi^{21}$ ma^{21} du^{33} le^{21} bi^{21}
 my mother lsg night NEG go out give

母は私を夜外出させない。

- 30) a^{55} $p\gamma^{21}$ $z\gamma^{21}$ a^{33} lu^{21} e^{33} $z\gamma^{21}$ $dz\gamma^{33}$, a^{21} so^{33} la^{33} $z\gamma^{21}$
 Aben go Alu also go say, who AGT go

to^{21} bi^{21}
 ahead, before give

アーペンもアールーも行きたいそうだ、あなたはどちらを先に行かせるの？³²

³¹ 『彝語簡志』(1985) の分類による。本稿では以下ニ蘇彝語と呼ぶ。

³² 例文 30) は、李生福 (1996: p. 196) より引用。

3.4. 撒尼彝語の使役表現の特徴

上述の内容を踏まえ、彝語諸方言と撒尼彝語を比較すると、撒尼彝語の使役表現の特徴は以下のようにまとめられる。

1. 他の彝語方言では使役者は無標であるが、撒尼彝語では li^{33} という使役者マーカーが現れることが多い。この li^{33} は、受動的表現においては行為者を示すマーカーとして義務的に現れる。一方、使役表現においては、被使役者によってなされる行為のそもそもの発生源、つまり、「おおもとの行為者」として、 li^{33} で明示化される傾向が高いと考える。
2. 被使役者は、 $\eta o^{55} / qe^{55} / t\check{c}hi^{33} / z\Delta^{55}$ といった、一部文法化していると考えられる動詞が義務的に後続し、被使役者であることを明示している。
3. 他の彝語方言と異なり、撒尼彝語の迂言的使役表現では VP の後に使役動詞が現れない。
4. 文中において、使役者は通常最左におかれ、最右に現れるものが被使役者＝実際の行為者となる。
5. 間接使役と間接使役からなる二重使役において、第一の被使役者が主題化され最左に置かれる場合、上記 4 とは異なる語順を取り、且つ無標となる。

4. 結語

撒尼彝語に関する先行研究は少なくないが、使役表現についてはこれまであまり詳細な報告がなされてこなかった。そこで本稿では、先行研究のデータや記述に加え、筆者の言語データを整理・分析し、撒尼彝語の使役表現についての初歩的な考察を試みた。これにより、基本的な撒尼彝語の使役表現のパターンを示し、他の彝語方言との比較によりその特徴を示すことができた。

しかしながら、語彙的使役に関するデータはほとんどが二次資料からの引用であったため、今後の課題として、それらの実際の使用状況を現地調査で検証し、同時に語彙の収集も改めて行いたい。

略号

AGT: 行為者	CL: 類別詞	DAT: 与格	NEG: 否定
PART: 助詞	PERF: 完了	PROH: 禁止	1sg: 一人称単数
2sg: 二人称単数	3sg: 三人称単数		

参考文献

中国語文献

- 陳士林他. 1985. 『彝語簡志』北京：民族出版社。
 戴慶厦他. 1992. 『藏緬語族語言詞彙』中央民族學院出版社。
 何德宗. 1988. 『阿細文語法』（孔版）
 李生福. 1996. 『彝語南部方言研究』北京：民族出版社。
 馬學良. 1951. 『撒尼彝語研究』上海：商務印書館。
 普璋開他編著. 2005. 『滇南彝文字典』昆明：雲南民族出版社。
 武自立, 紀嘉發編著. 2011. 『漢彝簡明詞典』成都：四川民族出版社。
 袁家驊. 1953. 『阿細民歌及其語言』北京：中國科學院。
 雲南省路南彝族自治州縣文史研究室編. 1984. 『彝漢簡明詞典』昆明：雲南民族出版社。
 藏緬語語音和詞彙編寫組. 1991. 『藏緬語語音和詞彙』北京：中國社會科學出版社。

中国語以外の文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. 2015. *The Art of Grammar*. Oxford University Press.
 Bradley, David. 2002. “The subgrouping of Tibeto-Burman”, *Medieval Tibeto-Burman Languages*. Leiden: Brill. 73–112.
 Comrie, Bernard. 1976. “The syntax of causative constructions: cross-language similarities and divergences”. In Shibatani, Masayoshi (ed.), *The Grammar of Causative Constructions*, 261–312. New York: Academic Press.
 ———. 2006. Transitivity pairs, markedness, and diachronic stability. *Linguistics* 44(2): 303–318.
 Dixon, R. M. W. and Aikhenvald, Alexandra Y. 2000. *Changing valency Case studies in transitivity*. Cambridge University Press.
 General Statistics Office of Vietnam: Central Population and Housing Census Steering Committee. 2010. “The 2009 Vietnam Population and Housing Census: Completed Results”. p. 135. Retrieved 2013-11-26.
 Haspelmath, Martin. 1993. More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In Bernard Comrie & Maria Polinsky (eds.), *Causatives and transitivity*. Amsterdam: Benjamins. 87–120.
 Hayashi, Norihiko (林範彦). 2009. 『チノ語文法（悠楽方言）の記述研究』。神戸市外国語大学研究叢書第43冊。神戸市外国語大学外国語研究所。
 Iwasa, Kazuo. 2004. Axi and Azha—Descriptive, Comparative, and Sociolinguistic Analyses of Two Lolo Dialects of China—. Ph.D dissertation, Kobe City University of Foreign studies.
 Lama, Ziwo Qiu-Fuyuan. 2012. Subgrouping of Nisoic (Yi) Languages: A Study from the Perspectives of Shared Innovation and Phylogenetic Estimation. Ph.D. dissertation, University of Texas at Arlington.
 Liétard, Alfred. 1909a. “Notions de grammaire lolo (dialecte a-hi)”. Hanoi: *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 9.2. pp. 285–314.
 ———. 1909b. “Notes sur les dialects lolo”, Hanoi: *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 9.3. pp. 549–572.
 ———. 1911. “Essai de dictionnaire lo-lo français, dialecte a-hi”. Leiden: *T'oung Pao* 2.12. pp. 1–37, 123–156, 316–346, 544–558.
 ———. 1912. “Vocabulaire français lolo, dialecte a-hi”. Leiden: *T'oung Pao* 2.13. pp. 1–42.
 Maruta, Tadao (丸田忠雄) and Suga, Kazuyoshi (須賀一好). 2000. 『日英語の自他交替』。東京：ひつじ書房。
 Matisoff, James A. (with Stephen P. Barow and John B. Lowe). 1996. Languages and Dialects of Tibeto-Burman. (STEDT Monograph Series, No. 2) Berkeley: Center for Southeast Asia Studies, University of California, Berkeley.
 ———. 2006. *English-Lahu Lexicon*. University of California Press.
 Sasaki, Yoshihito (佐々木勲人). 2002. 「中国語における使役と受益—比較方言文法の観点から—」。筑波大学現代言語学研究会編『事象と言語形式』。東京：三修社。pp. 177–197.
 Schliesinger, Joachim. 2003 (digitized in 2014). *Ethnic Groups of Laos volume 4 Profile of Sino-Tibetan-Speaking Peoples*. E-published by BooksMango, Thailand.
 Sun, Hongkai. 1999. On the Category of Causative verbs in Tibeto-Burman Languages. *Linguistics of Tibeto-Burman Area. Volume 22.1*. pp. 183–199.
 Vial, Paul. 1909. *Dictionnaire Français-Lolo dialecte gni*. Hong Kong.

チノ語悠楽方言の使役

林 範彦

1. はじめに



図1 チノ族居住区〔悠楽方言〕(加藤 2000 を筆者修正)

チノ語（基諾語；Jino, Jinuo）は中国雲南省景洪市基諾郷および補遠山地区に居住するチノ族（基諾族）の話す言語である。系統的にはチベット・ビルマ語派ロロ・ビルマ語支に属する。方言としては大きく悠楽方言 [ISO 639-3; jiu] と補遠方言 [ISO 639-3; jiy] に分かれる。チノ族の人口は 23,413 人（2010 年の人口統計）であるが、流暢な話者人口の詳細は不明である¹。本稿では悠楽方言のデータを用いる²。以下、本稿では「チノ語」と略する。

¹ Bradley (2007) および Endangered Language Project では悠楽方言の話者は 10,450 人未満、補遠方言の話者は 1,000 人未満であると推定している。悠楽方言について Endangered Language Project は 2018 年 3 月の時点で Severely endangered（深刻な危機に瀕した状態）の評価を与えている。

² 本稿では主として 2003 年から 2017 年までに現地調査により得られた悠楽方言バカ方言のデータを用いる。例示するデータは自然発話と作例データをあわせて使用する。ただし、本稿においては記述の網羅性のため、作例データが中心となることを断っておきたい。調査協力者は主に W 氏（1980 年代生まれ；女性）、Y 氏（1950 年代生まれ；女性）である。本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（ないし補助事業）(20720111, 23720209, 26370492, JP16H02722, JP17H02335) および三島海雲記念財団の援助を受けている。また現地調査については中国雲南民族博物館（高力青館長・謝沫華（前）館長・高翔氏）・西雙版納州民族宗教局（楊紹華氏）ほかの協力も得た。さらに本稿の内容は 2018 年 3 月 11 日に京都大学人文科学研究所にて行われた TB+ 会議で発表した。同研究会の代表である池田巧教授はじめ、参加者から貴重なご意見を多数いただいた。ここに記して謝意を表したい。

類型論的にはチノ語はSVあるいはAPVの語順をとる。また、名詞修飾表現については、形容詞は名詞に後置され、連体節（いわゆる関係節）はデフォルトでは名詞に前置される。チノ語は周辺諸言語に比して膠着性の高い言語である。

本稿ではチノ語の使役に関する諸現象について記述する。ただし、後述する使役接辞をめぐる問題（いわゆる分析的使役の問題）に限定して記述する。これはチノ語には語彙的使役や動詞の形態的な自他交替が基本的に見られないことによる。

本稿は以下の手順で論じる。第2節ではチノ語の動詞複合形式の概要を示す。第3節と第4節では使役に関するデータの分析を行う。第3節では使役を標示する各接辞と使役接辞の強制度の階層を取り上げる。第4節では二重使役（/三重使役）の問題を記述する。第5節でチノ語の使役の地域言語学的特徴について言及する。第6節で結論を述べる。

なお、チノ語の先行研究としては主として蓋（1986）、林（2009）、蔣（2010）などがある。本稿はチノ語の使役を記述言語学的な観点から整理・分析し、林（2009）を修正・補完する。蓋（1986）と蔣（2010）は本稿とは悠楽方言の異なる変種を扱っており、記述の枠組みも大きく異なる。本稿の分析との差異については注で最小限に言及する。

2. チノ語の動詞複合形式

2.1. 動詞複合形式

チノ語の動詞語根は一般にその前後に接頭辞類と接尾辞類を付加されて用いられる。この全体の構造を「動詞複合形式 (verbal complex)」と呼ぶ。模式化すると、(1) のようになる。

- (1) [接頭辞類 (PREFIX)]- 動詞語根 -[接尾辞類 (SUFFIX)]

それぞれの接頭辞類と接尾辞類のグループは、その全てが共起することはないものの、以下の形と順序に展開できる。

- (2) a. [接頭辞類 (PREFIX)]=(prev)-(pref₁)-(pref₂)-(pref₃)
 b. [接尾辞類 (SUFFIX)]
 =(acc)-(B/R)-(T/A₁)-(T/A₂)-(caus)-(aux₁)-(aux₂)-(T/A₃)-(still)-(T/A₄)

各スロットに入る具体的な接辞類も例示しておこう。

- (3) [接頭辞類 (PREFIX)]
 prev (前動詞): tɕɛ⁴²-, ʃɔ- (「とても ~」), tʃɣ- (「さらに ~」), ku- (「また ~」)

pref₁ (接頭辞): a₁- (名詞化), ma- ~mɔ- (否定), thə- (禁止), a₂- (禁止)

pref₂: pi-, khø-, ja- (使役)

pref₃: m- (使役)

(4) [接尾辞類 (SUFx)]

acp (達成): -khjo (達成)

B/R (受益・相互): -m̥ə (受益), -ji (相互)

T/A₁ (テンス・アスペクト): -kɔ (進行)

T/A₂: -tɔ (経験)

caus (使役): -vi (使役)

aux₁ (助動詞): -khju (可能), -tɕhɛ (「あえて～する」)

aux₂: -ŋu (願望), -m̥ɣ (「～のようだ」)

T/A₃: -mɣ (過去), -me (未来)

still: -suw (「まだ～」)

T/A₄: -a (完了)

なお、重要な点として、同一スロットの接辞類が同一の動詞複合形式内に生起することはない。例えば、pref₂ の位置にある pi- と khø- は同一スロットにあるため、pi-khø- あるいは khø-pi- といった形で同一の動詞複合形式内に生起することはできない。

3. チノ語の使役接辞とその機能

3.1. 使役接辞の一覧と使役構文

チノ語の使役接辞は2節の(3)と(4)において、太字で表示したものである。ここで再度整理すると(5)の通りである。

(5) pi-, khø-, ja-, m-, -vi

さて、使役接辞の生起しない述語が用いられた態のことを「普通態 (simplex)」と呼ぶこととする。チノ語においては他の多くのチベット・ビルマ諸語と同様に、普通態の構文は以下の(6)のように整理できる。なお、ここでは形容詞述語は「述語 (自動詞語根)」に含むこととする。

- (6) a. [主語][述語 (自動詞語根)]
 b. [主語][目的語][述語 (他動詞語根)]

チノ語において、いくつかのインド・ヨーロッパ諸語のように形態統語的に主語あるいは目的語を規定することはきわめて難しい。ここでは、Dixon (1994) で示されているように、自動詞の要求項を「主語」と呼ぶこととする。チノ語は主格・対格型の言語である。他動詞述語の要求項は通常 2 項（以上）あるが、自動詞の「主語」と同一の格標示となる項が同じく「主語」となる。それ以外の項が「目的語」である。

その上で、使役構文のモデルを整理したい。(5) の使役接辞が動詞複合形式内で生起すると、使役の意味が生じる。この使役接辞の生起した述語を「使役述語」と呼ぶことにする。使役述語の生起する使役構文は以下のように整理される。なお、(7) では、動詞語根が自動詞である使役述語を「使役述語（自動詞語根）」、動詞語根が他動詞である使役述語を「使役述語（他動詞語根）」と記しておく。

- (7) a. [使役者][被使役者] (=va⁵⁵) [使役述語（自動詞語根）]
 b. [使役者][被使役者] (=va⁵⁵) [被動者 / 対象][使役述語（他動詞語根）]

(7) では名詞句の標示が意味役割を用いた形となっている。(7) の普通態との対応関係としては、普通態の主語項が使役構文の「被使役者」に、普通態の目的語項が使役構文の「被動者 / 対象」となる。使役構文中の「使役者」の項は使役述語中の使役接辞によって認可される。「被使役者」が有生名詞であれば、後置詞 =va⁵⁵ が後接しうる。一方、「被使役者」が代名詞の場合は、斜格形をとる。

以下本節では、(5) で掲げた各使役接辞の機能を記述していく。

3.2. pi-

pi- は元来「与える」という意味を持つ動詞 pi⁵⁵ が文法化した接頭辞である。(8) で見るように、動詞複合形式内で生起すると使役述語を構成する。

- (8) a. zɔ⁵⁵ku⁵⁵ mɛ³³ɲu⁵⁵ + ʃɔ⁵⁵ tɕɔ⁵⁵-nœ⁴⁴.
 子供 牛 + 肉 食べる -SFP
 子供が牛肉を食べる。
- b. a⁵⁵mɔ⁴⁴ zɔ⁵⁵ku⁵⁵(=va⁵⁵) mɛ³³ɲu⁵⁵ + ʃɔ⁵⁵ pi⁵⁵-tɕɔ⁵⁵-nœ⁴⁴.
 母 子供 (=DAT) 牛 + 肉 CAUS- 食べる -SFP
 母は子供に牛肉を食べさせる。

(8a) は普通態、(8b) はそれに対する使役態の一例である。(8b) は(8a) に比べ、使役者項である a⁵⁵mɔ⁴⁴ 「母」が生起しているが、これは使役接辞 pi- が認可している。

さて、一般に使役における有効な分析手法として容認使役 (permissive

causation) と強制使役 (coercive causation) の 2 分法がある。pi- は本質的には容認・強制どちらにも指定されないと考えられるが、全体的には、(9) に見るように、容認使役の読みとなる傾向が強い。

- (9) nə⁴² ŋɔ³⁵ pi⁵⁵-le⁴⁴-la⁴²?
 2SG.NOM 1SG.OBL CAUS- 行く -Q
 行ってもいい? (= [直訳] あなたは私に行かせるのか?)

pi- を用いた使役では、被使役者は有生物であれば、人間でなくても容認される。

- (10) a. ʃao³³li³³ ja³⁵ (= va⁵⁵) me³³tu⁴⁴ pi⁵⁵-tsɔ⁴⁴-mɯ³⁵.
 李さん 鶏.OBL (=DAT) とうもろこし CAUS- 食べる -PAST
 李さんは鶏にとうもろこしを食べさせた。
- b. a⁵⁵mo⁴⁴ khɯ⁴⁴ jo³³me⁵⁵ tso³³+tha⁵⁵la⁴² pi⁵⁵-ta³⁵+ja⁴⁴-me³⁵.
 母 それ 猫 家+上 CAUS- 登る+いく -PAST
 母はその猫を屋根に上らせた。

(10) はいずれも被使役者が有生物であるが人間ではない(「鶏」と「猫」)。しかし、pi- による使役文において容認される。このことは 3.3 と 3.4 に述べる使役接辞 khø- と ja- と大きく異なる点である。

3.3. khø-

khø- は強制使役専用の動詞接頭辞である。由来は不明である。pi- 同様、(11) で見るように、動詞複合形式内で生起すると使役述語を構成する。

- (11) a. ʃao³³li³³ tɕe³³phu⁵⁵ ma³³-tə⁵⁵+jo³³-mɯ³⁵.
 李さん 酒 NEG- 飲む+良い -NML
 李さんは酒が飲めない。
- b. ʃao³³wan³⁵ ʃao³³li³³ tɕe³³phu⁵⁵ khø³³-tə³⁵-mɯ³⁵.
 王さん 李さん 酒 CAUS- 飲む -NML
 王さんは李さんに無理やりに酒を飲ませた。

(11b) は (11a) に続く文であるが、ここでは 1 文ずつに分けて、分析する。(11a) は普通態、(11b) は (完全には対応しないが) それに対する使役態の一例であると考えられる。(11b) は (11a) に比べ、使役者項である ʃao³³wan³⁵「王さん」が生起しているが、これは使役接辞 khø- が認可している。

さて、(11) の日本語訳にも付したように、強制使役の読みが一般的に現れる。容認使役の文脈では *khø-* は生起できない。この例の場合、後述する使役接辞 *-vi* が用いられるのが普通である。

- (12) a. **ʃao*³³*waŋ*³⁵ *ʃue*³³*ʃi*³⁵-*ŋu*³³-*mɣ*³⁵.
王さん 勉強する -AUX-NML

*khɣ*³³ *a*⁵⁵*mɔ*⁴⁴ *ʃao*³³*waŋ*³⁵ *khø*³³-*ʃue*³³*ʃi*³⁵-*mɣ*³⁵.
3SG.OBL 母 王さん CAUS- 勉強する -NML

(王さんは勉強したい。(彼の) お母さんは王さんに無理やり勉強させた。)

- b. *ʃao*³³*waŋ*³⁵ *ʃue*³³*ʃi*³⁵-*ŋu*³³-*mɣ*³⁵.
王さん 勉強する -AUX-NML

*khɣ*³³ *a*⁵⁵*mɔ*⁴⁴ *ʃao*³³*waŋ*³⁵ *ʃue*³³*ʃi*³⁵-*vi*³⁵-*mɣ*³⁵.
3SG.OBL 母 王さん 勉強する -CAUS-NML

王さんは勉強したい。(彼の) お母さんは王さんに勉強させた。

khø- の持つもう 1 つの重要な特徴は、被使役者が人間でなければならないことである。(13) を見られたい。

- (13) a. *khur*³³*ŋi*⁵⁵ *zo*³⁵+*ja*⁴²-*nœ*⁴⁴.
犬 歩く+行く -SFP

犬が歩いて行った。

- b. **ʃao*³³*li*³³ *khur*³³*ŋi*⁵⁵ *khø*⁴²-*zo*³⁵+*ja*⁴²-*nœ*⁴⁴.
李さん 犬 CAUS- 歩く+行く -SFP

(李さんは犬を無理やり歩いて行かせた。)

- c. *ʃao*³³*li*³³ *khur*³³*ŋi*⁵⁵ *ka*⁵⁵+*zo*³⁵+*ja*⁴²-*nœ*⁴⁴.
李さん 犬 追う+歩く+行く -SFP

李さんは犬を追い出した。(lit. 李さんは犬を追って, (犬が) 歩いて行った。)

(13a) に対応する使役文として (13b) を構成しようとしても、許されない。コンサルタントとのインタビューでは、人間以外の動物たちのように言葉が通じないものに対しては、*khø-* は用いられないとの判断であった。おそらく、被使役者が人間以外の動物の場合、使役者が直接的な行為を下すことが多く、強制使役の接辞を用いることがないからだと考えられる。

3.4. ja-

ja- は khø- と同様に強制使役専用の動詞接頭辞である。由来は不明である。(14) で見るように、動詞複合形式内で生起すると使役述語を構成する。

- (14) a. ʃao³³li³³ tɕe³³phu⁵⁵ ma³³-tə⁵⁵ + jə³³-mɤ³⁵.
 李さん 酒 NEG- 飲む + 良い -NML
 李さんは酒が飲めない。
- b. ʃao³³waŋ³⁵ ʃao³³li³³ tɕe³³phu⁵⁵ ja³⁵-tə³⁵-mɤ³⁵.
 王さん 李さん 酒 CAUS- 飲む -NML
 王さんは李さんに無理やりに酒を飲ませた。

(14a) は (11a) と同一の例で、(14b) は (11b) の使役接頭辞を ja- に置き換えたものである。やはり、(14a) は普通態、(14b) は（完全には対応しないが）それに対する使役態の一例であると考えられる。そして (11b) と同様に、(14b) は (14a) に比べ、使役者項である ʃao³³waŋ³⁵「王さん」が生起しているが、これは使役接辞 ja- が認可している。

ja- は khø- と極めて高い互換性を持つ。(15) は (12) の使役接頭辞の部分をやはり ja- に置き換えたものであるが、ja- は生起できない。

- (15) *ʃao³³waŋ³⁵ ʃue³³ʃi³⁵-ŋu³³-mɤ³⁵.
 王さん 勉強する -AUX-NML
- khɤ³³ a⁵⁵mɔ⁴⁴ ʃao³³waŋ³⁵ ja³⁵-ʃue³³ʃi³⁵-mɤ³⁵.
 3SG.OBL 母 王さん CAUS- 勉強する -NML
- (王さんは勉強したい。(彼の)お母さんは王さんに無理やり勉強させた。)

更に ja- と khø- が共有するもう 1 つの重要な特徴は、被使役者が人間でなければならないことである。(16) を見られたい。

- (16) a. ŋɔ⁴² khu³³ni⁵⁵ khɤ³⁵ a⁵⁵khri⁵⁵ phi⁵⁵-vi³³-mɤ³⁵.
 1SG 犬 そこ 糞 排泄する -CAUS-PAST
 私は犬にそこで糞を排泄させた。(林 2009: 68)
- b. *ŋɔ⁴² khu³³ni⁵⁵ khɤ³⁵ a⁵⁵khri⁵⁵ ja³⁵-phi⁵⁵-mɤ³⁵.
 1SG 犬 そこ 糞 CAUS- 排泄する -PAST
 (私は犬にそこで糞を無理やり排泄させた。(林 2009: 68))

(16b) に見るように、被使役者が人間でない場合は ja- を用いることができない。

やはり、(16a) のように後述する -vi であれば容認される。

以上のように、ja- と khø- は多くの点で特徴を共有し、互換性が高い。ただし、ja- の方が khø- よりも強制度が高いニュアンスがあるようである。

- (17) a. lao³³si⁵⁵ ŋɔ³⁵=va⁵⁵ tso³⁵ {khø³³/*ja³⁵}-ʃue³³ʃi³⁵-mɣ³⁵.
 先生 1SG.OBL=DAT 家.OBL CAUS-勉強する -PAST
 先生は私に家で無理やり勉強させた。(林 2009: 152)

- b. a⁵⁵mɔ⁴⁴ ŋɔ³⁵ tɕiŋ³³xoŋ³⁵ {khø³³/*ja³⁵}-le³³-mɣ³⁵.
 母 1SG.OBL 景洪 (PLN) CAUS-行く -PAST
 母は私に景洪に無理やり行かせた。

コンサルタントへのインタビューから分析すると、ja- は使役者によって被使役者の行動の実現が確認されなければならないようである。(17) はいずれも使役者が口頭で被使役者に（高い強制的な圧力をかけて）行動を促すことが表現されているものの、被使役者の行為の実現を確認するところに至らないケースである。つまり、「先生」は「私」に確かに家での学習を命じ、「母」は確かに「私」に景洪に行くよう命じるのであるが、実際に学習したか、景洪に行ったかは「先生」も「母」も確認しない。ja- は被使役者の行動が目の前で起こる必要があるようである³。

3.5. m-

m- は元来「作る, する」という意味を持つ動詞 m⁴² が文法化した接頭辞である。(18) で見ると、動詞複合形式内で生起すると使役述語を構成する。

- (18) a. a³³tsi⁵⁵ thø³⁵+lɔ⁴²-nœ⁴⁴.
 木 折れる+くる -SFP
 木が折れた。
- b. khɣ⁴² a³³tsi⁵⁵ m³³-thø³⁵-mɣ⁵⁵.
 3SG.NOM 木 CAUS-折れる -PAST
 彼 / 彼女は木を折った。

(18a) は普通態、(18b) はそれに対する使役態の一例である。(18b) は (18a) に比べ、使役者項である khɣ⁴²「彼 / 彼女」が生起しているが、これは使役接辞 m- が認可している。ただし、他の使役接辞と異なる点がある。他の使役接辞は全て

³ ことによると、ja- と khø- の違いを証拠性 (evidentiality) の違いとして解釈し直すことができるかもしれない。ja- は一次情報に用いられる接辞で、khø- は証拠性の素性が指定されない接辞であるとも分析しうる。ただ、ja- と khø- の違いは非常に小さいため、今後も慎重な分析が必要である。

間接使役 (indirect causation) を標示するが, *m-* は直接使役 (direct causation) を標示する。このため, *m-* の生起する多くの例において, 「他動詞化」(transitivization) が生じたとみなすことも可能である。実際に (18a) の動詞 *thø*³⁵ を自動詞「折れる」, (18b) の *m*³³-*thø*³⁵ を他動詞「折る」と解釈することもできよう。

他方, (18) の使役接辞の位置に間接使役を表す接辞をおいても, (19) に示すように, 適格な文とはみなされない。

- (19) a. **khɣ*⁴² *a*³³*tsi*⁵⁵ {*pi*⁴⁴/*khø*⁴²/*ja*³⁵}-*thø*³⁵-*mɣ*⁵⁵.
 3SG.NOM 木 CAUS- 折れる -PAST
- b. **khɣ*⁴² *a*³³*tsi*⁵⁵ *thø*³⁵-*vi*³³-*mɣ*⁵⁵.
 3SG.NOM 木 折れる -CAUS-PAST
- (彼 / 彼女は木を折った。)

また興味深いことに, *m-* は形容詞の語根にも前接されうる。以下の例 (20) を見られたい。

- (20) *ja*⁵⁵*ŋ*⁴⁴ *lao*³³*tonj*⁵⁵-*mɛ*⁵⁵. *a*⁵⁵*prø*⁴⁴ *m*³³-*prø*⁵⁵-*khjo*³⁵-*xa*⁴⁴.
 今日 働く -PAST ドロドロだ CAUS- ドロドロだ -ACP-PFT
- 今日は働いた。すっかりドロドロになってしまった。(林 2009: 69)

(20) の第 2 文に注目されたい。*a*⁵⁵*prø*⁴⁴ は「ドロドロだ」という形容詞である。チノ語の形容詞は [*a-/la-/jo-* 語根] の構成を持ち, この語根は動詞語根と共通の形態論的特性を持つ。第 2 文後半の *m*³³-*prø*⁵⁵ は使役接辞が付加されていることから, 「ドロドロにする」という解釈となる。日本語話者にとっては大変難しい分析であるが, 省略された部分を補いながら, 可能な限り直訳すると, 「(私の服を) ドロドロな (状態に) すっかりドロドロにした」のような形となろう。このような形容詞語根への *m-* の付加はよく見られる。

また, 一般的に *m-* は静態的 / 状態的な意味特徴を持つ語根に付加されることが多いが, 直接使役を表現する場合であれば, 動態的な語根にも付加される。

- (21) *ʃao*³³*li*³³ *ŋa*³³*zɔ*⁵⁵ *m*³³-*pre*³⁵ + *ja*⁴²-*mɣ*³⁵.
 李さん 鳥 CAUS- 飛ぶ+いく -PAST
- 李さんは鳥を飛ばした。(林 2009: 151)

(21) は動態動詞 *pre*⁴² 「飛ぶ」に *m-* の付加した例である。これは鳥の「意志」に任せて自由に飛ばせるのではなく, 使役者である「李さん」が被使役者「鳥」

⁴ 例では声調交替後の 35 調となっている。

を捕まえて、李さんの手から鳥を「飛ばす」行為を表現している。

以上見てきたように、*m-* は直接使役専用の接辞であり、また直接使役は *m-* でのみ表される。さらに、(18) の例で分かるように、被使役者に有生性 (animacy) や人間性 (humanness) の制限はない。

3.6. -vi

-vi は使役接辞の中で唯一の動詞接尾辞である。由来は不明である。他の使役接辞同様、(22) で見るように、動詞複合形式内で生起すると使役述語を構成する。

- (22) a. çi^{44} $\text{jo}^{33}\text{kha}^{33}$ $\text{t\check{c}e}^{33}\text{phu}^{55}$ $\text{ma}^{55}\text{-t\check{a}}^{55}\text{-a}^{44}\text{-n\check{o}e}^{44}$.
 これ 老人 酒 NEG-飲む -PART-SFP

この老人は酒を飲まない。

- b. $\eta\text{ɔ}^{42}$ çi^{44} $\text{jo}^{33}\text{kha}^{33}$ $\text{t\check{c}e}^{33}\text{phu}^{55}$ $\text{ma}^{33}\text{-t\check{a}}^{55}\text{-vi}^{44}\text{-m\check{y}}^{35}$.
 1SG.NOM これ 老人 酒 NEG-飲む -CAUS-PAST

私はこの老人に酒を飲ませなかった。

(22a) は普通態、(22b) はそれに対する使役態の一例である。(22b) は (22a) に比べ、使役者項である $\eta\text{ɔ}^{42}$ 「私」が生起しているが、これは使役接辞 -vi が認可している。

-vi は間接使役専用で、かつ容認使役の読みをデフォルトで持つ。(22b) はデフォルトでは「この老人の酒を飲みたい意志」が解釈に現れる。

また -vi の被使役者は人間性の制限はない。

- (23) $\text{ʃao}^{33}\text{li}^{33}$ $\eta\text{a}^{33}\text{z\check{o}}^{55}$ $\text{pre}^{35} + \text{ja}^{55}\text{-vi}^{44}\text{-m\check{y}}^{35}$.
 李さん 鳥 飛ぶ+いく -CAUS-PAST

李さんは鳥を飛ばせた。(林 2009: 151)

(23) の被使役者は「鳥」である。加えて、この文のデフォルトの解釈は「鳥が自由に飛ぶ意志」が含まれる。この点は *m-* の生起する (21) と異なる。

3.7. 各使役接辞のまとめ——強制度の階層——

ここでまとめとして、第3節で見た使役接辞の強制度による階層関係と、被使役者の「人間性」の有無との関係性を整理した表を以下に掲げる。

表1 チノ語の使役接辞の種類と使役の強制度・被使役者の人間性

被使役者	間接使役 容認的 ←————→ 強制的			直接使役
	[+human]	-vi < pi- < khø- < ja-		
	[-human]	-vi < pi-		m-

表1はチノ語の使役接辞の一覧を示している⁵。まず、チノ語の使役接辞は大きく、直接使役と間接使役に分かれ、m-のみが直接使役を表す。それを右端のコラムに置いている。その他の間接使役接辞については、被使役者の人間性が使役接辞の生起に関与し、khø-とja-は被使役者が人間でない場合は生起ができない。そのため、最下段のコラムには置いていない。

間接使役においては強制度の階層が存在すると考えられる。デフォルトで-viは容認使役を、khø-とja-は強制使役を表す。pi-は容認使役の読みが一般的にとられやすいが、pi-の強制性は元来指定されないものと推定される。ja-はkhø-よりも強制性が強いと解釈される。

4. 二重使役（/ 三重使役）の問題

チノ語には同一の動詞複合形式内に異なる使役接辞が共起する「二重使役（double causation）」あるいは「三重使役（triple causation）」の現象が存在する。二重使役あるいは多重使役は「直接使役 & 間接使役」か「間接使役 & 間接使役」の組み合わせが認められる。直接使役の接辞はm-のみであり、同一の使役接辞は同一の動詞複合形式内で1度しか生起できないので、「直接使役 & 直接使役」の組み合わせは認められない。

重要な点としては、4.1.2節で後述するように「間接使役 & 間接使役」の二重使役においては、意味として二重使役を表さないことである。以下、二重使役の例を中心に記述を行う。

⁵ ここで先行研究である蓋（1986）及び蔣（2010）の記述との差異を述べておこう。蓋（1986）は動詞と形容詞の接頭辞としてm⁴²の存在を示し、これが「使動態（使役態）」を標示する機能を持つと述べている（蓋 1986: 51–52, 60）。動詞に付加される場合、「動作行為の実行は外的な力の影響力の下でなされる」ことを表す、としている。形容詞に付加される場合の意味的な特徴については詳しい説明がないが、いわゆる「動詞化」のように見える。また本稿の-viに相当する形式として、蓋（1986: 111–112）ではve⁴⁴を挙げている。これは漢語では「让，被」に相当すると考えているようだが、「被动句（受動態）」を構成するのに用いられるとされる。

蔣（2010）も蓋（1986）同様に巴朵下位方言を取り扱っている。蔣（2010: 103–106）ではvi⁴⁴を使役の中心に据えている。vi⁴⁴は「外部の力が働いて、ある事柄が起きることを許される、あるいは禁止される時に使用される」とされる。また同様に動詞pi⁴⁴「与える」、m³¹「作る、する」、khjə³¹「派遣する、使う、呼ぶ、譲る」を動詞に対して前置させる例も挙げている。pi⁴⁴は「許可あるいは禁止に限って用いられる」と述べているが、m³¹とkhjə³¹については詳細な説明はなく、例のみが提示されている。これらは本稿の提示した使役接辞にいずれも形式上対応するが、直接使役・間接使役の分析や使役の強制度の違いについては一切触れていない。また本稿のja-に対応する形式は蔣（2010）では見られない。

4.1. 二重使役

4.1.1. 直接使役 & 間接使役

チノ語では直接使役と間接使役の接辞が同一の動詞複合形式内に共起する二重使役が起こりうる。直接使役の接辞は *m-* しかないため、具体的には *m-* と他の使役接辞の共起の問題が存在する。

- (24) a. $\eta\mathfrak{c}^{42}$ $kh\mathfrak{r}^{35}$ $a^{33}tsi^{55}$ $pi^{44}-m^{33}-th\emptyset^{35}-n\mathfrak{c}^{44}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL 木 CAUS-CAUS- 折れる -PAST

- b. $\eta\mathfrak{c}^{42}$ $kh\mathfrak{r}^{35}$ $a^{33}tsi^{55}$ $m^{33}-th\emptyset^{35}-vi^{44}-n\mathfrak{c}^{44}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL 木 CAUS- 折れる -CAUS-PAST

私は彼 / 彼女に木を折らせた。

- (25) a. $\eta\mathfrak{c}^{42}$ $kh\mathfrak{r}^{35}$ $a^{33}tsi^{55}$ $kh\emptyset^{35}-m^{33}-th\emptyset^{35}-n\mathfrak{c}^{44}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL 木 CAUS-CAUS- 折れる -PAST

- b. $\eta\mathfrak{c}^{42}$ $kh\mathfrak{r}^{35}$ $a^{33}tsi^{55}$ $ja^{35}-m^{33}-th\emptyset^{35}-n\mathfrak{c}^{44}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL 木 CAUS-CAUS- 折れる -PAST

私は無理やりに彼 / 彼女に木を折らせた。

(24), (25) は 3.5 節で見た (18b) よりもさらに一つ多く使役接辞が生起している。いずれも直接使役である *m-* と間接使役である他の使役接辞との二重使役である。*m-* は「木が折れる」状態にするための接辞で、3 人称代名詞 $kh\mathfrak{r}^{35}$ を認可するが、他の使役接辞はさらにその「木を折る」ことを生ぜしめる 1 人称代名詞 $\eta\mathfrak{c}^{42}$ を認可する。このように直接使役接辞と間接使役接辞の共起は意味的にも形態統語的にも二重使役であることが示される。

4.1.2. 間接使役 & 間接使役

次に、2 種類の間接使役の接辞が同一の動詞複合形式内に共起する例を見てみよう。

- (26) a. $\eta\mathfrak{c}^{35}$ $pja^{33}-vi^{44}$.
 1SG.OBL 話す -CAUS

- b. $\eta\mathfrak{c}^{35}$ $pi^{55}-pja^{33}-vi^{44}$.
 1SG.OBL CAUS- 話す -CAUS

私に話させてくれ！ (林 2009: 154)

(26a) は間接使役接辞が1つだけ生起している例である。この(26a)ですでに「私に話させてくれ」と言う使役の意味を持った文となるが、この(26a)に間接使役接辞 *pi-* を生起させた(26b)も(26a)と同様の意味を持つのである。これは一種の形式と意味のミスマッチの問題であるが、実は間接使役接辞どうしの二重使役の場合、どの組み合わせであっても「単一の」使役であると解釈されるのである。以下も合わせて見られたい。

- (27) a. $\text{kh}\chi^{42}$ $\text{ʃao}^{33}\text{li}^{33}$ $\text{ku}^{55}\text{-pi}^{44}\text{-lao}^{33}\text{toŋ}^{55} + \text{le}^{44}\text{-}\text{ɔ}^{44}\text{-nœ}^{44}$.
 3SG.NOM 李さん また -CAUS- 働く + 行く -PFT-SFP
- b. $\text{kh}\chi^{42}$ $\text{ʃao}^{33}\text{li}^{33}$ $\text{ku}^{55}\text{-pi}^{44}\text{-lao}^{33}\text{toŋ}^{55} + \text{le}^{44}\text{-vi}^{44}\text{-}\text{ɔ}^{44}\text{-nœ}^{44}$.
 3SG.NOM 李さん また -CAUS- 働く + 行く -PFT-SFP
- 彼 / 彼女は李さんにまた働きに行かせた。(林 2009: 154)

- (28) a. $\text{a}^{55}\text{mo}^{44}$ ŋɔ^{35} $\text{a}^{55}\text{ko}^{44}$ $\text{pho}^{35}\text{-mjə}^{42}$,
 母 1SG.OBL ドア 開ける -SBN
 $\text{khjo}^{55}\text{lo}^{55}$ $\text{khø}^{33}\text{-tɛ}^{44}\text{-mɿ}^{35}$.
 中 CAUS- 見る -PAST
- b. $\text{a}^{55}\text{mo}^{44}$ ŋɔ^{35} $\text{a}^{55}\text{ko}^{44}$ $\text{pho}^{35}\text{-mjə}^{42}$,
 母 1SG.OBL ドア 開ける -SBN
 $\text{khjo}^{55}\text{lo}^{55}$ $\text{khø}^{33}\text{-tɛ}^{44}\text{-vi}^{33}\text{-mɿ}^{35}$.
 中 CAUS- 見る -CAUS-PAST
- 母は私に（無理やりに）ドアを開けて、中を覗かせた。
 (林 2009: 155)

- (29) a. ŋɔ^{42} $\text{zɔ}^{55}\text{ku}^{55}$ $\text{mɛ}^{55}\text{po}^{42}$ $\text{ja}^{35}\text{-tʃhu}^{33}\text{-mɿ}^{55}$.
 1SG.NOM 子供 乳房 CAUS- 吸う -PAST
- b. ŋɔ^{42} $\text{zɔ}^{55}\text{ku}^{55}$ $\text{mɛ}^{55}\text{po}^{42}$ $\text{ja}^{35}\text{-tʃhu}^{33}\text{-vi}^{33}\text{-mɿ}^{55}$.
 1SG.NOM 子供 乳房 CAUS- 吸う -PAST
- 私は子供に（無理やりに）乳を吸わせた。(林 2009: 155)

(27), (28), (29) はいずれも林(2009)からの引用である。いずれの例も(27a), (28a), (29a) に対し, (27b), (28b), (29b) は間接使役接辞が1つ増加している。しかし, いずれも意味的な変更は見られない。このことは(26) で見た二重使役と同じ現象である。間接使役接辞が同一の動詞複合形式内に複数共起しても, 使役のカウントは1つしかなされない。

意味的に重要な点としては, 複数の間接使役接辞の共起がある場合, 必ず一方

は -vi であることから、もう一方の使役接辞の強制度の方が高い点にある。このことから、全体の解釈として、必ず強制度の高い方の使役接辞の解釈の方が優先される。

4.2. 三重使役

実際の自然な発話で現れることはほとんどないが、形式的に使役接辞が同一の動詞複合形式内に 3 種共起することが可能である。以下の例を見られたい。

- (30) a. a⁵⁵mo⁴⁴ ŋɔ³⁵ a⁵⁵phi⁴⁴ pi⁵⁵-m³³-tshe³⁵-vi⁴⁴-mɣ³⁵.
 母 1SG.OBL 紐 CAUS-CAUS- 切れる -CAUS-PAST
 母は私に紐を切らせた。
- b. ŋɔ⁴² ʃao³³li³⁵ tʃen⁵⁵tɣŋ⁴⁴ ja³⁵-m³³-prɔ³³-vi³³-mɣ³⁵.
 1SG.NOM 李さん 電灯 CAUS-CAUS- 明るい -CAUS-PAST
 私は李さんに電灯を無理やりつけさせた。

(30) の例はいずれも使役接辞が「三重に」現れている。(30a) は pi-, m-, -vi が、(30b) では ja-, m-, -vi が共起している。しかし、これらの例は直接使役である m- とその他の間接使役接辞が共起している例であると解釈すべきである。4.1 節で見たように、異なる間接使役接辞が同一の動詞複合形式内で共起しても、意味的には二重使役を表さず、強制度の高い使役接辞の解釈が優先される「一重使役」とであると分析される。よって、(30) では間接使役接辞の解釈は 1 つしかカウントされないため、意味的には「直接使役 & 間接使役」の「二重使役」としてのみ解釈可能である。

(30) の例ではいずれも -vi が生起してもしなくても、論理的な意味は変わらないようである。これは上の説明と符合する。間接使役接辞は複数個共起しても使役の解釈は 1 個に限定され、かつ強制度の高い使役接辞の解釈が優先されるから、最も強制度の低い -vi は (30) の例では意味的にはほぼ何の貢献もしないこととなる。

5. 地域言語学的特徴

最後に、チノ語の使役接辞の地域言語学的位置付けについて、簡単ながら付言しておこう。

歴史的にはチベット・ビルマ諸語における使役のシステムは動詞の形態交替を伴う自他交替をベースとしていたと考えられている。チベット・ビルマ祖語の自他対応の存在する動詞のペアにおいて、他動詞は自動詞の形式に接頭辞 *s- を加

えた（あるいは自動詞接頭辞と交替させた）形式が再建される（Benedict 1972: 105–108, Matisoff 2003: 100–101）。チベット語やビルマ系言語など一部の現代語にその反映形式が観察される⁶が、大部分の言語における使役はより分析的な手法をとるようになったと考えられる。

現代のチノ語において、自動詞をベースとした他動詞の形式は見当たらない。その一方で、3節で見た5種類の使役接辞を発展させたことは重要である。使役の種類が多様性に対応する形で豊富な接辞を持つことになったのは興味深い。少なくとも現時点で知りうる限り、近隣のチベット・ビルマ諸語ロロ・ビルマ語支の言語では稀なケースであると考えられる。

ただ、特筆すべきは、5種類の使役接辞のうち、少なくとも2種類、すなわち *pi-* と *m-* がそれぞれ「与える, やる」⁷と「作る, する」からの文法化によって使役を表すようになったことである。周知の通り、「与える」と「作る, する」は世界の諸言語においても使役マーカースとして用いられることはしばしば見られる。

東・東南アジア諸語⁸に限定すれば、この両者ともに使役表現に用いる言語として標準タイ語が代表格である。ただ、チノ語と大きく異なるのは、標準タイ語が SVO 語順を取る高度に孤立的な言語で、この2つの形式 (*tham*「する」, *hây*「与える」)⁹を、動詞の接辞としてではなく、被使役者マーカースとして用いる点である。漢語普通話（標準中国語）¹⁰も「給 *gěi*」「与える」を使役表現に用いることがあるが、標準タイ語と同様に、被使役者マーカースとして用いる。漢語と標準タイ語と

⁶ 例えば、チベット文語において *riŋ-ba*「長い」vs. *sriŋ-ba*「長くする」のようなペアを見つけることができる (Matisoff 2003: 100)。

⁷ 日本語の「やる」は使役ではなく、受益 (benefactive) を表す。「遊ぶ」に対して「遊んでやる」は使役ではなく、受益態を表す。

⁸ 近年の研究のなかでは Jenny (2015) がミャンマー国内の諸言語における「与える」と「得る」の文法化の問題を整理している。

⁹ Iwasaki and Ingkaphirom (2005: 325) では、「迂言的使役 (peripherastic causative)」の構造として以下の (i) を掲げ、その名詞句や使役の性格について、(ii) の表にまとめている。

(i) NP_{1(CAUSEE)} {*tham/hây/tham-hây*} NP_{2(CAUSEE)} VP

(ii)

Causative Type	Typical Causer	Typical Causee	Degree of Control
/tham/	Animate Inanimate	Animate Inanimate	Strong control
/hây/	Animate	Animate	Weak control
/tham-hây/	Animate Inanimate Abstract	Animate Inanimate Abstract	Medium control

標準タイ語がチノ語と大きく異なるのは、(a) いずれの使役構文でも被使役者マーカースとして機能すること、(b) /*tham*/「する」と /*hây*/「与える」を組み合わせた /*tham-hây*/ が使役構文に用いられ得ること、(c) humanness「人間性」の指定がないことなどが挙げられる。一方で、/*tham*/ が強いコントロール (strong control) に、/*hây*/ が弱いコントロール (weak control) を表す構文に用いられることは興味深い。本稿のチノ語の分析においては /*m-*/ (動詞「作る」に由来) は直接使役に、/*pi-*/ (動詞「与える」に由来) は間接使役に用いられることと関連付けられるだろう。

¹⁰ 漢語普通話においては「弄 *nòng*」「いじる, つくる, やる」を状態述語の前に置き、「弄明白 *nòngmíngbai*」「はっきりさせる」のように使役動詞化のような機能を持つことがある。この現象は標準タイ語の /*tham*/ やチノ語の /*m-*/ に類似しており、興味深い。また漢語の「弄」は他の使役構文で用いられる「让 *ràng*」「叫 *jiào*」「使 *shǐ*」などと異なり、状態述語の直前に置かれることも重要なポイントである。もちろん、「弄」が用いられるのはいわゆる「処置文」(把字句)などに多く、構文上の問題とセットで考えねばならず、単純な比較は難しい点もある。

では文法的な位置付けは異なるものの、動詞「与える」の文法化から発展した形式が容認使役の文脈で用いられ得ることはチノ語にも当てはまる。「与える」本来の意味から考えれば、「(被使役者に) 行為の許可を与える」ことから容認使役の意味を生み出したと推定できようが、今後その歴史的発展が地域に限定されるものか、言語普遍的なものか、詳細な分析が待たれる。

6. おわりに

本稿はチノ語悠楽方言の使役について、動詞複合形式に生起する使役接辞を中心に、林(2009)で記述した内容を補完・修正する形で概括した。その特徴を以下に整理しておこう。

- (i) 使役接辞として *pi-*, *khø-*, *ja-*, *m-*, *-vi* の5種が認められる。
- (ii) *m-* は直接使役専用, その他の使役接辞は間接使役専用として用いられる。
- (iii) *khø-* と *ja-* は被使役者が人間でなければならない。
- (iv) 間接使役において *-vi* < *-pi-* < *khø-* < *ja-* の順に強制度が高くなると解釈される。
- (v) 形式的に二重使役が存在するが、意味的にも二重使役であると認められるのは、直接使役と間接使役の接辞が共起した時のみである。間接使役接辞どうしが共起しても意味的には二重使役として認められない。

林(2009)に比べて、いくつかの否定的証拠(negative evidence)による文法性判断の指摘、形式的な三重使役の存在¹¹や地域言語学的な特徴に言及したところは新しいと言える。ただ、言語類型論的な分析や歴史的発展の問題など、今後さらに取り扱うべき課題は多く、引き続き精緻な記述と深い分析を進めたい。

略号

A: 他動詞主語, AUX: 助動詞, CAUS: 使役接辞, COP: コピュラ, DAT: 与格, lit: 直訳, N: 名詞, NEG: 否定辞, NML: 名詞化, NOM: 主格, OBL: 斜格, P: 他動詞目的語, PART: 助詞, PAST: 過去, PFT: 完了, PL: 複数, PLN: 地名, Q: 疑問, S: 自動詞主語, SFP: 文終止助詞, SG: 単数, V: 動詞

¹¹ チノ語では二重使役及び三重使役の問題があることを本稿で述べたが、他の言語に見られる二重使役と言っても同一の使役接辞の回帰的使用とは異なった様相を呈している。モンゴル語ハルハ方言では同じ使役接辞 *-UUL-* を一回生起させた場合は事態の実現が使役者に依存し、二回生起させた場合は事態の実現が被使役者に依存し、二回生起させても必ずしも「二重使役」を表さないようである(梅谷 1999, 2008)。また二回生起させた場合に実際の行為の実現者である被使役者に敬意を払っているニュアンスが生まれるようである。このような二重使役ないし多重使役の問題は言語類型論的にも重要な研究テーマとなろう。

参考文献

〈日本語文献〉

- 梅谷博之 1999. 「現代モンゴル語の使役を表す接辞が連続して現れる場合」(日本言語学会第118回口頭発表, 東京都立大学)
- 2008. 「モンゴル語の使役接辞-UULと受身接辞-GDの意味と構文」(東京大学博士論文)
- 加藤久美子 2000. 『盆地世界の国家論』京都: 京都大学学術出版会.
- 林範彦 2009. 『チノ語文法(悠楽方言)の記述研究』神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.

〈漢語文献 / 汉语文献〉

- 盖兴之 1986. 《基诺语简志》北京: 民族出版社.
- 蒋光友 2010. 《基诺语参考语法》北京: 中国社会科学出版社.

〈英語文献 / Written in English〉

- Benedict, Paul K. 1972. *Sino-Tibetan: A Conspectus*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bradley, David 2007. Language Endangerment in China and Mainland Southeast Asia. In Matthias Brenzinger (ed.), *Language Diversity Endangered*. pp. 278–302. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Dixon, R.M.W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Iwasaki, Shoichi and Preeya Ingkaphirom 2005. *A Reference Grammar of Thai*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jenny, Mathias 2015. The far West of Southeast Asia: ‘Give’ and ‘get’ in the languages of Myanmar. In Nick Enfield and Bernard Comrie (eds.), *Languages of Mainland Southeast Asia: The State of the Art*. pp. 155–208. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Matisoff, James A. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman*. Berkeley: University of California Press.

〈インターネット情報〉

- Endangered Languages Project on Youle Jino
<http://www.endangeredlanguages.com/lang/4328> [2018年4月30日アクセス]

ポー・カレン語の使役と逆使役

加藤 昌彦

1. ポー・カレン語の概要

ポー・カレン語はシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派カレン語群に属する言語である (Matisoff 1991, 2000 など参照)。Kato (2009b) に示したように, ポー・カレン語には表 1 に示すような方言群がある。ポー・カレン語諸方言の詳細な特徴に関しては, Kato (1995), Phillips (2000), Dawkins and Phillips (2009a, b) などを参照されたい。本稿では, 東部ポー・カレン (Eastern Pwo Karen) に属するパアン (Hpa-an) 方言を扱う。以下, 単にポー・カレン語と言えばパアン方言を指す。

表 1 ポー・カレン語諸方言

方言群	分布地域
Western Pwo Karen	Irrawaddy Delta, Myanmar
Htoklibang Pwo Karen	Bilin Township, Mon State, Myanmar
Eastern Pwo Karen	Karen State, Myanmar; Mon State, Myanmar; Tennasserim Division, Myanmar; West-Central Thailand
Northern Pwo Karen	Northwestern Thailand

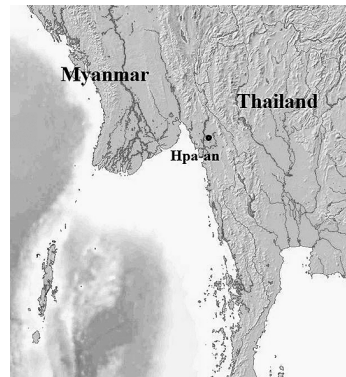


図 1 パアンの位置

ポー・カレン語の単語は, 名詞, 動詞, 副詞, 助詞, 感嘆詞の 5 つの語類に分類することができる (加藤 2004, 2008)。この言語は分析的 (analytic) な特徴を持ち, 基本語順は SVO である (Kato 2003, 2017 など)。屈折は存在しないと言ってもよく, 接辞による派生も数が限られている¹。一個の節は図 2 に示すような要素で構成される。加藤 (2013) で述べたとおり, 動詞はポー・カレン語の節における必須要素である²。

¹ 加藤 (2004) は, 10 個の派生接辞を挙げている。

² ただし, 常に容認されるわけではないが, 加藤 (2013) で議論したように, 指差し行為を伴ったときなどに述語が名詞のみからなる文が使われる場合があることも確かである。これを根拠としてポー・カレン語に名詞述語文の存在を認めてよいかどうかは今後も検討の余地がある。

(名詞₁) (Vptc) 動詞 (Vptc) (名詞₂) (名詞₃) (副詞的要素)

図2 ポー・カレン語の節の基本構造

この図において「名詞₁」は主語であり、「名詞₂」と「名詞₃」は目的語である。二つの目的語が現れるのは、/phîlân/「与える」などの二重他動詞（ditransitive verb）のときである。授受にかかわる二重他動詞の場合、「名詞₂」が受領者（recipient）、「名詞₃」が対象（theme）を表す。「動詞」の部分には連結型の動詞連続が現れることもある。「Vptc」は動詞助詞（verb particle）で、動詞の前に現れるものと後に現れるものとがあり、それぞれ同時に複数個現れることができる。動詞と動詞助詞からなる部分を「動詞複合体」と呼ぶ。「副詞的要素」には、副詞、側置助詞句、副助詞³を含む。この他、節頭に名詞の一部や副詞が現れることや、副詞的要素の後にもう1個の動詞が現れること（分離型動詞連続）もあるが、説明の煩雑化を避けるため、ここでは省略する。(1)に例を示す。

(1)	θàʔwà	mə	ʔán	bá	mì	ʔáʔá	ló	yéin	phèn	cī
	(人名)	IRR	食べる	(機会)	ご飯	沢山	LOC	家	中	も
	名詞 ₁	Vptc	動詞	Vptc	名詞 ₂	副詞	側置助詞句		副助詞	
	動詞複合体				副詞の要素					

ターワーは家でたくさんご飯を食べられることにもなろう。

ポー・カレン語の文をボイスの観点から見ると、少なくとも使役構文と逆使役構文を設定することができる（加藤 2013 参照）。他にも適用構文（Peterson 2007 参照）、再帰構文、相互構文といった構文を認めることができる可能性もあるが、本稿では、主語の変更を伴うという点で重要な、使役構文と逆使役構文を扱う。ポー・カレン語における項の変更を伴う統語的操作の全般についてはKato (2009a)を参照されたい。本稿の目的は、ポー・カレン語における使役構文と逆使役構文の用法を概観することである。以下、第2節で使役構文を扱い、第3節では逆使役構文を扱う。さらに第4節では、ポー・カレン語の自他対応を観察し、この言語では自他対応において自動詞から他動詞を派生する傾向が強いことを見る。

³ 助詞には、側置助詞（adpositional particle）、従属節助詞（subordinate clause particle）、一般助詞（general particle）、名詞修飾助詞（noun modifying particle）、動詞助詞（verb particle）、副助詞（adverbial particle）、文助詞（sentence particle）の7種類を認めることができる（加藤 2004）。

2. 使役構文

以下の記述は Kato (1999) に基づく。ポー・カレン語の使役を表す構文には TYPE 1 と TYPE 2 の 2 つがある。ここでは、使役行為を表す要素を使役要素、被使役行為を表す動詞を被使役動詞と呼ぶことにする。(2) に図示するように、TYPE 1 では、使役要素と被使役動詞が並置され、これ全体が動詞複合体となり、その後に目的語として被使役者を表す名詞句が置かれる（ただし、被使役動詞が三項動詞の場合には側置助詞を伴って現れる）。TYPE 2 では、使役要素が補文を取り、被使役者を表す名詞句⁴と被使役動詞が補文の中に現れる。TYPE 1 の例を (3) に、TYPE 2 の例を (4) に示す。それぞれの詳細は 2.1 と 2.2 で述べる。

(2) TYPE 1 : [動詞複合体 使役要素 被使役動詞] 被使役者

TYPE 2 : 使役要素 [補文 被使役者 被使役動詞]

(3) jə [dà lì] ʔəwê

1SG CAUS 行く 3SG

私は彼に行かせた。

(4) jə ʔánmân [ʔəwê lì]

1SG 命ずる 3SG 行く

私は彼に行くことを命じた。

2.1. TYPE 1

TYPE 1 では、使役要素と被使役動詞が並置される。この 2 つの間にはいかなる要素も介在できない。このタイプの使役構文は、「動詞複合体の目的語が、動詞複合体を構成するいずれかの動詞の論理的主語と同一指示である」という特徴によって定義することができる。TYPE 1 は 2 種類に分けることができる。一つは、使役要素として動詞助詞が用いられる場合 (2.1.1) であり、もう一つは、使役要素として動詞が用いられる場合 (2.1.2) である。

2.1.1. 使役要素として使役助詞を用いる場合

使役を表す動詞助詞をここでは「使役助詞」と呼ぶ。代表的な使役助詞には dà がある。これは正真正銘の助詞である。なぜなら、(a) 単独で使われることがない、(b) 対応する動詞がない、(c) 弱化して軽声音節の də となることがある（すなわち音韻的に後続する動詞への従属度が高まっている）、という特徴を持つか

⁴ 被使役者を表す名詞句は、表面上、使役要素の目的語であるかのようにも見えるが、統語的には被使役動詞の主語である。その根拠については Kato (1999) で詳細に論じたので、参照していただきたい。

らである。

使役要素として使役助詞を用いたとき、被使役者の現れ方は次のとおりである。(5)は被使役動詞が自動詞の例、(6)は単一他動詞(monotransitive verb)の例である。いずれの場合も、被使役者は動詞複合体の目的語として現れる。(6)から分かるように、被使役動詞が単一他動詞の場合、被使役者を表す名詞は「名詞₂」として現れ、被使役動詞の目的語は「名詞₃」として現れる。

- (5) jə dà klí ʔəwê
1SG CAUS 走る 3SG

私は彼に走らせた。

- (6) jə dà ʔán ʔəwê m̀ì
1SG CAUS 食べる 3SG ご飯

私は彼にご飯を食べさせた。

被使役動詞が二重他動詞(ditransitive verb)の場合には、被使役者は共同者や道具を表す側置助詞 dē に導かれて現れる。

- (7) jə dà phílân ʔəwê láíʔàu dē jə m̄
1SG CAUS 与える 3SG 本 COM 1SG 母

私は自分の母に頼んで彼に本を渡してもらった。

Comrie(1976)が指摘したように、被使役動詞が二重他動詞であるとき被使役者が斜格名詞句で現れる現象は、世界の様々な言語に見られる。

使役助詞には、dà の他に、mà (「する、作る」を意味する動詞に由来)、phílân (「与える」を意味する動詞に由来)、kò (「呼ぶ」を意味する動詞に由来)、l̄ (「語る」を意味する動詞に由来)がある。(8)から(11)に例を示す。

- (8) a. jə mà θi ʔəwê
1SG CAUS 死ぬ 3SG

私は彼を殺した。

- b. jə mà pjò ʔəwê m̀ì
1SG CAUS 吐く 3SG ご飯

私は彼にご飯を吐かせた。

- (9) a. jə phɪlân mî ʔəwê
 1SG CAUS 寝る 3SG

私は彼を寝させてやった。

- b. jə phɪlân pō ʔəwê láɪʔàu
 1SG CAUS 読む 3SG 本

私は彼に本を読ませてやった。

- (10) a. jə kò mî ʔəwê
 1SG CAUS 寝る 3SG

私は彼を呼んで泊ませた。

- b. jə kò ʔán ʔəwê mî
 1SG CAUS 食べる 3SG ご飯

私は彼を呼んでご馳走した。

- (11) a. jə lə nī ʔəwê
 1SG CAUS 笑う 3SG

私は彼を笑わせた。

- b. jə lə ɣən ʔəwê pòun
 1SG CAUS 聞こえる 3SG 昔話

私は彼に昔話を語って聞かせた。

これらは動詞に由来するものであり、その点で、2.1.2で見る「使役要素として一般動詞を用いる場合」と共通する。本稿で「一般動詞」とは、使役助詞として文法化されていない動詞を指す。しかし、(8)～(11)の各bに示したような他動詞は、一般動詞を用いた使役の場合には現れない。例えば、使役動詞として一般動詞である dú「叩く」を用いた(12)は非文である。この違いをもって、上記4形式を一般動詞とは考えず、使役助詞として文法化していると見なす。

- (12) *jə dú pjò ʔəwê mî
 1SG 叩く 吐く 3SG ご飯

意図した意味：私は彼を叩いてご飯を吐かせた。

使役助詞の使い分けに大きく関わる要素は、被使役動詞の意志性と被使役者の有生性である。したがって、以下では特にこの2点に着目して使役助詞を観察する。

2.1.1.1. dà

dàuあるいはdəとも発音される。スゴー・カレン語の使役助詞 duw? や西部ポー・カレン語 (Western Pwo Karen) の dɔw? との対応から考えると, dà, dàu, də のうち dàu が最も古い発音であると考えられるが, dà と発音されることが最も多い。Jenny (2015: 170) は, dà と同源のカヤー・リー語 (Kayah Li) の使役形式 dɔ́ (‘give’の意味も持つ; Solnit 1997: 314) および上記スゴー・カレン語の duw? がチベット・ビルマ祖語の *ter/*s-ter ‘give, CAUSATIVE’ (Matisoff 2003: 399, 615) に由来するとする。カヤー・リー語では動詞としても用いられるようであるが, ポー・カレン語とスゴー・カレン語では動詞としての用法は存在しない。

dà は次のように, 意志動詞とも無意志動詞とも共起することができる。

(13) jə dà phû ʔəwê

1SG CAUS 跳ぶ 3SG

私は彼にジャンプさせた。

(14) jə dà θî ʔəwê

1SG CAUS 死ぬ 3SG

私は彼を死なせた。

上例の被使役者は有生物であるが, 無生物の被使役者も可能である。

(15) jə dà ʔàʔòn ʔéin

1SG CAUS 壊れる 家

私は家を壊した。

2.1.1.2. mà

「する」「作る」を表す動詞 mà に由来する。mà は, (16) のように無意志動詞とは共起するが, (17) に示すように, 意志動詞とは共起しない。

(16) jə mà θî ʔəwê

1SG CAUS 死ぬ 3SG

私は彼を殺した。

(17) *jə mà phû ʔəwê

1SG CAUS 跳ぶ 3SG

意図した意味：私は彼を跳ばせた。

被使役者は、上掲 (16) のように有生物であっても、下掲 (18) のように無生物であってもよい。

- (18) jə mà ɣàɣòn ɣéin
 1SG CAUS 壊れる 家
 私は家を壊した。

dà と mà は無意志動詞と共起するという点で共通する。同じ無意志動詞に dà と mà を共起させることが可能である。例えば、(14) と (16), (15) と (18) を見ていただきたい。このような場合に二つの形式の間に見られる大きな違いは、dà は使役が間接的であるのに対して mà は直接的であるという違いである。(18) は直接的に家に打撃を加えて破壊する様子を表す。一方、dà を用いた (15) は、風雨にさらして自然に壊れるのを待つような状況を表す。同様に、(16) は直接手を下して殺すことを表すが、(14) は放置して食事を与えずに殺すような状況を表す。

第3節で見るように、ポー・カレン語には、動作対象に変化を生じさせる典型的な他動的状況を表す他動詞が少ない。そこで、そのような状況を表すとき、自動詞にこの使役助詞 mà を用いるのが一般的である。例えば、「殺す」を表す動詞は存在せず、「殺す」という状況を表すには、mà ɔi 「殺す」を使って迂言的に表現する必要がある。

2.1.1.3. phılân (phılân)

「与える」の意を表す動詞 phılân に由来する。phılân とも言う。この使役助詞は裨益的な使役を表す。意志動詞と無意志動詞のいずれとも共起する。(19) は意志動詞と共起した例、(20) は無意志動詞と共起した例である。

- (19) jə phılân klí ʔəwê
 1SG CAUS 走る 3SG
 私は彼に走らせてやった。
- (20) jə phılân mên thán ʔəwê
 1SG CAUS 生きた up 3SG
 私は彼を生き返らせてやった。

上掲 (19) と (20) は被使役者が生物である例であるが、被使役者は次の (21) のように無生物であってもよい。ここで被使役者は dàuphòn 「部屋」である。

- (21) jə phıl̥l̥n phàn thán dàuphàn (ʔəwê ʔəɣān)
 1SG CAUS 明るい up 部屋 3SG ため

私は（彼のために）部屋を明るくしてやった。

ただし、(21) のように被使役者が無生物の場合には、被使役者とは別に有生物の受益者の存在が前提となる状況しか表すことができない。この文では、「彼」が受益者に相当する。

2.1.1.4. kò

「呼ぶ」の意を表す動詞 kò に由来する。「呼び寄せて～させる」「呼びかけて～させる」という意味を表す。意志動詞と無意志動詞のいずれとも共起する。(22) が意志動詞の例、(23) が無意志動詞の例である。

- (22) jə θò kò mī jə
 1SG 友人 CAUS 寝る 1SG

友人が私に泊まりにくるよう言った。

- (23) jə kò nó thán ʔəwê
 1SG CAUS 目覚める up 3SG

私は彼に声をかけて目覚めさせた。

被使役者は人間でなければならない。したがって (24) は可だが (25) は容認されない。

- (24) jə kò ɣê thán jə phú
 1SG CAUS 来る up 1SG 子

私は子供を（二階に）呼び寄せた。

- (25) *jə kò ɣê thán jə thwí
 1SG CAUS 来る up 1SG 犬

意図した意味：私は自分の犬を（二階に）呼び寄せた。

2.1.1.5. l̥

「語る、話す」の意を表す動詞 l̥ に由来する。話しかけて何らかの状況を引き起こすことを表す。(26) に示したように無意志動詞とは共起するが、(27) のように、意志動詞とは共起しない。

- (26) ʔəwê lə̌ nī jə̌
 3SG CAUS 笑う 1SG

彼は私を笑わせた。

- (27) *ʔəwê lə̌ klí jə̌
 3SG CAUS 走る 1SG

意図した意味：私は彼に話しかけて走らせた。

被使役者は、人間を含む動物でなければならない。したがって、(28) は可能であるが、(29) は容認されない。無生物に語りかけて何らかの事象を生起させることは常識的には不可能だからであろう。

- (28) jə̌ lə̌ ɣə̌n jə̌ thwí
 1SG CAUS 聞こえる 1SG 犬

私は自分の犬に言って聞かせた。

- (29) *jə̌ lə̌ ɣàɣò̌n jə̌ ɣéin
 1SG CAUS 壊れる 1SG 家

意図した意味：私は家に話しかけて破壊した。

2.1.2. 使役要素として一般動詞を用いる場合

連結型動詞連続（加藤 1998, Kato 2009a を参照されたい）における「主語非同一型」では、第一動詞（V1）が他動詞、第二動詞（V2）が自動詞であり、第一動詞の O が第二動詞の S と同一指示になる。このようなタイプの動詞連続は TYPE 1 の定義に当てはまるので使役構文と見なすことができ、V1 が使役要素、V2 が被使役動詞に該当する。被使役者は (30) のように有生物であっても、(31) のように無生物であってもよい。

- (30) jə̌ chə̌ θí ʔəwê
 1SG 刺す 死ぬ 3SG

私は彼を刺し殺した。

- (31) jə̌ ʔáin blə̌ kú
 1SG かむ 砕ける 菓子

私は菓子をかみくだいた。

被使役動詞である V2 は常に無意志動詞でなければならない、意志動詞を用いる

ことはできない。したがって、次の (32) は非文法的である。

- (32) *jə dú chínnàn ʔəwê
 1SG 叩く 座る 3SG

意図した意味：私は彼を叩いて座らせた。

2.2. TYPE 2

TYPE 2 の使役構文は、「目的語の位置に現れる補文に現実法 (realis modality) と非現実法 (irrealis modality) の対立が生じない文」と定義することができる。通常の補文は、例えば動詞 dá「見える」が目的語位置に取る補文のように、現実・非現実の対立を示す。(33a) が現実法の例、(33b) が非現実法の例である。

- (33) a. jə dá [ʔəwê klí] b. jə dá [ʔəwê mə klí]
 1SG 見える 3SG 走る 1SG 見える 3SG IRR 走る
 私は彼が走っているのを見た。 私は彼が走ろうとするのを見た。

しかし、TYPE 2 の使役構文の補文には、(34b) に示すように、irrealis marker の mə が現れない。

- (34) a. jə ʔánmân [ʔəwê klí] b. *jə ʔánmân [ʔəwê mə klí]
 1SG 命じる 3SG 走る 1SG 命じる 3SG IRR 走る
 私は彼に走るよう命じた。

このような特徴を有する動詞には、ʔánmân「命じる」、plètò「許す」、phílân「与える」の3つがある。TYPE 1 と同じく、TYPE 2 においても被使役動詞の意志性と被使役者の有生性が容認度に大きく関わる。したがって、以下では特にこの2点に着目して各々の動詞を観察する。

2.2.1. ʔánmân

ʔánmân は「命じる」という意味の動詞である。この動詞が取る補文の動詞は意志動詞でなければならない。したがって、(35) は適格だが、(36) は容認されない。

- (35) jə ʔánmân ʔəwê chínnàn
 1SG 命じる 3SG 座る

私は彼に座るよう命じた。

- (36) *jə ʔánmêN ʔəwê θi
 1SG 命じる 3SG 死ぬ

意図した意味：私は彼に死ぬよう命じた。

また、被使役者は人間でなければならない。(37) に示すように、有生物であっても、動物では容認されない。

- (37) *jə ʔánmêN jə thwí chinàn
 1SG 命じる 1SG 犬 座る

意図した意味：私は自分の犬に座るよう命じた。

2.2.2. plètò (plè)

plètò は「許す」という意味の動詞である。plè とも言う。この動詞が取る補文の動詞は意志動詞でなければならない。したがって、(38) は適格だが、(39) は容認されない。

- (38) jə plètò ʔəwê chinàn
 1SG 許す 3SG 座る

私は彼に座ることを許可した。

- (39) *jə plètò ʔəwê θi
 1SG 許す 3SG 死ぬ

意図した意味：私は彼に死ぬことを許可した。

また、被使役者は人間でなければならない。(40) に示すように、有生物であっても、動物では容認されない。

- (40) *jə plètò jə thwí chinàn
 1SG 命じる 1SG 犬 座る

意図した意味：私は自分の犬に座ることを許した。

2.2.3. phílân (phlân)

phílân は「与える」という意味の動詞である。phlân とも言う。TYPE 1 で見た使役助詞 phílân と同じく、裨益的な使役を表す。TYPE 1 の phílân は、TYPE 2 の phílân で言い換えられることが多い。例えば、(41a) と (41b) の間にさしたる意味的な差異はない。

- (41) a. jə phılân lî ʔəwê [TYPE 1]

1SG CAUS 行く 3SG

私は彼を行かせてやった。

- b. jə phılân ʔəwê lî [TYPE 2]

1SG 与える 3SG 行く

私は彼を行かせてやった。

しかし次のような点で、TYPE 2 の phılân は、TYPE 1 の phılân と異なる。まず、TYPE 1 では被使役動詞は意志動詞でも無意志動詞でもあり得たが、TYPE 2 では、被使役動詞は必ず意志動詞でなければならない。そのため、TYPE 1 の例である (42) は容認されるが、同じ状況を表すことを意図した TYPE 2 の (43) は容認されない。

- (42) jə phılân xī thán ʔəwê [TYPE 1]

1SG CAUS 美しい up 3SG

私は彼女を（きれいな衣装を着せて）美しくしてやった。

- (43) *jə phılân ʔəwê xī thán [TYPE 2]

1SG CAUS 3SG 美しい up

また、ʔánmân や plètò の場合と同様、被使役者は人間でなくてはならない。したがって、TYPE 1 である (44) は容認されるが、同じ状況を表すことを意図した TYPE 2 の (45) は容認されない。

- (44) jə phılân jā jə thwí thî [TYPE 1]

1SG CAUS 泳ぐ 3SG 犬 水

私は自分の犬を泳がせてやった。

- (45) *jə phılân jə thwí jā thî [TYPE 2]

1SG CAUS 1SG 犬 泳ぐ 水

このように、TYPE 2 の phılân は、TYPE 1 の phılân に比べて、使用上の制限が大きい。しかも、(41b) のような TYPE 2 として成立する文は、(41a) のように、TYPE 1 に言い換えることが可能である。ではなぜ TYPE 2 の phılân が存在するのかという疑問が生じるが、その理由は分からない⁵。

⁵ LaPolla (p.c., 2000 年) によれば、通言語的な文法変化の傾向から見ると、TYPE 2 の phılân のほうが TYPE 1 より古く、TYPE 1 の phılân は TYPE 2 から発生した可能性があるという。もしそうだとすると、TYPE 2 の phılân は歴史的な残存物である可能性がある。

2.3. 使役構文のまとめ

このように、使役構文の適格性には、被使役動詞の意志性と被使役者の種類が条件として関わっている。上で論じてきたことを表2にまとめる。「一」は制限のないことを表す。TYPE 1 には動詞が無意志動詞でなければならないものが多い。しかし、TYPE 2 では動詞は意志動詞でなければならない。この点において、TYPE 1 と TYPE 2 は対照的である。また、TYPE 2 では被使役者が人間でなければならないが、TYPE 1 では被使役者に制限がないものが多い。この点も対照的である。

表2 使役構文が適格となる条件

使役要素の種類	被使役動詞の意志性	被使役者の種類
TYPE 1		
使役助詞 dà	—	—
使役助詞 mà	無意志	—
使役助詞 phĩlân	—	—
使役助詞 kò	—	人間
使役助詞 l̥	無意志	人間を含む動物
一般動詞	無意志	—
TYPE 2		
ʔánm̥ân	意志	人間
pl̥t̥	意志	人間
phĩlân	意志	人間

3. 逆使役構文

ポー・カレン語には逆使役構文（anticausative construction）がある。逆使役構文とは、他動詞文から派生された自動詞文のSが派生元の他動詞文のOに相当し、なおかつ、元の他動詞文のAが標示されないような文である（Dixon and Aikhenvald 2000: 7）。まず (46) に示す他動詞文を見ていただきたい⁶。

(46) ʔəwê pàu thán pàitərân
 3SG 開ける up 窓

彼は窓を開けた。

この文は、動詞助詞 θà によって、(47) に示す自動詞文に変えることができる。

⁶ 動詞 pàu「開ける」は、ほとんどの場合、後に上方向を示す動詞助詞 thán を伴って現れる。thán は速い発話では rán と発音されることが多い。

- (47) pàitərân pàu thán θà
窓 開ける up ANTIC

窓が開いた。

上掲(46)の目的語位置にあった pàitərân が(47)では主語位置にある。また、(47)では(46)の主語である ʔəwê は現れることができない。本稿ではこのように、θà が使われて、他動詞文の O が S として現れた文をポー・カレン語の逆使役構文と定義し、動詞助詞 θà を、逆使役構文を形成する助詞であると見なす。また、動詞に θà が後置された動詞複合体全体を逆使役形と呼ぶ。Kato (2009a) では(47)のような文を middle(中動態)と呼んだ。しかしながら、Dixon and Aikhenvald (2000: 11) が指摘するように、middle と呼ばれる現象は、「恐ろしく多様な意味」(frightening variety of meanings) で用いられる。したがって、ここではよりの確にこの構文の特徴を把握することのできる逆使役構文という用語を使っておきたい。なお、様々な言語の middle と呼ばれる現象については、Kemmer (1993) に詳しい。TB 諸語の middle については LaPolla (1996) を参照されたい。

この動詞助詞 θà は名詞 θà 「心」と同形であり、この名詞に由来すると考えられる。Kato (2009a) で記述したとおり、動詞助詞 θà には次のような再帰の用法も存在する。しかし、再帰の用法では、θà は常に下方への移動を表す動詞助詞 làn と共に現れる。したがって本稿では、再帰の用法の θà は逆使役構文を形成する θà とは別個のものであると見なす。

- (48) ʔəwê ch̀e làn θà
3SG 刺す down REFL

彼は自分自身を突き刺した。

逆使役の θà の重要な役割の一つは、自動詞的状况を表す動詞が欠如しているときに、他動詞から自動詞述語を形成することである。ポー・カレン語には、動作対象に変化を生じさせる動作を表す他動詞が少ない。本稿では、以降、このような意味を持つ動詞を達成動詞 (accomplishment verb) と呼ぶことにする。達成動詞が少ないので、動作対象に変化を生じさせる動作の多くは、使役構文を用いて表される。典型的には、2.1.1.2 で扱った使役助詞の mà を使って表現する。例えば、mà θi 「殺す」、mà ʔəyòn 「壊す」、mà khā 「折る」、mà lànthé 「落とす」、mà thé 「切る」、mà gakhī 「(木を) 倒す」、mà wà 「揺らす」などに見られるとおりである。ところが、逆に、達成動詞のみが存在し、意味的に対応する自動詞が存在しないことがある。そのような場合に、自動詞的状况を表すために使われるのが θà である。これについては既に Kato (2009a) で指摘した。現在のところ、次のようなものが見つかっている。

(49) 達成動詞	逆使役形
pàu thán 「開ける」	→ pàu thán θà 「開 (あ) く」
θàu 「動かす」	→ θàu θà 「移動する」
wái 「ねじる」	→ wái θà 「ねじれる」
?ò 「剥く」	→ ?ò θà 「剥ける」
?ánlè 「変える」	→ ?ánlè θà 「変化する」
khə̀dà 「貼る」	→ khə̀dà θà 「貼りつく」
klò 「はがす」	→ klò θà 「はがれる」
?ánkhwê 「(魚を) 釣る」	→ ?ánkhwê θà 「釣れる」
kə̀thái 「はさむ」	→ kə̀thái θà 「はさまる」
bēin 「(目を) 閉じる」	→ bēin θà 「(目が) 閉じる」
khlēin 「転がす」	→ khlēin θà 「転がる」

こうした動詞と θà の組み合わせは、おそらく、慣用句的に決まっているものである。なぜなら、達成動詞であれば、対応する逆使役形を自由に作れそうなものであるが、実態はそうではないからである。例えば、(50) の ?ánká 「焼く」と (51) の thû 「(筒状に) 巻く」は論理構造に変化を含んでいると思われるけれども、これらの動詞に θà を後置して逆使役構文を作ることはいできない。

- (50) *já ?ánká θà
 魚 焼く ANTIC
 意図した意味：魚が焼けた。

- (51) *khí thû θà
 ござ 巻く ANTIC
 意図した意味：ござが巻いた状態になった。

したがって、(49) に列挙したような用法を、ここでは θà の「イディオム用法」(idiomatic usage) と呼ぶことにしよう。

ところが、?ánká 「焼く」や thû 「巻く」のような達成動詞は、「結果の持続」を表す動詞助詞 wè 「既に～した状態にある；前もって～しておく」が共起したとき、適格な逆使役構文になる。(52) と (53) に示すとおりである。なお、wè と θà の語順は、wè θà でなければならない、θà wè は容認されない。

- (52) já ?ánká wè θà
 魚 焼く RES ANTIC
 魚が焼けている。

- (53) khl⁵ thû wè θà
 ござ 巻く RES ANTIC
 ござが巻いてある。

イディオム用法とは別の、逆使役の θà のもう一つの役割は、(52) や (53) のように、結果の持続を表す wè と共に現れて、結果を表す自動詞文を作ることである。他にも例を挙げよう。これらの例文における動詞は、例文の右側に示したとおり、θà のみを後置して逆使役形を作ることができない。しかし、wè が共起すると、逆使役構文が成立するのである。

- (54) mī ʔánphôn wè θà (*ʔánphôn θà)
 ご飯 炊く RES ANTIC
 ご飯が炊いてある。

- (55) phlī cəntháwn wè θà (*cəntháwn θà)
 ひも 結ぶ RES ANTIC
 ひもが結んである。

- (56) chāin ʔánchújwà wè θà (*ʔánchújwà θà)
 シャツ 洗う RES ANTIC
 シャツが洗ってある。

- (57) nó thè wè θà (*thè θà)
 草 引き抜く RES ANTIC
 草が引き抜いてある。

- (58) chəphèn kháwn wè θà (*kháwn θà)
 穴 掘る RES ANTIC
 穴が掘ってある。

- (59) láíʔau kòkíθú wè θà (*kòkíθú θà)
 本 隠す RES ANTIC
 本が隠してある。

- (60) chāin çân wè θà (*çân θà)
 シャツ 破く RES ANTIC
 布が破いてある。

(61) phlì kwé làn wè θà (*kwé làn θà)

ひも ほどく down RES ANTIC

ひもがほどいてある。

動詞助詞 wè を共起させることによって逆使役構文が成立するのは、達成動詞の場合のみである。(62) に例を示した dú「叩く」のように、論理構造に変化を含まない動詞の場合、wè が共起しても逆使役構文は成立しない。

(62) *cəpwē dú wè θà

机 叩く RES ANTIC

意図した意味：机を既に叩いてある。

このように、達成動詞であれば、イディオム用法が可能ではなくても、逆使役形を wè と共に用いることにより、適格な逆使役構文を作ることが可能になるのである。この統語的操作は極めて生産的である。

動詞助詞 wè を用いた逆使役構文においては、逆使役形が表す状況を引き起こした動作が存在することが含意 (entail) される。そのことは、例文 (60) の cān「破く」や (61) の kwé làn「ほどく」のように、意味的に対応する自動詞が存在する動詞で検証すると明らかである。(63) と (64) は、それぞれ (60) と (61) に対応する、自動詞を使った文である⁷。

(63) chāin já wè

シャツ 破ける RES

シャツが破けている。

(64) phlì lānkwé wè

ひも ほどける RES

ひもがほどけている。

例文 (60) と (63) の違いは、逆使役構文を用いた (60) が表す状況においては、「破ける」という変化が何らかの動作の結果として生じたことが含意されるのに対し、自動詞文の (63) では、そのような動作は含意されないことである。同様に、(61) と (64) の違いも、(61) では動作の存在が含意されるのに対して (64) では含意されないことにある。このように、wè θà を使った文においては、動作の存在が含意される。一方、(49) に列挙したイディオム用法の逆使役形を用いた逆使役構文

⁷ (63)(64) のような無意志的な自動詞に後置された wè は、wè θà と言うこともある。例えば (63) は chāin já wè θà としてもよい。本来、θà は自動詞と共起しないので、これは奇妙である。筆者はこれを、逆受動構文の wè θà からの類推で生じた用法なのだと考える。

においては、動作がまったく含意されない。したがって、(65) は窓がひとりでに開いたことを表すのである。

(65) pàitərân pàu thán θà (=47)

窓 開ける up ANTIC

窓が開いた。

しかし、これに wè を入れた (66) では、動作が存在するか否かは曖昧になる。この文は、何らかの動作によって窓が開いた場合にも、ひとりでに窓が開いた場合にも、用いることができるのである。

(66) pàitərân pàu thán wè θà

窓 開ける up RES ANTIC

窓が開いている。

逆使役形がもしイディオム用法でのみ使われるのであれば、この言語における逆使役構文の重要度はそれほど高くないと思われる。イディオム用法の逆使役構文は生産性に欠けるからである。しかし、動詞助詞 wè を伴った逆使役構文の生産性は非常に高い。その分、逆使役構文の重要度が高まっていると言えよう。筆者は、Kato (2009a) を書いた段階ではこのことに気づいていなかった。

逆使役構文を使用する意義は、被動者 (patient) の意味役割を持つ名詞を主語にすることによって、被動者を目立たせることができるということである。(54) が表すのと似た意味は、次の (67) によっても表すことができる⁸。

(67) jə ʔánphôn thá wè m̀

1SG 炊く (保持) RES ご飯

私はご飯を炊いておいた。

例文 (54) と (67) の違いは視点の置かれ方にある。(54) では視点 (viewpoint) が被動者である「ご飯」に向いているのに対し、(67) では視点はどちらかといえば動作主である「私」に向けられている。逆使役構文が結果の持続を表す動詞助詞 wè を伴ったときに生産性が高まる原因も、このことに関連していると思われる。動作の結果は被動者に残るものであるから、結果を表す形式が使われると、被動者に視点が向きやすくなる。そのために、被動者を表す名詞句を主語として文を作る要請が生じるのではないか。その要請に応えるという点で、逆使役構文の存在は非常に重要である。

⁸ 意志動詞に wè が後置されるとき、この例文のように、保持を表す動詞助詞 thá が共起することが多い。この助詞はビルマ語の補助動詞 thá「～しておく」の借用である可能性がある。

視点ということに関連した現象を、この節の最後に指摘しておきたい。面白いことに、使役助詞や動詞連続によって自動詞から作られた派生的な他動詞述語が、逆使役によってもう一度、自動詞述語になることがある。(68) から (70) に示した例がそうである。例えば (68) では、自動詞 *θi* 「死ぬ」が使役助詞 *mà* によって他動詞述語化され、さらにそれが逆使役形を用いることで自動詞述語化しているのである。

- (68) *chân mà θi wè θà*
 鶏 CAUS 死ぬ RES ANTIC
 鶏は殺してある。

- (69) *θên khà bài wè θà*
 おかず 覆う 塞がる RES ANTIC
 おかずは覆ってある。

- (70) *lé bò khā wè θà*
 棒 打撃を加える 折れる RES ANTIC
 棒が折ってある。

派生的な他動詞述語をわざわざ自動詞述語に転換することの意義は、主語として現れた被動作者に視点を置きながらも、同時に動作者の存在を示すことができるということである。例えば (68) は、単純に *θi wè* 「死んでいる」というのと違って、鶏を殺した動作者がいることを表すことができるのである。

4. 使役と逆使役の分布

ここでは、パルデシ・桐生・ナロック (2015) に所収のチベット・ビルマ系言語に関わる 4 つの論文 (桐生 2015, 松瀬 2015, 大西 2015, 白井 2015) にならって、Haspelmath (1993) の動詞リストがポー・カレン語でどのように表現されるかを見てみる。Haspelmath は 21 言語における 31 対の inchoative/causative verb pairs⁹ を調べ、使役化傾向の強いものから逆使役化傾向の強いものへと並べた表を示している (Haspelmath 1993: 104 の Table 4)。これに基づいてポー・カレン語の対応する形式を示したのが表 3 である。Haspelmath は verb pair という用語を使っ

⁹ Haspelmath (1993: 90) は、inchoative/causative verb pair を次のように定義する。“An inchoative/causative verb pair is defined semantically: it is a pair of verbs which express the same basic situation (generally a change of state, more rarely a going-on) and differ only in that the causative verb meaning includes an agent participant who causes the situation, whereas the inchoative verb meaning excludes a causing agent and presents the situation as occurring spontaneously.” 日本語の例を挙げれば、「壊れる」が inchoative verb であり、それに意味的に対応する「壊す」が causative verb である。

ているが、対をなす動詞相互の対応関係は、屈折的・派生的・統語的を問わないとしている（Haspelmath 1993: 92）。したがって、ポー・カレン語の使役化と逆使役化はどちらも形態論ではなく統語論レベルの現象であるが、Haspelmath の提案した枠組みの中で扱うことに問題はない。

表3 Haspelmath (1993) の31動詞対に対応するポー・カレン語形式

	INCHOATIVE	CAUSATIVE	
1. boil	khū thán	dòn	S
2. freeze	khúlón	mà khúlón	C
3. dry	xāin	mà xāin	C
4. wake up	nó thán	mà nó thán	C
5. go out/put out	cáin thán (出る) lànphái (消える)	thàu thán (出す) mà lànphái (消す)	S C
6. sink	làn bèn	bèn	S
7. learn/teach	mà ló	mà ló	L
8. melt	phlī	mà phlī	C
9. stop	pətháu	mà pətháu	C
10. turn	ʔùtə̀rài	mà ʔùtə̀rài	C
11. dissolve	phlī	mà phlī	C
12. burn	khūyú	mà khūyú	C
13. destroy	yà yòn	mà yà yòn	C
14. fill	xwè	mà xwè	C
15. finish	yòn	mà yòn	C
16. begin	tài thán	tài thán	L
17. spread	lē thán	mà lē thán	C
18. roll	khlēin θà	khlēin	A
19. develop	dú thán	mà dú thán	C
20. get lost/lose	làn mā	mà làn mā	C
21. rise/raise	thán	bò thán	C
22. improve	yì thán	mà yì thán	C
23. rock	wàthú	mà wàthú	C
24. connect	bàu	thò bàu	C
25. change	ʔánlè θà	ʔánlè	A

26. gather	kòun	pəkòun	S
27. open	pàu thán thà	pàu thán	A
28. break	yà yòn	mà yà yòn	C
29. close	bài	khà bài	C
30. split	théphà	mà théphà	C
31. die/kill	θi	mà θi	C

A = anticausative alternation; C = causative alternation; E = equipollent alternation; L = labile alternation; S = suppletive alternation

表の右端に示した略号は派生の種類を表している。その意味は表の下に記したとおりである。Hapelmath (1993) の inchoative verb を自動詞, causative verb を他動詞と簡便に呼び替えると, A は他動詞から自動詞が派生されるもの, C は自動詞から他動詞が派生されるもの, E は双方が別個の同一形式から派生されるもの, L は同形の動詞が使われるもの, S は派生関係のない異なる動詞が使われるものである。ポー・カレン語には E に相当する対は存在しない。

この表から, ポー・カレン語では, 他動詞的状況を表すのに動詞助詞 mà を用いた TYPE 1 の使役構文が多く使われることが分かる。すなわち, causative alternation が多い。使役化の傾向が強い事実は, 桐生 (2015) のメチェ語, 松瀬 (2015) のネワール語, 大西 (2015) のラワン語, 白井 (2015) のギャロン語と共通している。一方で, 31 対のうち 3 つのケースで anticausative alternation が使われることにも注目すべきである。Kato (2009a) で同様のことを指摘したように, 隣接するチベット・ビルマ系言語であり, 現在最もポー・カレン語との接触の多い言語であるビルマ語には, anticausative alternation が存在しないのである。

5. まとめ

本稿では, ポー・カレン語のボイス現象において重要な使役構文と逆使役構文の用法を見てきた。使役構文においては, 被使役動詞の意志性と被使役者の有生性が文の容認度に大きく関わっていることを見た。また, 逆使役構文については, この構文が結果の持続を表す動詞助詞を伴ったときに生産性が高まることを見た。これまで筆者は, ポー・カレン語における使役構文の重要性については何度も述べてきた。一方で, 逆使役構文については, 既にその存在を指摘して記述も行ってはいたが,それほど重要な現象であるとは認識していなかった。本稿では, ポー・カレン語における逆使役構文の重要性を指摘した。そして最後に, Haspelmath (1993) の動詞リストに基づいて, ポー・カレン語が causative alternation の優勢な言語であることを指摘した。

略号

ANTIC	逆使役	SG	単数
CAUS	使役助詞	Vptc	動詞助詞
COM	共同者または道具	1	一人称
IRR	非現実法	2	二人称
REFL	再帰	3	三人称
RES	結果の持続		

転写に用いる記号

子音音素には /p, θ [θ~t], t, c [tɕ], k, ʔ, ph, th, ch, kh, b, d, ɕ, x, h, ɣ, ʋ, m, n, (ɲ), (ŋ), ɳ, w, j, l, (r)/ がある。括弧でくくったものは主に借用語に現れる。韻母には /i [ɿ], i, ɯ, i [ɪ], u, e, ə, o, ɛ, a, ɔ, ai, au, əŋ, aŋ [ǎŋ], oŋ, eɪŋ [eɪŋ~ei], əwɪŋ [əwɪŋ~əwɪ], oʊŋ [oʊŋ~ou], aɪŋ/ がある。また、声調には、/á/ [55], /ǎ/ [33~334], /à/ [11], /â/ [51] がある。絶対語末以外の環境には軽声音節 (atonic syllable) も現れる。軽声音節に現れる韻母は /ə/ のみであり、声調符号を付さないことでこれを表す。

筆者はこれまで、音素 /i/ を /ɪ/ と表記してきた。ところが、/ɪ/ を用いると、声調符号を付けたときに /i/ との区別が付きにくい。例えば、/ɪ/ と /í/ を比較していただきたい。さらに、発音記号フォントによっては、斜字体のときに /ɪ/ と /í/ の区別がほとんどなくなってしまうことも分かってきた。そこで本稿では、従来用いてきた /ɪ/ の代わりに /i/ を用いる。

本研究のデータ

本稿で扱ったデータはすべて筆者自身が 1994 年から続けている実地調査で収集したものである。使役および逆使役については、母語話者として特に Saw Hla Chit および Saw Thurein の協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

参考文献

- Comrie, Bernard. 1976. "The syntax of causative constructions: cross-language similarities and divergences". (In) Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics, Vol 6: The Grammar of Causative Constructions*, 261–312. New York: Academic Press.
- Dawkins, Erin and Audra Phillips. 2009a. *A Sociolinguistic Survey of Pwo Karen in Northern Thailand*. Chaing Mai: Linguistic Department, Payap University.
- Dawkins, Erin and Audra Phillips. 2009b. *An Investigation of Intelligibility Between West-Central Thailand Pwo Karen and Northern Pwo Karen*. Chaing Mai: Linguistic Department, Payap University.

- Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) 2000. *Changing Valency: Case studies in transitivity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haspelmath, Martin. 1993. "More on the typology of inchoative/causative verb alternations". In Bernard Comrie and Maria Polinsky (eds.) *Causatives and Transitivity*, 87–120. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Jenny, Mathias. 2015. "The far west of Southeast Asia: 'Give' and 'get' in the languages of Myanmar". In N. J. Enfield and Bernard Comrie (eds.) *Languages of Mainland Southeast Asia*, 156–208. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.
- Kato, Atsuhiko. 1995. "The phonological systems of three Pwo Karen dialects". *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*, 18.1, 63–103.
- 加藤昌彦. 1998. 「ポー・カレン語（東部方言）の動詞連続における主動詞について」『言語研究』113, 31–61.
- Kato, Atsuhiko. 1999. "Two types of causative construction in Pwo Karen". In Tadahiko Shintani (ed.) *Linguistic & Anthropological Study on the Shan Culture Area*, 55–93. Tokyo: ILCAA.
- Kato, Atsuhiko. 2003. "Pwo Karen". In Graham Thurgood and Randy LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*, 632–648. London and New York: Routledge.
- 加藤昌彦. 2004. 「ポー・カレン語文法」東京大学博士論文.
- 加藤昌彦. 2008. 「ポー・カレン語に形容詞という範疇は必要か？」『アジア・アフリカの言語と言語学』3, 77–95.
- Kato, Atsuhiko. 2009a. "Valence-changing particles in Pwo Karen". *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 32.2, 71–102.
- Kato, Atsuhiko. 2009b. "A basic vocabulary of Htoklibang Pwo Karen with Hpa-an, Kyonbyaw, and Proto-Pwo Karen forms". *Asian and African Languages and Linguistics* 4, 169–218.
- 加藤昌彦. 2013. 「ポー・カレン語の文の分類」澤田英夫（編）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』, 81–114. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Kato, Atsuhiko. 2017. "Pwo Karen". In Graham Thurgood and Randy LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages (2nd Edition)*, 942–958. London and New York: Routledge.
- Kemmer, Suzanne. 1993. *The Middle Voice*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 桐生和幸. 2015. 「メチェ語の使役動詞の形態的特徴」パルデシ プラシャント・桐生和幸・ナロック ハイコ（編）所収, 239–255. 東京：くろしお出版.
- LaPolla, Randy J. 1996. "Middle voice marking in Tibeto-Burman". *Pan-Asian Linguistics: Proceedings of the Fourth International Symposium on Languages and Linguistics, Vol. V, 1940–1954*. Mahidol University.
- Matisoff, James A. 1991. "Sino-Tibetan linguistics: present state and future prospects". *Annual Review of Anthropology* 20, 469–504.
- Matisoff, James A. 2000. "On the uselessness of glottochronology for the subgrouping of Tibeto-Burman". In Colin Renfrew, April McMahon, and Larry Trask (eds.) *Time Depth in Historical Linguistics*, 333–371. Cambridge: The McDonald Institute for Archaeological Research.
- Matisoff, James A. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman*. Berkeley: University of California Press.
- 松瀬育子. 2015. 「ネワール語における自他動詞対：民話テキストの動詞分類と考察」パルデシ プラシャント・桐生和幸・ナロック ハイコ（編）所収, 257–274. 東京：くろしお出版.
- 大西秀幸. 2015. 「ラワン語の自他動詞：形態的対応と事象のコード化の面からの考察」パルデシ プラシャント・桐生和幸・ナロック ハイコ（編）所収, 223–237. 東京：くろしお出版.
- パルデシ プラシャント, 桐生和幸, ナロック ハイコ（編）. 2015. 『有対他動詞の通言語的研究：日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』東京：くろしお出版.
- Peterson, David A. 2007. *Applicative Constructions*. Oxford: Oxford University Press.
- Phillips, Audra. 2000. "West-Central Thailand Pwo Karen phonology". *33rd ICSTLL Papers*, 99–110. Bangkok: Ramkhamhaeng University.
- 白井聡子. 2015. 「ギャロン語ヨチ方言の他動性：自他動詞対からの分析」パルデシ プラシャント・桐生和幸・ナロック ハイコ（編）所収, 141–157. 東京：くろしお出版.
- Solnit, David. 1997. *Eastern Kayah Li: Grammar, Texts, Glossary*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

古代中国語における動補型結果構文の拡張メカニズム＊ —「他動詞＋在」結果構文を例として—

松江 崇

1. はじめに

現代中国語（標準語）には、「主語（S）＋他動詞（Vt）＋結果補語（自動詞 Vi／形容詞 A）＋目的語（O）」という統語形式で「動作主 S の行為 Vt によりその対象 O に結果状態 Vi/A を生ぜしめる」という広義の使役的意味を表す結果補語構造「Vt＋Vi/A」がみとめられる¹。この構造は、機能上、いわゆる結果構文（resultative construction）に相当するため、本稿では、この類の結果補語によって構成される結果構文を動補型結果構文と称することにする。

動補型結果構文の成立は、中国語史において重要な意味を持つ。この構文は上古中国語（殷～前漢）には存在せず、上古中国語と現代中国語の統語構造面での最も大きな差異の一つに数えられるからである。この構文は、中古中国語（後漢魏晉南北朝）の頃に出現したと考えられ、その生成過程についてはすでに膨大な研究が蓄積されている²。しかしながらこの動補型結果構文が中古中国語の段階で生成された後に、どのようなメカニズムによって、そのカテゴリーに属する成員を拡張していったのか、というカテゴリー拡張のメカニズムについては、十分な注意が払われているとは言えない。後述するように、歴史的にみれば、ある時点で突如として現代中国語と同じ動補型結果構文が出現したのではなく、様々な拡張のプロセスを経て、現代語における動補型結果構文が生成されていったと考えられるのである。本稿は、以上を踏まえ、現代中国語の動補型結果構文としては周辺の成員に位置づけられる「他動詞（Vt）＋在」結果構文の生成過程に着目し、動補型結果構文の拡張メカニズムの一端を明らかにすることを目的とする。

＊ 本稿の主要な部分（2.～5.）は中国国内で刊行予定の『第十屆漢文佛典語言學國際學術研討會會議論文集』に収録される中国語論文「略談“動詞＋補語”型使成式的擴展機制——以早期漢譯佛典中“他動詞＋在／到”型使成式為例」に基づく。ただし内容上は大きな修正点を含み、かつ本稿では「Vt＋到」結果構文には言及しないなどの違いもある。また当該論文集の出版事情により修正稿たる本稿の発表が先行することとなった点も付記しておく。なお、本稿執筆に際して、二松学舎大学の戸内俊介氏から貴重なご指摘をいただいた。記して謝意を表します。

¹ 結果補語構造（結果構文）としてどのようなタイプを認定するかは簡単な問題ではない。例えば、石村（2011）は、①他動型（例：孩子撕破了书皮儿。[子供が本の表紙を引き裂いて破った]）、②受動型（例：书皮儿撕破了。[本の表紙が引き裂いて破れた]）、③自動型（例：张三喝醉了。[張三は飲んで酔っ払った]）、④原因型（例：那瓶酒喝醉了张三。[張三はその酒を飲んで酔っ払った（意識）]）の四タイプを典型的な結果補語構造とみとめる。本稿で言う動補型結果構文は、①に相当するものである（③は含まない）。

² 先行研究は枚挙に暇ないが、記述・分析の双方で最も優れた研究の一つに魏培泉 2000 が挙げられる。この他、英語で読めるものとして Xu 2006（4. The Rise of Resultative Compounds）を挙げておく。

2. 上古・中古中国語における結果表現

「Vt + 在」結果構文の生成メカニズムを論ずる前に、まずその背景として、典型的な動補型結果構文である「Vt + Vi/A」結果構文の生成過程について検討しておく必要がある。本章では、上古・中古中国語において結果表現を担っていた各種の構文を紹介した上で、先行研究に基づきつつ「Vt + Vi/A」結果構文の生成メカニズムについて述べていく。

2.1. 能格動詞・形容詞の他動詞用法

上古中国語において、「(何らかの行為により目的語に対して) ある結果状態を生ぜしめる」という意味の表現を担っていたのは、能格動詞 (Ve) からなる他動詞構文 (以下、能格動詞の他動詞用法) であった (用例 (1)(2))。ここで言う能格動詞とは、自動詞用法と他動詞用法とを備え、自動詞用法の主語の意味役割と他動詞用法の意味役割とが一致する動詞を指す³。能格動詞として具体的にどの動詞を認定するのは議論のあるところであるが、上古中国語の動詞体系において、この類の動詞が少なからぬ位置を占めていたことは間違いないであろう⁴。上古中国語では、形容詞も目的語を伴った他動詞構文に用いられることがあり、「(目的語に対して) ある結果状態を生ぜしめる」意味の表現を表すことが少なくなかった (用例 (3))。

- (1) 鄭人大敗戎師。 (『左伝』「隠公九年」1-66)⁵

鄭人は大いに戎軍を破った。

- (2) 若二子怒楚，楚人乘我，喪師無日矣。 (『左伝』「宣公十二年」2-734)

もし彼ら二人に使者が楚を怒らせ、楚軍が急襲してきたら、わが軍が壊滅するまで幾日もないであろう。

- (3) 匠人斲而小之，則王怒，以為不勝其任矣。 (『孟子』「梁惠王下」1-146)

大工が(せっかくの大きな材木を)削ってそれを小さくしたら、王は怒って、仕事ができないと考えるでしょう。

³ 本稿で言う「能格動詞」は、中国語学の近年の研究では「非対格動詞」と称されることも少なくない (戸内 2018: 5 など)。なお上古漢語に能格動詞が体系的に存在するかどうかという議論については、大西 2004 を参照されたい。

⁴ 以下、「敗」の自動詞用法、「小」非他動詞用法の用例を挙げておく (「怒」の自動詞用法は例文 (3) の「則王怒」を参照)。

・呉師敗。 (『左伝』「定公五年」4-1552)

呉軍は敗北した。

・子曰「管仲之器小哉。」 (『論語』「八佾」1-206)

先生が言われた。「管仲は人物が小さいね。」

⁵ 文献は書名・篇名の順にあげる。数字は、本稿末に掲げた依拠テキストの冊数・頁数を表す。「1-66」であれば第1冊66頁の意。

上述の現象に関連して、上古中国語動詞のいわゆる「破読」あるいは「四声別義」「清濁別義」と称される問題にも言及しておく必要がある。上古中国語では、語の用法（自動詞用法・他動詞用法の別など）や品詞の区別と、声母（語頭子音）の種類（有声－無声／有気－無気など）や声調の種類（去声／非去声など）の交替とが、しばしばある種の対応関係をみせることがある⁶。用例(1)の「敗」であれば、宋・賈昌朝の『羣經音辨』によれば「毀他曰敗，音拜」（他のものをやぶるのを「敗」という，読音は「拜」）と「自毀曰敗，薄邁切」（自らがやぶれるのを「敗」という，薄邁切）と解説され，かりにこれが上古の実際の発音を反映したものであれば，自動詞用法では有声声母であり（推定音価 *brāts）⁷，使役的他動詞用法の場合は無声声母（推定音価 *prēts）であったことになろう。このような現象を網羅的に収集し，言語学的な分析をした周法高 1962 では，本稿の議論と直接的に関わる動詞の使役化について，①去声或いは有声声母の場合に使役的述語となる（例：「来」〈来る〉（平声）を去声で読む場合は使役的述語〈来させる〉），②前項とは逆に非去声或いは非有声声母の場合に使役的述語となる（例：「去」〈去る〉（去声）を上声で読む場合は使役的述語〈除く・去らせる〉，上述「敗」もこの類），③非去声では自動詞用法，去声では他動詞用法となる（例：「語」では上声は〈話をする〉，去声は〈言葉で伝える〉）といった類型に整理している。このような後世の文献に基づいた読音の区別がどれほど上古中国語の実際の発音と符合していたかは議論があるが，少なくともそのなかの一部の動詞については，音韻的交替がその動詞の機能的相違に対応していた可能性がある。そうすると，能格動詞の自他交替についても形態論レベルの議論をすべきということになるだろうが，実際は上述の音韻交替と機能的転換との対応が確認される能格動詞は限定的である。上古中期（春秋戦国期）以降の能格動詞・形容詞の自他変換の現象は，上述の現象に配慮しつつも，原則として統語論に主軸を置いて議論していくべきだと考える。

以上のような上古中国語における「行為とその結果状態」を表す構文は，中古中国語に至ると大きな変化が生ずることになる。能格動詞（Ve）・形容詞（A）の他動詞用法が衰退していくとともに，これらの前に他の他動詞を置いた「Vt + Ve/A」から構成される「S + Vt + Ve/A + O」という統語形式で，「O を Ve/A の状態にする」という行為の結果状態を表す構文が増加したのである（用例(4)）⁸。この構文における Ve/A を担う能格動詞ないし形容詞を非他動詞用法だとみなすことができれば，動詞の連用（連動構造）であった「Vt + Ve/A」が動補型結果

⁶ この現象は上古中国語の形態論という難解な問題と関わる。とりわけ欧米の研究者を中心に，しばしばシナ＝チベット祖語の再構までを視野に入れた積極的な議論がなされているが，筆者にこの問題を論ずる能力と準備がないため，本稿では論じない。なお，比較的新しい上古中国語の形態論の体系的な研究に Sagart 1999 がある。Sagart 氏の研究は，重要な視点を提供するものではあるが，丁邦新 2002 が指摘するような種々の問題もあり，必ずしも所説の全てに従うことはできない。

⁷ 再構音は，Schuessler 2009 の体系による。

⁸ 上古にも一見同様の構造がみられるが，動補型結果構文とみなし得る確実な用例はない。以下の用例における「滅」は他動詞用法であり，他動詞の連用（連動構造）であると解釈される。以下は太田 1958: 200 所引の例（ただし意味解釈に諸説ある個所である。仮に太田氏の訳を引用しておく）

・若火之燎于原，不可嚮邇，其猶可撲滅。（『尚書』「盤庚」2-274）

火が原で燃えるがごとくである。これに向い近づくことはできないが，なお撲滅することができる。

構文「Vt + Vi/A」へと再分析されたことになる。従来の研究では、「Vt + Ve/A」における「Ve/A」が他動詞用法とみなし得るか否かについて多くの議論がなされてきた。この問題については、現在でも決定的な認定指標は提示されておらず、先行研究の結論は必ずしも一致していないが、一般には中古初期の後漢の頃には、少なくとも一部の能格動詞は自動詞用法専用に近づいており、動補型結果構文の萌芽がみられると考えられている（宋亞雲 2004 など）。

- (4) 是諸魔衆，互相催切，各盡威力，摧破菩薩。（『過去現在因果經』4-40c）

これらの悪魔たちは、互いにせきたてあい、それぞれに力を尽くして菩薩を打ち破ろうとした。

2.2. 兼語構造

動補型結果構文の成立は、上述した能格動詞・形容詞の他動詞用法の衰退という通時的現象の他、「兼語構造」による使役表現の通時的変化とも密接な関わりを持っている（この点はすでに太田 1958 に指摘がある）。兼語構造とは、動詞連続の形式をとるもののうち、第一動詞の目的語が第二動詞の論理主語を兼ねるもの（＝「兼語」）であるタイプの構造を指す（用例 (5) では「齊」が兼語）。第一動詞が何らかの働きかけを含意する動詞である場合、使役的な意味がもたらされる。そして中古期になると、第二動詞が非対格動詞あるいは形容詞であるものが出現するようになり、動補型結果構文に意味機能が接近した構造——ただし「他動詞＋目的語＋補語」の形式である——がみられるようになる（用例 (6)）⁹。

- (5) 勸齊伐燕，有諸。（『孟子』「公孫丑下」1-289）

齊を勧めて燕を伐つようにしむけたというのは、本当にあったことなのか。

- (6) 王語木工「…擔物之法，禮當用手。由卿口銜，致使墮水。今當打汝前兩齒折。」（『賢愚經』4-429a，太田 1958: 200 所引の用例）

王は大工に言った。「…物を持つときは、手を用いるべきだ。君が口で銜えたために、（斧が）水に落ちてしまったのだ。今、お前の二本の前歯をたたき折ってやろう。」

もう一点触れておくべきことは、上古漢語では、一定程度文法化された「使」「令」が使役動詞として第一動詞に用いられた兼語構造もみられることである（用例 (7)）。この構文は中古にかけてさらに発達し、中古初期には、第二動詞に状態動詞や形容詞を伴うことが多くなった（小方 2002 の指摘による、用例 (8)）。この場合、具体的な行為を表す動詞を欠くけれども、「結果状態を生ぜしめる」という結果表現を担う構文の一つであったとみてよいであろう。興味深いのは、用

⁹ この類の構造を、「隔開式動補構造」と呼ぶ論者も少なくない（梅祖麟 1991 など）。

例 (9) のように、中古以降、「令」が一層の文法化を経て、第一動詞と第二動詞との間に生起する形式が出現したことである（古屋 2000，田中 2008 など参照）。用例 (9) から「令」が脱落すれば、現代語の動補型結果構文に極めて近い構造となる。現代語の動補型結果構文は、このような構文に由来するものも含まれると考えられる。すなわち 2.1 で述べた「他動詞＋非対格動詞／形容詞」に由来するものと、用例 (9) に由来するようなものとの複雑な過程で合流しつつ、近古（唐宋）以降の動補型結果構文が形成されていったと推定されるのである。ただしその具体的なプロセスは必ずしも明確にはなっていない。

- (7) 寡君使_レ下群臣_ヲ為_レ二魯衛一請上曰「無_レ令_レ輿師_ヲ陷入_レ君地」
（『左伝』「成公二年」2-794）

わが君は私たちを使わし、魯衛のために（あなたに軍隊を引き上げること）をお願いさせたのであり、「斉国に深く入ってはならない」と言われました。

- (8) 怒觸不周之山，使_レ天柱折_レ，地維絶。
（『論衡』「談天」2-469，小方 2002 より引用）

（共工は）怒って不周之山にぶつかり、天柱を折り、地維（＝大地をつなぐ綱）を絶った。

- (9) 象師散閣將象至會。尋使工師，作七鐵丸，燒_レ令_レ極赤。
（『賢愚経』4-372a～b，田中 2008 所引の例）

象使いの散閣は象をつれて集会に現れた。すぐに職人に七つの鉄の玉を作らせ、続いて（それを）焼いて真っ赤にさせた。

3. 「Vt + 在」結果構文の中古資料における共時的状況

本章では、以上を踏まえ、「Vt + 在」結果構文が生成されるメカニズムを論じていく。資料は、主に中古期に成立し、当時の口語の状況を比較的多く反映するとされる初期漢訳仏典を用いる。具体的には『中本起経』（207 年前後に成立か）、『六度集経』（252 年に江南で成立）、『出曜経』（399 年に成立）、『賢愚経』（445 年あるいは 435 年に成立）、『雜宝藏経』（472 年に成立か）などである。

3.1. 「Vt + 在」結果構文の定義

本稿で言う「Vt + 在」結果構文は、以下のごとき構文を指す。

- (i) 統語形式：主語（S = 動作主）＋〔前置詞 P＋前置詞目的語 Op（＝対象）〕
＋他動詞 Vt＋在（＋于）＋O（＝帰着点）

- (ii) 動補構造（「Vt + 在」）の結合価：三項（動作主・帰着点・対象）、二位（動作主・帰着点）¹⁰。
- (iii) 構文的意味：動作主（S）の行為（Vt）の実現により、対象をある帰着点（O）に定位せしめる。

すなわち、現代中国語における「你把那本書放在桌子上吧。」〔あの本を机に置きなさいよ。〕のような用例がこれにあたる。結果補語構造のVtの論理目的語（一般に〈対象〉）が、結果補語構造全体の目的語（〈帰着点〉）と一致しない点で、典型的な動補型結果構文の「Vt + Vi/A」結果構文とは異なる。なお、「你坐在椅子上吧。」〔椅子に座りなさいよ。〕のような文は、構文的意味の面で「定位せしめる」という広義の使役的な意味を持たないため（動作行為の結果、定位するのは動作主S）、「Vt + 在」結果構文とはみなさない。

もう一点、補足しておくべきことは、現代中国語の「Vt + 在」結果構文は、一般的には前置詞「把」を用いた「処置構文」の一種とみなされ、「定位せしめる」という広義の使役的な意味は、前置詞「把」からなる処置構文の構文的意味と結びつけられていることである。確かに現代中国語を共時的にみれば、このような分析が合理的なのであろうが、以下にみるように、歴史的には、「Vt + 在」という構造自体が、「把」などの前置詞の助けを借りずに、「定位させる」という広義の使役の意味を備えるようになった方が先だと考えられる（前置詞句の生起は随意的）。本稿では、以下において、「Vt + 在」が「Vtの実現により対象をある帰着点（O）に定位せしめる」という結果構文としての意味機能を備えているかを検討していくことにする。

3.2. 中古における「Vt + 在」結果構文の萌芽

中古資料において「Vt + 在」結果構文とみなし得るものは多くない。下に挙げたものは「V + 在 + O（＝帰着点）」という統語形式をとるが、いずれも構文的意味の面で結果構文とはみなし得ない。

- (10) 母既至已，嫌母遲故，尋作恨言：「我生在母邊，不如鹿邊生也。」
（『雜寶藏經』4-453b）

母親がついてからも、（娘は）母が遅れたことに不満を抱き、恨めしげにいった。「私はお母さんのところに生まれてきてしまったが、鹿のところに生まれたほうがよかった。」

¹⁰ 本稿における動詞の結合価に関する概念は、基本的には現代中国語の結合価を論じた袁毓林（1998）に依拠している。「項（item）」は、動詞が一つの文において支配し得る名詞句の数（前置詞を用いて導かれる名詞句を含む）、「位（position）」は、動詞が一つの文において前置詞を用いずに支配し得る名詞句の数を指す（袁毓林 1998: 100 参照）。

- (11) 海神見是商主能捨珍寶救諸商賈，心生歡喜，取是商主所棄珍寶擔，飛在前。
(『雜寶藏經』 4-488b)

海神はこの商人の長（＝比舍佉）が財宝を捨て商人たちを救ったのを見ると、喜んで商人の長が海に捨てた財宝をとり、背に負って（比舍佉たちの）前まで飛んできた。

しかし結果構文とみなし得るものも、皆無ではない。以下に挙げる用例は「V + O1（＝対象）＋在＋ O2（＝帰着点）」という兼語構造の O1 が省略された文である可能性を排除できないものが多いけれども、用例 (14) のように、兼語が省略されたとの解釈が成り立ち難い構造も存在するため、これらのうちの一部の「V＋在」は結果構文となり、「定位せしめる」という構文的意味を獲得していたと考えられる。用例 (15)(16) のように、行為の対象が前置詞に近づいた動詞「取」に導かれており、Vt の直後に対象（O1）が省略されているという解釈が不自然な形式が存在することもこの推定を裏付ける¹¹。しかし多くの用例が兼語構造とも解釈できるという点で萌芽期であったとも言える。

- (12) 尊者僧迦羅刹『造立修行經』亦作是說「猶如多捕眾鳥，藏在大器。隨時瞻視，養食以時。毛尾既長，隨時剪落，選其肥者，日用供廚。…」
(『出曜經』 4-655c)

尊者・僧迦羅刹も『造立修行經』のなかでこのように言う。「種々の鳥を多く捉え、大きな器に入れておくようなものだ。つねに観察し、食物として養っておく。羽毛・尾羽が伸びると、隨時切り落とし、太ったものを選び、日々厨房に供するのだ。…」

- (13) 技術已備，師復試其意。師飲鹽湯，即吐在地，使弟子食之。
(『出曜經』 4-673c)

（弟子である婆耶羅に）技能が備わると、師匠は、さらに彼（＝弟子）の心持ちを探ろうとし、塩湯を飲むとすぐに地に吐き出し、弟子にそれ（＝吐き出されたもの）を食べさせようとした。

- (14) 尊者答言「我念往昔五百世中生於狗中，常困飢渴。唯於二時，得自飽滿。一值醉人酒吐在地，得安樂飽。…」
(『雜寶藏經』 4-484a)

尊者が答えて言った。「私は過去の五百世において犬に産まれたが、いつも飢えと渇きに苦しめられた。ただ二回の機会に満足に食べられた。一つ目の機会に、酔った人が酒を飲んで地面に吐いた時であり、（この時は）安心を得、腹一杯たべるのを楽しんだ。

¹¹ 中古の前置詞化した「取」は基本的には漢訳仏典にしか見いだされないため、これを原典言語（サンスクリットなど何らかのインド語）の影響で文献上に生じたものにすぎない（すなわち現実の中国語口語としては存在しなかった翻訳文体）という見方もある（曹廣順・遇笑容 2000、曹廣順・龍國富 2005 など）。これに対して、中国語の連動構造から発展したものとして解釈可能とする見方もある（趙長才 2010）。本稿は、かりに「取」の前置詞化が原典言語の影響だったとしても、用例 (15)(16) の「Vt＋在」に結果構文としての使役の意味が全く備わっていなかったのであれば、漢訳仏典の翻訳者たちがこのような表現を採用したことを合理的に解釈することは難しいと考える。

- (15) 時流離王，取七萬釋種成須陀洹果者生埋在地，暴象踐殺。
(『出曜經』 4-625a)

そこで流離王は、七万のシャカ族のうち須陀洹果を得たものを（捉え）、地面に生きたまま埋め、暴れ象に踏み殺させた。

- (16) 時婆羅門又語王言「汝身盛壯力士之力，若遭斫痛，儻復還悔。取汝頭髮堅繫在樹，爾乃然後，能斫取耳。」
(『賢愚經』 4-389c)

その時、バラモンはさらに国王にいった。「あなたは身体が頑強で、格闘家のような力がある。（首を）斬られる痛みを味わえば、恐らく後悔するでしょう。（まず）髪を木に堅く結びつけください。その後に、（あなたの首を）斬り取ることができるでしょう。」

3.3. 機能上「Vt + 在」結果構文と対応する二種の統語形式

上で述べたように、中古期においては、「V + 在」結果構文はまだその萌芽がみられる程度であり、言語体系内で重要な位置を占めるには至っていなかった。「動作主の行為の実現により、対象をある帰着点に定位せしめる」という意味は、主として以下にみる「Vt + O1 (=対象) + 在 + O2 (=帰着点)」兼語構造、および「Vt [+ O1 (=対象)] + 著 + O2 (=帰着点)」連動構造により表現されていた¹²。

〔構文 (A)：「Vt + O1 (=対象) + 在 + O2 (=帰着点)」兼語構造〕

- (17) 爾時世尊，躬自寫水於地，告羅云曰「汝見吾 * 寫 [宋本・元本・明本「瀉」]
水在地不乎。」
(『出曜經』 4-668a)

その時、世尊は自ら水を地にそそぎ、羅云に言った。「お前は私が水を地にそそぐのをみたか。」

- (18) 「…我時即入，盜彼飯食，值彼食器口小，初雖得入頭，後難得出。雖得一飽，然受辛苦。夫從田還，即便 * 剪 [宋本「摘」，元本・明本「翦」] 頭在於器中。…」
(『雜寶藏經』 4-484a)

…(犬であった)私は(家に)入り、食べ物を盗んで食べた。(しかし)その食べ物が入った器の口が小さかったため、頭は入れられたものの、後で出られなくなり、腹を満たせたものの苦悩を味わった。夫婦の夫の方が帰ってくると、(私の)首を切り(首は)器の中に落ちた。…

- (19) 時婆羅門舉手欲斫，樹神見此，甚大懊惱「如此之人，云何欲殺？」即以手搏婆羅門耳，其項反向，手腳繚戾。失刀在地，不能動搖。
(『賢愚經』 4-390a)

¹² 本稿が「Vt [+ O1 (=対象)] + 著 + O2 (=帰着点)」(構文 (B)) を兼語構造とはせず、連動構造とみなすのは、「著」が〈対象〉と〈帰着点〉のいずれをも同時に目的語としてとり得る(二重目的語をとり得る)動詞だからである。なお、本稿で言う「Vt + O1 (=対象) + 在 + O2 (=帰着点)」兼語構造を、「隔開式動補構造」(梅祖麟 1991 など)の一種とみなす立場もあろう。

そこでバラモンは手を挙げて（月光王の首を）斬ろうとした。樹神はそれを見ると、大いに苦悶し苛立った。「どうしてこのような人が殺されようとしているのか」。樹神がすぐにバラモンの耳を手でつかむと、（バラモンの）首は反対に向き、手足がねじ曲がった。（バラモンは）刀を地面に落としてしまい、身動きできなかった。

- (20) 尊者答言「…爾時¹³有諸比丘，於四衢道頭施大高座，置鉢在上，而作是言…」
（『雜宝藏經』 4-491a）

尊者は答えていった。「…その時、比丘たちは大通りの道端に大きくて高い座を備え付け、鉢をその上にのせ、このように言った…」

〔構文 (B) : 「Vt [+ O1 (=対象)] + 著 + O2 (=帰着点)」連動構造¹³〕

- (21) 昔者菩薩生於貧家。貧家不育，以 * 褻 [宋本・元本・明本「氈」] 裹之，夜無人時，默置四 *，并錢一千送著其道。
（『六度集經』 3-25c）

昔、菩薩は貧しい家に生まれた。家が貧しくて養うことができずに、布で包み、夜人の無い時分に密かに四方に通ずる道に置き去りにし、銅錢千枚を併せて道に置いておいた。

- (22) 妻侍質家女，女浴脱身珠璣衆寶，以懸著架。
（『六度集經』 3-3a）

（国王の）妻は質に入れられた先の（バラモンの）家の娘に仕えた。その娘は沐浴するために、身に着けていた真珠や様々な宝物をはずし、（それを）骨組みの棚にかけておいた。

- (23) 爾時其夫猶故未寤，還以鑰匙繫著腰下。
（『雜宝藏經』 4-458a）

その時、彼女（=美しい王女）の夫はまだ目覚めていなかったで、（皆は）カギを再度（夫の）腰に結びつけておいた。

- (24) 大臣孝順心所不忍，乃深掘地，作一密屋，置父著中，隨時孝養。
（『雜宝藏經』 4-449b）

その大臣は親孝行であったので、（親を追いつ出すのが）忍びがたく、地面を深く掘り、密室を作り、父をその中においておき、隨時世話をした。

この二種の構文にも構文的意味の点での差異がみとめられる。すなわち、構文 (A) では、動作主の意図が行為 (Vt + O1) までしか覆っておらず、結果状態 (在 + O2) までは及んでいないが（典型的な用例は (17) ~ (19)）、構文 (B) では動作主の意図が結果状態 (著 + O2) まで及んでいると考えられるという点である。

¹³ 本稿が「Vt [+ O1 (=対象)] + 著 + O2 (=帰着点)」(構文 (B)) を兼語構造とはせず、連動構造とみなすのは、「著」が「以 + 〈対象〉 + 著 + O (=帰着点)」という前置詞「以」を用いて〈対象〉を導く構文に用いられ得るからである（例：以歡喜園置佛鉢中〔歡喜丸を仏の食器のなかに入れた〕）。そうであれば、構文 (B) は「以 + 〈対象〉」という前置詞句が省略されていると解釈できることになり、構文 (B) は連動構造とみなすことができる。

以下、これらの構文と「Vt + 在」結果構文との機能上の継承関係に着目しながら、「Vt + 在」結果構文の生成メカニズムを推定していきたい。

4. 「V + 在」結果構文の生成メカニズム

上述のように中古期においては、「Vt + 在」結果構文はすでに出現していたと考えられるが、萌芽状態にあった¹⁴。本稿は、この「Vt + 在」結果構文は、二種の来源持ち、その二種が合流することで生成されたのだと考える。すなわち、来源の一つは上記の構文(A)「Vt + O1 (=対象) + 在 + O2 (=帰着点)」兼語構造であり、いま一つは「Vt [+ O1 (=対象)] + 著 + O2 (=帰着点)」連動構造だと推定するのである。

まず構文(A)に由来すると考えられる「Vt + 在」結果補語構造には「吐在」〔～に吐く〕等がある。これらの構造における行為動詞は〈帰着点〉を目的語としてとることができず(中古期には「吐地」という構造は確認されない)¹⁵、〈帰着点〉との関係は疎遠であった。中古期においては、これらの動詞は構文(A)に生起することはできるが、構文(B)に生起することはほとんどない¹⁶。ここから本稿は、「Vt + O1 (=対象) + 在 + O2 (=帰着点)」兼語構造では、O1がしばしば先行文脈に既出のために省略され「V + 在 + O (=帰着点)」という形式で出現することが少なくないために、この構造が固定化を経て構文へと変化するプロセスを辿ることになったと考える。そしてその時、「Vt + Vi/A」という動補型結果構文への類推が働き——この「在」〔～にある〕はある種の状態を表している点で多くのVi/Aと共通する性質を有する——これが動補構造へと再分析され、動補型結果構文の周辺の構文に位置づけられることになったのだと推定する。以上の推定が正しければ、この類の「Vt + 在」の結果構文としての使役の意味は、兼語構造の有する構造的意味に由来することになる。

構文(B)に由来すると考えられる「Vt + 在」結果補語構造には、「埋在」〔～に埋める〕、「繋在」〔～につなぐ〕等がある。これらの構造における行為動詞は、〈帰着点〉をその目的語にとり得るものであり(以其父母, 生_埋地中〔その父母

¹⁴ 「Vt + 在」結果構文と密接な関係にあると思われる「Vt + 到」結果構文は、中古期には未だ出現していなかったようである。中古期の資料には「Vt + 到 (+ 於) + O (=移動地点)」という構文が少なからずみられるのであるが、本稿の「Vt + 在」結果構文についての用例(14)(15)(16)のように、それが結果構文であることを強く示唆する用例が、南北朝以前の文献には見出し難い。中古資料において「行為の実現により、対象のある地点に移動せしめる」という意味機能は、主に「V (+ O) + 著 + O2 (=移動地点)」連動構造によって担われていた。

¹⁵ 下列は例外であるようだが、必ずしも中古中国語の反映とは限らない(『法苑珠林』は近古中国語に属する唐代の編纂)。

問「何以作牛。」答「由過去世經他穀田，取五六粒粟口*嘗〔元本・明本「嚐」〕吐地，以損他粟故作此牛。…」(『法苑珠林』所引『處處經』53-478c)〔(弟子が) たずねた。「どうして牛になったのでしょうか。」(仏は) 答えて言った「過去世に他人の畑を通った時，五・六粒の粟を口に入れてから地に吐いて，その人の粟を損なったために牛になったのだ。…」〕

¹⁶ 構文(B)に現れることもあるが、この時には動作主の意図性が結果状態まで関わっている。次の例を参照。

食竟，洗手漱口。含一口水，吐著舍利弗鉢中，言…(『雜譬喻經』4-506c)〔(バラモンは) 食べ終わると，手を洗って口を漱いだ。(そして) 水を一口に含むと，舍利弗の食器の中に吐きつけて言った…〕

を地中に生き埋めにし]『雑宝蔵経』4-455b;以索繫樹〔縄で木に縛り付け〕『賢愚経』4-422a),〈帰着点〉と密接な関係がある。中古期においては、これらの動詞はしばしば構文(B)に生起するが,「置」など少数の例外を除いて,構文(A)に生起することはほとんどない。ここから本稿は,「Vt + 著」という連動構造の「著」が文法化により動作性を消失して場所を導く前置詞に近づいた結果,「Vt + 在」結果構文への類推が働き,これが動補型結果補語へと再分析されると同時に,「語彙交替」が生じて「著」が「在」に取り替えられ,「Vt + 在」結果構文に合流したのだと推定する。この場合,結果構文としての使役的意味は,元来は他動性の高い動詞であった「著」の意味機能(〈対象を〉を〈帰着点〉に付着させる)に由来することになる。

構文(B)の「Vt [+ O1 (=対象)] + 著 + O2 (=帰着点)」連動構造は中古を通じて極めて盛んに用いられた。よってこれが「Vt + 在」結果構文に全面的に取り替わるのは,近古(唐宋)以降だと考えられる。

5. 結論

①中古時期においては,「動作主(S)の行為(Vt)の実現により,対象をある帰着点(O)に定位せしめる」という意味を表す「Vt + 在」結果構文は,その出現が認められるものの,萌芽状態にあった。

②「Vt + 在」結果構文の来源は二つあったと考えられる。一つは,「Vt + O1 (=対象) + 在 + O2 (=帰着点)」兼語構造(=構文(A))であり,いま一つが「Vt [+ O1 (=対象)] + 著 + O2 (=帰着点)」連動構造(=構文(B))である。構文(A)では〈対象〉がしばしば先行文脈に既出のために省略され「Vt + 在」という形式で出現したため,これが固定化を経て一つの構文へと変化するプロセスを辿った。このとき「Vt + Vi/A」という動補型結果構文への類推が働き——この「在」[～にある]はある種の状態を表している点で動補構造の多くのVi/Aと共通する性質を備えていた——これが動補構造へと再分析され,動補型結果構文の周辺の構文に位置づけられることになった。構文(B)では「V + 著」という連動構造の「著」が文法化により動作性を消失して場所を導く前置詞に近づいた結果,構文(A)に由来する「Vt + 在」結果構文への類推が働き,これが動補型結果補語へと再分析されると同時に,「語彙交替」が生じて「著」が「在」に取り替えられ,「Vt + 在」結果構文が出現した。よって構文(B)に由来するものは,構文(A)に由来するものが生成された後に出現したのだと考えられる。

③以上の推定が正しければ,「Vt + 在」の結果構文のうち構文(A)に由来するものの結果構文としての使役的意味は,この兼語構造全体が備えていた使役的意味に由来し,構文(B)に由来するもののそれは,元来は他動性の高い動詞であった「著」の意味機能(〈対象を〉を〈帰着点〉に付着させる)に由来することになる。

⑤通時的な観点からすれば、「Vt + 在」結果構文の出現の重要性は、「在」という歴史的にも使役的意味を備えたことのない語が結果補語を担うことになった点にある。この構文において使役的意味は補語によって担われているのではなく、「Vt + 在」という構造全体によって担われていたと考えるしかない。よって「Vt + 在」結果構文の出現は、中古期には動補型結果構文が成立していたことを改めて証明する現象であるとも言える。

【参考資料】『雑宝蔵經』における「在」「著」を含む主な統語形式

表 1 『雑宝蔵經』における「在」を含む統語形式

「在」の担う統語成分	統語形式	用例数
在 = 述語動詞 (文レベル・フレーズレベルのいずれも含む)	(1) 在 (+ 於) + 〈帰着点〉	135
	(2) 在 + 〈時間〉	8
	(3) 在 + 〈状態〉	2
	(4) 在	7
在 = 前置詞	(5) 在 + 〈帰着点〉 + VP	35
	(6) 在 + 〈時間〉 + VP	3
在 = 補語あるいは兼語構造の後項動詞	(7) V + O + 在 (+ 於) + 〈帰着点〉	11
	(8) V + 在 (+ 於) + 〈帰着点〉	16

表 2 『雑宝蔵經』における「著」を含む統語形式

「著」の担う統語成分	統語形式	用例数
著 = 主要動詞 (文レベル・フレーズレベル のいずれも含む)	(1) 著 a (+ 於) + 〈帰着点〉	18
	(2) 著 a + 〈対象〉 + 〈帰着点〉	4
	(3) 著 b + 〈対象〉 (= 衣服)	20
	(4) (〈衣服〉 +) 著 b + 〈帰着点〉 (= 身体部位)	3
	(5) 著 a/b	11
著 = 補語あるいは兼語構造の後項動詞	(6) V + O + 著 a + 〈帰着点〉	12
	(7) (以 + 〈対象〉) V + 著 a + 〈帰着点〉	5
	(8) V + 著 a + 〈対象〉 (= 心理的に執着する対象)	12

* この他にさらに 5 例あるが、どの類に分類すべきか不明である。

* 著 a = 『広韻』入声葉韻：著，附也。直略切（澄母葉韻開口三等）

著 b = 『広韻』入声葉韻：著，服衣於身著附也。張略切。又直略，張豫二切（張略切知母葉韻開口三等）

使用テキスト

- 『尚書』：『尚書正義』（十三經注疏 整理本），北京大學出版社，2000 年
 『左伝』：『春秋左傳注（修訂本）』楊伯峻，中國古典名著譯註叢書，中華書局，1990 年
 『論語』：『論語集釋』（新編諸子集成第一輯），程樹德撰・程俊英・蔣見元點校，北京：中華書局 1990 年
 『孟子』：『孟子正義』（新編諸子集成第一輯），焦循撰・沈文倬點校，北京：中華書局，1987 年
 『論衡』：『論衡校釋』（新編諸子集成第一輯），黃暉撰，北京：中華書局，1990 年
 『中本起經』『六度集經』『出曜經』『賢愚經』『雜寶藏經』『雜譬喻經』『法苑珠林』：『大正新修大藏經』
 高楠順次郎他，大藏出版社，1924-1934 年

参考文献

【日本語】

- 太田辰夫 1958. 『中国語歴史文法』江南書院
 太田辰夫 1988. 『中国語史通考』白帝社
 石村 広 2008. 『中国語結果構文の研究』白帝社
 小方伴子 2002. 先秦・兩漢の使動用法と使令兼語式. 『中国語学』249
 志村良治 1984. 『中国中世語法史研究』三冬社
 田中希実 2008. 『太子須大拏經』『賢愚經』における“令”使成式とその成立背景『開篇』27
 戸内俊介 2018. 『先秦の機能語の史的発展—上古中国語文法化研究序説—』研文出版
 古屋昭弘 2000. 『『齊民要術』に見る使成フレーズ Vt + 令 + Vi』『日本中国学会報』52

【中国語】

- 曹廣順・遇笑容 2000. 中古譯經中的處置式《中國語文》第 6 期
 曹廣順・龍國富 2005. 再談中古譯經中的處置式《中國語文》第 4 期
 大西克也 2004. 施受同辭芻議—《史記》中的“中性動詞”和“作格動詞”—*Meaning and Form: Essays in Pre-Modern Chinese Grammar*. [意義與形式—古漢語語法論文集]. Ken-ichi Takashima & Jiang Shaoyu (eds.), LINCOM EUROPA
 丁邦新 2002. 上古漢語的構詞問題——評 Laurent Sagart: *The Roots of Old Chinese*. 《語言學論叢》26
 梅祖麟 1991. 從漢代的“動，殺”，“動，死”來看動補結構的發展—兼論中古時期起詞的施受關係的中立化. 《語言學論叢》16
 劉子瑜 2009. 處置式帶補語的歷時發展. 《語言教學與研究》2009(1)
 宋亞雲 2014. 《漢語作格動詞的歷史演變研究》北京大學出版社
 王 力 1958. 《漢語史稿（中冊）》科學出版社；『漢語史稿（重排本）』中華書局，1980 年
 魏培泉 2000. 說中古漢語的使成結構. 『中央研究院歷史語言研究所集刊』71(4)
 周法高 1962. 《中國古代語法 構詞法》中央研究院歷史語言研究所專刊之三十九
 袁毓林 1998. 《漢語動詞的配價研究》江西教育出版社
 趙長才 2010. 《也談中古譯經中“取”字處置式的來源——兼論“打頭破”，“啄雌鴿殺”格式的形成》
 遇笑容・曹廣順・祖生利（主編）《漢語史中的語言接觸問題研究》語文出版社

【英語】

- Sagart, Laurent 1999. *The Roots of Old Chinese* (Amsterdam studies in the theory and history of linguistic science; ser. 4. Current issues in linguistic theory; v. 184), J. Benjamins.
 Schuessler, Axel 2009. *Minimal Old Chinese and Later Han Chinese, A Companion to Grammata Serica Recensa*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
 Xu Dan 2006. *Typological Change in Chinese Syntax*, Oxford University Press.

再び甲骨文の「不」と「弗」について —使役との関わりから—

戸内 俊介

1. はじめに

戸内 (2018) は、甲骨文に見える否定詞「不」と「弗」の否定作用の違いについて検証を行ったものである。2018 年 3 月に刊行されたが、その後、自身の見解に変化が生じたため、本稿では改めて修正案を提示したい。

甲骨文の「不」と「弗」の研究概況については、戸内 (2018: 65–75) ですでに示したとおりであり、ここではその概略を記すに留める。

上古中国語の「不」と「弗」の機能については、従来、否定の強調度合いの違いにその区別を求めることが多かったが、丁聲樹 (1935: 991–992) が「弗」は「不之」に相当し、目的語代名詞「之」が内包されていると述べ、Boodberg (1934/1979: 430–431) が「弗 *piuət < 不 *piuə + 之 *ti」という合音説 (戸内 (2018) では「併合説」と称す) を提起して以降、様々な議論を呼んだ。現在でも幾ばくかの論争はあるが、大西 (1988)、魏培泉 (2001) が証明するように、併合説が現在では首肯される傾向にある。

一方で、甲骨・金文・『尚書』といったより古い文献では併合説が成り立たないことが、呂叔湘 (1941/1999: 82–83) や周法高 (1953/1972: 44) らによって早くから指摘されている。実際、後に見るように、甲骨文の「弗」はしばしば目的語をともなった動詞句を否定しており、「弗」に目的語代名詞「之」が含まれているとは考えにくい。

甲骨文の否定詞「弗」と「不」については、これまで種々の見解が提出されてきたが、中でも高嶋謙一氏の学説は今なお影響力が強い。Takashima (1988: 115) はまず「不」と「弗」を音節頭子音によって *p-type 否定詞と分類しつつ (一方、「勿」、「毋」を *m-type と分類)、意志によってコントロールできない、uncontrollable な動詞を否定するものと分析する。その上で、「不」は状態性を否定する stative/eventive negative、「弗」を非状態性 (動態性) を否定する non-stative/non-eventive negative と解釈する (Takashima 1988: 127)。

無論、高嶋氏の見解にも問題が無いわけではない。例えば、「不」は時に、「獲」など動態性の高い動作動詞とも共起する。これに対し高嶋氏は、「saliency は「動作」よりは「現象」—即ち「獲」ということがおこる「イベント」にある」 (高嶋 1992: 46) と述べつつ、さらに、「「状態」と「現象」の違いとしては、前者が時間的にある程度継続するのを前提とするが、後者は継続性よりはむしろ瞬間的なイベントとしてとらえたものである。換言すれば、現象をくりかえすと状態に

なる。その点両者はちかいものと言える」(高嶋 1992: 48)として「不」が状態にも現象にも用いられる動機を説明しようとするが、アスペク的な事態タイプ(situation type)が相反する両者に(Lyons 1977: 483 は, event (現象)を動態的タイプ(dynamic situation)の下位分類とする),なぜ同じ言語形式が取られているか,についての解釈としては説得力を持ち得ない。

張玉金(2006)は膨大な用例の検討を通して「不」と「弗」の差異について,いくつかの項目を挙げている。その中で,「不」は状態や動作を表す自動詞を否定し,「弗」は動作を表す他動詞を否定するとの見解を提示するが(張玉金 2006: 146),「不」が他動詞を否定する事例は,例外と言えないほど多く,また「弗」の否定する動詞は時に「死」や「疾」など典型的な動作行為ではない例も散見され,その結論は必ずしも首肯できるものではない。

2. 上古中国語の非対格動詞(unaccusative verb)について

戸内(2018)のあらましは次のようなものであった:「不」は,動詞の結果状態(或いは状態パーフェクト)の否定詞であり,先行して発生する動作プロセスは相当程度背景化され,結果残存・継続の局面が前景化されている;「弗」は動詞によって対象にもたらされた変化や結果を否定する“致使”(使役)の否定詞であり,「不」とは異なり,動作プロセスは背景化されていない。

論拠は,非対格動詞(unaccusative verb)と否定詞の共起状況にある。

ここで甲骨文の非対格動詞に立ち入る前に,まず,上古中期～後期¹の中国語における非対格動詞について概略を述べたい²。上古の非対格動詞は,明示的なヴォイスマーカーなくして主語と目的語の意味役割(thematic role)が交代する動詞を指す:目的語をとらないとき,主語の意味役割が被動作主(patient)や被使役者(causee)或いは対象(theme)となる;目的語を取るとき,主語の意味役割が動作主(agent)または使役者(causer)となり,目的語の意味役割が被動作者/被使役者/対象となる。非対格動詞文は従来,“受事主語句(被動作主主語文)”,“意念被動句(概念上の受動文)”,“反賓為主”,“施受同辞”などと称されてきた。

¹ 本稿では松江(2010: iii)により,上古中国語の時代区分を以下のように定める。

上古前期中国語:殷,西周時代,紀元前13世紀～紀元前771年

上古中期中国語:東周(春秋戦国)時代,紀元前771年～紀元前221年

上古後期中国語:秦,前漢時代,紀元前221年～紀元8年

言語資料としては,上古前期中国語は殷墟甲骨文,西周金文,『尚書』,『毛詩』など。上古中期中国語は楚簡(戦国時代楚の竹簡),『論語』,『春秋左氏伝』,『孟子』,『呂氏春秋』など。上古後期中国語は,秦簡(秦代の竹簡),漢簡(漢代の竹簡),馬王堆帛書,『史記』などが挙げられる。

² 以下の一段は,2013年度第1回TB+OC研究連絡会議(2014年1月26日,於立教大学)で筆者が口頭発表した,「上古中国語動詞研究概況—能格動詞・対格動詞の対立から—」に基づく。

- (1) 欒魴傷。 (『左伝』襄公 23 年)

欒魴は傷を負った。

- (2) 酆舒爲政而殺之，又傷潞子之目。 (『左伝』宣公 15 年)

酆舒は政権を取ると潞子嬰兒の夫人を殺し，さらに潞子の目を傷つけた。

例 (1)(2) ともに，動詞「傷」はいかなるマーカーも帯びていないが，前者では主語が被動作者（或いは被使役者）である一方，後者では主語が動作主（或いは使役者）で目的語が被動作者／被使役者となっている。

嘗ては，(2) のような他動詞型を基本形と見なした上で，(1) のような被動作者／被使役者／対象が主語に立つ自動詞型を受動文の一種と考え，文脈・修辭的要請，ないしは主語の有生性の低さに，その成立動機を求めていた。しかし，Cikoski (1978: 128–134) は上古中国語の動詞を能格動詞 (ergative verb) と中性動詞 (neutral verb) に分類し，自動詞型成立の動機を能格動詞の性質，謂わば，動詞固有の構造特徴に帰した。

上古中国語の議論では，能格動詞は非対格動詞に，中性動詞は非能格動詞 (unergative verb) に該当する³。非対格動詞は多くの場合，自動詞の下位に分類されるが，上古中国語では自動詞，他動詞に拘わらず，無目的語文の主語と有目的語文の目的語が同じ意味役割を持つ動詞についての謂いである。

後，Cikoski の学説は大西 (2004)，巫雪如 (2008)，宋亚云 (2014)，杨作玲 (2014) などに継承・修正され，近年盛んに議論されている。しかし，どの動詞を非対格動詞と認定するかには，研究者間で出入りが大きく，未だ一致を見ていない。筆者は主に，大西 (2004) 及び大西 (2009) に従う⁴。

具体例を見てみたい。非対格動詞は上で述べた通りであるが，一方，非能格動詞は目的語を取るか否かに関わらず，主語の意味役割が変わらない動詞である。両種の文型は以下のように図式化できる。

- | | | |
|-----|-----------------|----------------|
| (3) | 他動詞型 | 自動詞型 |
| | 非対格動詞：X + V + Y | ／ <u>Y</u> + V |
| | 非能格動詞：X + V + Y | ／ <u>X</u> + V |

例 (1)(2) の「傷」は非対格動詞とされ，目的語を取らないとき，その主語は「傷つけられる側」で，「傷つける側」ではない。一方，目的語を取るとき，主語は「傷つける側」で，目的語は「傷つけられる側」である。例えば，

³ 中国語研究において，能格動詞や非対格動詞がどのように扱われてきたのかについては，Aldridge (2015) が紹介しており，参照に値する。

⁴ 大西氏自身も，非対格動詞の認定基準を変えており，例えば大西 (2004) では，「敗」，「傷」を非対格動詞に含めていないが，大西 (2009) ではこれらを非対格動詞の例として挙げている。

- (4) 欒魴傷。(= (1)) (『左伝』襄公 23 年)
Y + 傷 = Y が傷つけられる

欒魴は傷を負った。

- (5) 酆舒爲政而殺之，又傷潞子之目。(= (2)) (『左伝』宣公 15 年)
X + 傷 + Y = X が Y を傷つける

酆舒が政権を取ると潞子嬰兒の夫人を殺し，さらに潞子の目を傷つけた。

次の「追」は反対に非能格動詞であり，目的語の有無に拘わらず，主語は常に「追う方」を指す。例えば，

- (6) 項王之救彭城，追漢王，至滎陽。(『史記』項羽本紀)
X + 追 + Y = X が Y を追う

項王（項羽）が彭城を救ったとき，漢王（劉邦）を追って，滎陽に着いた。

- (7) 燕軍樂毅獨追，至于臨菑。(『史記』樂毅列伝)
X + 追 = X が追う

燕軍の樂毅は単独で追ひ，臨菑に着いた。

非対格動詞に関連して，上古中国語動詞の「清濁別義」と称される現象についても触れておかねばなるまい。これは，声母（音節初頭子音）の清濁（有声か無声か）の違いによって，動詞の意味が異なる現象を指す。そしてその対立は，非対格動詞の「X + V + Y」型と「Y + V」型に対応する。

例えば，動詞「敗」は非対格動詞であるが，唐・陸德明『經典釈文』は「敗」の字音について，以下のような注を付す。

- (8) 鄭皇戌使如晉師，曰：“…楚師必敗。” 僂子曰：“(晉) 敗楚服鄭，於此在矣。” (『春秋左氏伝』宣公十二年)

『經典釈文』：敗楚，必邁反。

鄭皇戌は人を晉の軍隊のもとに行かせて言った，「…楚軍は必ず敗れます」と。僂子は言った，「(晋が) 楚を破り，鄭を服従させるなら，正に今です」と。

『經典釈文』：「敗楚」は必邁の反。

(晉) 敗楚：X + 敗 + Y (X が Y を敗北させる)

必邁の反 = 清音声母 = *prâts⁵

楚師必敗：Y + 敗 (Y が敗北する)

(音注無) = 濁音声母 = *brâts

⁵ この上古音の復元音価は Schuessler (2009) による。

- (9) 惠公之季年，敗宋師于黃。 (『春秋左氏伝』 隠公元年)

『經典釈文』：敗，必邁反

惠公の季年は宋を黄で敗北させた。

『經典釈文』：「敗」は必邁の反

惠公之季年敗宋師：X + 敗 + Y (X が Y を敗北させる)

必邁の反 = 清音声母 = *prats

「敗」の声母と意味の対立は以下のように整理できる。

- (10) 敗 *brats (濁音)：敗北する (自動詞)
敗 *prats (清音)：敗北させる (他動詞／使役動詞)

多くの研究者は、この自他の対立を上古の形態的な違いに由来するものとして、上古音を復元するが、その解釈はなお一致を見ていない。例えば、Mei (2012: 11–12) は濁音声母の自動詞を語根 (root) と見なしつつ、清音声母の他動詞／使役動詞に対し、非濁音化を引き起こす causative *s-prefix を想定する。すなわち、

- (11) 敗 *brads > bwai ‘ruined, defeated’
敗 *s-brads > *prads > pwai ‘to ruin, to defeat’

一方、Baxter & Sagart (2014: 54) は清音・他動詞／使役動詞を語根と見なしつつ、濁音声母の自動詞に、濁音化を引き起こす intransitive *N-prefix (N = 後続の子音の調音点を伴った鼻音) を推定する。すなわち、

- (12) 敗 *N-p^hra[t]-s > baejH ‘suffer defeat’
敗 *p^hra[t]-s > paejH ‘defeat (v.t.)’

斯くして、清濁別義を上古の形態的違いの反映と見なすのが、現在の上古音研究の趨勢であるが、それでもなお筆者は清濁別義の存在そのものに対し懐疑的である⁶。そもそも清濁別義の代表例として扱われる「敗」、「見」、「別」、「折」は、いずれも非対格的振る舞いを見せる動詞であり、その文型の違い—「Y + V」か「X + V + Y」か—から意味的の違いを判別できるもので、そこにさらに音型の違いを想定するのは redundant である。また、清濁別義を伴うのが非対格動詞の一部に限られる点も、上古にその形態的な反映が体系的ではなかったことを裏付ける。

清濁別義については反論も多く、例えば古くは北齊・顔之推『顔氏家訓』音辞

⁶ この問題については、かつて野原将揮氏 (成蹊大学) と共同で「清濁別義」と称される現象について」という題目のもと、2014 年度第 1 回 TB + OC 研究集会 (2014 年 7 月 6 日、京都大学) にて研究報告を行った。

篇が、これを「此其穿鑿耳(こじつけであろう)」と批判しているほか、魏培泉(2000: 848)は、

- (13) 上古漢語有些單音節的使動詞雖可以用清濁或四聲來與其基式相區別，但在實際上却仍須依賴句法。如「甲敗乙」是「乙」失敗，而「甲敗」一定是甲失敗，不會理解為「甲 i 敗 j」(即甲打敗某一個對象，只是這個對象不具語音形式)。這也就是說，作為使動詞用法的一個動詞後頭一般得有一個具語音形式的賓語才行，也就是不能有零賓語。因此我們可以說，無論使動詞與其基式是否有形態的區別，其主要的區別還是依賴句法。此外上古漢語單音節使動詞和其基式間沒有形態的變化可能也有不少。

上古中国語のいくつかの単音節使動詞(非対格動詞の「X + V + Y」型：引用者注)は清濁や四声でその基本形式(非対格動詞の「Y + V」型：引用者注)と区別できるが、実際にはなお文法に依存せねばならない。例えば「甲敗乙」は「乙」が敗れるが、「甲敗」は必ず甲が敗れるのであり、「甲 i 敗 j」(即ち甲がある対象を打ち破るも、この対象が語音形式を備えていない)とは理解できない。これはすなわち、使動詞用法としてのある動詞の後ろにはふつう語音形式を備えた目的語がなければならず、つまりゼロ目的語ではいけないのである。従って私は、使動詞(X + V + Y)とその基本形式(Y + V)が形態的区別があるかどうかにかかわらず、その主要区別はやはり文法に依存するのだと考える。この他、上古中国語の単音節使動詞とその基本形式の間には形態変化がなかった可能性も少なくない。

として、清濁別義が認められない可能性を提示する⁷。以上により、本稿ではひとまず、非対格動詞と清濁別義を切り離して扱うこととする。

3. 戸内(2018)の論旨

以上は、上古中後期の状況であるが、甲骨文に目を向けると、やはり非対格的振る舞いの動詞を見ることができる。例えば例(14)～(21)の動詞「得」,「𠬞／𠬞(擒)」,「𠬞」,「𠬞(振)」,「𠬞／𠬞(賓)」,「來」,「涉」,「羸」である。うち、aは目的語をとった「X + V + Y」型、bは「X + V + Y」型の否定文、cは目的語がなく、被動作主或いは被使役者が主語となった「Y + V」型の否定文である。ここで我々は文型と否定詞の間に一定の傾向を見て取ることができる：「X + V + Y」型には「弗」が用いられ、一方「Y + V」型には「不」が用いられる⁸(なお「涉」,「羸」にはb「X + 弗 + V + Y」型が見えない)。

⁷ 以上の清濁別義に対する反駁は大西克也氏(東京大学)よりご教示いただいた。

⁸ 「不」が受動文に用いられる傾向があるというのは、朱岐祥(1992: 114)やDjamouri(2001: 166)で夙に指摘されている。

- (14) a. 雀得亘我。 (合集 6965) 【自賓問】⁹
 雀（人名）は亘（敵勢力）と我（敵勢力）¹⁰を捕獲する¹¹。
- b. 辛巳卜，敵貞：“雀弗其得亘我。” (合集 6959) 【賓一】
 辛巳の日に卜い，敵が検証した，「雀は亘（敵勢力）と我（敵勢力）を捕獲できない（＝亘と我が捕獲される結果に至らない）だろう」と。
- c. 貞：“失¹²羌不其得。” (合集 508) 【典賓】
 検証した，「逃げた羌は捕獲されないだろう」と。
- (15) a. 癸酉卜，出貞：“皐皐（擒）¹³舌方。” (合集 24145) 【出一】
 癸酉の日に卜い出地で検証した，「皐（人名）は舌方（敵勢力）を捕まえる」と。
- b. 貞：“弗其皐（擒）毳（麋）。” (合集 10344 正) 【賓一】
 検証した，「（我々は）麋（鹿の一種）を捕らえられない（＝麋が捕らえられる結果に至らない）だろう」と。
- c. 乙酉卜：“𠄎不其皐（擒）。” (合集 10249) 【自賓問】
 乙酉の日に卜った，「𠄎¹⁴の豚は捕獲されないだろう」と。
- (16) a. 辛亥貞：“雀牵亘，受又（祐）。” (合集 20384) 【歴一】
 辛亥の日に検証した，「雀は亘を捕らえるとき，祐を受ける」と。
- b. 貞：“兔¹⁵，三十馬弗其牵羌。” (合集 500 正) 【典賓】
 検証した，「兔（人名）と 30 人の馬を管理する役人は羌を捕らえることができない（＝羌が捕らえられる結果に至らない）だろう」と。

⁹ 各例文後の【 】は当該甲骨文の分類を示す。本稿の甲骨文の分類は黄天树（2007）及び楊郁彦（2005）に従う。


¹⁰ 本例の「我」が代名詞ではなく方国名であり，且つ殷に敵する勢力であるというのは，Takashima & Serruys（2010 vol. II: 127–128）による。

¹¹ 「説文」卷三下・卜部に「貞，卜問也」とあることから，曾ては卜辞の命辞は疑問文と理解されるのが支配的であったが，現在，否定的な見解が展開されており，議論となっている。とりわけ欧米では早い段階から，疑問文説に疑義が呈され（Serruys 1974: 22–23, Keightley 1978: 29），その後，Nivison（1989）など，広く受け入れられている。また，中国大陆でも，裘錫圭（1988/2012）が甲骨文の中に非疑問文があることを論じて以降，沈培（2005）などが追認している。このほか，高嶋（1989）は関連する議論を包括的に扱った論考である。本研究は基本的に，命辞＝非疑問文との立場を取るため，命辞を疑問文として訳さない。同時に，命辞に前接する「貞」字についても，疑問文を提示するマークとは見なさず，Takashima & Serruys（2010 vol. I: 23）の“(diviner) Y tested [to gain sapience from the numen of the turtle or bone]（貞人が〔甲骨の神霊から知恵を得るために〕検証した）」との解釈に従う。なお，反対意見としては，陳煒湛（1994/2003）がある。

¹² 「失（𠄎）」の字釈は趙平安（2000/2009）による。また，「失羌」は沈培（2002: 251）により「逃亡した羌」と解釈する。

¹³ 陳夢家（1956/1988: 554）及び葛亮（2013: 36）により「皐」を「皐」の異体字と解釈する。

¹⁴ 鳥（1967: 418）によると，「𠄎」は殷に属する一地方である。

¹⁵  は従来「毳」と隸定されてきたが，本稿では單育辰（2015: 73–79）によって「兔」と釈す。なお，ここでは人名と考えられる。

- c. 癸巳卜，賓貞：“臣不其牽。” (合集 643 正) 【典賓】
 癸巳の日に卜い，賓が検証した，「臣は捕らえられないだろう」¹⁶と。
- (17) a. 其壺（振）壹。 (屯南 236) 【無名】
 壺地を乱すであろう。
- b. 方來入邑，今夕弗壺（振）王自（師）。 (合集 36443) 【黃類】
 方（敵勢力）が邑に侵入するも，今夜，王の軍を乱すことができない（＝軍が乱される結果に至らない）だろう。
- c. 貞：“今夕自（師）不 壺（振）。” (合集 36430) 【黃類】
 検証した，「今夜，軍は乱されない」と。
- (18) a. 王窆（賓）父丁，歲（劇）二牛。 (合集 23188) 【出二】
王は祖先神の父丁を賓客となして厚遇するための祭祀をするとき，二頭の牛を斬り殺す。
- b. 弗其妨（賓）婦好。 (合集 2638) 【典賓】
 （上位にある某神）は祖先神の婦好を賓客となして厚遇しない（＝婦好が厚遇される結果に至らない）だろう。
- c. 貞：“下乙不旁（賓）于帝。” (合集 1402 正) 【典賓】
 検証した，「祖先神の下乙（祖乙）は最高神帝に賓客として厚遇されない」と。
- (19) a. 貞：“斐來牛。” (合集 9525 正) 【典賓】
 検証した，「斐（人名）は牛をもたらす」と。
- b. 貞：“斐弗其來牛。” (合集 9525 正) 【典賓】
 検証した，「斐は牛をもたらすことはできない（＝牛が到着する結果に至らない）だろう」と。
- c. 己未卜敵貞：“缶不其來見王。” (合集 1027 正) 【賓一】
 己未の日に卜い，敵が検証した，「缶（人名）は来て王にまみえることはないだろう／できないだろう」と。

¹⁶「臣」の身分については議論があり，奴隸であると言う者もいれば，官員であると言う者もいる。但しいずれにしても，第一期甲骨文で「臣」は「羌」と同様，捕獲される対象となっていることから，その身分は低いものと見なされる。例えば，

壬午卜，敵貞：“兕追多臣，失羌，弗牽。”

(合集 628 正) 【典賓】

壬午の日に敵が検証した，「兕（人名）が多臣と逃亡した羌を追うと，捕まえることができない」と。

従って，例 (16c) の「臣不其牽」の「臣」は動作主ではないと言える。ただし，同じ「臣」でも「小臣」は奴隸ではなく，高い身分である可能性もある（寒峰 1983: 43-50）。或いはもとは奴隸であったが，統治機構の複雑化につれてより多くの職能を得て身分が高くなったとも言われる（蕭良瓊 1991: 362-365）。

- (20) a. 戊辰卜貞：“翌己巳涉自（師）¹⁷。”（合集 5812）【賓三】

戊辰の日に卜い、検証した、「（我々は）次の己巳の日、軍隊に川を渡らせる」と。

- b. （無）

- c. 壬辰卜，夬：“噉今勿入，不涉。”（合集 20464）【自肥筆】

壬辰の日に卜い、夬（が検証した）、「噉（人名）¹⁸は今入ってはいけない、（入ると）川を渡れない」と。

- (21) a. 乙未卜，敵貞：“妣庚羸王疾。”（合集 13707 正）【賓一】

乙未の日に卜い、敵が検証した、「祖先神の妣庚は王の疾病を取り除く」と。

- b. （無）

- c. 疾齒羸¹⁹
不其羸。（合集 709 正）【賓一】

病んだ齒は良くなる。（齒は）良くならないだろう。

まず、否定詞「不」について、戸内（2018: 82–85）では、上古中期後期の非対格動詞の「Y + V」型の意味機能について巫雪如（2008: 185）や宋亞云（2014: 138）が単に結果状態を表すものと指摘していること、及び甲骨文中で「不」が「不吉」、「不佳」²⁰、「不効（嘉／男）」²¹のように単純な状態を否定していることに鑑み、「不」が「結果状態」に強く関与する否定詞であると推定したうえで、寺村（1984）や工藤（1995）を引きつつ、「結果状態」＝「結果継続」＝「状態パーフェクト」²²の否定詞であると結論付けた。

次に「弗」についてであるが、それが非対格動詞の「X + V + Y」型でよく用いられることによって、戸内（2018: 86–90）ではまず、非対格動詞の上古中後期における性格について検証した。大西（2009）を引きつつ、非対格動詞の「X + V + Y」型は語彙使役文であり、使役者が被使役者を直接コントロールするもので、使役イベントにおける結果事象（caused event）が使役者の行為によ

¹⁷ 裘錫圭（1979/2012: 25–26）は「涉師」の「涉」を“使動用法”，すなわち使役義を表しているとしつつ，“使師涉水（軍隊に川を渡らせる）”と解釈する。

¹⁸ 「噉」を人名とするのは、黄天樹（2007: 18）による。

¹⁹ 「ち」字は従来、「龍」字に隸定され、「龍」に讀まれてきたが、ここでは王蘊智（2004）により「羸」に隸定する。その具体的な釈読については、未だ明らかになっていないが、およそ「病が癒える」、「病を取り除く」の意味に相当する（王蘊智 2004: 75）。

²⁰ 甲骨文において「佳」は copula であると考えられる（Takashima 1990）。

²¹ 「効」字については、「嘉」に讀むのが一般的である。しかし、黄天樹（2016: 3）は合集 19965 と合集 21071 を綴合することで得られる「効，唯其疾」で「効」を形容詞「嘉」と見なしては文意が通らないことから、これを「男」に讀む。

²² パーフェクトは本稿では以下の定義に従う。

An anterior (perfects) signals that the situation occurs prior to reference time and is relevant to the situation at reference time. (Bybee et al. 1991: 54)

パーフェクトはある状況が参照時以前に起こり、且つそれが参照時の状況と関連を持っていることを示す。

て直接引き起こされる直接使役であることを確認し、さらに当該文型を取る用例（例（14a）～（21a）及び（14b）～（21b））の主語がいずれも「雀」（殷人）、「皐」（殷人）、「兔／三十馬」（殷人）、「師」、「下乙」（祖先神）、「妣庚」（祖先神）といった（広義の）有生名詞であることから、甲骨文の語彙使役文は目的語に対する主語からの直接操作（direct manipulation）を表すものであったと解釈。そしてそこに「弗」が用いられるということから、「弗」が“致使”（使役）に関わる否定であると結論を下した。

また使役という状況に関して言えば、それは原因事象（causing event）と結果事象（caused event）が直接的な因果関係を構成して表現される²³。謂わば、「X + V + Y」はXがVという行為を遂行することで（原因事象）、その結果としてYに変化が生じる（結果事象）、というスキーマ的意味を有している。以上より戸内（2018）では、甲骨文の「弗」はVの表す動作によって対象にもたらされた変化や結果を否定する“致使”（使役）の否定詞であると、戸内（2018）は結論付けた。

4. 修正案①—「弗」について

「弗」は非対格動詞の「X + V + Y」型のほか、以下のように、有生の主語が目的語を対象に処置を加えることを表していると見られる文で用いられている。言い換えれば、これらは対象への直接操作を表す語彙使役文である²⁴。

- (22) 壬午卜，敵貞：“亘弗戔（翦）²⁵ 鼓。” （合集 6945）【典賓】

壬午の日に卜い、敵が検証した、「亘は鼓（敵勢力）を討ち滅ぼすことはできない（＝鼓が討ち滅ぼされる結果に至らない）」と。

- (23) 貞：“帝弗終茲邑。” （合集 14210 正）【賓一】

検証した、「帝はこの邑を終わらせることはできない（＝邑が終わる結果に至らない）」と。

- (24) 戌弗及方。 （合集 28013）【無名】

戌（守備）を担う役人は方（敵勢力）を捕らえることはできない（＝方（敵勢力）が捕らえられる結果に至らない）。

²³ 郭锐（2003: 155–156）による。

²⁴ 語彙使役文が動作プロセスを表すか、それとも結果だけを表し、動作プロセスを表さないか、については議論があり、上古中期以降では、動作プロセスが背景化していると一般的には考えられている。しかし、甲骨文の段階では常に（広義の）有生主語を取ることから、甲骨文の語彙使役文は有生の動作主による自主的な動作を表していると見て相違ない（戸内 2018: 87–88）。

²⁵ 「戔（翦）」字の字釈は陳劍（2007）による。

(25) 貞：“𠄎弗其𠄎𠄎龍。” (合集 6637 正) 【典賓】

検証した、「𠄎（人名）は𠄎龍（敵勢力）の侵攻を阻むことはできない（＝𠄎龍の侵攻が阻まれる結果に至らない）だろう」と。

例 (22) は相手国に攻撃を加え減ぼすか否かを表しているが、これは目的語に対する直接操作である。(23) も最高神である帝が殷の都市を終わらせるような処置を加えるか否か、という直接操作を表す。(24) の動詞「及」は Takashima & Serruys (2010 vol. II: 592) は“get”の意味に解するが、そうであるならば、やはり目的語「方」に対する直接操作と言える。(25) の動詞「𠄎」は、鄔可晶 (2016: 163) は「遮る, 阻む」を意味する「要／邀」と読んでいるが、そうであるならば、これもまた目的語「𠄎龍」に対する直接操作である。

(26) 己亥卜，王：“余弗其子婦姪子。” (合集 21065) 【白賓間】

己亥の日に卜い、王（が検証した）、「私は婦姪の生んだ子を王子とすることができないだろう」と。

例 (26) は、裘錫圭 (1979/2012b: 25–26) が名詞「子」の意動用法の例として挙げたものであるが²⁶、ここの「子」はあるいは使動詞で、「婦姪子」に対する「余」による何らかの処置を表していると思なすべきかもしれない。すなわち直接操作を表す語彙使役文である。

使役とは、上でも述べたように原因事象と結果事象の直接的な因果関係であり、例えば「X + V + Y」という構文は X の行為の結果、Y に変化が生じることを表す。加えて、使役事態について、Rappaport & Levin (1998) はその語彙概念構造を次のように示す。

(27) [[X ACT] CAUSE [BECOME [Y <STATE>]]]

(Rappaport & Levin 1998: 104)

これは、X が活動し (ACT)、Y がある状態 (STATE) に変化する (BECOME) ようにさせる (CAUSE)、という抽象的な意味構造を表す。ここで注目したいのは“BECOME”の局面である。使役事態の中には常に、結果の局面として内項 (Y) の「BECOME = 変化」が含意される。変化とは出来事の結果であり、終結点でもある²⁷。翻って考えるに、このような使役事態と強く関与する否定詞「弗」は、動詞句が表す事態の時間軸に沿った一連の展開が終結点に至らない、或いは変化が実現に至らないことを、取り立てて示しているのではないか。換言すれば、

²⁶ 裘錫圭 (1979/2012: 26) は“不以婦姪所生之子爲子（婦姪の生んだ子を子と見なさない）”と訳す。

²⁷ 楊榮祥 (2017: 12–13) は非対格動詞を結果自足動詞と称しつつ、その意味特徴として、ある結果を生じる「+終結」を挙げる。また、影山 1996: 60 は、(27) で挙げた語彙概念構造の中の瞬間相の変化を示す“BECOME”を telic、すなわち限界的と見なしている。

「弗」は限界性 (telic) の否定詞なのではなかろうかと推定される。これが本稿の修正案の1つである²⁸。「弗」が“致使”(使役)の否定となるのは、その限界性否定という機能の一部であると位置づけられる。

筆者が使役の否定を退け、限界性の否定へと考えを改めたのは、以下のように、使役と無関係な無意志動詞 (non-volitional verb) を否定する「弗」の存在によるところが多い。

- (28) 我弗其受黍年。 (合集 795 正) 【典賓】

我々は黍の豊作を受けられないだろう。

- (29) 子雍友弋, 又 (有) 復, 弗死。 (花東 21)

子雍が弋と友好関係を結び、そことの間を往復することがあるも、死ぬことはない²⁹。

- (30) 戊弗雉³⁰ 王衆。 (補編 8982 = 合集 26879) 【無名】

戊 (官職名) の弋 (人名) は王の衆を失わない。

- (31) 王弗疾目。 (合集 456 正) 【典賓】

王は目を病まない。

- (32) 甫弗其遭舌方。 (合集 6196) 【典賓】

甫 (人名) は舌方 (敵勢力) に遭遇しない。

以上の文はいずれも、Vendler (1967) の言うところの到達 (achievement) のアスペクトタイプを表していると解釈できる。そしてそれは (意図せぬ) 瞬時的な変化である。例えば, (28)「受黍年」, (29)「死」, (30)「雉王衆」は発生と終結が一瞬の出来事であるし, (31)「疾目」は無病状態から有病状態への変化を, (32)「遭舌方」は敵との不意の遭遇を表しており, いずれも瞬時的変化を示すものである³¹。これらの動詞句は, ここまで議論してきた動詞とは大きく異なり, 使役と関係がないばかりか, 目的語に変化をもたらすことも意味しない。むしろ主語に対する影響や変化の有無を表すものである。(28) は一人称主語「我」が「年」を受けたことによる (ポジティブな) 変化を, (29) は「子雍」が死ぬという変化を, (30) は「王衆」を失うという「戊弋」側の変化を, (31) は殷王の目の病変を, (32) は敵と遭遇することでもたらされる「甫」に生じるネガティブの変化や影響を表している。

²⁸ なお, 戸内 (2018: 103) では「弗」が変化の局面に焦点を当てた否定詞である可能性に言及している。

²⁹ 本例の解釈は朱歧祥 (2006: 964) による。

³⁰ 「雉」字の解釈は沈培 (2002) による。

³¹ Chow (1982: 141) は「遭舌方」, 「遭雨」は日本語の被害受け身文に相当し, 望ましくない事態を表していると考ええる。

いずれにせよ「弗」は、動詞句の表す変化が実現に至らない＝事態の展開が終結点に到達しないことを示しているものという想定が可能であり、従って、限界性 (telic) の否定詞と見なすに相応しいものである。

5. 修正案②—「不」について

戸内 (2018) では、「不」を動詞の結果状態（或いは状態パーフェクト）の否定詞とする一方、「弗」を“致使”（使役）の否定詞と位置づけ、それぞれ異なった機能を担いつつ一対一で対立する否定詞であるという方向で立論した。しかし、本稿では、「弗」は事態の終結点の局面を焦点とした意味的に有標 (marked) の否定詞であり ([+telic])、一方「不」は、その点に関して無標 (unmarked) の一般の否定詞である ([±telic]) と、考えを改めたい。つまり、「不」は普遍的な否定詞として広範囲に用いられる一方で、何らかの変化が実現しないという点を話し手が取り立てたいときのみ、「弗」が用いられるということである。それゆえ、「不」の使用比率は「弗」を大きく超えるうえ、「弗」を用いることができる文脈で、しばしば「不」が用いられる。例えば、

- (33) a. 黄尹弗求 (咎) 王。 (丙編 104 = 合集 3458) 【典賓】

黄尹 (神霊) は王を災いのある状態に変えられない。

- b. 父乙不求 (咎)。 (龜甲 1.8.16 = 合集 2275) 【賓三】

祖先神の父乙 (小乙) は災いを下さないだろう。

- (34) a. 父乙弗蚩 (害) 王。 (合集 371 正) 【賓三】

父乙は王を害のある状態に変えられない。

- b. 羌甲不蚩 (害)³² 王。 (合集 1805) 【賓一】

祖先神の羌甲は王に害を下さないだろう。

Takashima (1988: 117–118) は例 (33b) の動詞「求 (咎) / 糸」³³ は「殷人にとって有害である、殷人に呪いをかけている」という状態的意味を表しており、それを否定する「不」は状態性の否定である；一方 (33a) は直接目的語「王」が現れることで、「求 (咎) / 糸」が状態動詞から非状態動詞へと変化しており、それを否定する「弗」は非状態否定である、との解釈を提示する。

対して本稿は、(33)(34) とも、a の「弗」[+telic] は「求 (咎)」や「蚩 (害)」が表す一連の事態が終結点に至らない、或いは目的語が表す対象に変化が実現し

³² 「蚩 (害)」の字釈については諸説あるが、ここでは裘錫圭 (1983/2012) による。

³³ 「求 (咎)」字は裘錫圭 (1986/2012: 284) の解釈であるが、Takashima (1988: 115–116) は「糸」で隸定する。

ないこと、謂わば「祖先神の行為によって殷王が悪い状態に変えられない」ことを述べ、一方bの「不」[±telic]は、変化が実現するかどうかに焦点がないものとする。

先にも述べたように、「不吉」、「不佳」、「不（嘉／男）」など単純な状態は「不」で否定されるが、これは、状態という[－telic]なアスペクトが、[＋telic]否定の「弗」と矛盾するからであろう。また非対格動詞の「Y＋V」型も「不」で否定されるが、これは宋亚云（2014: 138）や巫雪如（2008: 185）が述べるように、この文型の意味焦点が結果状態にあり、[－telic]な事態であるため、[＋telic]否定の「弗」とそぐわないことによると思われる。

このほか、「隻（獲）」も「弗」「不」双方の否定詞が見える。

- (35) a. 雀弗其隻（獲）缶。 (合集 6834 正) 【賓一】

雀は缶を捕らえることができない（＝缶が捕まる結果に至らない）だろう。

- b. 貞：“正不其隻（獲）羌。” (丙編 120 = 合集 190) 【賓一】

検証した、「正（人名）は羌を捕まえないだろう／捕まえることはできないだろう」と。

(35a)の「弗隻（獲）」[＋telic]は「缶」が「捕まる結果に至らない」という終結点の局面に焦点が当たっているが、(35b)「不隻（獲）」[±telic]は中立的な否定表現であり、事態の展開が終結点に至るかどうか、或いは変化が実現するかどうかに関心がないものと思われる。

下の「罝（擒）」は上文で述べた通り、非対格動詞と思われるが、複文の後節で用いられているときは、形の上で目的語がなくとも、意味的には目的語を伴った「X＋V＋Y」型（すなわち直接使役）として解釈できる。これは1つには前節でVO構造が提示されていることの影響であり、いま1つには、前節のVが非能格動詞（例えば「獸（狩）」や「射」、「田」）であることの影響である³⁴。この種の「罝（擒）」は「不」と「弗」、双方により否定される。

- (36) a. 弼罝（罝）³⁵ 虢鹿，弗罝（擒）。 (合集 28343) 【無名】

（我々は）虢地のノロジカを狩るのに罝を仕掛けまい。罝を仕掛けると、捕獲することはできない（＝ノロジカが捕獲される結果に至らない）。

- b. 壬申王勿[獸（狩）]³⁶，不其罝（擒）。 (合集 10407 正) 【賓一】

壬申の日、我が王は狩猟をすまい。狩猟をすると、獲物を捕獲できない。

³⁴ 大西（2004: 384–385）は、『史記』を中心的コーパスとしつつ、非対格動詞は非能格動詞やVO構造と連用されることで、目的語がなくとも主語が動作主となる事例を挙げている。

³⁵ 「罝」字は葛亮 2013: 52–53 により、「罝」と「罝（麋，ノロジカ）」の合文、或いは専用字と見なす。

³⁶ 「」は欠字を補ったことを表す。

例 (36a) のは複文前節で「罫を仕掛けること」について述べていることから、後節の「弗罫（擒）」[+telic] は、「（罫を仕掛けたところで）ノロジカが捕獲される結果に至らない」ことを述べ、動詞の表す事態が終結点に至らないことを表しているものと思われる。一方で、(36b) の「不罫（擒）」[±telic] は中立的な否定表現で、変化の実現に焦点がない。「弗」が終結点に強く関与していることの証左として、(36a) では「捕獲する」という行為の終結点となる獲物の名前「麋鹿」が見られるが、(36b) ではそれが見えない。

次は同版の中に「弗」と「不」が見える例であるが、同様の解釈が可能である。

(37) “其于甲迺射柳兕，亡災，罫（擒）。”

“弗罫（擒）。”

丙午卜，在冒貞：“王其田柳，卒逐亡災，罫（擒）。”

“不罫（擒）。”

（英國 2566）【黃類】

もし甲の日になってから柳地の水牛³⁷を弓矢で狩れば、災いがなく、捕獲する

水牛を捕獲することができない（＝水牛が捕獲される結果に至らない）。

丙午の日に卜い、冒地で検証した、「王が柳地で狩猟をすれば、獲物を追い終るときまで、災いがなく、獲物を捕獲する

獲物を捕獲しない／捕獲できない。

第 2 辞「弗罫（擒）」[+telic] では「射」という方法を使ったところで、「水牛が捕獲される結果に至らない」ということを表しているのであろう。一方、第 4 辞「不罫（擒）」[±telic] は、終結点の局面を焦点としていない中立的な否定表現であり、「卒逐」、すなわち獲物を探索し追尾する間に、狩猟行為が行われないことを意味しているに過ぎない。「弗」は変化の実現に焦点があたるため、(36a) 同様、直前に終結点となる獲物の名前が見える。

付言すれば「弗卒」、「弗罫（擒）」、「弗隻（獲）」はしばしば、前節で捕獲対象を伴う。例えば、

(38) 𠄎追多臣失𠄎，弗卒。

（合集 628 正）【典賓】

𠄎（人名）が多臣と逃亡した𠄎を追うと、捕獲できない（＝多臣と𠄎が捕獲される結果に至らない）。

(39) 𠄎𠄎（陷𠄎），弗其罫（擒）。

（合集 10951）【自賓間】

𠄎が𠄎に落とし穴の罫をしかけると、捕獲することができない（＝𠄎が捕獲される結果に至らない）。

³⁷「兕」を「水牛」と解するのは、雷煥章（2007）による。

- (40) 翌辛巳王勿往逐兕，弗其隻（獲）。 （合集 10401）【典賓】

次の辛巳の日に我が王は水牛を追うまい。追うと，捕獲できない（＝水牛が捕獲される結果に至らない）。

- (41) 其𪔐，弗其隻（獲）。 （合集 5516）【賓一】

もし虎を打てば，捕獲できない（＝虎が捕獲される結果に至らない）だろう。

例 (39)(41) は一見すると目的語が見えないが，動詞「𪔐」³⁸ は目的語「麋」を，動詞「𪔐」³⁹ は目的語「虎」を含んだ文字と見なされる⁴⁰。

このほか，上で挙げた，(28)～(32)は無意志動詞が「弗」で否定される例であるが，これらの無意志動詞は項構造の変換なしに「不」でも否定される。以下，a は「弗」の例 ((28)～(32)の再掲)，b は「不」の例である。

- (42) a. 我弗其受黍年。（＝(28)） （合集 795 正）【典賓】

我々は黍の豊作を受けられないだろう。

- b. 今歲我不其受年。 （合集 9668 正）【賓一】

今期，我々は作物の豊作を受けないだろう。

- (43) a. 子雍友敦，又（有）復，弗死。（＝(29)） （花東 21）

子雍が敦と友好関係を結び，そこの間を往復することがあるも，死ぬことはない⁴¹。

- b. 往鵠，疾，不死。 （花東 3）

（子が）鵠地へ行くととき，病にかかるも，死なない⁴²。

- (44) a. 戌兕弗雉⁴³ 王衆。（＝(30)） （補編 8982 = 合集 26879）【無名】

戌（官職名）の兕（人名）は王の衆を失わない。

³⁸ 「𪔐」字の解釈については，裘錫圭（1980/2012: 82–83）の“用陷阱捕獸（落とし穴で獸を捕らえる）”による。なお，裘氏は当該字を「陷麋」の合文と見なす。

³⁹ 「𪔐」字の解釈は裘錫圭（1976/2012）による。

⁴⁰ 但し，葛亮（2013: 63–68）が A1 間接狩猟行為に分類した「獸（狩）」や「田」は通常，動詞後に狩猟対象をすることはなく，地名のみを取ることから，獲物に対する直接的な狩猟行為を表さないと考えられる。これらの動詞は，狩猟対象を目的語に取らなくとも，後節の動詞は「弗」を用いることがある。

王獸（狩）雀，弗𪔐（擒）。

（村中南 68 + 合集 33384）【無名】

王が雀地で狩猟をすると，（獲物を）捕獲できない（＝獲物が捕獲される結果に至らない）。

翌日戌王其田𪔐，弗擒。

（屯南 2739）【無名】

次の戌の日，王がもし凄地で狩猟すると，（獲物を）捕獲できない（＝獲物が捕獲される結果に至らない）。

⁴¹ 本例の解釈は朱歧祥（2006: 964）による。

⁴² 本例の解釈は朱歧祥（2006: 959）による。

⁴³ 「雉」字の解釈は沈培（2002）による。

- b. 多射不雉衆。 (合集 69) 【典賓】

多射（官職名）は衆を失わない。

- (45) a. 王弗疾目。(= (31)) (合集 456 正) 【典賓】

王は目を病まない。

- b. ☒不疾。 (合集 13814) 【典賓】

病まない。

- (46) a. 甫弗其遘舌方。(= (32)) (合集 6196) 【典賓】

甫（人名）は舌方（敵勢力）に遭遇しない。

- b. 于辛省田，無災，不遘雨。 (合集 28633) 【無名】

辛の日になって（王が）狩獵地を視察するとき、災いはなく、雨に降られない。

繰り返しになるが、上の文はいずれも（意図せぬ）瞬時的な変化を表す到達（achievement）のアスペクトタイプに該当する。これらが「弗」で否定されるときは、上で述べたように、動詞句の表す変化が実現に至らないこと、事態の展開が終結点に到達しないことを示していると考えられる。では、なぜ同じ動詞句が「弗」のみならず、「不」でも否定されるのであろうか。

この問題について、「変化」に備わる2つの性質から考えてみたい。「変化」とは無から有への移行であり、移行である以上それは動態的な事態である。さらに何らかの有形の結果として実現するものであることから、終結点を備えた[+telic]な事態とも見なすことができる。この意味において、変化を否定する際、「弗」を用いることについて何ら疑問を差し挟む余地はない。しかし一方で木村（1997/2007: 7）が述べるように、人間にとって変化の具体的存在は完了後の姿を通してしか観察できず、そして変化が完了した後の姿とは結果状態である。つまり、人が変化を認知する基板は変化後の「状態」にある。以上により、変化は以下のような二面性を伴ったものと言える：①「無から有への瞬時的変移」という点から見れば、[+telic]である；②人がそれを変化後の「結果状態」を通して認識するという点から見れば、それは[-telic]でもある。

変化のこのような二面性に基づくと、到達動詞を否定する「弗」と「不」について、以下のような推論を導き出せる：話し手がその変移の側面を取り立てたいとき、当該事態を[+telic]に位置づけ、[+telic]の否定詞“弗”を用いる；一方、話し手がその変移を特に取り立てようとしなないときは、“弗”を用いず、[±telic]の否定詞“不”を用いる。

6. おわりに

本稿では、戸内（2018）の結論を以下のように修正した。

戸内（2018）	修正案
「弗」はVが表す動詞によって対象に何らかの変化や結果をもたらすということを否定する“致使”（使役）の否定詞であり、「不」とは異なり、動作プロセスの局面は背景化されていない。	「弗」は文の表す事態の時間軸上の展開が、終結点に至らないこと、何らかの変化が実現に至らないことを示す、限界性（telic）の否定詞である。“致使”（使役）の否定詞となるのは、その機能の一部である。
「不」は、動詞の結果状態（或いは状態パーフェクト）の否定詞であり、先行して発生する動作プロセスの局面は相当程度背景化され、結果残存・継続の局面が前景化されている。	「弗」が[+telic]の有標（marked）の否定詞であるならば、「不」は[±telic]の無標（unmarked）の否定詞であり、事態が終結点に至るかどうかという点は中和されている。

参考文献

【日本語】

- 大西克也. 1988. 「上古中国語の否定詞“弗”と“不”の使い分けについて」『日本中国学会報』第40集：232-246.
 影山太郎. 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点—』東京：くろしお出版.
 工藤真由美. 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間表現—』東京：ひつじ書房.
 島 邦男. 1967. 『殷墟卜辭綜類』東京：大安.
 高嶋謙一. 1989. 「殷代貞卜言語の本質」『東洋文化研究所紀要』第110冊：1-166.
 高嶋謙一. 1992. 「太古漢語（10）」『中国語』1992年10月号：45-48.
 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』東京：くろしお出版.
 戸内俊介. 2018. 「甲骨文の非對格動詞から見る「不」と「弗」の否定機能差異」『東洋文化98 特集 出土文獻と秦楚文化（1）』：65-112.
 森賀一恵. 2000. 「卜辭の法表現」『東方學報』（京都）第72冊：1-16.

【English】

- Aldridge, Edith. 2015. Ergativity and unaccusativity. (最終閲覧日：2018年5月10日) http://faculty.washington.edu/aldr/pdf/ECLL_erg.pdf, 2015
 Baxter, William H & Sagart, Laurent. 2014. *Old Chinese: A New Reconstruction*. New York: Oxford University Press.
 Boodberg, Peter A. 1934/1979. Note on morphology and syntax I. The final -t of 弗. *Selected Works of Peter A. Boodberg*: 430-435, Berkeley: University of California Press, 1979.
 Bybee, Joan L, Perkins, Revere & Pagliuca, William. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Language of the World*. Chicago: University of Chicago Press.

- Chow, Kwok-Ching (周國正). 1982. *Aspects of Subordinative Composite Sentence in the Period I Oracle-Bone inscriptions*. Ph.D. dissertation. Vancouver: University of British Columbia.
- Cikoski, John S. 1978. An outline sketch of sentence structure and word classes in Classical Chinese—Three essays on Classical Chinese grammar: I. *Computational Analysis of Asian & African Languages*. 8: 17–152.
- Djamouri, Redouna. 2001. Markers of predication in Shang bone inscriptions. *Sinitic Grammar: Synchronic and Diachronic Perspectives* (ed. by Chappell, Hilary): 143–171, New York: Oxford University Press.
- Keightley, David N. 1978. *Source of Shang History: The Oracle-Bone Inscriptions of Bronze Age China*. Berkeley & Los Angeles: University of California Press.
- Lyons, John. 1977. *Semantics* 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mei Tsu-Lin (梅祖麟). 2012. The causative *s-prefix and voicing alternation in Old Chinese and related matters in Proto-Sino-Tibetan. *Language and Linguistics* 《語言暨語言學》 13.1: 1–28.
- Navison, David S. 1989. The “question” question. *Early China*. vol.14: 115–125.
- Rappaport, Malka & Levin, Beth. 1998. Building verb meanings. *The Projection of Argument: Lexical Compositional Factors* (edited by Miriam Butt & Wilhelm Geuder): 97–134, California: CSLI Publications.
- Serruys, Paul L-M. 1974. Studies in the language of the Shang oracle inscriptions. *T'oung Pao* 60: 12–120, Leiden: E.J. Brill.
- Schuessler, Axel. 2009. *Minimal Old Chinese and Later Han Chinese: A Companion to Grammata Serica Recensa*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Takashima, Ken-ichi (高嶋謙一). 1988. Morphology of the negatives in oracle-bone inscriptions, *Computational Analysis of Asian and African Languages*. 30: 113–133.
- Takashima, Ken-ichi. 1990. A study of copulas in Shang Chinese. *The Memories of the Institute of Oriental Culture*. 112: 1–135.
- Takashima, Ken-ichi & Serruys, Paul L-M. 2010. *Studies of Fascicle Three of Inscriptions from the Yin Ruin*, Volume I & II. 臺北：中央研究院歷史語言研究所。
- Vendler, Zero. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.

[中文]

- 陳夢家. 1956/1988. 《殷墟卜辭綜述》北京：中華書局
- 陳劍. 2007. 〈甲骨金文“𠄎”字補釋〉陳劍《甲骨金文考釋論集》：99–106. 北京：線裝書局
- 陳平. 1998. 〈論現代漢語時間系統的三元結構〉《中國語文》1988年第6期：401–422.
- 陳煒湛. 1994/2003. 〈論殷虛卜辭命辭的性質〉陳煒湛《甲骨文論集》：154–168, 上海：上海古籍出版社, 2003年12月
- 大西克也. 2004. 〈施受同辭芻議—《史記》中的「中性動詞」和「作格動詞」〉高嶋謙一, 蔣紹愚 (編)《意義與形式—古代漢語語法論文集》：375–394. München: Lincom Europe
- 大西克也. 2009. 〈試論上古漢語詞彙使役句的語義特點〉朱岐祥, 周世箴 (編)《語言文字與教學的多元對話》：383–401. 臺中：東海大學中文系
- 丁聲樹. 1935. 〈釋否定詞「弗」「不」〉《慶祝蔡元培先生六十五歲論文集》：965–996. 北平：國立中央研究院歷史語言研究所
- 葛亮. 2013. 〈甲骨文田獵動詞研究〉《出土文獻與古文字研究》第5輯：31–153.
- 郭銳. 2003. 〈“把”字句的語義構造和論元結構〉《語言學論叢》第28輯：152–181. 北京：商務印書館
- 寒峰. 1983. 〈商代「臣」的身份攷析〉, 胡厚宣編《甲骨文與殷商史》：36–59, 上海：上海古籍出版社
- 黃天樹. 2007. 《殷墟王卜辭的分類與斷代》北京：科學出版社
- 黃天樹. 2016. 《甲骨拼合四集》北京：學苑出版社
- 雷煥章 (葛人 譯). 2007. 〈商代晚期黃河以北地區的犀牛和水牛—從甲骨文中的𠄎和𠄎字談起〉《南方文物》2007年第4期：150–160.
- 呂叔湘. 1941/1999. 〈論毋與勿〉呂叔湘《漢語語法論集 (增訂本)》：73–102. 北京：商務印書館, 1999年
- 木村英樹. 1997/2007. 〈“變化”和“動作”〉《日本現代漢語語法研究論文選》：1–15. 北京：北京語言大學出版社, 2007年
- 裘錫圭. 1976/2012. 〈說“玄衣朱襪”——兼釋甲骨文“𠄎”字〉裘錫圭《裘錫圭學術文集》第三卷：3–5. 上海：復旦大學出版社, 2012年
- 裘錫圭. 1979/2012. 〈殷墟甲骨文研究概況〉裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷：20–26. 上海：復旦大學出版社, 2012年

- 裘錫圭. 1980/2012. 〈甲骨文字考釋（八篇）〉裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷：72-91. 上海：復旦大學出版社，2012 年
- 裘錫圭. 1983/2012. 〈釋“蚩”〉裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷：206-211. 上海：復旦大學出版社，2012 年
- 裘錫圭. 1986/2012. 〈釋“求”〉裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷：274-284. 上海：復旦大學出版社，2012 年
- 裘錫圭. 1988/2012. 〈關於殷墟卜辭的命辭是否問句的考察〉裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷：309-337. 上海：復旦大學出版社，2012 年
- 單育辰. 2015. 〈甲骨文中的動物之三——“熊”，“兔”〉《出土文獻與古文字研究》第 6 輯：69-86.
- 沈培. 2002. 〈卜詞“雉众”補釋〉《語言學論叢》第 26 期：237-256. 北京：商務印書館
- 沈培. 2005. 〈殷墟卜辭正反對貞的語用學考察〉丁邦新，余霽芹（主編）《漢語史研究：紀念李方桂先生百年冥誕論文集》：191-233. 臺北：中央研究院語言學研究所
- 松江崇. 2010. 〈古漢語疑問賓語詞序變化機制研究〉東京：好文出版
- 宋亞云. 2014. 《漢語作格動詞的歷史演變研究》北京：北京大學出版社
- 王蘊智. 2004. 〈出土資料中所見的“羸”和“龍”〉《鄭州師範大學學報（哲學社會科學版）》第 37 卷第 6 期：72-78.
- 魏培泉. 2000. 〈說中古漢語的使成結構〉《中央研究院歷史語言研究所集刊》第 71 本第 1 分：807-856.
- 魏培泉. 2001. 〈「弗」，「勿」拼合說新證〉《中央研究院歷史語言研究所集刊》第 72 本第 1 分：121-215.
- 巫雪如. 2008. 〈從認知語義學的角度看上古漢語的「作格動詞」〉《清華中文學報》第 2 期：161-198.
- 鄺可晶. 2016. 〈甲骨文“弔”字補釋〉《中國文字》第 42 期：151-164.
- 蕭良瓊. 1991. 〈「臣」，「宰」申議〉王宇信（編）《甲骨文與殷商史》第 3 輯：353-375，上海：上海古籍出版社
- 楊榮祥. 2017. 〈上古漢語結構自足動詞的語義句法特征〉《語文研究》2017 年第 1 期：11-17.
- 楊郁彥. 2005. 《甲骨文合集分組分類總表》臺北：藝文印書館
- 楊作玲. 2014. 《上古漢語非賓格動詞研究》北京：商務印書館
- 張玉金. 2006. 〈論甲骨文中“不”和“弗”的根本區別〉東海大學中國文學系（編）《花園莊東地甲骨論叢》：127-153，臺北：聖環圖書出版
- 趙平安. 2000/2009. 〈戰國文字的“遊”與甲骨文“𠂔”為一字說〉趙平安《新出簡帛與古文字古文獻研究》：42-46，北京：商務印書館
- 周法高. 1953/1972. 《中國古代語法 稱代編》臺北：臺聯國風出版社，1972 年
- 朱岐祥. 1992. 〈殷墟卜辭句法論稿——對貞卜辭句型變異研究一〉臺北：學生出版社
- 朱岐祥. 2006. 《殷墟花園莊東地甲骨校釋》臺中：東海大學中文系語言文字研究室

引用版本及び略称

- 丙編：張秉權.《小屯第二本：殷虛文字丙編》臺北：中央研究院歷史語言研究所，1957-1972 年
- 合集：郭沫若（主編），中國社會科學院歷史研究所（編）。《甲骨文合集》北京：中華書局，1977-1982 年
- 屯南：中國社會科學院考古研究所（編）。《小屯南地甲骨》北京：中華書局，1980-1983 年
- 英國：李學勤，齊文心，艾蘭編。中國社會科學院歷史研究所，倫敦大學亞非學院（編輯）《英國所藏甲骨集》北京：中華書局，1985-1992 年
- 花東：中國社會科學院考古研究所（編）。《殷墟花園莊東地甲骨》昆明：雲南人民出版社，2003 年 12 月
- 村中南：中國社會科學院考古研究所（編）。《殷墟小屯村中村南甲骨》昆明：雲南人民出版社，2012 年 4 月
- 左伝：楊伯峻（編）。《春秋左傳注（修訂本）》北京：中華書局，1990 年 5 月
- 史記：標點本二十四史《史記》北京：中華書局，1997 年 11 月

執筆者一覧（五十音順）

荒川慎太郎（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

池田 巧（京都大学人文科学研究所）

岩佐 一枝（神戸市外国語大学：研究員）

海老原志穂（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所：研究員）

加藤 昌彦（慶應義塾大学言語文化研究所）

桐生 和幸（美作大学生活科学部）

白井 聡子（日本学術振興会／筑波大学人文社会系：特別研究員）

鈴木 博之（オスロ大学：ポストドクター研究員）

高橋 慶治（愛知県立大学外国語学部）

戸内 俊介（二松學舎大学文学部）

長野 泰彦（国立民族学博物館：名誉教授）

林 範彦（神戸市外国語大学外国語学部）

本田伊早夫（名古屋短期大学英語コミュニケーション学科）

松江 崇（京都大学人間・環境学研究科）

シナ＝チベット系諸言語の文法現象 2 使役の諸相

2019(平成 31)年 3 月 15 日発行

編 者 池田 巧

発 行 京都大学人文科学研究所
京都市左京区吉田本町

印 刷 中西印刷株式会社
京都市上京区下立売通小川東入ル
